山岳

第二十八年
第三號

山岳

第二十八年第三號

目次

（第二十八年第三號　昭和八年十一月）

本欄

風成雪とその雪崩に關する考察　今西錦司　一頁

雜錄

墺國のエンガディーン　高橋健治　三〇
朝日山麓三面村記　高橋文太郎　三九
小澁川　荒川溯行　遠山川　北股　大澤を下る　黑田初子　五二
毛猛連山行　中司文夫　六二
春の白山より妙法山へ　池田知幸　七七
北九州の山ところどころ（その三）　竹内亮　八五
脊振山懷古　今泉龍三　一〇七
ウェストン氏の杖の跡　黑田孝雄　一三一

追憶

松井幹雄君を憶ふ　石川孟範　一三九
谷本光彦君を憶ふ　藤島敏男　一四三
一九三二年に於けるナンガパルバット登攀の概略（黒田孝雄）　一四五
一九三三年度エヴェレスト登攀概要（渡邊漸）　一五一
本邦山岳遭難要項輯録（自一九二三年至一九三三年九月）　瀬木三雄編　一五九
吾妻山に於ける松枝角二氏の遭難顛末記（原田信次郎）　一七五

圖書紹介

一八六—一九七
E. S. Smythe : Kamet Conquered（藤島敏男）—Peaks, Passes and Glaciers, Third Series（島田巽）—Alpine Journal Vol. XLV. No. 246.（渡邊漸）—日本山岳會編、高山深谷第九輯（藤島敏男）—原全敎、奥秩父（黒田孝雄）—藤木九三：雪線散歩（黒田孝雄）—安齋徹、東北の山々（藤島敏男）

會務報告(一九八)第七回關西小集會記事(二〇〇)第五十九回小集會記事(二〇一)「高山深谷」編輯報告(二〇三)山岳寫眞資料展覽會記事(二〇七)日本山岳會會員有志晩餐會(二一三)圖書基金報告(二一三)新入會員紹介(二一三)會員訃報(二一五)退會者(二一五)「山岳」投稿規定(二一六)日本山岳會會則(二一七)

圖版

山田峠にて遭遇せる雪崩とその説明圖　角田吉夫　一四—一五頁
風成雪による第二次雪崩の自然的發生　高橋健治　一七—一八
シュネーブレット崩壞　Der Bergkamerad (1930)より　一〇—二一
ザールバッハ風景　三〇—三一
朝日山麓三面村三面　高橋文太郎　四〇—四一
サワブドウ　高橋文太郎　四〇—四一
古處山頂石灰岩上のツゲ　竹内亮　八六—八七
犬ヶ岳尾根のツクシシャクナゲ　竹内亮　八六—八七
故松井幹雄氏　一四二—一四三
故谷本光彦氏　一四二—一四三

插圖

風の影響の全然なき降雪直後の積雪狀態(第一圖)
降雪後風の影響を受けて變化せる積雪狀態(第二圖)
登高行VIII記錄一〇九頁より(第三圖)
遠山川北股、小澁川荒川
毛猛連山附近
白山妙法山附近
英彥山主峯西側の尾根と谷
日本アルプスに於けるウェストン氏の杖の跡
吾妻山附近概念圖

附錄

「山岳」第二十八年總目次　茨本猪之吉
カット(表紙)　坂本直行
カット

風成雪とその雪崩に關する考察

今西錦司

風成雪及びその雪崩に就いては嚮に大島氏(1)が、ラン Lunn (2)、パウルケ Paulcke (3)、クラーンシュテッフェル Krahnstoever (4)、ブラウン及びアンナ Brown and Unna (5) の研究を紹介され、又森田氏(6)はスマイス Smythe (7) のものを飜譯してゐられるから、これらを熟讀する事に依つて、歐洲に於いてこの問題に關する知識が、どの程度まで進んでゐるかを知悉する事が出來ると思ふ。併しそれらの中には紹介者の誤解も幾分含まれてゐる事は、當時の狀態から見て已むを得ない處である。その後次第に、我國の氣候に基いてその雪質なり、その雪崩なりを理解しようとする傾向を見るに至つたのであつて、筆者が既に發表した「雪崩の見方に就いて」(8) もこう云ふ點で一つの貢献たる事を失はぬつもりである。こゝに述べんとする處も前著同樣に、主として筆者の所謂發生的見地から考察したものであり、その見地からしてこの問題に關する從來の知識を整理し、補正しようと欲するものである。

風成雪

發生的見地をとる者は雪崩を論ずる以前に、先づ雪崩んとする雪の狀態なり、性質なりを知る必要がある。それ故先づ風成雪の成因から考へて行かう。風成雪を文字通りに解釋すれば風に依つて出來た雪である。處が我々が一般に雪と稱してゐるものの中には、空から降つて來る個々の雪片も含まれてゐるし、その雪片が地表に落ちて、それが集つて出來た處の積雪も亦雪と呼ばれてゐるのである。雪崩んとする雪と云つた場合の雪は、必ず後者卽ち積雪を意味してゐることは明かであるが、風成雪と云ふ事になるとその何れを指すかが曖昧となつて了ふ。筆者がこゝで風成雪と云ふ文字を使ふに際しては、一般的に雪と云ふ場合と同じ樣に、降つてくる雪、積つた雪を敢へて區別することをしないが、その何れを意味してゐるかは使用されてゐる場所に依つて自ら判明してくるであらうと思ふ。

風の無い場合に降る雪が、あの美しい結晶をしてゐる事は誰しもがよく承知してゐる處である。處で風がある時、又は強い時に降つてくる雪は、風の爲にその姿を變へられてゐるだらうか。換言すれば空氣中を漂ひつゝ落下して行くあの美しい結晶に風を與へた場合、風に依つてその結晶が變化するかどうかと云ふのである。筆者の考へでは、よしんば結晶に變化が起るにしても、それは等閑視(ネグレクト)出來る程度のものであつて、次に述べる樣な變化に較べたならば、この程度のものでは到底之を風成雪とは云ひ得ないのである。次に一旦この結晶或ひはこの雪片が積雪表面に落着いて、その後に於いて風に吹き曝された場合にはどうなるか。この場合の例は皆よく知つて居られる樣に非常に微細な雪粒となつて、一旦落着いた雪面（以下積雪表面を雪面と略す）から再び風の爲に吹き

飛ばされ、風に運ばれて行くのである。快晴であるにも拘らず風が強い日には、山稜附近でこの風が持つて來た雪粒の爲に散々頰を叩かれる事がある。又それ程の風ではなくとも、雪面近くでは始終この雪粒が風に運ばれてゐて、スキーの厚さだけが辛うじて雪に沈む程度の處を歩いてゐても、靴の上やプティーの上にはこの雪粒が附着する。こうして風は風上側の斜面の積雪を浸蝕して、これを雪粒にして風下の方へと運んで行く。雪庇の影では雪粒が日に輝いてキラ〳〵舞つてゐる。この雪粒こそ「風成雪」と呼ばれ得るべきものである。

この雪粒になるまでの變化には勿論風が必要なのであるが、直接には雪の個々の結晶がお互に衝突し、破壞し、或ひは摩擦されて出來るものと想像する。それ故雪面が緻密であれば、それだけこの作用は旺盛である。この事については後に雪面の變化を說明する場合に詳しく述べる。空氣中を漂ひつゝ落下してくる降雪中の雪片には、いくら強い風が當つても、かゝる雪粒にまでは成り得ないと云ふ事も、そこではかゝる機械的作用の起る可能性が殆んど無い事に依つて理解出來ると思ふ。又降雪中と雖も風が雪面の雪を吹き捲るのは屢々見る事實だから、子細に觀察すれば降雪中に於いても風成雪が出來つゝあるやも知れない。けれども次から次へと積つて行く雪の爲に雪面は更新されて常に柔く、風成雪の出來るには非常に不利な狀態と考へられ、又假令風成雪が出來てもすぐに埋沒されて了ふ懼れがある。

以上の叙述から、**風成雪**とは、降雪後に、一旦積つた雪が風の影響に依つて變形したものである事を知る。その出來る場所に就いて云へば敢へて風上風下を問はず、風の强く又始終吹きつける處であればよいわけである。

風成雪による雪面の變化

元來風當りに積つた雪は、風蔭に積つた雪がフワ〳〵してゐるのに較べて緊つてゐる。又風當りには降雪中と雖も風が働いて雪面に色々な波紋や凸凹を生ずるが、これらはすべて前節に於いて定義した處の風成雪の形成以前に於ける雪面變化と看做されるべきにより、こゝでは論じない事とする。併し降雪が止んで愈〻風成雪が出來る段取りとなると、風當りの既に相當緊つた雪面に於いては、その形成が遙かに容易である事は、先に述べた處に依つて明かである。かくして形成された風成雪は、風に運ばれて行くものであるが、普通の降雪の場合と同じ樣に必ず何處かの雪面に落着かねばならない運命にある。處が風成雪は細かい雪粒であるから、雪面の一寸した間隙にでも巧く這入り込む事が出來る。風當りの雪面と云ふものはかくの如く、一方では風成雪の形成に役立ちつゝも、一方では風の運んで來た風成雪の爲に次第にその間隙を充塡され、次第に緻密になつて、了ひにはその上を歩いてもぶからぬ程度になつて了ふ。その色も次第に白堊色に變つて了ふ。尾根の風上側とか、廣い谷の風當りの强い場所に、局所的にこの種の雪面が存在する。

次に風當りに落着く事が出來なくて、風蔭まで吹き飛ばされて行つた風成雪の行方を吟味して見よう。例へば雪庇の下は風蔭に當つてゐて、そこは尾根の向ふ側から風に運ばれて來た多くの風成雪にとつて絕好の落ち着き場所なのである。處がこゝは風蔭である爲に、降雪中は風に緊めつけられる事もなく濟んで、雪が降り止んだ時には多量の新雪が積つてゐる。その上へ風成雪が降つてくるのであるが、こゝの新雪面は風上側よりは一層粗鬆であり、その上風成雪の方では風上側に於ける場合の樣に風に押され、風に强ゐられてその雪面の間隙に逃げ込

んだのと異つて、こゝでは降りたての新雪の上へ、云はゞ好きな樣に積るのである。それでも風上からドン〳〵と風成雪を送つてくれば、次第に新雪面を掩ふて、遂には新雪の上に風成雪の層が出來る樣になる。

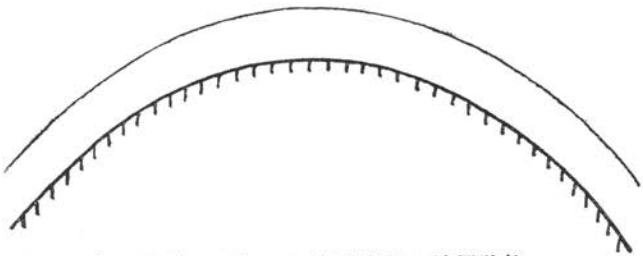
以上の二例が示す風成雪による雪面の變化は、その兩極端と思はれるものを擧げたに過ぎない。かくの如く變化した雪面は、廣い意味でウインドクラストと呼び慣らされてゐるけれども、實際には風蔭の新雪面の上に、靜かに風成雪が積つた場合の殆んどクラストを感じぬ程度から、尾根の風當りの半分氷を交へた樣な、最早クラストと云ふよりも、アイスと云つた方が適當と思はれる頑固なのまでの移り行きがあるから、之を一々分類する事は困難である。

風成雪の雪面に於ける分布狀態

山上に於いて風を伴はずに雪の降る事も少ないが、雪の降り止んだのと同時に風の吹き止む樣な事も亦稀である。それ故降雪後ある時間を經過した時に於いて、雪面が風成雪に依つて如何なる變化を來たしてゐるであらうかと云ふ事、言ひ換へるならばその時に於ける風成雪の種々なる分布狀態を豫察する事は、登山の計畫上甚だ必要であり、又望ましき事である。

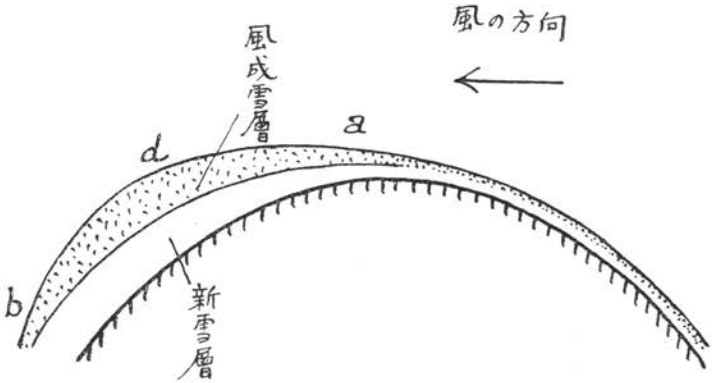
けれども風成雪を形成し、且之を分布せしめる風そのものが、場所に依つて甚しく相違のあるものである。そしてこれは一つに地形の變化が然らしめてゐる處である。從つて風成雪の分布狀態も地形が複雜であればある程複雜となり、尙其の上に常に風の方向、その强弱乃至はその作用せる時間の長短等を考慮しなければならないわけだから、これに關して、何處にでも又何時でも當てはまる樣な通則を與へる事は一寸出來兼ねるし、又これだけ

第一圖



風の影響の全然なき降雪直後の積雪狀態

第二圖



降雪後風の影響を受けて變化せる積雪狀態

でも一つの立派な研究問題を提供するものである。

それで此處には唯單に、その研究の出發點(スタート)を示すと云ふ意味で、地形の影響を出來る丈け消去(エリミネート)した、一つの理想的な山容を假定して、その場合に於ける風成雪の分布狀態を考へて見る事としたい。

第一圖は風の影響が全然無くして、雪の降り積つた場合を示す。かくの如き積雪狀態の處へ、若しも矢を以つて示すが如き方向の風が作用するものとすれば、風は直ちに風上側の積雪を浸蝕し始める。これらの浸蝕された積雪は卽ち風成雪として風に運ばれるが、暫て風の速力の衰へた場所に堆積を始めて第二圖に示す樣な分布狀態を呈するに至る。卽ちこの圖に依つて風當りの堅いウインドクラストから、柔い新雪層の上に極く薄く風成雪が積つた狀態までの、連續的な漸移的な、雪面の變化が明瞭にされ、以つて前節に於ける說明の不備を補ふと共に、一方風成雪の分布狀態と云ふ事から云へば、その表面的な擴がりだけが問題ではなくて、又其處に堆積してゐる風成雪自身の厚味と云ふ事にも注意すべきであり、特に風成雪の最大堆積量を示すべき地點—第二圖d—は、後に述べる如く風成雪による雪崩の發生に關聯して、忽かせに出來ないものがあるのである。

又かくの如く觀る時には、今迄常識的に使ひ慣らされてゐる風上、風下と云ふが如き對蹠的な言葉は、丁度新雪舊雪なる區別の不合理さと同じ程度に、風成雪の分布狀態の說明に對しては不充分である事を知る。例へばd點はa點に對しては風下であるが、併しb點に對しては風上と云ひ得るからである。それ故風成雪の分布を正確に、又より一般的に理解する爲には、寧ろかゝる言葉を使用する代りに、將來に於いてはその地點に於ける風速を以つて表はす樣にする方が望ましい事を、この圖は又暗示するものであらうと思ふ。

風成雪による雪崩

風成雪による雪崩と云ふのは風成雪の存在に依つて初めて起り得る雪崩と云ふ意味であつて、この場合に於ける風成雪とは、既に風成雪に依つて變化された雪面の事を云つてゐるのである。この風成雪による雪崩が如何なる原因によつて惹起するかと云ふ事は筆者の主眼とする處であるが、それは「風成雪による雪崩の發生的條件」なる次節に讓つて、こゝでは風成雪による雪崩が從來の文献上でどう云ふ取扱ひを受けて來たかと云ふ事を一通り説明しておきたい。

この種の雪崩に對して「板狀雪崩」なる文字を使用したのは、大島氏がランの slab avalanche の譯語に當てたのに始り(9)、以來本邦では之が通り名になつてゐる。然して雪崩の分類上この「板狀雪崩」なるものを特立さしたのはランの創見によるものであつて、大島氏は之を踏襲したのである。處でランは彼の slab avalanche の代りに、時としては wind-slab なる文字を使用してこの雪崩のことを表現してゐるかと思ふと、又一方ではこの wind-slab なる語が大陸に於ける研究家の Schneebrett に當ると記してゐるのである(10)。即ち彼は wind-slab なる一語によつて、雪とその雪による雪崩との二つの意味を持たせたがために、これが禍根となつてその後の研究者に色々な混亂を生ぜしめたと筆者は信ずるのである。

抑々 Schneebrett と云ふのは Windharst の一種であつて、雪面の性質を表示した言葉であるに過ぎないから、その中には Schneebrett-lawine と云ふ意味までは含まれてゐない筈である。その證據には大陸に於ける雪崩研究家としての第一人者であり、且はこの Schneebrett とか、或ひは又 Schneeschild とか云ふ紛らはしき

言葉の持つ内容と、その用途とを定義した處の當人である、パウルケ教授の小著「雪崩の危險」(11)を繙いて見ればよからうと思ふ。このパンフレットの序文中に、Schneebrett 及び Schneeschild の意味に關しては、彼が以前に定めた處のものを變更してゐないと斷つてあるが、此處に以前と云つてゐるのは、'Gefahren' にある彼の記述を指してゐるものである事に注意されたい。こゝで一應 Schneebrett 及び Schneeschild に關する彼の定義を、譯出して見るのは無益な事ではあるまいと思ふ。

シュネーシルトと云ふのは「尾根の下とか、斜面内にある隆起の蔭とか、或ひは又斜面中でも傾斜の變る場所などに、風の影響で局所的に限られて雪の堆積する事があつて、かゝる堆積は雪崩の危險を孕んだものなのである。私はかくの如く Lockerschnee が局所的に限られて積つてゐるのを 'Schneeschild' と名付ける」(Lawinengefahr, S. 21) とあつて、これは第二圖に示した樣な、風成雪の一種の堆積狀態を指して名付けたものと解釋すべきである。從つてシュネーシルトは雪崩を起す原因ではあつても、「シュネーシルトなる雪崩」では決して無いのである。

又シュネーブレットに就いては「全く局所的にではあるが、風上側とか或は風の盛んに荒れ廻る場所には、その程度には色々あるが、緊く吹きつけられた雪層が出來る。私は之に現在一般に使用されてゐる 'Schneebrett' なる名稱を與へる」(Ibid., S. 22) 或ひは「シュネーブレットは風の吹き荒れる斜面とか尾根とかに最も屢々存在する」(Ibid., S. 23) と記して居るから、これはシュネーシルトの出來る場所よりも更に風當りの強い場所に於いて、風成雪の爲に變化した雪面の狀態を指すものと解すべきである。即ちこれも今まで屢々誤用された樣に、雪崩を現はす處の言葉とは、もともと違ふのである。

然らば何故にかくの如き一般的誤用にまで導かれたかと云ふに、それは恐らく風成雪による雪崩が多くの場合、その崩落狀態に於いても、或ひはその堆積狀態に於いても板狀を呈するが爲ではあるまいかと筆者は考へるのである。併しこう云ふ意味で slab-avalanche を他の雪崩から特立さすのであつたならば、それは最早シュネーブレットとは何等直接なる關係にあるものでは無くなる。何となればシュネーブレットとはその定義に從へば、風成雪によつて變化を受けた雪面の中のある特殊のものに對して與へられた名稱であり、一方板狀となつて落下するのは、シュネーブレットによるもののみに限らず、その他の風成雪によつて惹起される雪崩に於いても亦之を認め得るからである。其の上發生的に論ずるならば、崩落狀態や堆積狀態から雪崩を分類する事は、最も忌む處であつて、例へば折角の板狀雪崩も長大なる岩壁を落下して行く時には、遂には塵雪崩と化して了つたりするから、こんな事では到底正確な分類の準據（クライテリオン）が得られないと云ふものである。

然し乍らランの slab-avalanche を惹起するものが、彼の slab, wind-slab 或ひは又 wind-board と名付くる板狀雪であるとして、且これらの種々の名稱で呼ばれる板狀雪が、すべてパウルケのシュネーブレットと同一のものを指してゐると考へるならば、然る時には slab-avalanche 卽ち Schneebrett-lawinen を意味する事にはなるが、それでは唯單にシュネーブレットと關係があると云ふ丈の事で、風成雪による雪崩全體から見れば、何もシュネーブレットによる雪崩だけを、特に取り立てゝ重要視する程の理由も無いと云ふ事になつて了ひそうなのである。

それでランが slab-avalanche を特立さした事は、一見雪崩の分類上一進步を齎したものの樣に考へられるけれども、スラブ卽ちシュネーブレットと云ふも要するにそれが雪面の狀態の說明である以上は、彼の得意とする

フイルムクラストだの、或ひはマーブルクラストだのと云ふのと同じ様に、雪面の分類以上の何物でもない。處で彼はこう云ふ雪面の分類に準じて、雪崩をも分類しやうとした爲に、遂に風成雪によつて最も明瞭に變化を受けた處の雪面としての、シュネーブレットによる雪崩を選り出す事が出來たのみで、遂に他の重要な、又普通な風成雪による雪崩さへ、彼の分類から逸して了つたのであつた。之を要するにかゝる意味の slab-avalanche を分類上特立さすのならば、シュネーブレット以外にも、風成雪によつて變化した雪面を分類し、命名し、然してそれらによつて起る雪崩を一々特立させねばならなくなるわけであるが、實際上そんな事の不可能である事は既に述べた處から明瞭であるからして、かくの如く詮議して了つては、最早ランの分類も一向我々を滿足せしむるものではないと云ふ事になるのである。

それならば slab-avalanche と云ふ言葉をもつと廣い意味に解して、風成雪による雪崩全般を指すものとしたらどうかと云ふ意見があるであらうと思ふ。併しこれにも筆者は贊成し兼ねるのである。何となれば風成雪による雪面の變化が必しも板狀雪の形成に終始するものでない事は、既に圖示した如く風成雪の堆積狀態からも察知される筈と思ふが、更に厄介な事には、slab とか板狀雪とか云ふ言葉の定義が確かで無い以上、風成雪による雪崩の中でも、外觀上全然板狀を呈しない樣なものは、注意をのがれ易く、之に反して風成雪によらない雪崩にあつても、その落下の初めに於いては屢々板狀を呈し、もしもその崩落距離が短いならば、デブリの堆積も亦板狀若くはブロック狀を呈する事さへあるからして、假令風成雪による雪崩全般を指すものとしても、かくの如き混亂と、それに伴ふ誤解とを防ぐためには、slab-avalanche 若くは「板狀雪崩」なる名稱を以つてしたのでは、之を不適當と考へざるを得ないのである。

然らば一體パウルケはこれらの風成雪による雪崩を、彼の分類に於いて如何に取扱つてゐるかと云ふに、彼の分類法に從へば、それがシュネーシルトによつて起つた雪崩であらうと、或ひは又それがシュネーブレットによつて起つたものであらうと、すべてこれらは新雪雪崩なる項目の下に一纏めにして收められてゐるのである(12)。ルトゲルス、クラーンシュテッフェル等の大陸側の研究家は皆、大體に於いてこのパウルケの分類法に倣ふものである。この點で大島氏の「雪崩の分類表」(13)中、ルトゲルスの欄に Schneebretter なる記入のあるのは、原文(14)に餘り忠實であるとは云へない。大島氏が本邦に於ける雪崩研究の開拓者として拂つた努力とその功績とに就いては、今更申すまでも無い事であるが、それと共に一方では氏の論文は最早立派な歴史的價値を有するものとして認めたいのである。それ故今後の改版に際しては修正を加へるべきものでないと信ずるが、その代りに之を讀む上には、相當の用意が必要であり、この一節に記す處も亦かゝる意味で、後輩たる筆者が故人へデディケートするものであらん事を願ふのである。

さて今度は風成雪による雪崩が、果して新雪雪崩に屬するものかどうかと云ふ問題になるが、之は畢竟風成雪そのものを新雪と認めるか否かと云ふ事に還元され、こゝに再び新雪舊雪の定義問題、或ひは又新雪舊雪の限界を奈邊に引くべきかと云ふ困難な問題に逢着するのである。併し既に前著にも記しておいた通り、筆者の理想的とする雪崩の分類に於いては、すべてかくの如き、人によつてどうにでもその境界線の引ける樣な、不確實な又不徹底な準據を捨てて了はねばならないと云ふのが、筆者の持論なのである。

そこで最後に筆者自身は、かくの如き風成雪による雪崩を如何に整理してゐるかを示さう。前著に於いて發表した處のものは、風と云ふ要因を全然考慮に入れないで、或ひは風の影響が無い場合を假定して、その場合に降

りたてのフワ〳〵の雪から、底雪崩に見る様なフイルン化の進んだ雪に至る迄の、積雪の經過狀態に基いて整理した處の、雪崩發生の一つの系列(セリーズ)であり、遷移(セクセッション)であつたのである。今こゝに新たに風なる要因が加つた爲に風成雪が形成されるのであるならば、このもの自身が發達(デベロープ)し、そしてそれが遂にフイルン化する迄の生活史に於いても、亦之と同じ樣にそこには雪崩發生のも一つの系列があり、遷移があるであらう。そしてこれに就いては後に詳しく述べよう。從つて筆者の見地よりすればあの雪庇の蔭でキラ〳〵輝きつゝ舞つてゐる處の風成雪は、それが何も降りたての雪でなくて、一旦積つた雪が風の爲に粒狀に變つたものであらうとも、シン〳〵と降る粉雪と較べて、それが積雪の原料たる點では何等異るものではないのである。それ故之を新雪と見るか、舊雪と見るかと云ふ如き詮議立ても不必要であれば、從つて風成雪による雪崩がパウルケ等によつて新雪雪崩の部類に入れられ、或ひは加納氏(15)によつてそれが舊雪雪崩の部類に入れられてゐようとも、筆者の立場から云へばそれらの問題に對しては、全然觸れる必要さへ無いと云つてもいゝわけなのである。

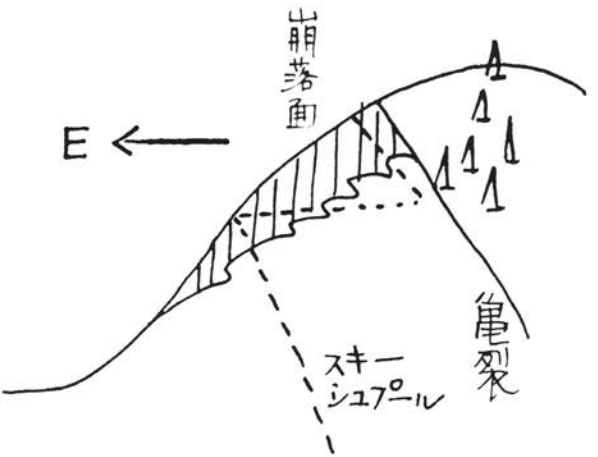
風成雪による雪崩の發生的條件

風成雪による雪崩と云ふのが、風成雪の存在を待つて初めて惹起される樣な雪崩を意味する以上、その發生的條件は又必ずや風成雪自身の特性(キヤラクター)に關聯したものでなくてはならぬ。併しこの特性は、風成雪の發達と共に次第に變化するものであるから、適宜その發達の時期(ステージ)を限つて、考察する事が必要である。それ故先づ雪が降り止んだ後風が一定の方向に吹き出して、初めて風成雪が作られ出すと云ふ第一圖に示すが如き狀態から始める事とする。便宜上風速も一定と假定しておく。

既に述べた如く、かゝる場合に風は、風當りの強い場所の雪を浸蝕し、之を風成雪にして、風當りの弱い場所に運び、そしてそれをそこに堆積して、地形の凹凸を平均さす樣に働くものである。けれども風上の方に浸蝕するべき雪がなくなつて了へば、それで最早風下の堆積も止むわけである。この狀態に達した時の說明として、再び第二圖を參照せられたい。卽ち降雪後風成雪が初めて作られ出す時から、風成雪の堆積が止むまでの間を、**第一の時期**と看做すのである。

この時期に於いて問題となるのは、勿論浸蝕の行はれる場所に非ずして、堆積の行はれる場所である。この場合もしもこの堆積の結果として雪崩れる樣な事があるならば、その雪崩は卽ち「第一次の雪崩」(16)の發生と條件を等しうするものである。けれども內部摩擦の少ないフワ〳〵の雪が一時に澤山積ればこそ、重心の位置が高まつて、その新雪層は斜面で不安定な狀態となつて來るのであるが、風成雪の樣な粒子狀のものは、いくら積つてもその雪層の重心の位置が問題となる程は積るものでないと考へられる。それ故にこの條件が滿たされぬ限り風成雪による第一次の雪崩は、自然發生をせぬものとしなければならない。

けれどもこゝに注意すべきは、風成雪の堆積の下には、之と質を異にする雪層が存在してゐる事である。そして風成雪の方が大抵の場合、その下層の雪よりも緻密に出來てゐるから、積雪の斷面を考へると、積雪層が比重の逆列をなしてゐる事が多いのである。この比重の逆列と云ふ現象は、「第二次の雪崩」(17)の發生條件の一つであつた如く、この場合に於いても亦、雪崩を誘發する要因として働くものである(18)。併し風成雪の分布は局所的ではあつても、之に接續する異質の雪に對しては、自然的な移り行きを示すものであるからして、かゝる異質の雪の間にあつても、その雪面に於ける張力の上では、それはよく平衡狀態を保つてゐて、恰も第二次の雪崩の場合



山田峠にて遭遇せる雪崩並にその説明圖　　角田吉夫

の如く、そこにその平衡狀態を破る事を餘儀なくされるのでない限り、又自然的には雪崩ないと云ふ事になるのである。これを喩へたならば、蜘蛛の巣に虫が掛つてゐる樣なものと思へばよい。

それ故もしもスキーのシュプールによつて、かゝる平衡狀態を攪亂したならば、それが明かに雪崩發生の誘因となるのである。勿論その場合の風成雪の堆積の厚さ、その斜面の緩急、或ひはその風成雪を取り圍んでゐる雪の性質等の關係で、必しも常に雪崩れるものでもなからうが、併し又丁度一本の糸を切つても、今迄蜘蛛の巣の上に引掛つてゐた虫が、ぶらんと垂れ下つて了ふ樣に、其處を切斷したが爲に雪面の平衡狀態が忽ちにして破れ、雪崩は直ちに發生すると云つた樣なクリチカルな場所のある事を忘れてはならない。

之をも一度第二圖に就いて說明するならば、d點こそはこの平衡狀態の最も破れ易い、クリチカルな場所に當るのである。a點より風上の浸蝕面に當る部分は雪面が堅く、或ひは岩石、笹等が出てゐる爲歩き難い場合などに、風成雪による雪崩の危險は風蔭の斜面に限られたものと早合點して、雪庇の出てゐないこの樣な廣い尾根に氣を許し過ぎると、知らぬ間に危險地帶（デンジャーゾーン）に踏み込んで了ふ事になるのである。こゝに示す寫眞は角田吉夫氏の一行が一九三二年二月十日草津白根北方の山田峠にて遭遇せる雪崩（註）であつて、筆者の今迄の記述に最もよく該當した實例であると信ずるから、特に氏に乞ふて揭載の許しを得たものである。

註　山田峠に於いて遭遇せる雪崩の說明

位置及び發生地　草津白根山の西北方、山田峠の直南方、二、一二〇m圈のドーム型の無名峯の東斜面。同斜面の傾斜度は約三十度位と記憶す。附近の狀態は同峯の山頂附近は枯木の疎林あり（白根の噴火による）、發生地の積雪狀態はコンベックス狀をなす。夏は熊笹繁り、中腹に登山道あり。（五萬分一圖幅草津參照）

發生の日時　一九三二年二月十日午前十時。

當時の天候及び積雪狀態　この年は近年には珍らしい積雪の少ない年であり、自分は七年間毎年熊の湯の雪に親しんでゐたが、最も雪の少ない年であらうと思ふ。熊の湯の前山は笹が露出してゐるし、鉢山の往復には笹で可成り苦しんでゐる。積雪は當時平均して、熊の湯附近は三、四尺であらう。二月七日は曇、八日曇、西北風強く特に溫度は下つた。九日晴後曇、十日卽ち雪崩發生の日は夜半に小雪、朝曇十時頃より快晴となる。熊の湯附近は大した風も感じられなかつたが、山田峠附近は西方松川の谷が深く落込んでゐるし、全く森林帶がないので、西寄りの風は可成り強く吹いてゐると想像される。

雪崩發生の狀況　二月十日早朝に熊の湯を發し、澁峠、山田峠を經て萬座溫泉に遊び、その日の內に引返す豫定であつた。一行は六名。

澁峠より南へ、池の塔山（二、二〇〇m）までは針葉樹林、ラッセルは少なく、スキーの沒する程度の粉雪。池ノ塔山より山田峠に下る斜面は南面にて、草付らしく、樹木なく、サンクラストにて固く、スキーの角付も効かず、回轉の度毎に數間は橫に流された。新雪の多量の場合、或は太陽の直射して雪の濕潤になつた時などは、雪崩の危險を思はせた。然して此のリッヂの西側卽ち信州側は僅かな針葉樹がある。滑る斜面の範圍も僅かで、全制動滑降をするだけの余地もなかつたが、粉雪にて滑降に好しく、自分はむしろ此の西側を降つた。山田峠（二、〇二八m）附近は芳ヶ平に向つて廣い谷が開けて風當りの强い個所に相應しく、疊々と岩石や、地藏佛も露出し、大きな波狀雪を見た。主なる風向は西北と思ふ。

山田峠に達した時が午前十時頃、薄曇であつた天候は此の時分より次第に雲が飛び、蒼空と太陽の輝きを見初めた。山田峠より次のピーク二、一二〇mの白いドームの東面中腹を、大體夏道と思はれる地點（此のドームを一つの山と見れば約五合目）をトラバースする豫定で自分がトップで進行した。山田峠附近の大きな波狀雪は山陰の爲か次第に波が減少し、粉雪のキユッと緊つた雪面となり、スキーの角付によつて淺い一本のシュプールが印せられる程度のものである。かゝる狀態は屢々風當りの强い斜面で經驗するもので、角付もよく効くし、滑走にも快適な雪の緊り方であつた。此の時は未だ雪崩の發生に就いては全く意識なく、自分はむしろ前方の斜面が太陽によつてキラ〳〵光つてゐるのを見て、その場所は東南向でもあれば、現在の場所よりも更に雪は固く、サンクラストをなして、角付がより困難になるであらうと考へてゐた。時に同行者

の一名會員の松室武夫氏が「雪崩が危くはないか」と云はれたが、まさか此の狀態で出るとは自分には考えられなかつた。併し、前述の樣な、前方の固いクラスト面の事もあるので、直ちに右へキックターンをして、可成り進んでから再び左にキックターンをして、ドームの八合目附近をトラバースする事になつた譯である。第二回目のキックターンをした附近は例の枯木があり、そのまゝ尾根傳ひに、枯木の中をドームの頂點に向つて進めば、事件は起らなかつたのである。

八合目附近を、角付をしながら、トラバースをしてゐると、やがて「ドーン」と底力のある、然し余り高くない音が聞えた。白根が淺間の爆發位に考えてゐたところが、音と共に自分の足元の前方に龜裂がスースーと走つて來た。その方向は右手山側上部より斜下方に向つてゐた。雪崩に對する意識よりもむしろ、たゞ反射的に自分はその龜裂を飛び越えて前進し、數間先に露出してゐる枯草のある所まで逃げ出した。續く二番三番の者もほとんど同時であつた。そして振返つて見ると、同じく會員の荻島四雄氏が、大きな雪塊の上に乘つたまゝ、恰も氷山の崩れる如く、大きな音と共に落ちて行つた。崩落の狀態は板狀といはうか、その板狀も薄い板片ではない、厚い、十尺もあらうかと思はれる雪塊である。そしてこの雪崩の走るスピードは最も遲い部類に屬するものであつた。その内に雪塊の山側に荻島氏は顚倒し、姿は消え、一、二度スキーの先が見えたと思つたが、その後は全く消えてしまつた。幸ひ、このドームの東面の下部が、擂鉢の底の如く平坦であつた爲に距離にして百米位の崩落後、雪崩は停止した。そして荻島氏が雪塊に壓される事もなく、間もなく、這ひ出して來た事は幸運であつた。

此の種の雪崩は自分としては嘗つて全く經驗した事のないものであり、發生を豫期してゐなかつただけに、心の動搖は大きかつた。發生後約一時間を經て、此等失はれたスキーを探しに近寄つて見たが、發生地點の裂け目の厚さは目測ではあるが、十五尺以上二十尺はあつた。中央部が最も厚く、その切斷面は弧を畫いて左右は下り、厚さも減少してゐた。そして雪は全然一尺も殘さずに、痕は草付の斜面を露してゐるのを見れば、底雪崩でもある。更に此の裂け目を注意して見るのに、此の厚い積雪層が二段に、階段狀に切れてゐる。これは風成雪の發達に大きな二回の時期を物語るものであらうと思ふ。

次に、もう一つ留意すべき點は、雪崩發生の切れ目がスキーのシュプールより二、三尺上方であつた事である。嘗つて教えられてゐた所謂板狀雪崩の一例として、スキーのシュプールによつて發生するといふ點に相異がある。又自分としてもク

ラストを破つて、其處より崩落した板狀雪崩の經驗は持つてゐる。又、雪面に殘された龜裂の距離は五、六十米に及び、その中央部の十米か、十五米の間が崩落したのである。そして不運にも四番目にゐた荻島氏が、この中心に乘つた譯である。僅か人間一人の重量が、これだけの厚い積雪層を踏み破るとは、考へても不思議な力である。結果論ではあるが、若し一行が最初の進路、卽ち五合目附近をトラバースしたならば、今回の雪崩を體驗せずに終つたかとも考へて見た。

今度、今西錦司氏の「風成雪による雪崩の研究」の一例として發表する事になつたが、此の報告が幾分でも參考となれば幸である。

（一九三三年十月七日　角田吉夫）

以上によれば風成雪は、自然發生による雪崩を起さないと云ふ從來一般に信ぜられて來た說を支持するものゝ如くである。それ故もしこの場合スキーのシュプール等によつて雪崩を惹起せしめた場合には、之を「風成雪による第一次雪崩の人工的發生」と稱するのが適當と考へる。處でこゝに風成雪による雪崩も、時には自然發生をするのではないかとの疑ひを抱かせる樣な寫眞があるから御覽に入れよう。これは高橋健治氏が滯歐中、一九三一年一月十九日に Arosa で見た雪崩を寫して筆者に送つてくれたものであつて、その說明には「前日十八日の風と雪に依つて Brett が出來てゐたのが、十九日の晴天午前十時の日光（この時の氣溫は攝氏三度）によつて出たものだ」とある。卽ち人爲的な或ひは之に類似の條件は、この場合考へられないのである。

例へば雪は太陽の沈んだのと相前後して降り止み、その後に空は晴れわたつたが、風は夜通し吹いてゐたものとすれば、朝までに風成雪が相當に形成され、又堆積してゐるものと考へられる。夜が明けると果して非常にいゝ天氣で、太陽は燦々として新雪面に照り輝いた。こう云ふ狀態は容易に想像されるであらう。そしてこんな場合に警戒しなければならないのが、かの第二次の雪崩である事もすぐ聯想されるであらうと思ふが、唯この場合には風成雪の存在と云ふ條件が一つ餘計に加はつてゐる點が、第二次の雪崩の正常（ノーマル）な發生の場合と違ふのである。

風成雪による第二次雪崩の自然的發生　　高橋健治

第二次の雪崩の今一つの發生條件として、太陽の輻射熱が雪面に於ける凝縮力の增進を促し、これが雪面に於ける張力の平衡狀態を破つて龜裂を生ぜしめる原因となるのであるが、かくの如き龜裂が如何なる場所に最も多く生ずるかと云ふ事に至つては、筆者の知らんと欲して未だ充分に知り得ない重要な問題なのである。併し少くとも風成雪の存在する場合には、次の樣な推論が可能なのでないかと思はれる。

即ち質の均一な雪面であつたならば假令そこに凝縮力が働いても、その雪面に於ける張力の平衡狀態を破る事が困難であるが、その反對に降り立ての粗鬆な新雪の間に、緻密な風成雪の如き異質の雪が介在してゐるものとすれば、その平衡狀態は破れ易い筈である。そこで今風成雪が一部分に出來てゐる樣な斜面に太陽が照射した場合を考へると、粗鬆な新雪の風成雪に繫がる部分に、龜裂が生じて雪面はその平衡狀態を失ひ、第二次の雪崩が發生すると同時に風成雪も亦雪崩ると云ふ事になるのでなからうかと思はれるのである。即ちこの雪崩は風成雪の存在が誘因となつて發生した第二次の雪崩の一種であり、或ひは「風成雪による第二次雪崩の自然的發生」と稱すべきものであらう。この種の雪崩に關しては、今の處充分な資料がないけれども、第二次の雪崩の發生狀態の研究が進むに從つて、その重要性を增して行くものでなからうか。又その發生時期等に就いては第二次の雪崩の一般に準ずるものと解すればよい。

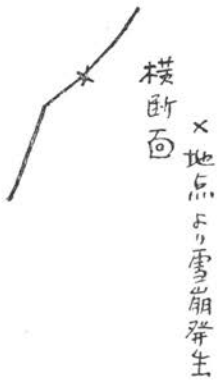
風上に於ける浸蝕が止んで、風成雪の堆積が行はれぬ樣になつた後は、既に形成され、堆積された風成雪が雪面に於いて少しづゝその位置を移動して、以つてその間隙の充塡を始める。この作用は風上の方から順次波及して來るものとも考へられる。そして遂に堆積した風成雪の表面が、ウインドクラストで掩はれるに至るのである。即ちこの堆積が止んで、クラスト形成の始まる時から後を、假りに風成雪發達の**第二の時期**と看做すのであ

る。

この第二の時期に入つて、風成雪面にクラストが形成されても、風成雪はその雪崩の發生に關聯した特性を失はない。それ故普通ならば第一次及び第二次の雪崩の危險期が過ぎ去つて了へば、積雪は一先づ落着き、新たなる降雪がない限り、それから更に「高次の雪崩」(19)となつて出る迄には一應警戒を緩めてもいゝ時期があつたわけだが、風成雪の場合には、降雪後天氣が續いて一般的には安全とされる樣な日が來ても、その危險の豫測から云へば、反對に我々は段々不安な狀態に導かれて行くものと云ひ得るのである。先に擧げた角田氏の經驗せる山田峠の雪崩の如きも、筆者は記述の都合で、之を先に出したが、その雪面はスキーを叩きつけて歩かねばならぬ程堅かつたと云ふから、正しく云へばこの第二の時期に於いて發生したものである。

又日本アルプスに於ける風成雪雪崩の慘禍として、未だ耳新しいあの野村實氏の遭難がある。その記錄(20)に徵する處、發生地附近のウインドクラストは堅く、スキーでは破れなかつたとあるから、この風成雪も矢張り第二の時期にあつたものに相違ない。併し筆者にこの雪崩の發生條件の推測を許されるならば、筆者は當時の積雪狀態を模索するよりも寧ろ登高行に報告された發生地地形の横斷面に據るであらう。その爲にこゝにその圖を轉載する。

第三圖



(登高行VIII, 記錄109頁より)

シュネーブレットの崩壊　　Der Bergkamerad(1930)より

之を見ると雪崩の發生地點と印された場所の下方に當つて、斜面の傾斜に著しい不連續點（但し圖は横斷面だから實際に於いては不連續線）が伺はれる。風成雪を雪面に支へてゐるものは、勿論下層の雪との外部摩擦であるけれども、雪崩の發生に關して重要なのは寧ろ雪面に於ける張力であり、そしてこの張力の平衡狀態が異質の雪の繋ぎ目で破れ易い事は前例にて述べた處である。

こゝにも一つ平衡狀態の破れ易い原因としての地形がある。例へばこの斜面に就いて云へば、之を等齊斜面に比較して、遙かにこの不連續線に於いて張力の平衡が破れ易いから、もしこの線の上方に於いて雪面に衝擊を與へるならば、平衡は先づこの不連續線に於いて破れるのであつて、勿論この處で雪面がオーバーラップするのと上部に龜裂が入るのとは同時に起る現象であるけれども、發生的に見るならば、龜裂の入つたのは下方で平衡が破れた結果であると云ふ風に考へるのである。何故一行の登りがけに雪崩が出ずに、下りがけに出たのか。これに就いては誰しもブラウン及びアンナの指摘した雪面の冷却狀態(21)を思ひ浮べるであらうが、この點に關しては記錄の上に何等求むべき處がない。又何故雪面に鋸齒狀をなせる半圓形の龜裂が入つたかは、將來の研究に殘された一つの問題であらう。

さてかくの如き時期に於ける風成雪が、何時迄も雪面にあつて曝されてゐる時、風成雪の下層にある雪の方は次第に凝縮して、剛體に近い風成雪だけが雪面に取り殘され、その間に空隙を生ずる事がある。かゝる場合に、下からの支へを失つた風成雪が、時に自らの重みに耐へずして破壞する事がある。こゝに掲げる寫眞は曾つてアルパイン・ジャーナル誌上(22)に'Schneebrett' Avalanche として紹介されてゐたものであるが、原圖(23)には唯單に'Ein Schneebrett'と題してあるだけであるのも面白い。

風成雪がかくの如くして自重のために破れるのは重力の爲である。それ故重力の斜面に直角な分力が最大となる、水平な雪面に於いてそれは最も破れ易いのであつて、その逆に斜面が急になる程破れ難くなる。今若しかくの如き原因によつて雪崩が發生するものとせば、これこそは風成雪による雪崩の、純粹な自然發生の、殆んど唯一の場合として認めざるを得ないのであるけれども、如上の理由に依り、かくの如き現象はごく緩傾斜の雪面にしか起り得ず、又起つた處でこの寫眞に見る如く、之を仰々しく雪崩と云ふ程のものではなくて、矢張り原圖に題されてゐる如くシュネーブレットであり、シュネーブレットの壞れたものに過ぎないと解する方が適當なのではなからうか。

風成雪が形成され、それが堆積される狀態にある時をその發達の第一の時期となし、堆積された風成雪がその雪面にクラストを形成する時をその發達の第二の時期とするならば、第一の時期と云ふのが、降雪後の比較的短い時間を表はすものであるにも拘らず、第二の時期に就いては始んどその時間的な概念を求める事が困難である。何となれば第一の時期は先に述べた樣に、風成雪の形成と云ふ點で制限を受けてゐるから、降雪後或る時間を經たら自ら第二の時期に移らざるを得ないのであるが、第二の時期に入つては、クラストが形成された後も、天候が好狀態（フェボラブル）である限りは、風成雪はその雪崩の危險を孕んだまゝで、何時までもその狀態を變へずに存續する事が出來るのである。それ故先にも第二の時期の始まる時に就いては記したが、その終る時に就いては記さなかつたのである。

かゝる狀態にある風成雪に變化を與へて、更にその發達の時期を今一段と進ましめるか否かは、實に氣溫の如何に懸つてゐるのである。即ち降雪後の快晴に輻射熱による第二次の雪崩は出る可能性があつても、氣溫の低い

場合には雪質が何時迄も粉雪狀を呈してゐるのと同じ樣に、風成雪も亦輻射熱はその表面に受けるのであるが、之だけを以つては何等決定的な變化を受けるには至らない。云ひ換へれば輻射熱の作用は風成雪の內部にまでは影響しないからである。然るに一旦氣溫の上昇、或ひは之を伴つたフェーン、降雨等が見舞はんか、すべての積雪はその深部まで、その影響を受けるのであつて、風成雪も亦こゝで初めてその特性の變化を餘儀なくされるのである。そしてこれが卽ち先に述べなかつた第二の時期の終る時に當るのである。

この場合に於ける特性の變化は、雪崩に關聯して甚だ重要である。風成雪による雪崩の最も重要な發生的條件が、雪面に於ける張力の平衡狀態の破壞であつた事は、今迄の處より明かであらう。併しこれをも少し詳しく考察するならば、風成雪自身がかゝる平衡狀態の破れ易い樣な特性を有してゐる事に歸因するのである。卽ち風成雪そのものは決して安定した形ではなくて、それは常により安定な他の形に移らうとしてゐるものであり、然もその經過に於いては一般の雪と同樣に、凝縮と云ふ形式に待つの外はない。それ故之を阻止してゐる雪面の張力がその平衡を失つた場合には、直ちに龜裂を生じたのであつて、かゝる不安定な形に於ける風成雪が、その質に於いてはいくら緻密であつても、いはゞその粘性に於いて甚だ乏しいのは、乾燥寒冷な氣候狀態の下にある雪の一つの通性と解する事が出來よう。

それ故もしも氣溫の上昇によつて積雪全體が落着いたならば、風成雪も何も龜裂を生じたりせずとも、より安定した形に移る事が出來、その代りにその粘性を增して、最早スキーで切つた爲に龜裂を生じる樣な特性を失つて了ふ。こゝに至れば風成雪は既にその發達の**第三の時期**にあるものと看做すのである。そして特にフェーンや降雨の如き、積雪の均質化の著しく行はれる天候狀態を一度經過した風成雪は、最早風成雪としては雪崩れない

ものと斷言してもよい位であつて、それは寧ろ風成雪たるの特性を失ふと共に、次第に正常な系列に近寄つて行つて、そのフイルン化を續け、かくして高次雪崩の發生の狀態に至れば最早この兩系列は合致したものと見るべきである。

これで風成雪の生活史に基いた處の、雪崩發生の系列を一先づ述べた事になるが、すべての風成雪がかゝる遷移を終るものではなくて、それは新しく雪が降る度にその發達を途中で遮斷されるものと見なければならぬ。この埋沒された風成雪の其の後の變化の細部に就いては詳しい事が解つてゐない。更にこの埋沒された風成雪の存在に起因する雪崩なんかと云ふものも、今までには殆んど注意された事がないのであるが、森田氏(24)はかゝる「埋沒された風成雪による雪崩の自然發生」の可能性があるのでないかとの疑問を提出された。

森田氏の考へる樣に支持點の少ない風成雪が、その上に積つた積雪の重量によつて、自然的に破壞される樣な場合とは筆者の最後に擧げた例に相當するものであり、從つて風成雪の破壞は自然的に起り得ても、之によつて危險な雪崩が發生する樣な事は、實例を待たずんば先づ考へられないのである。同樣に新雪層の加重が風成雪を有する舊雪面の、張力の平衡狀態を破らないかとの疑ひも起るが、自然的に降り積んで行く雪は、その平衡を亂さずして常に新しき雪面の平衡をその上に築いて行くものであるから、これも實例がない以上は、かゝる原因による雪崩の自然發生はないものとしておく。それよりも風成雪が埋れたと云つても程度があつて、五糎や十糎の雪で掩はれてゐる事もあらうから、こんな場合は人工的な攪亂や、衝擊を避ける樣に警戒すべきであらう。

風成雪による雪崩の地理的分布

風成雪による雪崩の發生的條件に就いては、不充分乍ら前節に於いて述べ終つたから、次には之を基として、かくの如き雪崩の發生が、地理的條件によつて如何なる制約をうけてゐるかを簡單に述べておきたい。即ちこれは概括的な雪崩の知識を、限定された地理的環境に當てはめて、以つて其處に發生し得べき雪崩を判斷する事になるから、之も亦登山計畫上から云へば甚だ重要な、又興味の深い事項たる事を失はぬものであらう。

これは又風成雪の地理的分布と云ふ問題とも考へ直す事が出來る。何となれば風成雪による雪崩とは風成雪の存在なくしては起り得ないのだから。然して風成雪とは又、一旦積つた雪が風の爲に浸蝕されて生ずるものであるからして、風に容易く吹き飛ばされる樣な輕い粉雪が、風成雪の形成には最も適しており、反對に一度クラストになつた雪とか、或ひはザラメ雪などと云ふものからでは、最早風成雪は形成され難い。即ち風成雪の地理的分布は第一に、その土地に降る雪の**雪質との關係**によつて定まるものである。それ故粉雪の多く降る、寒い乾燥した地方に風成雪は廣く分布し、越後方面から中國地方へかけての所謂濕雪の多く降る地方は、假令多雪ではあつても、風成雪の形成には不利な條件を具へたものである。これと同じ理由で高山に粉雪の多いのは、又そこが風成雪の形成に都合のよい事を示すものである。

第二には**地貌との關係**である。即ちいくら粉雪の降る地方であり、又風の强い地方であつても、風成雪の形成に適する樣な濶達なオープン・スロープがあるので無かつたならば、其處で多量の風成雪が形成される譯には行かない。これは森林のない高原や、或ひは森林限界以上の尾根筋に沿つて、風成雪が最もよく分布してゐる事から解る處であらう。

第三には**降雪後に於ける天候との關係**である。かくの如くして形成され、堆積された風成雪が、雪崩の危險狀

態に保たれたまゝで、何時までも存在する爲には、降雪後に寒い乾燥した天候が續く必要のある事は、先に記しておいた通りである。だから折角風成雪が形成されても、その尻から新雪に埋れて行つたのでは、風成雪の發達も中斷されるし、時間的に云つても危險狀態にある間が減少されて了ふ。それ故歐洲アルプスに於いては、風成雪による雪崩の事故が多い年は、降雪の少ない年と一致するものとされてゐる(25)。我が國に於いても野村氏の遭難が矢張り雪の少ない年であつた事は、この點でよく一致するものである。

勿論降雪後に風成雪の發達を著しく促進せしめる樣な高溫の日や、フェーン、降雨等があつては、風成雪による雪崩の危險が減殺されて了ふ事は云ふまでもないから、以上を綜括すると、こゝに初めて風成雪による雪崩の危險は、その季節から云へば主として**冬期**に限られたものであると云ふ事になるのである。又風成雪の分布狀態に就いて云へば、我が國の山岳は森林限界以上に拔き出た部分が乏しく、且緯度が低い關係上、雪質は概して濕潤に傾き、その上三日にあけず雪の降るのが、冬季に於ける山岳地方の一般狀勢であるから、その結果風成雪の分布は著しく制限され、從つて風成雪による雪崩の危險も、之を歐洲アルプスと比較する時には、ずつと少ないのではないかと考へられる。

卽ち歐洲アルプスは高緯度に位置する上に、その高さが遙かに我を凌いでゐる爲、その氣候上から云へば雪質は粉雪狀態を持續するに適し、又その地形上から云へば、氷河と森林限界以上を占める地域とからなる廣大な面積は、すべて風成雪の形成に好條件なる場所を與へてゐる。降雪狀態から見ても我が國の樣などか降りは少ないとしなければならないから、風成雪が危險狀態に保たれてゐる時間は長く、又これが季節的にも延長されるのは、その地理的環境が然らしめる處である。

これらと共に一般的な登山施設の完備は、歐洲アルプスに於ける冬季登山を容易にし、特にスキーの利用乃至はその享樂と云ふ點に於いては、こゝ十數年間に飛躍的な發展を遂げて來たのであるが、これが一方から云へば我が國でなら既にクランボンの範圍に屬する樣な風成雪の危險地帶を、その廣濶な斜面にまかせてスキーで横切る事にもなつて、又統計上、歐洲アルプスに於ける風成雪による雪崩發生の頻度を增加せしめる一因となつてゐるのではないかと思はれる。

こう云ふ見地からして、我が國に於いても富士山の樣な、降雪は比較的多からずして然も風が甚だ强く、高さから云へば斷然優秀な山だつたら、風成雪の見るべきものがあらうと筆者はひそかに期待してゐたのであつたが、その太平洋に直面した位置が原因して、此處に降る雪は濕雪の典型的なものであり、それでも風成雪は出來るには出來るが、降雪後に屢々襲來する海洋からの濕氣を帶びた雲霧が、雪面に凝固して日射の影響とは關係なしに雪面をクラスト化し、又この作用が風成雪の發達を促す爲に、この山では風成雪による雪崩の危險も、思つたより少ないと云ふ結論を得たのであつた(26)。

かくの如く風成雪の形成には色々な地理的條件が關與してくるから、風成雪と雖も決して何處へ行つても一樣なものではなく、又一旦形成された風成雪もその環境に從つて、その發達に相違ある事は免れ得ない處であるからして、之によつて生ずる雪崩も又一律には論じ難いのであるが、要するにこれらの諸條件が單一に或ひは複合して、雪崩發生の危險率を左右してゐるものと考へればよいのである。

筆者の前著に於いては風成雪及びその雪崩に就いては何等論及せず、何れ改めて筆をとる事を約しておいたが、

その續篇とも云ふべき本稿の發表が、遂に今日迄延引した理由の一つは、かくの如く本邦に於いてはこれらに關する觀察の機會を與へられる事の甚だ少なきが爲であつて、約を果すべく執筆した本稿も遂に考察と云ふ樣な題下に、文獻と信頼すべき僅かな實例とに頼つて不滿足な記述をするの餘儀なきに至つたのである。それ故今後に於いて筆者とともにこの一篇の欠を補はれん事を、諸賢に御願ひするとともに、研究の對象として他の雪崩と比較する時、この種の雪崩は自然發生をしない爲に、研究者自身を危地に陷し入れる懼れがあるから、この點に特に注意して貰ひたい事を、蛇足乍ら附け加へておく。

終りにこの雪崩に關する前後兩篇を草するに當つて、絶えず懇切なる助言を與へられたる西堀理學士に對して深謝の意を表すると共に、貴重なる資料を供せられた角田、高橋兩氏の好意を厚く謝するものである。

參　照

1 大島亮吉 1930 山　研究と隨想、一一—一二頁、二七—三一頁、一六〇—一九四頁

2 Lunn, A. 1920 Mountain Craft, edited by G. W. Young, pp. 431—434; 1921 Alpine Skiing, pp. 48—52; 大島、1ノ二七—三一頁。

3 Paulcke, W. 1922 In: Zsigmondy-Paulcke, Die Gefahren der Alpen, 7 Aufl., SS. 88-92; 大島、1ノ一七〇—一七二頁。

4 Krahnstoever, F. 1923 Jahrbuch des Schweiz. Ski-Verbandes, Bd. 18, SS. 15-16; 桑原武夫 1925 三高山岳部報告、第三號、一七五—一七七頁、大島、1ノ一七三—一七四頁。

5 Brown, J. W. and P. J. H. Unna 1925 Alpine Journal, vol. 37, pp. 160—163; 大島、1ノ一八〇—一八五頁。

6 森田勝彥 1931 アルピニズム、第二號、一一—一五頁、同第六號、一五—二〇頁。

7 Smythe, F. S. 1929 Alpine Journal, vol. 41, pp. 88—98; 1929 Climbs and Ski Runs, pp. 159—177.
8 今西錦司 1931 山岳、第二十六年、七七—九五頁。
9 大島亮吉 1923 登高行、IV. 一六六頁。
10 Lunn, 2ノ四三二及び四九頁。
11 Paulcke, W. 1926 Lawinengefahr, ihre Entstehung und Vermeidung, SS. 20—25.
12 11ノ三七頁。
13 大島、1ノ六〇—六一頁。
14 Rutgers, F. 1920 In: Ratgeber für Bergsteiger, hrg. von der Sektion ,Uto'; 2 Aufl., S. 114, SS. 119—122.
15 加納一郎 1929 氷と雪、二〇九頁。
16 8ノ八〇—八一頁。
17 8ノ八一—八六頁。
18 今西錦司 1933 ケルン、第一號、一三—一七頁。
19 8ノ八八頁。
20 山岳、第二十五年(1930)、一五〇—一五四頁(執筆者 松方三郎)、登高行、VIII (1931)、記錄一〇六—一一一頁。尙野村家より出版せる小册子あるも筆者は見てゐない。
21 大島、1ノ一八三—一八四頁。
22 Alpine Journal, vol. 42, 1930, p. 125.
23 Der Bergkamerad, 7 Jahrgang, 1930, S. 78.
24 6ノ一九—二〇頁。
25 7ノ Strutt の註及び一七五頁。
26 山岳、第二十七年(1932)、三三六—三三七頁。

(一九三二、九、二二、於京都)

「ティロールの冬」(八七頁—九九頁)を讀んで、氏の撮影になる美しいザールバッハ寒村の寫眞に魅せられ、彼氏より後に一九三一年二月。十日間のスキーホリデースを持つた時を思ひ出さずにはゐられなくなつた。

墺國のエンガディーンとはキッツビューエル附近の山地を呼んだのである。田中薫氏は「ティロールの冬」の中でこの墺國のエンガディーンに就いて概念を述べられた後「ザールバッハ」附近略圖を與へられてゐる。以下に記す私の紀行はこの中に全く含まれるものであるから、今更墺國のエンガディーンに就いて說明する必要もないが、今後の旅行者のためになる參考書及び參考地圖をここに附加へて置きたい。

墺國エンガディーンに關する私が參考にした一般旅行文獻

辻村　伊助　スイス日記(二〇七頁—二一三頁)

田中　薫　山岳第二十八年第一號(雜錄八七頁—九六頁)

田中　薫　山岳第二十八年第二號(雜錄五九頁—六〇頁)

Tursky, Franz: Skiführer durch die Kitzbüheler Alpen. 1926.

Rigele, Fritz., Schibergfahrten bei Kitzbühel. 1925.

Podhorsky, J., Gedanken und Bilder aus einer

雜錄

墺國のエンガディーン

高橋健治

故辻村伊助著「スイス日記」(一六〇頁—一八五頁)の中でエンガディーンについての旅行記を讀むことが出來る。夏も冬も春も私の最も住むに好きだつたオーバーエンガディーンについては又別稿にその印象を讓りたい。最近山岳第二十八年第一號雜錄に田中薫氏の

ザールバッハ風景

österreichischen Engadin. 1924.

Luther, Carl Julius, Erinnerungen an kitzbühel 1925.

Purtscheller, L. und Heinrich Hess, Der Hochtourist in den Ostalpen (Meyers Reisebücher) (S. 109—S. 118) 5te. Bd. 1928.

ザールバッハは田中薫氏も云つてゐられる如く墺國エンガディーンの中で最もスキーゲレートとして立派な處であり、未だ最も少くスキーヤーに知られて居る處である。

ザールバッハに關するスキー及び冬季登山の文獻

Koller, W., "Skiführer für Zell am See" 1931. (S.27—44)

Fischer, H., "Saalbach und seine Skiberge." (Deutsche Alpenzeitung Nr. 1/1931)

Goldmann, F., "Zwischen Saalbach und Kitzbühel" (Deutsche Alpenzeitung Nr. 1/1928)

Dessauer, A., Fastnachtstage im Saalbach. 1912.

Fleischmann, W., Hohe Penhab und Zwölferkogel. 1910.

de Watteville, H., A Winter in Tirol (British Ski Year Book. vol. 1. No. 3. 1922)

參考地圖は田中薫氏掲載のものの他に

○八代　準　車上談山(山岳第二十三年第二號)第四圖

○Skikarte der Kitzbüheler Alpen, Östl. Blatt, 1:50000 herausgegeben vom D u. Oe A-V. gemeinsam mit D S V.

○Skikarte von Zell am See und Umgebung, 1:50000. Kartographisches Institut, Wien.

○Skikarte vom Zell am See 1:75000 mit grünem Waldaufdruck und roten Skirouten. (Kartographisches früher Militärgeographisches Institut Wien.,

○Neue Alpenvereinskarte der Glocknergruppe 1:25000

○Alpenvereinskarte der Venedigergruppe 1:50000.

ザールバッハ行の計畫

一九三〇年のクリスマスの前夜。私はミュンヘンの西郊パーシングのハンス・フィッシャー氏宅で夕食後のお茶を飲みながら愈々明日からの冬期登山の計畫について話してゐた。彼フィッシャー氏はウィーンのアカデミカー時代には東アルペンに一年の大半を山の中で暮した男だつたが今はもうただ山に關係ある雜誌の編輯

者として一年に二週間より休暇のとれないのをしきりとこぼしてゐた。然し彼の山への憧憬は以前と同じく強かつた。そして二月中旬の休暇を利用して、二三、山の舊友を誘ひ合して墺國で最も人跡の少い、然も山間僻地でスキー登山の味へるところへ案内したいといひ出した。私は一月初旬から中旬へかけては已にベルナーオーバランドの冬季登山を計畫してゐたし、中旬以後は曾つて我國で山行を共にしたケンブリッヂ教授ヂー・アイ・テーラー夫妻とエンガディーンで行動を共にすることに約束してゐたが、二月は未だ未計畫であつたので幸ひこの計畫を約束することにした。メムバーは吾々二人の他に山友奥貞雄氏、ハンス・ベーム氏、アゥグスト・イッペン氏といふことになりウィーンのアカデミケルでアールベルグ派の主將ハンス・ベーム氏がリーダーとなることになつた。

一月三十一日晴（ミュンヘン―ウェーグル―ツェルアムゼー―ザールバッハ）

一月の末アローザの旅に英國のテーラー教授と別れを告げて私は奥貞雄氏とミュンヘンに歸つて行つた。

一月三十日の夜十一時ミュンヘンの停車場を發つてウェーグルに着いたのが夜中。吾々はこの田舍の驛前の宿屋で一泊するのである。薄暗い廊下の片隅みにはカンテラがつけられて、部屋の中もカビ臭い家具が如何にもキッチリとならんでゐる。一世紀、時代を引もどしたかの感がある。落付かない氣持ちで旅の一夜を過した。

朝起きてみると新雪で眞白だ。町を散歩してみる。ティロールの田舍風景が到る處の街角に見られる。ドロリとしたコーヒーにザーネを入れると、コーヒーだけは田舍とは思はれぬ味ひを見せて、朝の元氣を吾々に與へてくれる。

時間が來たのでパリー、ウィーン間の急行でキッツビューエルを過ぎ到る處美しいスキーゲレンデに魅せられながら、正午ツェル・アム・ゼーに着いた。ティロール獨特の晝食の後、雪道をゆられて自動車でザールバッハに向ふ。

天氣は未だ雪模樣を示して、山陰あたりの山旅の寒

空を偲ばしむ。日が西に入ると急に溫度が低下して四時ザールバッハの宿ペンハップに着いた頃には、零下十五度にも下つてゐる。ここでベームやイッペン氏に初對面する。アールベルグの荒武者だけにリーダーとして申し分ない男。愈ゝ明から吾々は日本のスキー術をアールベルグに比較して試みてみることになつた。

二月一日(晴)(アイビングヒュッテ〈)

標高一〇〇三米のザールバッハの朝は雪がきしむで顏もピリッといたむ。一月のはじめにユングフラウで受けた足の凍傷が次第に惡くなつて來たので、毎朝晩冷水と溫水とで治療をせなければならぬ。他のメムバーより仕事が一つ多い。コーヒーにミルクはつきものながら、吾々アカデミカーは蜂蜜や玉子の半熟マーマレードに二人前のパンと、贅澤を云つて然も時間が急ぐので仲々やかましい。朝食の用意を待つ間にゾームのアザラシ皮をはりつける。

吾々は主にゾームの青のワックスを粘りつけて使つてゐたが、「ツォラーアームト」といふ白いあまり粘着性のない新しいワックスを使つた。これで粘りつけると、滑るときにも充分役立つので實に便利なワックスであつた。

未だ皆の足並が分らないからトレーニングにアイビングヒュッテへ遊びに行つて、その調子で明日からプランを決めて行動することにする。今日はフィッシャー氏の舊友ロッククライムのエルンスト・ステッケル氏が吾々と同行する。ザールバッハから少し登ると、もうキッツビューレル・アルペンが手にとるごとくその美しいシーゲレンデを吾々の眼前に供して朝日に銀色に輝いて來る。吾々はスイスのエンガディーンでもこんなに廣い範圍のシーゲレンデを見たことがないと云つて驚嘆した。アイビングヒュッテに着いて少し練習をする。さすがにベーム氏のステムボーゲンのジッヘルさには驚いたのであつた。正午すぎ一滑りにザールバッハの宿に降り午後は自由練習をする。

二月二日(晴)コールマイスコップ(Kohlmaiskopf 1797m)—ウィルデンカールコーゲル(Wildenkaar

kogel 1910m) ―シェーンライテン (Schönleiten 1895m)―アヂッツコップ (Asitz-kopf 1915m) 登攀

今日は縱走と北斜面のスキー滑降との二つの問題を持つて一日の旅行をしやうといふのである。山は低いが雪は絶好であり、風景は墺國中でも最も美しい處である。吾々は午前八時三十分ザールバッハを出發。森と牧場との間を縫つて粉雪をラッセルして次第に登る。太陽に惠まれた陽かな日である。南斜面を幾つとなく蛇行して行く登りのテンポーは、ハンス・ベーム氏のリーダーシップに依る實に愉快なものであつた。コールマイスコップ(一七九八米)に登りつく前に既に晝食を取る。山頂はよく風がひどいから。コールマイスコップからアヂッツコップ(一九一五米)までの間を縱走する中、ウィルデンカールコーゲル(一九一〇米)、シェーンライテン(一八九五米)の兩峯を極めねばならぬ。アヂッツコップの上で(午後一時三十分―二時)再び輕い晝食を取る。罐詰と黑パン、果物パン、それにウィーンからの乾菓子と山袋の中からしきりに御馳走が出る。それは愈々これからアヂッツコップ(一九一五米)からレオガング(七八六米)まで千百米の降り一方の北斜面をブン〳〵と飛ばすための用意である。ワックスをうまく塗つて「ロース」の掛け聲勇ましく北斜面の粉雪を、息をもつがせず降りはじめた。私はラストを承つてゐたが、途中でオーダーを變へてフィッシャー氏がラストになることになつた。彼のテムポーが遲いからである。途中の牧場の小屋で大コップで冷いミルクを御馳走になり再び下へと降り出す。その滑降の愉快さは今だに忘れることが出來ない。立山彌陀原の降り、藥師太郎平への降り、さては北海道十勝岳など數ある我國スキーゲレンデの滑降と比較してみても、この千百米の滑降は吾々の最も印象深いものであつた。それにレオガングの村へ着いてから私はラングラウフをやらなければならなかつた。といふのは私はいつの間にか他のメムバーと反對の方向をとつたのである。汽車の線路に沿うてレオガングの驛が新驛と舊驛と二つになつてゐたから。(地圖の上にも二つになつてゐる。)汗だく〳〵で他のメムバーの居る停車場にたどりつい

たときには、丁度五時の汽車に間に合つて再びツェル・アム・ゼーに歸り、寒い雪の路を乘合自動車でザールバッハの寒村へ歸つた。時に日はとつぷり暮れて七時を敎會の時計は示してゐた。

二月三日(晴)　シャットベルグ(Schattberg 2096m)
ディリンガーエック(Dillinger Eck 2020m)登山

昨日のスキー行でフィッシャー氏は疲れたと云ふので、今日はハンス・ベーム氏をリーダーに奥氏イッペン氏に私と云ふ理想的のメムバーでグレムの谷を馬橇を雇つて登る。北海道や樺太に住んでゐる人にはさうもめづらしくない事を今冬の旅で知つたが、吾々は未だ信州の糸魚川街道を馬橇で往復したり越後でそれをみた位だつたから、この零下十五度の寒風を突いて走る馬橇の上では、大聲でカルメンでも歌つて元氣をつけてゐなければ、顏も口もやがて動かなくなる位だつた。九時にザールバッハを發つてグレムの谷の上方にあるアカデミカーヒュッテのそばを通つたのが十時、それから一氣に登り出す。丁度ザールバッハの南にあるシャットベルグに登るのであるが、途中ホッホアルムで晝食をする。一時にそこを發つて二時にはシャットベルグの頂上に着いた。今日は天氣がいゝので、昨夏フュラーロースで奥氏と二人で行つたグロックナーグルッペからグラナートスピッツェ、さては殆んどオストアルペンの總てが眼前に展開され、尙西南方スイスのアルペンまで。太陽にめぐまれて愉快な頂上の休憩を一時間取ることが出來た。これからは昨日の樣に又北斜面の粉雪を蹴つて千米以上の滑降である。例によつて頂上での休憩の間は山を見ることの他に腹を作るのにいそがしかつた。ゾームのアザラシ皮を取ると再び元氣づいて四十度の斜面をボーゲンする。三十分の後ザールバッハから下手の谷筋に降りた。冬の日はもうこの山谷から去つて大陸的の氣候が吾々にせまる。グン〳〵杖でこいでザールバッハ村ペンハップの宿へ急いだ。宿では五時のお茶が待つてゐる。御茶の後には面白かりし今日の土産話しを彼留守番フィッシャー氏等と共に大聲に語つた。夜は出來るだけ早く寢込む。

二月四日(晴後曇)　シュスターコーゲル　(Schüster-kogel 2210m)

天氣續きの上にザールバッハは谷底の村だから朝の寒いことはおびたゞしい。零下十五度以下は普通である。零下十三度のグレムの谷を馬橇の上で一時間も寒風に吹かれながら登つて行くのは一苦勞である。ホーゲルグラーベンの谷との出合で馬橇を捨てゝ愈々登る。ザールバッハを出發したのが八時三十分で、このホーゲルグラーベンの谷を登り出したのが十時だから、今日は一時間餘も馬橇の上で吹かれたわけで手も顏も足も凍つて了つてゐる。ツェントナーアルムで晝食をとるまで休みなしに登る。愈ゝシュスターコーゲル(二二〇八米)のカールを登りはじめる。午後二時難なく頂上に着く。風も無いどんよりした天氣なので又々頂上で晝寢をやる。三時出發。大きなカールを好雪にまかせて飛ばした。三十分の後には谷底へ千米の標高度を降つて、とある百姓家で暖いコーヒーを御馳走になる。グレムの谷をグン〳〵降る。四時三十分、アカデミカーヒュッテの側を過ぎ、五時には暖いペンハップの乾燥室で明日のスキー行の準備にワックスをしきりにぬつてゐた。

二月五日(雪)　ベルンコーゲル(Bernkogel 1735m)

霧と雪との日が久し振りに訪れて來た。又々雪の好くなることを夢みつゝ元氣に溢れて、ザールバッハを八時三十分出發して北方アイビングヒュッテに向ふ。十時ヒュッテを過ぎて十二時には簡單にベルンコーゲルの頂上に雪に吹かれつゝ立つ。今日は頂上で遊べないので直ちに吹雪の中を滑降しはじめた。一時にはペンハップで腸詰のあたゝかい晝食にありつく。

二月六日(雪)

今日はリーダーのベーム氏その他のメムバーが歸るので、吾々居殘る奧氏と二人は午前中ベルンスタインコーゲルにもう一度昇つて降り方を研究し、正午にザールバッハに歸り午後彼等カメラーデンと別れを惜んだ。シーハイル!!　又一年の後のスキー行を待ち佗び

つゝ。

二月七日(雪後晴)ライターコーゲル(Reiter Kogel 1820m)

今日からは奥氏と二人である。雪が未だ降つてゐるが、やがてあがる見込がついたのでベルンコーゲルの隣りのライターコーゲル(一八二〇米)に登ることにする。九時宿をたつて休み無しに登る。十二時ライターコーゲルに着く。雪は降らないが霧が深い。粉雪の上を愉快に降る。一時過ぎにはペンハップに歸つて了ふ。

二月八日(雪曇)

ザールバッハの南に美しく聳ゆるペンハップに登る予定であつたが、その天氣ではなかつたので一日を休養にして、村の風俗や習慣をみたり、スキーの練習をしたりして過す。

二月九日晴　ペンハップ(Hohe Penhab 2115m)

八時四十分馬橇でザールバッハを發つて再びグレムの谷を登る。アカデミカーヒュッテ(九時十五分)から登りはじめて二時三十分ペンハップ(二一一五米)の頂上に立つまで殆んど休みを取らない。一週間もトレーニングをするとすぐに若い吾々の體は山案内なみになる。然もペンハップへの登路は殆んど林間がない。森林は緯度を北へ行くと密林になつて、我國でも樺太の森林ではスキーを樂しめない如く、歐洲でもタンネやフィヒテの森はスキーで林間を樂しむと云ふ樣なことはない。然し密林の間を如何に早く縫つて降つて行くかは、我國中部地方山岳スキーの藪(ブッシュ)の中に於けるが如くである。この墺國のエンガディーンでは森林の限界が大抵一樣に千七百米位の所にあつて、その上は牧場地帶である。それ程人間の手は山の中に入つてゐるがスキー客と云ふものが少い。ザールバッハにゐると相當スキー客がある樣に見えるが、スキーゲレンデが豐富なために、山へ出掛けても他のパーティーに出合ふ樣なことは少い。谷を登る間にはティロールの風俗が面白く吾々の目にうつるし、一度この谷を訪れた旅人はこの墺國のエンガディーンの靜けさ、なごやかさ

を、スイスのエンガディーンに比べて一層強く印象づけられることであらう。峻險なる山は一つもない。そして鋭い旅人の心を慰めてくれるなごやかなスキーゲレンデが到るところにある。頂上で一時間の休みを取る間、そんなことを考へながら又暖い太陽にめぐまれて、二人は無言の中に四方の景色にみとれてゐた。

最後の壯快な滑降を味はうといふのである。又々千米餘りのダウンヒルである。

四時三十分には再びアカデミカーヒュッテの側を通つて、西日を背に負つてザールバッハへと平地を降る。

二月十日(晴後曇)　シュミッテンヘーエ (Schmittenhöhe 1968m)

十日間のザールバッハ行も終りを告げた。八時十五分の降りの乘合自動車でツェル・アム・ゼーへ。シュミッテンヘーエで最後のシーハイルを叫ばうと云ふので汽車の時間まで間があるのを利用して、ザイルバーンで昇る。天氣がよいので再びグロックナーの冬景色、昨夏歩いたグレッチャーがなつかしく朝日にかゞやいてゐる。吾々はインスブルックに一泊して、シュナィダーのサントアントンへ行かうとしてゐるのだが、グロックナーは吾々二人をしきりにまねく。山の呼ぶ聲きゝつゝも吾々は午後一時ツェル・アム・ゼーを發つて、夕方インスブルクの驛について無事この墺國エンガディーン行を終へた。

朝日山麓三面村記

高橋文太郎

昭和八年五月十九日

山形縣西置賜郡豐川村と津川村との境なる宇津峠は米澤驛より岐れたる米坂東線の終點驛手ノ子より約一里の處にあり。五百米に近き乘越なるが、縣道なれば道幅も廣く且つ闊達なる感じあり。

今や新綠も見事にて、疎林の間に隱見する木夷の花は稍ゝ盛り過ぎたると雖も、まことに美し。その傍に山櫻の一枝二枝散り殘りたるあり。背にミノ（簑）を當てナタフクロ（葡萄蔓にて作れる鉈入）下げたる男、家族連れにて、この峠の間道を下り來るに遇ひたり。六ツ許りの男兒も大人に倣ひてタッツケを著けたり。娘の背に負へる四ツ許りの幼兒は、母親、娘と同樣手拭の頰冠りをして、護謨靴を履く。

特に峠の山林にて眼を惹くは、赤き椿の花なり。背丈低く花多く持てり。花瓣稍ゝ丸味を破りて角張りて見ゆ。尙、紫の躑躅も偶々咲きたり。

津川村側の崖に見たるものなるが、以前より訊ねんとして聽かざる高山植物の一種あり。嘗て四月の末八ヶ岳信州側の麓にて見たる記憶あり。クローカスをもつと粗朴にしたる感じある花なり。

道が明澤川に沿ふては、一段と山の綠も映えたり。高坂部落あたりは既に奥まつたるの感じにて、その谷の廣やかに靜かなる、しみじみと懷し。たゞ最近始まれる鐵道工事にて、軈てこの和やかなる風趣も破壞さるべし。

次に伊佐領といふ部落あり、小國本村のうちなり。こゝに於ても亦澤は開きて、明澤川の水を合せたる橫川に沿ひ、田圃多く見えたり。

繰返すやうなれど、この澤に臨める山膚の春色は誠に軟かに映ゆ。特に栗、楢などの若葉見事なり。この部落の入口の路傍に、地藏尊像あり。視れば、朱に塗りたる彩色のものにて二基並ぶ。極めて丈長き板材を背に負ふて運搬する女あり。ニショヒミノといふ背中當てを著く。之は年號名前など編み込みて、所有者の

見覺えとなす習はしなり。

家の裏畑にてタッツケを著けたる頰冠りの女、頻りに桐の芽を手にて拂ふ。赤き三尺をしめたる青年田にあり、然も色眼鏡をかく。短き鍬を持ち田を打つに、村の人々は忙しき樣なり。路傍の八重櫻すでに盛りを過ぐ。

この川沿ひに進めば、松岡といふ部落を過ぎる。附近、川楊多し。流れは雪融け水なれば、殆んど澄めることなし。南方にあたりて飯豐山の雪姿。こゝも亦八重櫻、木瓜など。

小國の手前に町原の村あり。道に小學生徒多數、手に日の丸の旗を持ちて並ぶ。且つ子供を背負へる老人など數知れず。何かと訊ねるに、今日は飛行機が壹臺小國の町を訪れるなり。その歡迎と見物のためにて、飛行機は極めて珍らしといふ。

小國の町の家々は、多く小石を置きたる屋根を持ち、棟の形面白し。こゝまで鐵道工事進捗しつゝあり。工事などの爲め出來たと思はる橋基家といふ洋食店あり。入りて休めば、ウレ又はウルヰといふ山にて採れる草の漬物を馳走す。多少の苦味あれど美味なり。

爰より道を右に採り、横川に注ぐ荒川沿ひに北上す。流れに沿ふて開けたる澤は、すべて田圃なり。數軒づゝ纏まれる部落點々と連る。惣兵衞前などいふあり。山ウドを繩に結はひて干したる家あり。

船渡、今市邊よりの飯豐山の眺め、殊に廣濶なり。この邊の民家各々その庭にゼンマイを干す。賣り出す爲めなりといふ。梨、李の花見事なり。

栃倉と呼ぶ部落なりしが、こゝにて荷擔ぎの人夫を傭ふ。實は道案内も兼ねさす。同郡北小國村なり。案内は仁科春彌といふ。若くして頑丈なる體軀の持主なり。氣策にて、よく語る。

栃倉にてスキーを使用し始めたるは、今より十四、五年前なり。謂ふ迄もなく自製のものを使用し、その頃は杖を用ひず。昨年頃より急にその使用多くなれりといふ。自製の場合、木部は楢、ビンドッングにあたる紐は、土地でヰドヌ又はヰトと呼ぶ樹の皮を用ふ。淺き藁沓をズンベと謂ひ、踵へあてるものをアクトアテ

朝日山麓三面村三面　　高橋文太郎

サワブドウ(朝日山麓北小國村折戸)　　高橋文太郎

と呼ぶ。輪カンジキのうちザルカンジキといふものあり。之は普通のカンジキより丸型にて大なり。爪もなし。雪深き地方にてスカリなど呼ぶ種類に爰にては該當するものと思ふ。普通のものは謂ふ迄もなく楕圓にてツメ（爪）あり。ザルカンジキと同様、中央の乘り繩をノリヲ（乘緒）といふ。

この家に少年あり。護謨靴を履きタッツケを著けたるが、要領よく氣の利く子供にて、資料撮影の場合に種々とモデルとなり好都合なりき。名前を聞くことをつひ忘れたり。隣の家には近頃買入れたるスキーあり。案内せんと吾を伴なひ連れ行きたるに、その家の者留守にて何處へしまひたるか訊ねることを得ざりき。尤も老爺獨り座敷の奥に横はり居れるも、日頃の酒好きにて今日も飲みたる後とて、少年の手口に行かざりしといふは、如何にも山村らしく思ひたり。

尙、仁科方にはトビグチ（鳶口）と謂ふて、川にて流材に突刺し使用する道具見えたり。松材の杖位の長さにて、金具をその頭に嵌めたり。南アルプスの案内人が冬期この種の鳶口を杖にして、聖岳などに登りたることは友人から既に聽く。

背負ひ梯子をセシウマといふ。仁科は之を用ひず。ハケゴといふアケビの蔓製の、腰に下げる小籠あり。恰度この家にて見たるは、山から採れるアケビのボイ（エ）（蕾のついてゐる新芽の部分）が入れてあり。ボイはシタシにして食用とす。

栃倉の村を出でて、荒川沿ひに進む。荒澤邊に至りても飯豐の眺めは、振り返るごとに魅力ありて、路傍には流石に蛇多し。アサヅキといふノビルの一面繁茂せる畠あり。この部落附近の山林に又椿多し。宇津峠のものと同じ種類なり。

次は折戸（オリト）なるが、田圃の流れにバッタラ（ばつたり）といふ水車見ゆ。之は車無く、杵の船を利用したるものなり。蕗に似たる葉を持ち、白き花塊まりて一つの莖に咲くサワブドウと呼ぶものあり。恰度今は花盛りにて、秋に實を結ぶといふ。又こゝにてはイタドリをドングエイ（イ）と謂ひ、スカナといふもの別にあり。ミヅミサは團子柴（ダンゴシバ）とも呼び、川緣などに生え、然も正月十五日佛に供へる團子を挿す木なり。ヤナギ（川楊）又

美し。キズ（雉）のホヤといひて、山鳥が好んでその實を啄むヤドリギも見えたり。

路傍より少し入りたる處に、小鳥の首を挾む木枝にて作れるワナあり。之を仁科はグミョージと呼びしが、恐らく首用心ならんかと同行者話し合ふ。輪カンジキの籠（たが）を造る材は、トリキ、メクラフグ、杉など多く用ふとは矢張り同君の言なり。

三面（ミオモテ）口にて山形縣側最奥の部落は入折戸（イリオリト）なり。爰にて田圃は盡き、いよいよ國境の乘越に路は向つて上る。エサバウリ（魚行商人）の女の言ふに、三面への峠越えは大變なりと。雨も降りさうなり。急がねば途中にて暮れるといふ。この行商人を土地ではボテカツギとも呼ぶ。遠く日本海岸より來る者ならんが、女獨りの旅なり。鰊・乾鰯など賣る。

入折戸の村、人影は極く稀なり。田圃に出でて田を打ちし家族あり。行ずりの挨拶を交はしけるが、山村なれば殊にその風貌粗朴なり。傍の子供手に椿の花を持ちて立つ。

地圖に見える通りの小徑を、こゝよりは登り續く。

間もなく梯子坂（シゴザカ）といふ急坂あり。新らしき金カンジキの跡見ゆ。登り降りの者平生憩ふ場處あり。ヤスミドと呼ぶが、一行もそこにて憩ふ。雨滴落ち始めたり。ルリ鳥の聲聞ゆ。尾根にてオーイオーイと呼び交す人聲あり。ゼンマイ取りの人達だといふ。

この次にブナ坂といふ栂の大樹の生ひ茂れる急坂あり。麻布のタッツケを履きテンゴと呼ぶ繩編みの背負ひ袋にゼンマイを一杯詰めたる老婆の下り來るに行き遇ひたり。空いよいよ暗し。尾根痞せて、右の遙かに雪山見え始めたり。小徑の傍、イワカガミ多し。花盛りにて紅白入り交る。ツチザクラと仁科は呼ぶ。

こゝ暫くは誠に細き踏跡とも謂ふべきものにて、行く手には栂の暗く茂れる平地左側にあり。その邊一帶に雪田多く殘れるが、惜しくも雪面は甚だ穢れたり。右に一つ出でたる雪溪の頭ともいふべきところに、ドウロクジン（道陸神）の柴屋根（しばやね）あり。行く人、憩ふ者、皆こゝにて附近の柴を手折り、その道神の屋根を葺く習はしなり。椿、笹などの柴（しば）を多く用ふ。いと古風なる信仰、この邊の山貌に合致せるは嬉し。

これより少し登り行けば、軈て五八六米の國境に沿へる頭に達す。この乘越であり鷹ノ巣山續きの一頂點である場處の名前を訊ねしが、仁科は知らず。よき眺望なれど、雨氣迫りて遠望は利かぬ。近くは朝日連峯の雪を殘せし姿、遠く來し方の飯豐の姿、流石に山は低けれど奥深く感ぜらる。直ぐ下の末澤川に向ひ落ちる澤の茂みより、テルロ（水鷸鳥ならん）の聲頻りに響く。

頂點にての憩ひの後、路は再び栂林の間を潜る。數分も下ると、雪渓の廣く大なるもの左手尾根より降れり。附近の傾斜緩かにして、この雪渓の先端を横切ると、ヤスミドあり。爰が實は縣界なりといふ標杭立つて、柴にて屋根を葺ける道陸神の祠亦あり。これは境の神なりといふ。ユヅリハ、椿などの小枝を供ふ。

土地の者が栃の木シド（シドは側稜間の窪みをいふ）と呼ぶ、末澤川へ落ちる小さな澤を渡る手前にて三面村の男に追ひ付く。聽けば、小國より米を三面へ運ぶ歸りなり。

この澤を越えて、少し上ると四一五米の頂點に着く。眺望稍ゝ開けて、憩ふに好き場處なり。こゝにて其の男と一緒になり、いろいろ話す。見れば、男は地下足袋に金カンジキを著く。三本足のものにて、吾等が梯子坂の上りに見たる金カンジキの跡は、まさしく彼の踏み付けたるものなりしを氣付きたり。積雪期以外に斯の如く之を使用するは面白く、又この土地の風習なり。言ふ迄もなく、カタユキ（硬雪）の候など山入りする時、特に熊マキ（熊狩）する時には獵師共之を用ふ。或は五月下旬のころ、山に行きてゼンマイを採取する者、時に之を使用すといふ。三面にては鍛冶屋、村に入り來りて、之を造る。丁字形を有せる一片の横巾は、自分の手指四本（親指を除いて）を揃へたる巾最もよろしといふ。この金具は藤の皮などにて足袋に結ぶ。

附近にケラツヽキ（啄木鳥）の音聞ゆ。雄を青ケラ、雌を赤ケラと呼ぶ。小雨に濡れたる楢などの若葉は限りも無く眼を惹く。

仁科の擔ぐ荷物も、或はその米運びの男の袋も相當の重量らしく、爲めに時々休みつゝ進む。或る時は、

木夷、躑躅の花盛りなる斜面にて憩ふ。鷹ノ巣山續きの尾根は雪も疎らに見ゆ。高き山の經驗あるとて、今日の濡れたる路は決して侮り難く、動もすれば滑りて轉倒する惧れあり。細き樹の杖を太き棒に替へて、グリセード型にて下りたる處もあり。

鷹ノ巣尾根の眺望より別れて、路が北斜面を降ると、間もなく末澤川の岸に出づ。そこにはコゴメといふ羊齒類かと思はる食用草生ひ茂り、液汁を搾りたる後の漆の樹すく〳〵と立てる平地など拓けたり。

橋を渡ればゼンマイ小屋あり。三面の人こゝに來りてゼンマイの乾燥作業に從ふ。川面は既に夕靄に烟る。之より約半里、川に沿ひて歩く。

再びこの川を左に渡ると、最早三面の村なり。路傍に一本の梨あり。その下にハセといふ稻架立てり。ノビルの繁茂せる田畠の間を通りぬけて、舊家高橋源藏方に旅裝を解く。

五月十九日

三面（ミナモテ）（越後岩船郡三面村）にて

その生活など

山ブドウより葡萄酒を造る。この馳走に昨夜（ゆふべ）預かる。頗る美味なり。雨に濡れたる脚絆など乾かし乍ら榾火をかこみて、始めて會ふ山の人たちと語らひたる狀景、翌朝に至るも印象深く殘れり。黑光りする爐の部屋に、洋燈（ランプ）多くともしたるが、これは遠來の客を歡待する意味なりと。

朝のうち霧深きも次第に霽れたり。ぐるりの山々迫りて、民家を取り卷く田、僅少なり。他に山畑も見えず。村民の仕事はゼンマイ採取と冬の獸獵なり。村方の雪量五、六尺が最大といふも、尙大正七、八年の頃は八、九尺にも達せし事あり。近年に至り雪量は減少せりといふ。家の裏口にはユキヅと呼ぶ雪簾を掛けたるまゝのものあり。積雪期に出入する入口をチュウモンといふ。こゝは鉤型の出張りにて、多くは主屋に對ひ左手にあり。尙このチューモンの內部、オート（大戸）の前にメ繩を張り其に熊の牙（きば）を挾みて吊す。小池辰治郎方などにて之を見たり。災難除けのためといふ。

この部落現在三十戶許りにて、すべて宗教は三号山（さんごうさん）

龍音寺を中心とする曹洞宗なり。大炊介と普通に呼ぶ小池氏宅最も古く、現在の三面にその元屋敷ありしといふ。然も平家の直系を繼ぐ家なりといふが、今は聊か暮し向き豐かならずと謂はれ、高橋源藏方最も工面よしと聞く。伊藤氏の古屋敷は猿田川と泥又川との合流點附近なりしと謂ひ、高橋氏の舊屋敷は末澤川との合流點より三面川を少し遡りたるクルブチ（黑淵）といふ附近なりしといふ。この村、三氏よりなる。

村民は現在百五十六人にて、移住など極めて稀に、北海道へ二人移住せし他、宮城縣の鑛山に一家族行きたる許りなり。娘達紡績工女などの出稼ぎには出でず。他村より此の村に嫁ぎたる者十名許りありといふ。

龍音寺の住職は北蒲原より移れる者にて既に四年間當村に住む。半俗半僧なりと自ら語る。故を聽けば、寺の收入のみにては到底暮せず、爲めに副業としてゼンマイ採りなどするといふ。川より拾ひ上げたるカハギ（薪）多く集めて、本堂の隅に積めり。

村の小學校、現在生徒二十八人、目下ゼンマイ採取の時期なれば產業休みとて、生徒一人も見えず。教室は矢張り副業の干しゼンマイにて一杯なり。住職も教員も共に知識階級なりとて、この村にては暮しも樂ならざるやう見受けたり。

田の總反歩十六町三段なり。されど三十戸もあれば到底足らず。前述の如く米は多く小國方面より運搬し、鹽なども皆個々のセナカ（背中）にてアゲル（上げる）といふ。

當地より賣出す物產は主として前記のゼンマイにて年額七、八百貫より千貫に達す。ゼンマイの製法に二種あり、日蔭干しをアヲ製、天日にて乾燥せるをアカ製卽ち天ぼしと稱す。最初は共に小屋の釜にてゆでる。

尙、マイタケ、ナメコなどゼンマイに次で產出す。川漁はマス、イワナ、ヤマメなどにて、今は恰度イワナ多く獲れる。高橋さんは自分等の逗留の間數日鯖釣りに出かけ、十數尾は持ち還りたり。ユキシロ（雪融け水）のため、ヤマメは未だ釣れぬ、之れからだと言ふ。マスは水面鏡を使ひヤス（二本ヤス）にて突く。子供等が、ガンキョウ（眼鏡）を掛けて、小川にてイワナコ（鯖子）突きたるを見る。之をザコともいふ。

食膳に載せらるは、この新しき鰐の他に、山の青草なり。コゴメ、アケビのモエ又はボエ(新芽)、ウルキ、山ウドなど。米の外、蕎麥、粟、稗は重要なる食料なり。

高橋方の爐には火棚釣つてあり、その上にカワタビ(羚羊の脛皮にて造れる皮靴、獵の時用ふ)數多吊す。煤をかぶりて正體を見分くるさへ困難なるが、之は虫が付かぬためと、雪がしまぬ豫防のためなりと。

獵について

獵の作法などは現在も行ひ居るためか、なかなか話して呉れぬ。古式を固守するところ却て懷かし。槍を第一義の武器と考へて居ることは、特に舊き傳統ならん。三面にして始めて接觸せらるゝ風習なり。

獵師團のうち年長者をヤマオヤカタ(山親方)となす。村方に居る時は此者をヤマサキといふ。現在五十歳代の者なり。親方は部落民を代表して、山の神を祀る役を務む。氏神社は大山祇神を祀り、山ノ神様といふ。

シワス(十二月)十二日は山ノ神が獵に出る日だから、村人は獵に出てはならぬ。從つて山ノ神社への御詣りも成可く遲く出かけるのがよい。然ざれば途中にて山ノ神に出遇ふ恐れありと謂ふ。尙、氏神社の御堂内には、コマガタ(紙繪の馬)、熊や鷲の繪馬が供へてあり。オンベイ(御幣)もヤマサキが切るといふ。

レウバ(獵場)に於ける作法は嚴肅にて、親方に對しては絶對服從なり。手槍を持ち足の丈夫なる者先頭に立ちて獲物に近づく。この獵の期間は往復共十一日間位なり。一番槍、一番鐵砲の者は、獲物について牙の上にても下にても自分の好む方を先取りする特權認めらる。

雪中露營の法として、シャブロ及び雪篦にて穴を掘り、泥の見えるまで掘り下ぐる事あり。覆ひとして横木を亙し其に菅莫蓙を屋根皮として、一つの雪穴に六七人多い時は十人位まで籠るといふ。

獵場は多く羚羊、熊、猿などにて鹿は居らぬ。特に寒中のアヲシヽ(羚羊)狩りを名付けてスノヤマといひ、スノヤマには手槍を用ふるが原則なりといふ。

高橋方にて用ふる獵の服裝を左に記せば、頭にはブ

シといふ木綿淺葱色の帽子を冠る。之は頭巾型のものにて、耳を蔽ふことも出來るが、如何なる雪中に於ても獵中は之を垂れ下げるのは作法上許されぬ。但し進退谷まつたやうなる特殊の場合は之を許す。如何なる時にも眼と耳は出しておく事になり居れり。テカワといふ手袋をはめ、キカワといふ背を負ふ着皮をつける。前記のカワタビ（皮靴）は著けるとき、微溫湯に浸して柔軟にす。之等何れも羚羊の皮なり。ソデ（袖皮）は特に猿を用ひ、マヘカワ（胸あて）はマミ（貉）皮を使用する定めなり。これら、前後の皮は各々紐をもつて兩肩の邊にて結び合はす。

ハバキ（脚絆）は麻布にて作る。コバカマといふ麻布製の謂はばニッカー型の袴を著く。實によき恰好のものにて、ニッカー型などいふ形は外國輸入とのみ思ひたるに、この山村にてコバカマに接すると一種異樣の感に打たる。以前當地にて麻を畑作せり。それより之等を拵へしものなり。

このコバカマ、ハバキは獵以外に譬へばゼンマイ採取の折りなどの勞作の時用ひてゐる。且つコバカマの下には別に他の衣類著けることなく、獵の場合は特に如何なる寒氣にても此の作法を守るといふ。

脊に垂れ下げておく火道具あり。卽ち鐵のマッチ入れなり。腰にヤマガタナ又はキリハといふ短刀を差す。獸の皮を剝くなり。

輪カンジキ、山梨の花、クリ舟など。

吾等は高橋さんと共に山梨の花散る村を歩く。宇蓮萩山（六一二・五米）の深綠、三面川を越して對岸の前山などの傾斜に生える栗、楢などの新綠。池ノヒラと呼ぶ對岸傾斜の、その直き傍の麓に一軒のゼンマイ小屋あり。訪ねるに、老婆子供まで小屋に詰めたり。謂ふ迄もなく、石を載せたるコバ（栗のヘギなど）屋根の極く粗末なる小屋にて、莫蓙を垂れて雨戸となし、周りを樹皮又は萱などにて圍む。土間に莚など散在せり。ゼンマイ乾燥の期間だけの小屋棲みなれど、至つて簡素なり。老婆とタッツケ著けたる女兒頻りとウルヰの葉を整理す。娘は圍炉裡にかけたる焙爐型の臺に、取りたてのゼンマイを載せ乾かすに余念なし。外に土

竈築きありて、こゝにて先づゼンマイを煮るならん。テゴにゼンマイを詰めて負ふたる男、ミノ(蓑)、コバカマ姿にて山より歸り來る。テゴは前にも述べし如く繩編み製の横巾長き袋にて、之を背に負ふ。腰にハケゴと呼ぶ小さき籠下げたり。

この邊の耕地へ三面の部落より來るには、三面川を渡るなり。架橋なく、渡るに一艘のクリ舟を以てす。短き櫂にて漕ぐものなるが、全くの原始型なり。栂材にて造る。流れは此の邊未だ淺けれ共、風景よろしく、岸邊の朽木に身を横たへて、初夏の空に搖曳する山の雲を眺めたり。今日珍らしく晴れしと謂ひ、日の光りも強し。山梨の花、部落に散りて、鶯の聲微かなり。

村の者使用する輪カンジキを、カンジキ又はカジキと呼び、籠の材料はクロモジ、トリキを多く用ふ。材は始め大鍋にて藁、ホシ草(馬料)と共に煮て、軟めてから曲げるといふ。稻藁製の深沓を、フカグツ、淺いものをスシ(シンベと呼ぶ。或家にては、羚羊の顎皮にて造れるといふ子供用のシンベ(淺靴)を見たり。

狸の話その他。

石風呂に浸つて一日の汗を流せし後は、今宵も亦爐邊に寄つて主人から山の話を聽く。

スキーで三面へ始めて來たのは營林署の連中にて、昭和三年三月五日と高橋方の人名帳に記してあり。山形縣側の柳生戸より鷲ヶ巢山(一〇九三・三米)越えにて來たり。

「三面の者、朝日連峯の一角相模谷へは獵に這入らぬ。相模權現が白髮老人の姿にて現はれ、不思議な事件起るからだといひ、高橋は獵に笹原山の三角點(一三二三・七米)まで行つたといふ。

部落附近の山小屋に三面の人々泊り居りし晩、狸が小屋の廻りにて、ホイホイと呼ぶ人聲を立てた。それに向つて火の棒を投げつけたが、翌晩からは怒つたと見えて、獸の泣聲を出した。狸はよく小屋の便所へ人糞を食ひに來るものだ。或る時は岩を崩す音を出す。又時に木をガラ〳〵と言はして根倒しにする音を立てる。

山鳥が飛ぶと火ノ玉の樣になつて見える事がある。

ツキヨタケと呼ぶ毒茸は時に夜光りを發すといふ。

昭和五年八月十六日の夜、朝日連峯大上戸山の三角點（一四二九・四米）に夜營せし時、燒胡桃を全部狐に盗まれた。連中は源藏、甚太郎、幸次郎である。その晩は天氣が好かつた。小屋掛けの外に出て見ると、ぼうとした懐中電燈の弱い光のやうな工合の火が見えた。向ふの雜木の間に現はれ始めた。多分それは道陸神三角點（國境線尾根にあるらしい）の下の地點卽ち川べりのダン地の燈だらうと話し合つてゐた。通じるかと思つて大聲を擧げて見た。その中に一つの燈は忽ち十人位の松明行列と化した。見續けてゐると火はボヤ〳〵となつて、五十間も下方にさがつた。又見る間に、一本の火繩の形に變る。次いで流星の火の如く散つて、今度は元の處に戻り、元のボヤ火となつた。この時之は確かに狐火に違ひないと氣付いた。小屋掛けに戻つて炉邊の燒胡桃の包みを見ると全く無い。手提ランプで搜しても見當らぬ。紙包みから胡桃だけが散れたとすれば、紙だけは殘る筈だが、其もない。結局、火を遠く見せられて、その間に胡桃を奪はれたと語り合つた。」（以上高橋源藏談）

高橋方には現に一匹の日本犬飼つてあり。附近の山にて狼など見たる話あるやと問ふに更に無しと答ふ。偶々まぐれ犬など山に入り込みたるを獵師など時に見掛くる事あるも、之は一見して判るといふ。村には犬、猫の居る氣配さへも無く、誠に靜かなり。今現に新聞など屆かぬところを見れば、更に浮世との交通も稀なりといふべし。

五月二十日

朝より雨降る。いよいよ今日は三面に別れを告ぐる日なれば、記念にと高橋方家族を寫眞に收む。人々の顏の輪廓引き締りて整ひたるは、特に男子に於て著し。

部落を出端れるまで、同家の主婦など見送り呉れたるは、殊に印象深きもの〻一つなり。

三面川に沿ふて路は下る。瀧ノ大岩附近に來れば、最早河底深くなり激流となる。右側に稍々拓けたる耕地ありて、小屋二、三軒あり。ゼンマイ小屋なるが、其以前の時期には部落より馬など曳きて來り爰に駐む

といふ。猿田川林道との分岐點に、吊橋あり。之を渡りてフナフキ峠を越える迄は、路流れと聊か離れたり。アマクラ澤を横切る邊、珍らしき呼名の植物多し。

この邊又、栃倉附近にて見たると同種の椿あり。花瓣雨に濡れて一入趣き深し。手に取りて見るに、矢張り異樣の花片なり。ミヅメと呼ぶ白い綿の如き花を戴せたる濶葉樹見ゆ。山櫻桃の如き實がなり、秋に入りて落ちる故、熊が之を食ふといふ。樹皮に苦味あり。當地にてシナの樹皮をマダといふ。シシヅメと呼ぶ灌木あり。今、白く細かき花の盛りなり。

ヤマシキビと呼ぶ小木、紅味帶びたる白き花を一面に著く。葉の樣子、榕に酷似せり。程よき赤味、莖の邊に見ゆ。注意すればするほど、美しき花なり。尙この附近に傾斜緩かなる處ありて、栩など大木の切株殘る。ゲンゲイといふ片栗の花開けり。つひ此の間、外秩父の峠路にて此の花を見、この名前を知りたるものなれば、殊更になつかし。委にては花がをさまると根の玉より片栗粉を製し、或は花と葉とを摘みて之をシタシにして食ふといふ。

フナフキ峠頂上には、丸木にて組合せたる粗朴の腰掛あり。昔、舟を曳きてこの峠を越えたるより、この名由來すといふが、確かならず。

之より亦路は三面川に沿ふて下る。

ホイトガサと呼ぶ草あり。ホイトは土地にて乞食の意、山中にて雨に遇ひし時は此の莖を手折りて、葉の部分を倒にすれば笠になるといふ。葉莖全體が赤褐色を帶び、稍〻キヌガササウに似たる葉並なるも、鋸齒深く先端尖れり。多く葉五片を數ふ。今恰度穗狀の蕾をもつ。根に玉あるといひ、燒いて食ふ。日蔭の澤などに多きものなり。ホイトアシともいふ。他にサワグルミ、ハナ（もみぢ）の木など目に付く。栩の大樹又多し。

右に岩井澤を合せるころより、溪流いよ〳〵深し。對岸鹿森山（八三五・六米）の向ひ合ひに、五五六米の頭あり（陸測五萬分一鹽野町）。これより三面川に下る細き澤あるが、この邊にて晝食を喫す。高橋方にて作れる胡桃鹽の握り飯は、頗る旨し。赤き蛆の如きもの、靴などに匍ふ。この邊にて有名なるヤマヒルにや

あらんかと惧れしも、他の種類なり。同行高橋君の跳足足袋には、此の後屢〻赤きヤマヒル著きたり。ヒルは傍に覘(ねら)つて跳びつく者なる故に、どうしても後の者がやられると言ふ。事實その足袋には、一度に三匹許り食ひ著きしことあり。

愈〻澤も開けてカニバヒなど謂ふ處を過ぎると、炭燒小屋あり。岩崩(イワクヅシ)（越後岩船郡）の者來りて燒く。これより岩崩の部落は近し。同所に着きて憩ふ中、前記のホイトガサ二つ許り山より採り來りてあるを見る。聽くとヌスットガサと呼ぶ。誰か山より之を笠にし頭に載せ來りたるにあらずや。何處までも人なつこき植物なりと思ふ。（昭八、七、五）

行程（陸測五萬分一小國、鹽野町、朝日嶽）

十九日　曇雨　米澤驛着前五、五四—米坂東線手ノ子行六、二〇—手ノ子着七、五八—手ノ子町發八、二〇—自動車による—宇津峠頂上八、五〇—小國一〇、三〇—一二、一〇—栃倉一二、五〇—仁科春彌方發一、四〇—五〇（爰にて自動車を返す）—荒澤—入折戸三、一〇—梯子坂ヤスミド三、二五—楡坂上四、〇〇—道陸神祠—五八六米頂上四、四五—縣界休憩處道陸神祠五、〇五—栃ノ木シド五、三〇—四一五米頭休憩—末澤川渡橋—吊橋—越後岩船郡三面村三面高橋源藏方七、一〇。

二十日　晴

高橋方滞在、附近探訪。

二十一日　雨

高橋方發九、二五—瀧ノ大岩九、五〇—吊橋—アマクラ澤出合—フナフキ峠頂上一〇、三〇—岩井澤出合—五五六米下ノ澤出合晝食一二、一五—四〇—大澤出合吊橋一、一〇（此橋は壞れかけてゐる）—カニバヒ（蟹這）—第二炭燒小屋二、〇〇—岩崩三、三〇—舟に乘る四、一五—村上町六、〇五。

小澁川 荒川溯行 遠山川 北股 大澤を下る

黑田初子

旅程

昭和七年八月二日　東京發、小澁川桶谷にゆく。
朝汽車。伊那電の伊那大島四時四十分着。鹿養までハイヤー。鹿養五時半發。桶谷に七時着。
三日　小澁川廣河原小屋にゆく。
大河原十時四十五分發。鎌澤十二時二十分。晝食十二時二十分—一時。小澁湯二時三十五分—四十五分。ハンノキ澤上四時—四時二十分。高山澤五時。廣河原小屋六時十分。
四日　荒川溯行。荒川岳をこえて、荒川小屋に到る。
出發八時四十分。第一の瀧九時五十分。三つの瀧を絡み終る。十一時十分。休十一時十分—十一時卅五分。水べりへ出て食事十二時三十分—一時。四つ目の瀧を絡み終る。二時四十分。休二時四十分—三時。前岳着六時十分。荒川小屋六時四十分。
五日　雨天にて滯在。金光(案内)は廣河原に荷を取りに行く。
六日　東岳へ。出發七時五十五分。東岳頂上十時五十五分。
休憩十時五十五分—一時。小屋へ歸る。三時三十分。
七日　赤石を越えて百間洞に野營。
荒川小屋出發七時五分。大聖寺平七時三十分。百間洞三時十分。
八日　大澤を下り、北股大澤渡の小屋に泊る。
百間洞六時三十分。休三十分。大澤岳八時十分。鞍部出發八時五十分。ゴーロを下り二つの澤の出合に出る。十時五十分—晝食十時五十分—十一時三十分。大澤尾根に達す。四時十分大澤渡小屋四時三十分。
九日　北股を下り上町に出る。
大澤渡小屋發七時。大レン澤(小屋有り)八時。黑澤八時二十五分。尾高澤九時十五分。休九時二十分—四十分。アカル澤九時四十五分。タルガ澤十一時十分。晝食十一時十分—十二時十五分。不動澤(ブドウ澤)二時三十分。フスマ澤二時四十五分—三時。北又澤三時三十分。休三時三十分—四時四十分。井戸端七時三十分。休七時三十分—四十五分。上町九時十五分。

同行者　黑田正夫　　案内人　森上金光

第一日

朝六時二十分に新宿を出た。

伊那電は相變らず高い。それでも、久振りに見る南の山々に、何とも言へない懐しさを感じて、飽かず外を眺めてゐる内に、伊那大島に着いた。驛前から鹿養（カヨウ）といふ部落までハイヤーをとばした。鹿養から夕陽を脊に受けて、大河原へ向つて歩き出したのは五時半だつた。峠の様なところを越してからは、急な下りで、それから足早に沈み行く太陽と道を競つたが、山に入る日には負けるばかり。桶谷のとある家で、この先の道を尋ねたところ、未だ二時間位かゝると言はれて一休みすることにした。東京を今朝出て來たと話せば、そこの夫婦は「それでは、さぞ疲れてゐるだらう。よかつたら、この汚い家に宿つてゆきなさい。」と親切に言つてくれるので、たうとうこの宮島茂喜次方に厄介になることにした。

風呂に入つて裏の橋上に凉めば、螢がスイ〳〵と飛んでゐた。

第二日

大河原の宿に着いたのは九時頃だつた。丸川といふ宿屋へ立寄つて、案内の相談をした。「金光といふ案内は今山に行つてゐるのかしら、その人をよんで來てくれないか」と頼んだ。運よく、金光は畑で仕事をしてゐたので、暫くして來てくれた。そこで荒川を澤通し上り度いと話すと、自分達も誰一人として行つたものは無いが、行けるかも知れない。やつてみませう。」といふので、平田厚といふ人夫を荒川小屋までの荷擔ぎに雇つて、四人で十時四十五分に大河原を出た。

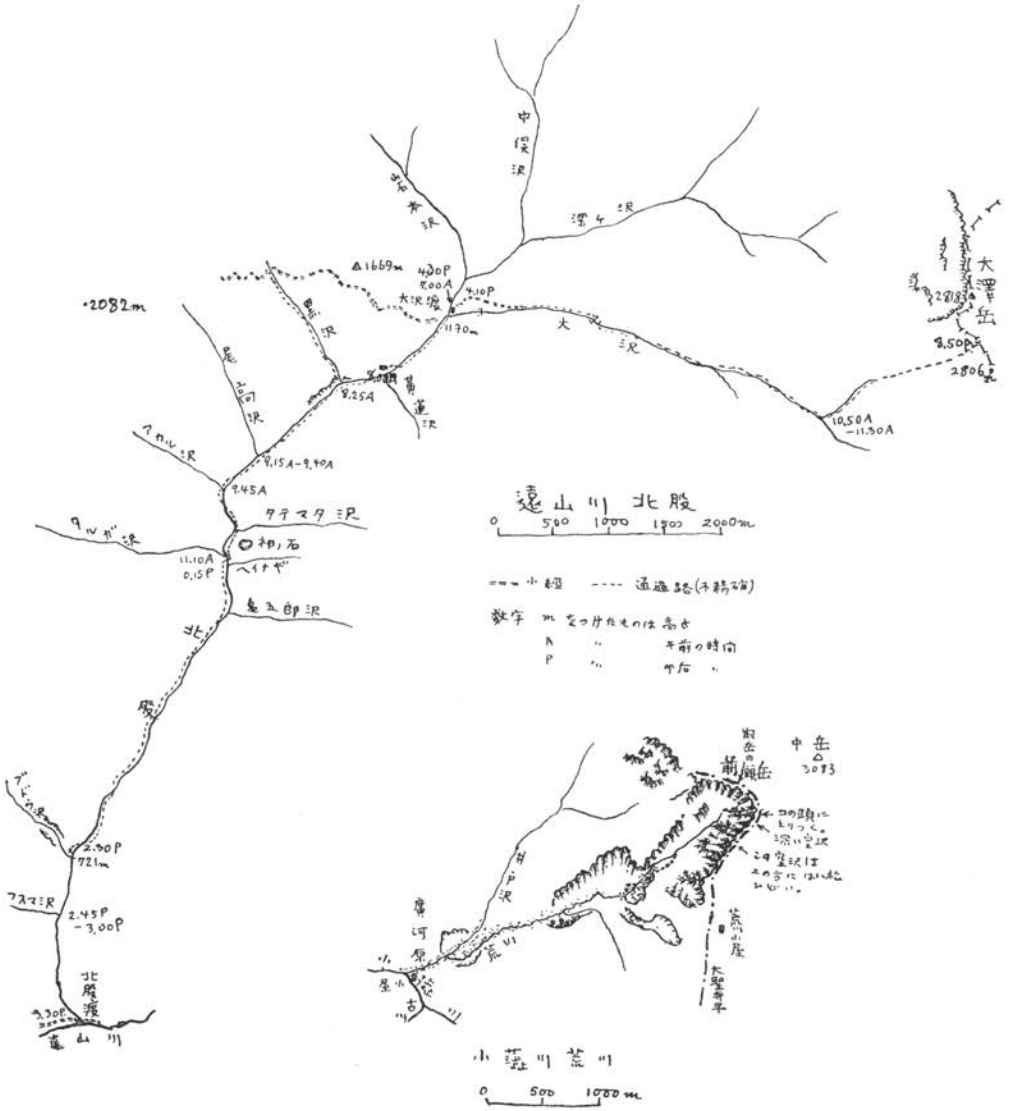
鎌澤に十二時二十分に着き、冷い筧を圍んで晝食をたべた。一時に腰をあげ、木蔭の多い緩かな路を小澁の湯まで一時間程で歩いた。湯は沸してゐるらしい。お客は一人も無く、晝食さへ食べさせて貰へない。「小澁湖貸ボート」といふ立札の側にボートがしまつてあるので、湖はどこですかと聞けば、もう失くなつた、といふので驚いた。然し、湖の跡だといふ廣い河原を見て、景色といふものも變化するものだと、泌々感じ

た。河原に出ると廣々として、流れの早い小澁川の水は實にきれいである。渡渉が多いので、ワラジにはきかへ、太い脛を出して歩いた。ハンノキ澤、高山澤を過ぎると、目的の對象、荒川岳が切立つて仰がれ、私共の胸は高鳴るのであつた。寫眞を撮つて行き度いけれど、二十分もの我慢に拘らず霧はのいてくれないので、斷念。小屋へ六時十分に着いた。廣河原の小屋は可成り大きく、中央に土間があり、兩側が一段高い板敷になつてをり、可成り多くの人が泊れる。然し夏でも小屋番は居ない。

第三日

荒川はずつと前に關西の人が登つて見ようとして、最初の瀧まで行かれたが、引返され、上からは金光が下りてみたが、瀧があるので下りられずに引返したそうだ。だからその上の瀧と下の瀧の間といふものは、全くどうなつてゐるのか誰も知らない。私共は其日は曉早く出掛けて、どうしても一日にやつて了はふとしてゐた。それは途中に宿る樣な場所は全然なし、又あつたとしても、若し夕立が來たりしてさへ落石や石雪崩が危險で澤の中にゐられないのに、まして二日續く天氣などを豫想することは不可能な爲であつた。そうすると一日にやるには、出來るだけ早く出て充分に滿一日を使はなくてはといふので、三時に起きてみたが悲しい哉雨であつた。仕方がなく又寢袋へもぐり込んで雨だれの小屋打つ音を恨めしく聞きながら寢てしまつた。

六時過ぎに起きて外を見ると、雨はやんでゐるが、霧が尾根に彷つてゐる。私共は上の小屋へ荷を運びに行く平田を送り出してから、今日は瀧の探險に行かうと言ひ出した。ロープに辨當だけの輕い身仕度。それでも雨具だけは用意して、私共を寄せ付けまいとしてゐる第一の瀧へ向ふ。瀧までは渡渉こそあれ、時に稍ゝ岩の多い場所もあつて手頃な面白い澤上りであつた。然し眼前に大きな瀧を眺めた時に、オヤオヤ之かと思つた。あまり高いのではないが水量は多い。私共は右側の垂直な岩を一ト登り上つて瀧の上に出た。金光は之から先は誰も通つたものがないから少しも判らな


中俣沢
北本沢
深ケ沢
大沢
大澤岳
2806m
2283
8.50P
10.50A
-11.30A
△1669m
4.30P
5.00A
4.10P
大沢堰
1170m
黄蓮沢
8.25A
黒沢
尾高沢
8.15A-9.40A
7.45A
タテマタ沢
タルガ沢
○神石
11.10A
0.15P
ヘイナギ
亀五郎沢
北股
2.30P
721m
フスマ沢
2.45P
-3.00P
北股滝
3.30P
遠山川
遠山川 北股
0 500 1000 1500 2000m
小細
通過路(不詳箇所)
数字 m をつけたものは高さ
A 〃 午前の時間
P 〃 午后 〃
中岳
3073
前岳
この頭にとりつく。深い空沢
この空沢はその奥にはいるとよい。
荒小屋
大聖寺平
井戸沢
東河原
小荒川
小荒川 荒川
0 500 1000 m

い。と言つて好奇心に燃える樣な眼付で足早に進んで行く。又直ぐ第二の瀧だ。之は前の數倍の高さで相當手ごはい。私は草鞋にはきかへ互に繩で身體を結びあつて、緊張して左側を絡むことにした。瀧の落口の左側はオーバー・ハングにゑぐれてゐて、下には淵になつてゐる瀧壺が見える。急なザレや岩を攀り、オーバー・ハングのところは一人づつジッヘルして水平にへつつた。一安心して先へ先へと行くのに、金光の足の早いこと驚くばかり。やがて第三の瀧にぶつかつた。之は實に立派なもので、薄い青味を帶びた滑らかな蛇紋岩の絶壁を落下してゐる。大きさは華嚴瀧位に思はれた。その絶壁の右側のチムニー狀の處を攀ぢ登ればよさそうだと考へてゐると、金光も、右のあの細い割目より外にないねと私を顧みた。そこは傾斜は急だけれどサウンドロックで少しも危げなく確實に登つていつた。瀧の上へ出たとはいへ、余程右の方へ上つて了つて裏側も急な傾斜をなしてゐるので再び水べりへ出るには大變であつた。つまり私共は薄い衝立のやうな岩の上端にあがつてゐたので、一休みしようにもあまり足場が惡くてゆつくりとは腰もおろせない。ずつと下の澤の水べりを見下ろしてみたが、落石があぶなくて休むどこではない。ちよつと休んでゐる內にも、あつちでもこつちでも石が落ちてゐる。私はもう少し行つてみたいと思つた。とにかく今日中に引返へせるところ迄行つて來ようと、休むによい所を探し求めた。すると向ふ側の澤へ突き出た岩壁の下が稍ゝ安全らしいので其處へ向つて下りることにした。急な斜面なので、一人づつ確保しながら下りるのであるが、十五米位下の所は、どうなつてゐるか見えない。行つてみては下り易さうな所を撰んで行つたが、最後の下りはザレてゐて足の止り樣が無く、思ひきつてザラザラと滑れば、繩でしばつた身體は橫倒しになつて止つた。手の皮が少々傷いたが、そのまゝ水べりに出て時間を見ればもう十二時半。この僅かな下りに五十分も費してゐたのには驚いた。黑田の體の調子がよくないので晝食後もゆつくり休んで一時に出發した。その間に上の方を眺めようと、後の岩の上に金光といつしよに立つてみたが荒川の尾根は見るべくも無い。私は、こんなに上つ

て來て又、今下りに險しい頭を越え、瀧をへつつて小屋に歸るのはいやだ。何とかして今日の中に行つて了へないものかと念じてゐた。それに未だ一時だ。休まずに、もう少し見當のつく所まで早く出てみようと今迄確保して來た綱をしまひ、自由の體になつて又々石高の澤を登り續けた。又瀧があつたら大變だ。時間がかかつて了ふと考へながら一時間程登ると、ドウドウと瀧の落ちるうなりがきこえて來た。澤が一枚岩の岩壁にぶつかつて左に折れてゐる。曲角迄ゆくと驚くばかりの大きな瀧が左よりの岩壁からすさまじい勢で落ちてゐる。いやになつてしまふ。何といふ荒れた澤だらう。道理で今迄人が手を付けなかつたわけだ。「荒川だもの荒れてるにきまつてるよ」と金光が笑つてゐた。後から考へると四つ目のこの瀧は、尾根の登山道路からも、大聖寺平や大澤岳あたりからもよく見えてゐるものであつた。幸ひ、澤の突當りの岩壁と夫に直角な瀧の落ちてゐる岩壁との交り目に大きな割目がはいつてゐるので、其を登つてみることにした。たとひその裏側は三つ目の瀧のやうに絶壁をなしておちてゐても之を登るより仕方がない。この割目は相當に廣く、堅い岩と風化したぐづ〳〵の相とが交互に出て來る。ゆるい足場は全く閉口である。疲れきつてガリーに登りついた時、未だこの先に瀧があつたら、もう今日は引返すより仕方がないと觀念した。ガリーの頭には灌木のくつついた岩が出てゐた。其をカモシカの足跡を傳つてからむと鍬にもぐり込んで了つたが、他には歩けさうな所もないので、そのまゝ進むと、先頭の金光が喜びの大聲をあげた。「荒川のやせ尾根が見えるよう」と叫んでゐる。私も嬉しくなつて、大急ぎで鍬を這ひ出せば、行手遙かに荒川岳の物凄い岩の重なりが空を限つてゐる。遠い遠い尾根。暗くならない内に行けるかしら。でも此處まで來れば、も早や戻るよりは進む方が早いのである。それだけでも嬉しい。そして案じた裏側も、鍬が所々に出てゐて、割合樂に澤に出られさうだし、澤は見通せて瀧もなささうだ。二時四十分から三時まで休んだが私共の身體には新しい元氣が溢れてゐた。「探險が本事になるねえ」といふ聲にも喜びの色は隱せない。鍬や草付きや一枚岩なぞをからんで、

殆んど水平に澤に下りた。しかし澤には煉瓦色した巨岩がいくつもある。聖岳の西澤を攀る時きいた、クォルツァイトとかいふ燧石の大きな塊だ。そして其の形の異様なこと、夕立雲にでもありさうな形。それから上るにつれて石の落ちる音が機關銃の樣に感じられて來た。それでも私共は自分達の先頭の足の下からの落石以外には飛び來る石にはわざわひを受けなかつた。たゞその音の恐ろしさに早く高い處へ上つてしまひ度いとあせつた。小粒な雨が四五粒顏にあたれば、石なだれが今にも出やしないかと恐ろしくなつて早く尾根に出たくなる。何にしても、私共は追ひたてられる氣持だ。其でも二時間かかつて了つた。最後の前岳へのロッククライミングは、その粘板岩のしつかりした手ごたへと丁度よい足懸り、手懸りの氣持よさにすつかり喜んでしまつた。

霧こそ深いけれど雨にもならずに無事に荒川前岳に立つた時、私は固く金光の手を握つて「有難う、有難う」と繰りかへした。時に六時十分。

それから馬の脊とも言はれてゐる尾根を右へ右へと傳ひ、しばらくゴロゴロした所を下れば、荒川小屋が見えた。「ヤツホウ」の呼び聲に下でも答へた。もういそぐ必要もなく、滿足しきつた心を包む健康な肉體をブラブラと小屋へ運びさへすればよいのであつた。そして淡い夕霧を透かして望まれる富士山や赤石の美しさに見とれながら白樺の林に入つた。林を通りぬければ荒川小屋だ、六時四十分。「おめでたう。おめでたう」の聲に迎へられて小屋に入つた。暗くなる前に外に出て、赤石のひいてゐる軟い線をいつまでもいつまでも見入つてゐた。

第四日

風足早く、雨がしきりに小屋の屋根を洗ひ凄い天氣だつた。私共は一日違ひでこの荒天に遭遇しなかつたわけであつた。雨や風の音をきゝながら、雜誌をよんだり、晝寢をしたり、歌を歌つて一日を過した。朝早く、金光は廣河原の小屋に置いて來た荷物をとりに行つた。そして二時頃戻つて來た。

夜になれば、一日焚火の煙でいぶされた眼は、誰の

もはれ上つて、みつともない。

第五日

東岳へ遊びに出かけた。なるたけ、ゆつくり登つて、できるだけのびて歸らないと、又あのけむい小屋に長くゐなければならないといふので、まるで老人の散歩みたいな歩き方でいつた。この日は小屋で近づきになつた金子さんと金光との四人であつた。八時五分前に出かけてブラブラと荒川東岳への上手につけられた小徑をたどつて登つていつた。頂上から東岳へ向つて下る時、積雪期のこのあたりの魅力を想像して、春早くにでも來てみたくなつた。東岳は赤石より高いとか。そして頂上近くは足場もあまりよくないのに、よくも大倉さんは籠で登られたものだと思つた。頂上に着いたのは十一時五分前。風あたりの少ない岩蔭で、一時迄休んだ。千枚岳の方へ行く平な尾根を指して金光が去秋遭難された川保さんのことを話した。「川保さんはあそこの廣い所で嵐にあつて道を失ひ、さん〳〵探した擧げ句、荒川小屋に戻る道を見付け、小屋の直き上までたどり着きながら、凍え死んだんだよ。何故、あの下の小屋へ逃げ込まなかつたんだらう。俺が、あそこに小屋があると言つたのだが」と殘念さうに話した。金光は、川保さんの死ぬ前日まで一緒に歩いてゐたのだといふので、一しきり故人の噂に花を咲かせた。遠くに見える白峯方面の寫眞をとらうと、雲の去るのを待つ間、私共は苔のしとねに長々と横になつた。それは暑からず寒からず、風もない。軟い苔はよいスプリングのベッドの樣な感觸で、青天井の快さは、この世ながらの天國であつた。二時間の甘い夢は、ポツリと來た一滴の雨に破られて、四人は立上つた。

足早に荒川岳へ傳つたが、雨はほんの一時的で霧に變つて了つた。荒川小屋への下りで川保さんの死體のあつた場所にケルンをつくり、そこらに咲いてゐた花をその側に移し植ゑ、水筒の水をかけて一同禮拜した。一人殘された坊チャンのションボリした顏が目についてて仕方がなかつた。

第六日

七時少し廻つた頃に小屋を出た。朝露の一ぱいおいてゐる草の間を登つて大聖寺平へ出た。堆石の多いこの平の名は、幾度、山友達の口から聞かされてゐたことだらう。行者が苦行してゐたといふ場所もあはれに興味深く眺めた。赤石の最後の登りはらくな登りで、知らず識らずの内に頂上に着いた。富士見小屋の屋根が遠くに望まれた。頂きから百間平へ出るところ、ゴーロと青空と白雲の調和が何とも言へなく美しく、中央アジアの未だ見ぬ世界を思ひ起させられた。百間平から小澁の方を見下せば、雪崩に薙ぎ倒された樺の木が無惨な姿を見せてゐた。美しいお花畑を過ぎ百間洞に着いたのは三時だつた。此處は清い水が手近かに流れ、樺の木で取圍まれた絶好の露營地だ。近い將來に小屋が出來るやうに聞いた。

第七日

百間洞から大澤岳まで、あまりに休み休み行つたので一時間半もかかつてしまつた。頂から遠山側の谷をのぞけば、虹の後光に取り圍まれた私共の影が望まれた。霧のお化とはいへ、まるで佛の姿である。私は、海底に沈み行く寶王を惜む樣な氣持で、その消え行くのを見守つた。大澤岳の頭を越えた始めての鞍部から降ることにしたが、金光も始めての澤だ。往來きする霧の間から谷をのぞかうとするが、仲々みえない。その中に幸ひ霧がとぎれて谷底がぱーつとひらけた。次の鞍部から落ちてゐる澤との出合までは一直線にみすかされて、大きな岩も出てゐないらしい。夫で安心して金子氏に別れをつげ、私共は大澤に向つて急傾斜の狹いゴーロを下り初めた。人の滅多に通らないこの空澤は、今春の雪解けからは踏まれた樣子もなく、一足毎に足下に石雪崩を生じ、土煙りで澤が一ぱいになる位である。かうした所をザラザラ下つてゆくと、ザレもとぎれて岩床の出た所もあり、豫想外に手間どつて、鞍部で目の下に見えた出合まで、二時間もかかつて了つた。こゝには水が流れてゐるので、そのほとりで十一時半までの長い晝休みをした。それから期待にはづれた、美しくない澤を御義理のやうに下つた。主に籔の中をくぐつてゆくのだが、今迄の樣な砂煙りの中に

ゐるよりは氣持がよく、所々危かしい倒木を橋の代用にして、右岸に左岸にと路をとつて進んだ。下るにつれ、だん〳〵と兩側の岩が高くなり、瀧の心配が加はつて來た。果然瀧壺ものぞけないやうな瀧の落口に來て了つた。しかし、右側に渡渉して、下ることが出來た。之が有名な大澤の瀧ではあるまい。もつと下にある筈だ。夫で處々にある古い伐痕を注意して傳つてゆくと、右側の本谷との界の尾根をからむでゆくやうであつた。古い五萬分の一にある徑らしいと、たどつてゆくと、果して尾根に出た。右側にも本谷が望まれ、尾根にも道が上から下つて來てゐる。之までに四時間四十分も費やし、四時十分となつて了つたが、大澤渡りはもう目の下だ。安心して一休みする。休んでゐるとリスがしきりに木の實を落し、こぜはしく活動してゐた。急な下り二十分で大澤渡りの小屋に着いたが、この時俄かに夕立が來た。今までと打つて變つた落付きのある景色が小屋の前に展開されて、明日の北股下りの美しさが豫知できる心地がして嬉しかつた。

第八日

雨で增水するのをひどく恐れてゐた私共の足は、ひとりでに早く進んだ。未知の澤を下るのではあり、雨がザンザン降るので、ろくに休まずに大レン澤・黑澤・尾高澤と過ぎた。然し、同じ遠山川でも、北股は遠山の本谷とはことなり、女性的な美しさを持つた澤である。滑らかになつた丸い大小の石の間を澄んだ川水がゆるゆる流れる。傾斜がなるいので瀧も無い。この邊は主に左岸をあるいてゐたが、アカル澤で渡渉したら右岸に小屋があつた。タルガ澤で晝食。この邊は既に廣い河原となり、剩へお天氣もあがつたので、もはや心の緊張もとけ、ゆつくり休んだ。鐵道の枕木を伐り出すとかで木伐りが處々にゐた。ヘイナギ澤のところで大きな流木が橋にかゝつてゐたのを渡つてからは道もよくなつて、はかどつた。大きな小屋があつて子供をつれた五六人の木伐りの仲間が住まつてゐた。間もなく不動澤・ホスマ澤を越すと、兩岸が何となく舊知の景色に似て來た。北股渡も近いのであらう。豫定よ

り三十分早く北股の出合に着いた。蛭で記憶新たな八丁坂を一氣に登り、なつかしの下栗の夕景の靜かさを心ゆくまで味ひながら井戸端に着いたのは七時半であつた。

眞暗な夜道を上町へ急いだが油屋でおかみさんとの再會を喜んだのは既に九時を廻つてゐた。

第九日

上町では、物珍らしげに子供達に包圍されて、未だ未だ北アルプスとはちがふと感じた。

日あたりのよい小川路峠を越えるのは、全く苦手だつたが、之も我家への路なれば仕方がない。然し頂上近くの展望は、暑さも疲れも此の爲ならばと思へる程に美しかつた。知久(チク)からの乘合自動車に間にあひ度いと三里の山道を二時間で飛ばして、五分ばかりの餘裕で間にあつた。伊那電の夕方の眺めは、南駒の方面が特に美しい。辰野に着いた時は、日もすつかり暮れてゐた。

く不便だつたと云ふ譯で、今まで疑問のまゝに殘されて居たのだつたらうが、上越線が開通して八海山が夜行日歸りと云ふ時代となつては最早疑問の儘に殘され置くべき譯はなくなつた。毛猛連山の北は守門山、淺草岳、南は大鳥岳の南未丈岳迄は既に記錄され來つて居る。かくてこの毛猛連山入りも只單に時間の問題にまでなつて居た次第である。

今度の山旅に就いて木暮理太郎先生の懇篤なる御指導を仰いだ事は附記して置かねばならないことである。

毛猛連山行

中司文夫

時　昭和八年七月
地圖　須原（五萬分の一）
人夫　中澤丑松　中澤松治郎

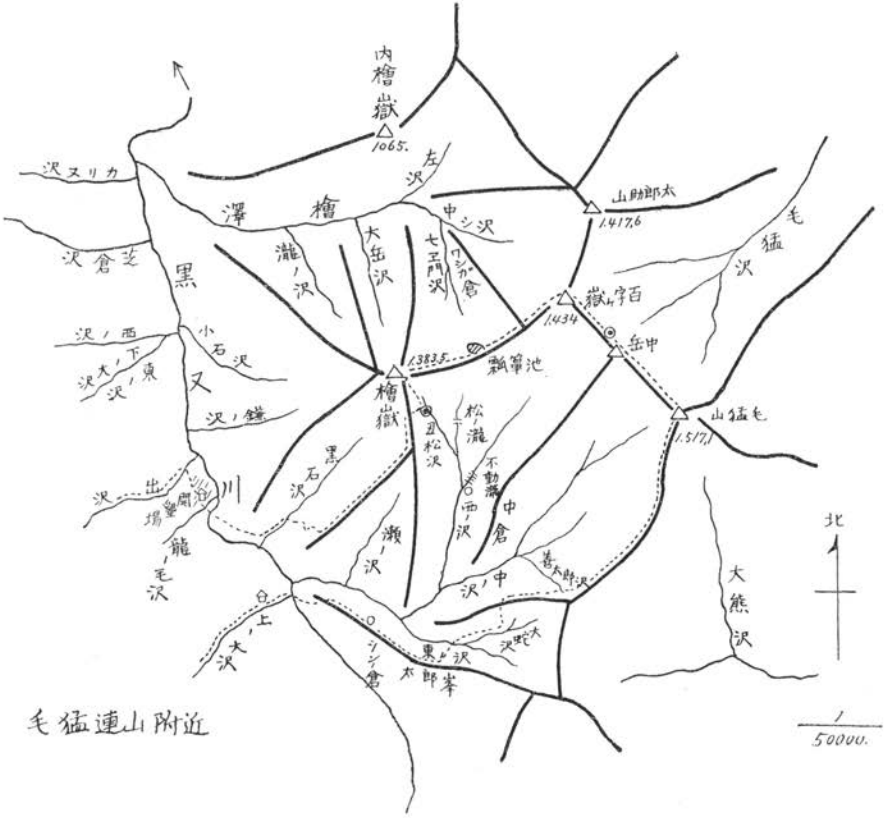
まへがき

未記錄の山には或る云ひ知れぬ魅惑はある。けれども實際問題としては、入る丈けの價値が有るか無いか豫斷が許されないので、その計畫を逡巡せしめられる場合がある。或意味に於てその實行が冒險的であるとも云はれるかも知れない。勿論これは一般に高山に於ては該當しないだらうが、割合に標高の高くない山には充分眞理だと思はれる。併しながらこの冒險或は無謀と云ふ氣持を解消し、心安く赴かしめるものに交通の發達と云ふものがある。この毛猛連山は最高毛猛山の標高は一五一七・一米で、山は相當に深く交通に全

概說

一、毛猛連山の主峯
毛猛山（一、五一七・一米）
百字岳（一、四三四・〇米）
檜岳（一、三八三・五米）
太郎助山（一、四一七・六米）

一、澤の主なるもの
中岩澤（東ノ澤、中ノ澤、西ノ澤）



毛猛連山附近

○ 岩小岩
△ 小屋
池
◉ 筆者キャンプ場
…… 〃 登路

黑又川への合流點に於て岩山を抱いて流れが二分して黑又川に注ぐが故に此の名がある。此の澤は概して兩岸嶮峻にして瀞あり、又大瀑の連續あり、足場たるべき岩場は殆んどない、急傾斜の草付き或は籔からなる深い廊下である。

檜　澤

檜岳、內檜岳の水を集めて居るので此の名があり、黑又川に注いで居る。

毛猛澤（地圖の大鳥澤）

毛猛山を水源とし北流して末澤川に流入して居る。土地の者は大鳥澤と云はず毛猛澤と呼んで居る。

大熊澤

毛猛山を水源とし南流し藤ヤ倉（一・〇六九・七米）との間を只見川に注ぐ。

以上擧げたる澤の遡行により毛猛登頂は可能なるべき筈であるが、その最も近き中岩澤最も困難多く、毛猛澤は多少迂回の感はあるけれど、最も容易なる如く觀察された。

全山殆んど籔に蓋はれ、尾根通りも文字通り猛烈なる籔の連續、而も檜岳より百字ヶ岳を經て毛猛山迄は疲尾根であつて、その籔は中岩澤側最も繁く、毛猛澤側は中岩澤側に比し少なく所々にガレ草付を見出せる。

檜岳は岩峯にして岩場に富み檜澤に面して殊に多し他の連峯は頂上附近までも籔である。

籔の主な植物　カンボリ、裏白、ヤドメ、山ナンテン、万作、モチ、ツヽヂ、ブナ、楢、山竹、熊笹、（白樺皆無）。

獸類　熊、ムジナ、兎、マムシ。

鳥類　鷲、鷹、カッコー、松ガサ鳥、鶯、夜鷹。

七月九日

深い朝霧を衝いて小出驛に入つたのは午前六時二十八分で、銀山平行らしい五人の人も降りた。天氣の具合は兎も角今日の中に是非三又か中子澤邊迄行つて明日入山の用意がして置きたい。銀山平行の人々は自動車を一臺借切つて行つて終つた。小生も自動車の交渉をして見る。思つた程入つて呉れない、精々入つて籔神村役場の附近迄と云ふ。仕方なしに一圓五十錢の約

東で乘る。須原街道と別れてから道幅は充分廣いに拘はらず手入れが足りない爲か斷然惡路と化して居る。運轉手に山案内人を傭ひ度いのだが良い世話人は無いかと尋ねると、元郡役所の兵事係をして居た豫備特務曹長某が良からうと役場を過ぎて、中家（チッカ）在の某氏宅前まで勉强して乘入れて呉れた。「何處の山へ登るんだ」と聞く親切な親爺樣だ。「毛猛山へ登るんだ」と云へば、「何しに行くんか、鑛山を見に行くんか」と、「只ゝ山に入り山を見に行くんだ」と答へれば、「えらく暑いのに物好きだね」には參つた。それなら三叉在の事情に明い、又顏の利く星野氏を紹介しようと星野氏宅へ。雜貨食料品店の主人星野氏は六十近い清正ヒゲの好々爺さんだ。毛猛連山入の計畫を述べ人夫の世話を賴む。毛猛山と云へば銅山かと聞き、檜、百宇、太郎助山と云つても爺さんの答が地圖と一致しない。盛んに爐の中に圖を畫いて說明して呉れるのだが益々こんがらがつて益々話が通じなくなる。けれど三叉在での人夫二名雇入れに付いては心よく引受けて呉れたので先づうれしかつた。只今日すぐと云ふ譯には行き兼ねるが、明日は俺も發つて三叉に一泊、黑又川の開墾場へ養蠶に行くから一緒に行けば良い人夫を世話すると云ふ。宜敷く依賴して一日余計の滯在に腰を据ゑる。

七月十日

午後三時半頃中家在を發して三叉に向ふ。道は坦々たるもの、羽根川の右岸に沿つて居る。途中中子澤鑛泉の廢墟に硫泉を掬んで渴を醫す。大震災當時「銀山サイダー」として東京へ賣り出されたるものゝ由。シ゛ッパいサイダー。こゝを過ぎて怪しげな吊橋を渡り左岸を行けば魚止瀧あり。三十分程で羽根川隨一の無名の景勝奇巖を遙か下に見つゝ橋を渡れば三叉在に入る。人夫中澤松治郎の家に午後六時十五分に着く。登山者最初の三叉入り。村人は怪奇の眼を以て迎へてゐる。暑いのに物好きな奴位に思つたのだらう。それはさておき純朴そのものゝ山村の空氣は何によりもうれしい。

この三叉在は嘗て陸軍省陸地測量部が毛猛連山附近の測量に從事した際の根據地である。又現在此處には營林區署があり、毛猛連山一帶がこの營林區署の管轄

であつてその一帶が此の三叉分でもあるからどうしても此の方面に入らうとする人は此處を根據地にせねばならない。

七月十一日　晴天

開墾場行きの例の淸正ヒゲの星野老人、一番早く起き出してゴト〳〵準備を始める。眠い目をこすつて起きる。三時半頃だつた。

午前六時十五分、松治郎の家の前で記念撮影をして出發。開墾地へ行く老人二名を加へて總勢五人に獵犬クロ一匹、小林區の區長さんに敬意を表して村端れへ出る。田圃道を東へ〳〵行く程に未丈岳が全く日本畫の墨繪の樣に美しく浮んで來る。羽根澤の音を左下に聞きつゝ尙東へ、六時五十分頃東流とツナノ澤の合流點で東澤とツナノ澤の間の尾根の「鼻」を前に見つゝ小憩する。舊道はこゝからツナノ澤を渡つて間の尾根の鼻を眞直ぐに通つて居る。この合流點から先は田圃がなくなる。これから舊道を捨てゝツナノ澤に付いた新道を遡行する。二度程小さな渡涉をして右岸から落ち込む魚ノ澤を渡れば小さな平にゼンマイ小屋が三棟ある。內は血に飢ゑたノミで一杯、入るべからずと外に休む。魚ノ澤の頭が伊五郎岩、その大きな岩頭がよく見える(七時二十分)。小屋と別れてすぐ左岸へ渡つて登ること二十分程で東澤と西澤との分岐點二叉に達する。東ノ澤の左岸をしばらくして三助澤の小瀧を見上げこれより少し上手を再び右岸に、そして又々炭燒カマドの處で一服する、里又川開墾地行の老人二人は相當參つて來たらしい。人夫達は分け與へた兩切タバコを喜んでのむ。この在には兩切なんて云ふものは滅多に入つて來ないものと思はれる。これから先で暗い感じの澤と別れ東澤と火打石澤の合流點の手前を左岸に渡り、Z形に登つて向側のブナ坂澤の見え出す處舊道ブナ坂に出合ふ。大ブナの獨立樹の下で又休む(八時三十五分)。いつもよく見へると云ふ駒ヶ岳が雲の中で見えないのは殘念だつた。只堤神樂山ははつきり見ることが出來た。澤を離れてから此處までの道は惡い道だ。こゝから明神峠までの間に二ケ所も水があるし道も惡くない。明神池の水落口(九時十五分)、今は夏涸

れで一滴の水もない。峠(九時三十五分)、雲間に檜岳毛猛山が現はれた。胸が高鳴る目的の山々だ。も一つの喜びはこゝで星野老人と會談以來一つのナゾが解かれたこと、即ち地圖の檜岳を百字と云つて居たと云ふ事を確められたこと、この百字と呼ばれて居る檜岳はこれまで村の少數の人々が登つて居る。信仰の目的はないけれどもこの山の美しい形に深い尊敬の念を拂つて居るのだ。秋又は春のよい天氣には佐渡の島までよく見えるまことに眺望のよい山だ。この眼界の廣い北アルプスに似た立派な山は毛猛山中一番高い山だと土地の人々に考へられて居た。勿論毛猛の頂上は殆ど登つてゐないのだ(勿論殘雪期以外は登頂したものは皆無だ)から高さの觀念もこの檜の如く天を突き破つて居る檜の方が頂上の丸い毛猛山よりも高いと見るのも無理のないことだと思つた。出澤東澤と大ハゲ澤の出合まで急坂を降つて晝食にする(十時十五分)。十一時五分立ち上る。長兵衞澤との出合を過ぎ四、五町下を左岸へ渡渉、ムヂナ澤出合より下流に瀧あり、同金澤の出合を過ぎて右岸へ渡渉、少しばかりかけ登れば開墾地に入る。ソバの匂を強く感じながらアハ、小豆、里芋畑の間を二町程行くと龍ノ毛澤の邊に小屋がある。これが開墾地唯一の小屋である。此の附近に常住人なし(時に午後十二時二十分)。小屋には若い者二人先着して居て、中に岩魚が燒けて居て良い香がして居る。入口にはフキが百本程束ねてある。小屋の大きさは六疊敷位のもので、この小屋はノミが一匹も居ないと云ふ事が何よりの自慢だと云ふことだ。龍(タツ)ノ毛澤の水にヒタしてパンを食ひ、二度目の腹を作る。そして澤の邊りの綠蔭に長くなる。涼しい風は澤の上流から通つて來る。澤の小さな小波せゝらぎは靜かに耳に入つて居る。うつかり休み過ぎて居ては大變だ、食糧の補給も終つた、干かしたシャツもさら〳〵したのを勢いよく着込んで出發準備、眞正面には檜岳が佇立して居る。

最後の小屋場と別れる(午後一時三十五分)。今夜は水のある平で安樂な眠が取れるやらどうやら全く見當が付かない。唯一の頼みは一升ビンの水だ。愈々この小屋の人々に別れを告げて人夫中澤丑松(五十六才)、

中澤松治郎(二十八歳)とクロと共に地圖の黒又川0.8の渡渉點へ。ほんの一町程で枯木が堆高く流れたまつて居る廣い河原に出る。二三日前の豪雨に上手から流れて來たものだらう。松治郎は踏みはずして積木の間に足を突込んで轉倒する。河原は一丁程の幅で割合明るい感じだ。河原石を飛んで行くと右岸寄りに黒又川の涼しい流れが勢よく流れて居る。股の邊まで來る冷たい渡渉。右岸の暗いブナ、ナラの林の中を三、四町で黒石澤の合流點に來る。この澤に入りヂャブ〳〵足を冷しながら遡る二、三町の間に三つ程小さな瀧があつた。こゝで愈ゝ水とお別れだ、思ふ存分飲んだ。水筒へも入れた、用意の一升ビンにも注込んで。黒石澤と瀨ノ澤の間の黒石東の峯へゼンマイ坂の急坂を登る(ゼンマイ坂は春ゼンマイ採りの通ふ道で地圖の一、一〇〇米の瀨ノ澤の頭まで附いて居る)。大息ついて汗を流し流し登つて居るとこれから先何處で水に會へるか分らないと思へばおかしなもので喉の渴きが一層激しくなつて來た。尾根道に出る頃涼風西方より來る、一息つく。併し乍ら道は險しさを增すばかり。前の人夫の足で顏を蹴られさうになること屢ゝ。美しい檜岳に煙がかゝりだした。一、一〇〇米の瀨ノ澤の頭までに數回途中休んだ。時計を見ると既に五時だ。これから先は一寸の切開もない藪だ。而かも之以上登つて何處で水が得られるか見當がない。この頭附近には水が無いけれど少し許りの平があるから、今夜はこゝにキャンプして明早朝水のある所まで行つて飯にしようと云ふ案も考へられたけれど、丑松が若い時分にこの上一、二〇〇米附近の松の大木のある所から二つか三つ目の澤に水を見たことがあると云ふ淡い記憶に信頼して、その水の有る所まで頑張ることにして藪の中へ突入、四十分かゝつて其の松の木の下に達した。こゝから右へ一つ二つ澤を絡んで見たが、水はない。太陽は西山に傾いて居る。日の暮れない内にどうしても水を見付けねばならぬと心だけやたらに逸る。手足は藪の中で思ふ樣にならない。もう一踏張り蟹の横這よろしく次の尾根を乘越せば向ふに八角菖蒲に似た黄い花が見えた。そこには必ず水があるに違ひないと猪突の勢で藪をすり拔け近づいて見ると確かに水がある。水だ水だ。一同は

蘇生の思ひだ。時計は六時を指して居る。まあよかつたと安心して居る暇なぞない。ガレを轉がる樣に降りて夢中に飲んだ〳〵、小砂利も一緒に飲んだ。流れと云つても幅五分位の水だ。けれどもうれしかつた。さて今度はキャンプ場がない。兩岸は崖、どちらを見ても四十度乃至六十度の傾斜、やつと見付けたのがこの澤の流れの横、それでも二十度位はある。これ以上の平はない。けれどすぐ上が六十度位のガレで、もし雨でも降れば水と岩とにたゝかれて逃場もない。これではいかんと元氣の松治郎に次の澤を調べさせた。幸ひなる哉、も少し多い流れと藪の中に二十度位の場所を見つけて來た。藪を切開いて藪を敷き漸く平を作つて天幕を枝から枝へ張る。落着いたのは午後七時、こゝから見る毛猛山は割合に尖つて居る。晩飯を食つたのは午後九時頃、蚊もアブも居ない、カッコーを聞きつゝ靜かな檜岳の懷に、今日の午後の苦勞を心よく思ひ起し乍ら寢に就く。

之の丑松澤（丑松の見當をつけた澤であるから丑松澤と呼んで置く）は中谷澤の西の澤の枝澤に突きさゝつて居る岩尾根の間を流れて居る小溪である。

七月十二日

朝四時半に起されたけれど眠くて又寢て終つた。六時に飯が出來たと起されてやつと天幕から這出た。藪の上に藪を重ねて作つた寢床はスプリングが非常に心地好かつたので思はぬ朝寢をして終つた。よく晴れた天氣である。岩尾根に立つて思ふ存分氣持のよい朝の空氣を胸一杯吸ふ。遙か下の方に二段になつて大きな瀧が落ちて居るのが見える。高さ一〇〇米以上もあらうかと思はれる。不動瀧と云ふ中岩澤東澤に懸かる瀑だ。その向ふに高く毛猛山が聳えて居る。鶯の鳴聲に送られて八時五十分泊場を出發。四十度——六十度の岩と藪を二息ばかり登ると急峻な岩場に出る。九時十分一、三〇〇米附近に休む。眞下黑又川開墾地附近にもう一つ小屋が出來て居る。老人達が養蠶小屋を作つたのだらう。こゝから岩場を十五分程眞直ぐに頑張つて頂上に立つた。この邊の岩は堅くて足場がよい。頂上は割合に平で十坪位あるだらうか。頂上から百字岳への

尾根筋にかけて一面の藪だ。三角點の周圍を切開いて休む。こゝの眺望は非常によろしい。駒ヶ岳、中岳、八海山、荒澤山、未丈岳、大鳥岳、丸山、旭岳、猿倉は一望の中、會津駒、燧もうすく見える。殘念ながら守門方面は煙つて居る。こゝから百字岳までは處々崖をも含む非常に起伏の多い藪の連續だ。この間が今度のコース中の最難所と領かされた。百字から太郎助山へはなだらかな藪尾根、又百字から毛猛山まではその中間に中岳（百字ヶ岳と毛猛山との丁度中程にあつて中倉尾根との分岐點を中岳と名附けて置く）と一つ、二つの小起伏だけで割合に樂さうに見えた。

十時頂上を辭去、急傾斜の藪をブラ下りながら降りて行くと靴の幅やつとの藪の疲尾根となる。時々藪を踏違へて右或は左の尾根の藪にぶら下る。仲々に苦勞が多い。えいと云ふ聲を聞いた時はきつとその人夫がぶら下つて居る。犬がうらやましくなつた。併し絶壁に近い惡場に來ると、人間の方が偉い、やつぱり人間の方が偉いんだ。犬は人間の手助を必要として來るのだ。右は中岩澤の西ノ澤。左は檜澤の大岳澤、七衛門澤。西ノ澤面よりも檜澤面に壁狀の斷崖が多い。大きなコブ三つ目に一服（十時四十五分）。振り返れば二枚もすごい壁が七衛門澤に落ち込んで居る。底部の見極めが付かないが凡そ二〇〇米以上もあらうかと思はれる。この毛猛連山で岩場を求めるなら檜岳が隨一と考へられる。西ノ澤方面にゴー〳〵たる大瀑の音が聞えて來る。これは見ることが出來ないけれど西ノ枝澤が丑松澤に別れて先程の不動瀧よりも大なる松ノ瀧の響だと云ふ。次のコブを一努力すると喜ぶべし、鞍部の平に殘雪を發見し、殘雪に續いて一段高い所に池を發見した。尾根歩きのオアシスだ、殘雪は幅二間に長さ五間位の南北に長くて藪に圍まれて居る。この殘雪の北端から一尺程高い處に東西に長い（七間×三間）深さ二、三尺の水量豐富な瓢簞池（この池瓢簞形を成すを以て瓢簞池と名付く）がある。この東及び南邊にニスの草の平あり。屈强の泊場である。開墾場からだと丁度いゝ一日行程だ。大發見だと人夫達も喜ぶ。早速池邊に荷を下して晝食とする（十一時五十五分）。この平は三十坪位あり。飯を食つて大の字に寢轉る。藪にいぢめら

れ延びる間もなかつた手足の絶好の安息だ。あんまり具合のよいのと突然の喜びとのために、このまゝ落着いて終つてゆつくり山の空氣にひたりたい氣持になつたけれど、日程の都合上儘にならぬ、午殘念午後一時十五分出發。瓢箪池の北側の急斜面を一登りした所に瓢箪池の三倍位の丸池があつたけれど水が悪いし良い泊場でない。西澤の頭の悪場に取り付く。犬も登りには難澁する。物すごい藪交りの岩場、一時五十五分頂上、百字岳迄はもう檜岳から半分來て居る。二〇〇米位の登りだ。檜からの尾根の藪には相當惱まされた。卷脚胖は幾度も幾度も解ける。腕は散々に搔きむしられる。ピッケルは邪魔なものゝ尤であつた。藪の臭が鼻をくすぐつてクシャミが連發する。苦勞しながら百字岳頂上に立つたのは午後三時二十分である。北西と東南に長い頂上で三角點はない、一、四三四米の木杭を探したが見付からない。眞北にすぐ藪尾根續きに雄大などつしりした萬太郎然たる太郎助山（一、四一七・六米）は時間の都合上乍遺憾そのまゝに殘して行くことに餘儀なくされた。煙霧の中に守門山が見えた。こゝから見る毛猛山頂は丸味をもつて居る。毛猛澤には見える限り殘雪あり、この方面よりの登高は比較的容易らしく見える。（地圖にはこの毛猛澤が大鳥澤になつて居るが三叉在の人夫達は之を毛猛澤と呼んで居る。この南方未丈ヶ岳より只見川へ流落ちる所に大鳥澤があり、この澤を大鳥澤と呼ばるに不思議はないが、毛猛山より東北へ落ちる澤を又大鳥澤と呼ぶは全く意味なきが上に、近き所に二つの同名の澤あるに於いては考へさせられる。この附近の地圖作成に當り三叉在を根據地として測量され且その古老によつて此等名稱を載錄されたりとすれば、この三叉在に於ては之を大鳥澤と云はずして毛猛澤と呼ぶに於ては、これは毛猛澤と記入さるべきものであつたのではなからうか。こゝでは其の吟味は止めて土地の呼稱に從つて毛猛澤と云ふことにする。）午後四時頂上を辭去毛猛山へ向ふ。又藪の中、第一の鞍部への下りだ。下りはやつぱり樂だ。併し乍ら間違ひを起すのは下りだと警戒しつゝ木から木へぶら下りつゝ滑りおりる。頂上から一丁ばかりの所に直徑八寸位のまだやつて間もない熊の糞が一つ、

熊もやつぱり尾根通ひかと、なんとなくその熊に親しみをさへ感じた。この尾根も瘠尾根。コンデイション前の通り、「オット」と云ふかけ聲と共に人夫は藪尾根にぶら下る。藪の瘠尾根はまことに歩きにくいものだ。荷が大きく重い程それが痛切に感じられる。第一の鞍部迄二十分で來て終つた。前方（南東）第一のコブ上の雷にやられて白くなつて居るブナの殘骸上に松ガサ鳥一羽、鐵砲を打つ眞似をしたりどなつたりしても一向に驚かぬ。こつちが顏負けの態だ。その中に四、五羽になる。次第に藪にぶら下りながら登つて近づいて行くにもかゝはらず逃げようともしない。驚かす心算でサイレンを鳴らして見たけれど驚くどころかサイレンの響に和するかの如く鳴き返すと云ふ仕末。愈ゝ近づいてその燒木に登る、手がとゞく時分になつてやつと、一羽づつ毛猛澤の方へ飛び去つた。このコブを越して第二の鞍部へ下る（午後四時四十五分）。尾根の毛猛澤側に大きな殘雪が斷崖を爲して居てその下から良い水が混々と流れ出して居る。併し毛猛澤側も中岩澤側も傾斜急にして適當な泊場に苦しむ。この邊、毛猛澤方割合にガレ多く又草地も發見されたが、何れも行つて見れば傾斜が余りにも強過ぎる。中岩澤側は藪がひどく尙急斜面で駄目、漸く尾根通りに二間程の平を見定め藪を切開いて天幕を張る。

檜岳より百字と今日の歩いて來た尾根通りが見える。コブ一つ毎に思出が浮ぶ。こゝから見る百字岳は尖つて居る。その右手に太郎助山、振返つて南東には夕日を受けて美しい毛猛山が羅漢頭の樣に頂上が凹んで兩耳が附いて居る。七時半夕食終る。今夜は水豐富なる爲め御馳走にありつけ、人夫達ウイスキーと共に喜ぶこと限りなし。夜たか、コヂトカッコーの聲を聞きつゝサックに入つたが、明日の毛猛登頂を思ふ時に胸高鳴して眠られず、二十日夜の月に天幕白くなる頃隣に寢て居る人夫丑松を跨いで、月に浮ぶ毛猛山を覗く。感極まりなし。人夫丑松驚く。

七月十三日

四時に起きる。駒ヶ岳、中岳、八海山、檜岳、百字ヶ岳、太郎助山、守門山、前毛猛山、毛猛山と順次雲海

の上に望まれる。朝日岳は殘念ながら雲がかゝつて居る。只見川上に充滿して居る雲海は溢れて毛猛澤へ或は八十里越邊りから守門山方面へなだれ込んで居る。その間を朝日がくる〳〵登り出す。

午前六時四十五分天幕を疊んで出發。第三のピークの下毛猛澤側に、條痕明らかな岩膚の露出があつた。藪の尾根を潜り續けて毛猛山眞下に七時二十分。この鞍部毛猛澤の東澤に程近き所に殘雪。藪に山竹、熊笹が混つて來た。一、三五〇米附近で休息する。この邊から登りが急で藪から藪へ摑りつゝ手で登ると云つた形だ。又嘘が始まる。犬も一つ二つ、皆大笑ひ。籔は次第に密生し丈も大になり、西の耳に達する頃になれば漸く腰下位の籔になつて來る。頂上も目前、勇躍稜線の藪を踏み付け踏み分け馳け登つて頂上三角點に立つ(午前八時半)。今日の天氣はどうも危い。時々煙が立ち罩めて來る。遠望は惡い。この頂上は大體東西に細長く東に三・四十米の疲尾根を隔てた所に頂上東の頭あり。三角點の周を刈つて記念撮影。東北に面した小さいガレに裸となり初山の氣分を吸ふ。赤トンボ、蜜蜂しきりに亂れ飛び、この突然の珍客を歡迎するよう。只見川が東下方に見えることゝのみ思つて居たが案に相違して見えぬ。只田子倉附近と思はるゝ所に白く光つて居るのみ。こゝから見ても檜岳は依然美しい。百字ヶ岳は尖つて居る、太郎助山は益々雄大に座つて居る。九時四十分頂上を南へ下る。先は幅の廣い尾根、藪の丈も段々高くなつて來る、一切見透が付かぬ。斷然毛猛連山中一つの藪の難コース。藪の間に山竹が束になつて密生して居る。下降に非常に困難、毛猛山の名もこの邊から名付けられたるの感がある。下降にしてかくの如くなれば、登高は一層困難であらう。頂上より一〇〇米位下つた所に大熊澤に面するガレを通るだけ。全部こんな藪で漸く藪の生へ方なびき方と磁石と地圖で方角を定めつゝ降るより外仕方ないといふ始末だ。縣界線を沿つて下降約一、一〇〇米と覺ぼしき邊、中谷澤小澤の入にブナの木平がある。こゝまで一氣に休みなくやつて來た心算だつたが既に十一時になつて居る。相當時を喰つた。藪を分けて地面を踏んで歩くのでない、藪を押し分け木の上に乘つかり、次から

次へ彈かれる樣に木から木へ傳つて歩くので（この連山何處でもさうだが）蟹の横這の出來る所はほんの少ししかなかつた。このブナの木平で休息。この先一、〇六〇米の鞍部の濕地に水、雪或は池でもと探し歩いたが何にもない。この附近から尾根の幅次第に狹まり藪も幾分樂になつて來る。一、一〇〇米の突起（善太郎の頭）の北面二・三十米下で晝食にする。午後〇時四十分、空腹にかゝわらず食慾がないので氷砂糖と一升瓶の殘り水を飲んで濟ませる。こゝは中岩澤の善太郎澤の上だ。この附近より人夫丑松が三年前に切開いた踏跡がある。道と云へども藪を切つて道の印にしたる程度だ。その上其の後手入がないのだけれどそれでも來し方に比較すれば樂に違ひない。丑松に感謝しつゝ一時四十分この所謂道に入る。歩度は延びる。道は東澤と中ノ澤との間の尾根に進む。雲が飛び出した。九〇〇米附近で道は尾根の兩側東澤と中ノ澤へ向つて下りて居る（二時）。東の丑松坂の方をどん〳〵降りて行く。ガレの下に水が見えた。三日目に見た水らしい水だ。大蛇澤（オーゴンザワ）が東と西との枝澤に別れる合流點である。急いでズリ降りて顏まで突込んで飲む、美味の限り（二時十分）。三十分休息して水を腹一杯飲む。遠雷聞ゆ。併し谷は日照り明るい。右岸のガレを登つて東澤を渡渉、すぐ蛇澤との出合よりずつと下手に出て東澤を渡渉、すぐ殆んど垂直に澤に落ち込んで居る赤禿を五・六米攀ぢて松坂を登る。この時突然黑雲に雷雨物凄いばかり、雨具取り出す暇もあらばこそ、散々叩かれて終つた。丑松鉈を落し探しに戻る、松治郎尾根道を求めて先へ行く。小生遲れて續く。松治郎を呼べど一、二度聲ありて後返答がない。不思議だ。丑松を待ちて共に道々松治郎を探す。松の尾根にて松治郎に出遇ふ。踏み違へて惡場に入り込んで終つたので呼び込む譯にも行かなかつたので、返事が出來なかつたんだと元氣で居る。とんだ輕いナンセンスに終つて結構だつた。雨は上つて涼しい尾根づたひ。まだ遠い所で雷が鳴つて居る。まだ怪しいお天氣模樣で、黑又川の增水を恐れ急ぐ。四時山の神に禮拜して四時十分狩の小屋場を過ぎて「シンの倉」の惡場（村人の云ふ惡場）、七・八米位の簡單なチムニーで大したものでない。岩上に蝮蛇を

見る。こゝから少しの間中岩東澤の雨上りの溪谷美を賞美し尾根付に一氣に黒又川右岸へ、開墾場へ通ずる道に別れキャンプに良ささうなブナ林を拔ける。又驟雨襲來、增水しつゝある黒又川を上ノ大澤落合へ大急ぎで渡渉、上ノ大澤を一町許り溯行右岸に上ノ大澤小屋を得る(五時三十分)。上りこんだ松治郎の足に見る間に無數の血に飢えた蚤。夕立は愈々その度を增せど俄かに入れない。蚤取粉を濃厚に撒布して床に靑草を敷きその上にアンペラを敷いて漸く心安く入る事が出來た。蚤取粉の効果百パーセントに人夫達喜びそして驚く。小屋の大きさは六疊位、兎角水の濁らぬ内にと夕食の準備、松治郎の獲つて來た岩魚で甘い夕食に向ふ。今夜は廣々とゆつくり寢られる。祝杯の加減かいゝ氣持で眠に入る。

七月十四日

午前三時三十分目が覺める。今日の天氣は大丈夫。九時二十分ゆつくり出發。草鞋で上ノ大澤登りだ。日のある中に栃尾又に着けばいゝんだ。ブナ、ナラの多い兩岸に飛沫上げて凉しい小瀧を乘越へ、或は岩影に岩魚を追ひ、目的の果たされた今氣もほがらかに心ものんびりと上ノ大澤を遡る。昨日の雨の爲か相當水は多いが澄んだ冷たい水。日もさし込んで澤は明るい感じ。高倉澤と花ノ木澤の合流點十時。花ノ木澤の凉を追ひつゝ溯ること一時間、十一時に東澤、西澤の出合を西の澤に入つて澤に別れ右の林道を登る。こゝで靴に代へる。明神の續く尾根を乘越えて振返れば靜かに檜岳、百字岳、毛猛山が立ち並んで送つて呉れて居る樣に見える。ほんとうに懷しい氣がした。金華澤の四〇〇米附近まで下つて晝食(午後〇時二十分)。昨日の雨で濡らしたものを干かす。一時半、金華澤の右岸へ。雪のために荒廢したまゝの林道で、金華澤が羽根川に合流して羽根川の右岸一五〇米位の急な赤禿の上を絡むで居る附近最も惡い。天氣も急變しさうになつて來た。二時五十分柳澤が羽根澤へ流れ込んで居る下手を左岸に渡渉、炭燒小屋の後を中手峠道へ、又大雷鳴と共に大雨沛然と來る。尾根筋へ出た頃益々惡くなり、段々光と音との感覺が一致して來る。雷の中心に入つて來

たらしい。すばらしい火柱が雷鳴と共に目の前に立ち出した。紐でピッケルを引ずつて勢ひ込んで深澤へ向け馳け降り養蠶小屋に休ませて貰ふ（三時二十五分―四時十分）。霽れ上るのを待つて、老人夫婦に禮を述べ眞赤に濁つた深澤を渡渉して、湯ノ谷越え、この乘越より見た檜岳、百字ヶ岳、毛猛山はよく並んで雨上り空に美しい一山塊だ。この縱走者はもう一度この乘越に立つて毛猛三山の美しさを見直すことはまことに意義の深いことだと思つた。これからコシキ澤を下つて下折立（五時）を經て栃尾又に投宿す（午後五時半）。

七月十五日

朝の中に枝折峠に至り毛猛連山をもう一度しみじみ眺め以て此の度の山旅の終りとする。

春の白山より妙法山へ

池田知幸

參考地圖　白山、白川村。
昭和八年四月一日――九日。
同行者　横山直介君、中山豪一君、永井喜市郎君。

一

冬から春へかけて加越、加飛國境の山々が豐富な雪に粧はれる頃、地理的偏在から近づかうとして近づき難い山、あの角錐形の山頂を持つ妙法山、そして白山を起點とする其等の一聯の加飛國境の連鎖に、ずつと以前から強い憧れを抱いて居たが、來る年も來る年も機會を逸した。

北部白山山脈に於いて笈岳以北は現在では可成り文献もあり、我々に親しみ續けられてゐるが、笈岳以南白山に至る間は文献も少なく特に積雪期に於いて足跡寥々たるものである。私は之等の山々の記錄は寡聞にして二つの例しか知らない。そしてその季節は必然的に五月の殘雪期が選ばれて居る。

註　金澤醫大先輩稻坂謙三氏は大正十一年五月下旬、佐伯平藏及び尾添の人夫二名を連れ、尾添から白山に登山し國境線を縱走して大門山から犀川上流、倉谷部落へ下つた。（パンフレット「故山」及び談話。）
四高旅行部、山本保、瀧山養、津野清也の諸氏は昭和三年五月上旬、佐伯兵治を連れ、市ノ瀨から白山に登山し大門山から小矢部川上流、下小屋部落へ下つた。（ペルグハイル第四號。）

我々は白山から妙法山へと連續する雪稜に二條のシュプールを印す可く春を選んだ。それは豐富な積雪があの濃密な藪を全く埋め盡してゐて、シー活用範圍の廣い事を希ふたからである。

行程は市ノ瀨から白山に登山し國境線を傳ひ、飛驒側への下降路として地圖上野谷莊司山の北肩より東方へ派出する馬狩莊司山の尾根と、妙法山と野谷莊司との間より荒谷に降る支尾根とを想定した。

二

四月一日。三月末先發した横山、中山二君の後を追つて市ノ瀨の喜市郎宅に落ち合つた。上飯場跡の小屋の發掘に從事して下山して來た三君の話を聞く。室堂に積雪期登山の設備をして無い今日、我々は上飯場小屋（約一、九七〇米）を第一の根據地としなければならない。今年は晩雪が多く、例年より積雪量が豐富で、數日前喜市郎が單身出かけたが小屋の位置さへ發見し得ず、今日は三君が小屋の見當を付け三米程掘り下げ、約二米四方の横穴を穿ち、四時間余り勞働を續けたが遂に小屋を發見し得ず下山したと云ふことだつた。

四月二日、晴。今日は小屋發掘の意氣込みで荷物を全部擔ぎ上げる。休憩の暇もなく發掘作業を續行して、屋根の一角に突き當り破風から梯子で中に入つた。積雪の重壓で小屋はひどく歪んでゐた。

夜就眠中ガス中毒にやられ、外へ出ようとした中山君が意識を失つて梯子から轉落して、其の音に眠を醒ました一同が助け合つて辛うじて外へ這ひ出して事なきを得た。

註　上飯場附近の積雪量

昨年十二月上旬一米、下旬二米半、本年一月上旬三米、四月上旬六米、五月上旬三米。尙昨年十月中旬此の小屋を訪れた時は少量の降雪に遭つた。

小屋は本年一月中旬全く埋沒されたものと推定される。

尙三月下旬約三分ノ一米の新雪が有り、四月上旬數糎積つた。

四月三日、曇。重苦しい霧の朝だ。シーの練習をする。大阪の住友の一行、今年の一月此處で會つた京都の人々等が登つて來てシーで賑つた。小屋の空氣は餘りよくない。横山君が換氣孔を作つたりした。

四月四日、吹雪。相談の結果荷物を殘して吹雪を突いて一先づ市ノ瀨へ下ることにした。一月以來の寒い經驗だつた。

四月五日、小雨後曇。明日の快晴を待ちながら休養、溫泉で住友の一行と快談した。

四月六日、晴。空模樣は良い。略ゞ見込みが付いたので午前十一時半喜市郎の家を出發する。

柳谷添ひの新道から遙か彌陀ヶ原の一端を仰いで今日は色々氣焔を揚げる。午後二時砂防事務所着、不動瀧を眼下に見る。廣い尾根は何時來ても氣持の好い處だ。折々舊道尾根邊に微かな雪崩の音響を聞く。四時上飯場小屋着少憩、荷物を全部小屋から取り出してルックザックに詰める。

先刻から浮動してゐた霧は見る〳〵中に下界を遮つて忽ち一、八〇〇米程の高度に雲海を造る。荒海に浮ぶ島、大長（オホチヨウ）、赤兎の親しい二峯、今日は又別山、御舍利山は何んと言ふ冷嚴な感じなんだらう。

四時四十五分出發、靜かな登行を續けて容易に甚之助谷の頭に出る。我々の歩む尾根にシュタイグアイゼンとシーの跡が縺れ合つて續いてゐる。昨夜溫泉で御馳走して下さつた住友の一行であらう。

彌陀ヶ原に出て見ると春晩く降雪があつた爲めか實に平坦で例年の波狀起伏が認められない。六時三分室堂の屋根でシーを脱ぐ。

薔薇紅の光が御前の嶺から天空へ消え去る。婦人室（ムロ）は滅多に埋沒し盡されないらしい。我々は携帶したシャベルで一米程掘り下げて直ちに東北面北寄りの窓に達した。昨年同時刻と全く對蹠的な吹き溜りの狀況である。豫期してゐた通り室堂には燃料、食料品、寢具等の設備が故意に省いてあるので懷爐を用ひて寢に就く。午後十一時氣溫室内零度、室外零下八度。

三

四月七日、晴後曇。筵の床をかこちながら矢張り眠つたと見えて、出發は意外に遲れて五時四十分、シュタイグアイゼンの紐を締める。氣溫零下八度。

時々岩を蹴つたり偃松を踏んだりして千蛇ヶ池へ出ると既に明るい。火口の跡を横切り翠池の上を歩み、劔・大汝兩峯の間を拔けて飛驒側を瞰下する。

溫い日に上昇し過ぎて嵐に吹きつけられたのであらう。夥しい小禽（カハガラス？）が此の邊一面に斃れてゐる。

我々と飛驒高原を挾んで延々併立する逆光の北アルプス、そして足下から加飛國境の山脈がなが〳〵と曲りくねつて遙か北方の幽暗に沒する。我々は先づ行手

を見透さねばならない、隆起や小突起まで仔細な視線を投げる。

視線は遠く大きく肩を張る笈、大笠に吸ひつけられて久闊の微笑を投げた。行かう！　小白水谷の上部を輕い歩調でアイゼンをきしませて、約二、三〇〇米迄谷底について降り、やがて等高線に添つて二、三〇〇米の國境鞍部に移る。七時十四分。

此の附近になるとサウシカンバが出現して來て多少氣分を壞すけれども、兎に角白山らしい靜かな眺だ。

前方に控える二、三六五米の山（四高の人の所謂仙石岳）は堂々たる純白な隆起だ。之れに續く山稜は可成り痞せてゐて偃松と岩とが闊いでゐたが、頂上へ達すると廣々としてのんびりした感じだ。中山君が既にシーを飛ばせてゐる。安山岩の凹みに張つた厚い氷をピッケルで破り臭い水を吸ふ。

硬雪の尾根をどん〳〵進んで、九時ワリ谷の上部の細い尾根で、丁度サウシカンバとオホシラビソとが黑壁谷の方から忍びやかに覗いてゐるのを見付けて腰を下して食事をする。二、一八〇米。

眼前に大きく蹲る三方崩山は斷然一家をなして居て、特徴あるガレの澤も深雪に埋もれて美しいが、樹木が多う過ぎて黑つぽく見えるのが物足りない。間名古谷側には雪崩の跡が少しも認められない。五、六月頃大白川側から這入つたら最も容易だらうし、早春、國境の二、一二三・九米峯より分岐する尾根を傳つて登頂するのが此の山の最も愉快な登路だらうと思ふ。

飛驒の山々に雲が騷ぎ始める。シーを擔いで可成り凄い稜を降ると、高距七〇米の登りに直面して一考した。西の黑壁谷側は急峻で藪が露出して居て、東面のワリ谷側は平滑で眞白で、サウシカンバが辛うじて發見されるだけだ。喜市郎は此の斜面をへつらうと提案したが、雪崩の不安が浮んだので結局忠實に尾根筋を傳つて遂に二、一六五米のワリ谷の頭に立つた。

幅廣く開いた間名古谷の上部がぐん〳〵延び上つた處に聳える二、一二三・九米の峯（舊記に據れば佐高峯）が三方崩山へ派出する高低の烈しい尾根と、地獄谷へ延びるなだらかな尾根とを左右一杯に張つてゐて立派な山容だ。此の峯に向つて一氣に登る。振り返つて見

ると今下つて來た尾根の加賀側から狹い急な底雪崩が數條谷深く落走して行く。地獄谷の中でも痩せた餓鬼の樣な尾根が赭褐色の地肌を露はして、雪の白い面を汚してゐるのが目立つ。

喜市郎が羚羊の新しい足跡を直ぐ傍に見付ける。我々は聲を擧げて「ホォーホォー」と呼ぶ。暫く頑張ると案外早く二、一二三・九米峯の頂を越えて、荒谷を瞰下して更に進むとゴマンド原である。(尾添、中宮の人々が春蛇谷を溯つて熊獲りに來る所で、彼等の發音はゴマンダ原ともゴマンド原とも聞える。稻坂氏の記載はゴマノ平となつて居るが、舊記に依ると護摩堂原であるらしい。)

此の附近の雪の斜面は緩く廣く春の陽光の下に夢見てる樣だ。最早雪は軟い、能美、石川の郡境が國境に結び付く處でシーにワックスを伸し、痛快な滑降の連續をやつて國境尾根を離れ、蛇谷の源流オモ谷に突入する。(此の谷は四高の人々は小尻谷と私稱してゐるが、オモ谷と言ひ主流を意味する、舊記には阿武谷とある。)

すつかり汗ばんで凡そ一、六八〇米まで降ると突然直徑二米位の竪坑が出來てゐて、水の音を傳へて來る。喜市郎は飯盒を吊して四米下からオモ谷の水をくみ上げてくれる。丁度十二時、晝食する。空には鱗の樣な雲が浮んでゐる。

快い此の谷を横に等高線に添つて外れ、約一、六四〇米の鞍部で再び國境に就く。是からは緩い登り降りの散歩氣分だ。(舊記に云ふ石川郡日見背は此處であらう。) 見下すとオモ谷が大きく彎曲した所から下方にガレが望まれて瀧が出現しさうな谷相に變つてゐる。

我々は目標の妙法山を凝視する。其の東南面のガレは眞白であるけれども、何時あの肩から切り落されるかも判らない樣な凄さを充分に持つて居る。愼重に然も敢然とシーで登る。或る時は一米の幅さへない狹い稜を階段登りで通過する友を仰ぎ、或る時は突風に煽られながら、雪庇の上で頻りに方向轉換する自分を見出す。

一時五十八分、遂に一行は妙法の山頂にシーを並べた。春の溫みは既に深山の頂にも忍びよつて來て灌木

と土が覗いてゐる。昨年つけられたらしい林道の杭がつんと立つてゐる。

中級山脈獨特の緩かな山波が悠々と北走して特に瓢箪山附近は實に坦々とした横顔を見せてゐて、其の奥に屹立した笈岳がもう雲の波頭と爭つてゐる。白山に視線を投げると既に吹き寄せる雲霧に二、〇〇〇米以上の高さを抹殺して了つた。

我々はもう天氣が崩れたことを知つてゐる。點々として廣い尾根を傳つて行く。著しく增して來た針葉樹の下で食事をする頃、空はひどく曇つて黄昏の樣だ。一羽の鷲が野谷莊司山の方から、低く頭上を掠めて飛ぶ。

眼下の庄川はくつきりと琅玕の玦と見え、街道は白絹の帶だ。庄川右岸の山々は黑々と雪消えの斑紋を着けてゐる。野谷や荻町や春めいた畑が望まれる。

天候の惡化は飛驒側へ下降路を求めねばならない。豫め圖上で選んだのは妙法と野谷莊司との中間から荒谷へ下つてゐる支尾根と、馬狩莊司山の尾根とであつたが、後者は望見した處馬狩莊司の頂上の隆起は突兀たる岩峯でシーによる降路としては不適當なのと、相當の時間を要するので、放棄して前者を取ることにした。國境の山稜に別れを告げて、三時ボーゲンを描いて荒谷に向つて滑降する。やがてシーの廻轉さへ許されない程尾根が惡くなり始めて、細い雪稜は階段的に斷續する。

シーで斜面を切斷する毎に惹起する人爲的表層雪崩はうなりながら深い谷間に落下して行く。各人の通過を緊張して見守る。

一ケ所シーを脫ぎ雪崩路を避けつゝ二〇米余りを降り、不安定な位置だつたが再びシーを穿き、猛烈な斜滑降に移る。此の惡場で一頭の熊が眼前の空洞から現れ出て、驚く間も無く瞬間に尾根を越え去つた。

ブナの林にかゝると可成り危險は少なくなつたが依然安全な滑降が出來ない。殊に荒谷の磧（六〇〇米）迄の約四〇〇米は藪が酷かつた。

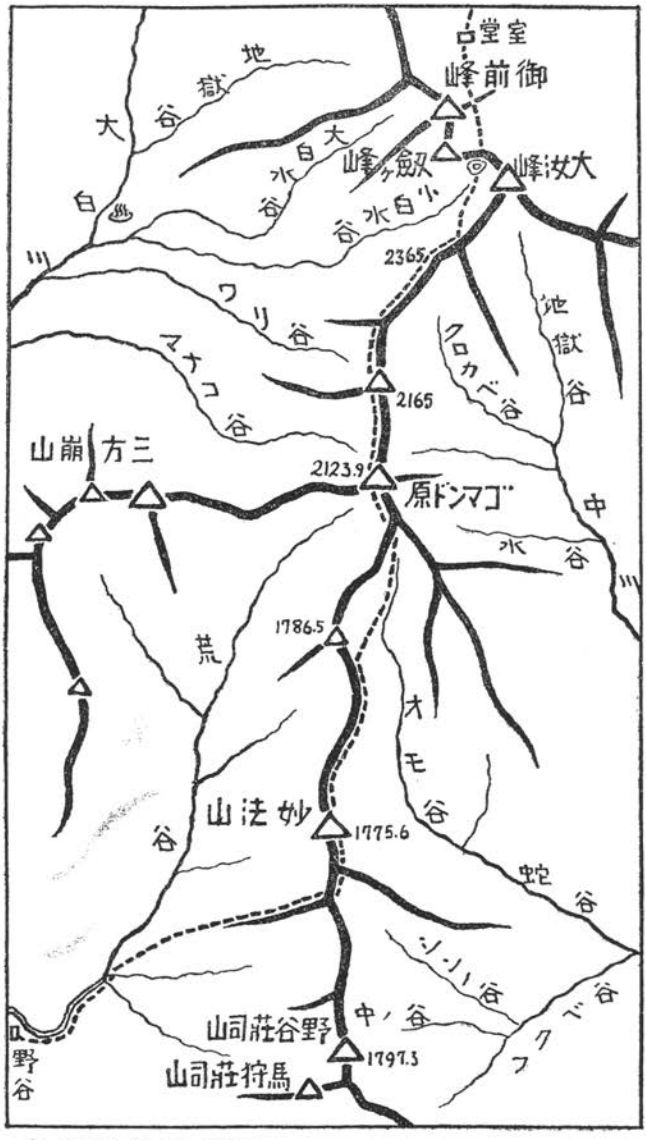
荒谷の磧（オーアキ谷出合）へ降つて野谷莊司山から流れ出るオーアキ谷（クルミ谷その他の合流）の落口を渡り、少憩の後、荒谷本流左岸の岩魚釣の小徑を

傳つて野谷の部落に向ふ。道々我々を取りまく山々に最期の一瞥を與へる事を忘れなかつた。

六時四十分、野谷に着く。村人は眼を見張つて聲を發しないでつゝ立つて居る。

雪のかけらさへ見えない白川街道を牛の様に水を繼ひつゝ歩む。八時荻町の旅舍に入る。蛙聲が聞えて來るのも里だ。

四月八日、雨。荻町に滯在する。昨夜は暴風雨となつて、庄川は霧の中を滿々として漲り流れてゐる。寒い雨だ。



白山妙法山附近

四月九日、雨。午前二時起床、二時半携帶天幕を被つて出發する。大分注意を受けたが下田附近ではトイタノマが出そうだ。(此の雪崩の稱呼は加賀の手取川筋でも使用する詞である。)物凄いデブリを踏み越えて行く。

五時十分内ヶ戸で二度目の朝食を攝りラテルネを納ひ込む。八時五十分東赤尾で少憩、十二時下梨着、船に乘る。一時十分出航、增水して危いと言ふ豪雨の庄川峽を下る。

八時五十分金澤に歸着した。

——七月十日稿——

北九州の山

ところどころ（その三）

竹内亮

三六　古處山

古處山（古所山）は福岡縣朝倉郡と嘉穗郡との境にある三郡山塊中の一雄峯で海拔八六二米を算する。山は一名白山嶽とも云はれ朝倉郡秋月町の北東約三粁に聳え、全山古生層の岩石より成り中腹以上には石灰岩の露出があつて突起せる頂上には美事なカツレンが發達し、巨岩を負つて白山神社の小祠がある。小祠の前には小平地があつて、東及び南の眺望がよく展け背振山塊、水縄山、九重山彙等を望むことが出來る。山中には植物の珍種に富み特に山頂附近一帶を蔽ふツゲの自然林は昔から有名なもので、中には直徑三〇糎に及ぶものもあり、今指定天然紀念物として保護されて居る。登山路は略ゞ二條ありいづれも秋月町を起點にして居る。即ち一は秋月町より正面の溪流傳ひの險路を登るものと、他は嘉穗郡に越える舊八丁の峠に迂廻して西より尾根傳ひに頂上に達するものである。

筆者は昨年（昭和七年）一月四日と十一月十三日との兩度同山に登つたが、第一回は秋月町より前記溪流沿ひの登路を登り、頂上より舊八丁の路をとり、更に尾根傳ひに新八丁の峠に出でその先から細徑を求めて秋月町に歸つた。舊八丁から先は地形高原性で到る處美しい草原が開け遠く寶滿、三郡の連峯を望んで絶好の逍遙地帶であると思つた。

第二回は福岡山の會の一行と行を共にしたもので前同樣の登路により更に東に近く聳ゆる屏山（九二七米）に縱走したのであつた。屏山へは頂上神祠の横から東に石灰岩間を縫ふ細徑があつてそれを辿ると約十余分で奥之院と稱する風穴がある。この邊迄一帶の尾根には特にツゲが密生して居る。

山麓の秋月町は古處山麓の秋月盆地の入口にある舊黑田支藩の城下町で今猶古色を存し柿と水前寺のりと同一物である川茸が名産である。朝倉郡甘木から約四

粁バスの便があるので古處登山も早朝福岡を出れば充分夕方迄に歸着することが出來る。

猶日本山嶽志には日本の勝地誌よりの詳細な引用があつて略ゝ山狀を盡して居る。

三七　屏　山

屏山は古處山の北東約二粁に連なる海拔九二七米の一峯である。本山は古處山の峻秀なるに似ず山頂甚だ平坦でブナを主とする喬木林に蔽はれ眺望は殆んどない。嘉穗郡誌には

「屏山（宇土浦山）屏村の南にあり、絕頂を平家城と云。馬見山の西北より續いて其の後は長野山なり。故に此の山を一ノ山とも云ふ。馬見山を二ノ山とも云ふ。馬見よりは猶高き故なるべし。山麓宇土浦より二十五町」と記されて居る。

筆者は昨年十一月十三日福岡山の會の一行と共に古處山から尾根傳ひにこの山頂に達した。古處山から奥之院への小徑を辿り、奥之院迄下らずにその手前で右に分かれる細徑を行くとやがて露岩も少なくなつてツゲ林が終ると間もなく屏山への登りにかゝる鞍部に達する。それから極めて緩斜のスロープを椿の密林を左右して細徑が登つて居る。少し登ると落葉濶葉樹林に移つて間もなくスヽキ原に出る。眺望のあるのはこの邊丈で古處山の頂がよく見える。それから直ちにブナを主とした巨木林に入り、少し登ると山頂の平地に達する。山頂は東西に約一粁の長さを有する平頂峯で東端に三角點の石標がある。古處山頂よりこゝ迄約一時間の行程である。

三角點から北側の急斜面を下る細徑があつて嘉穗郡側に下ることが出來るが、その路を約五分許り下つた處に比高約五〇米の石灰岩の一枚岩の斷崖が聳えて居り、その西側の緣をからんで登降することが出來る。岩隙には福岡附近の山地には稀なツルデンダが多生して居るのを見たのは特記すべきことであつた。

屏山から更に北東に尾根傳ひをすると途中約八七〇米の一峯を經て馬見山（九五八米）に達する。筆者は未だその機會を得て居ないが先は路がなく少くとも二時間を要する由である。筆者等はこの日屏山から直ち

古處山頂石灰岩上のツゲ　　竹内　亮

犬ケ岳尾根のツクシシャクナゲ　　竹内　亮

に路のない南側の谷に下り、上秋月村の下戸河内に出て柿の紅とイテフの黄葉美しい盆地の秋色を賞し乍ら秋月町に出て福岡に歸つた。

三八　犬鳴山

三郡山塊の略北端をなして福岡縣粕屋郡と鞍手郡に跨がる犬鳴山は低山ではあるが福岡市東郊の深山地帶で、山中には間々野生の鹿を見るといふ。山名については昔山中の瀧を狼が乘り越せず鳴いて居たので犬鳴山の名を得たと佐々木滋寛氏の筑前傳說集には記してある。

一帶の山地は尾根高く谷深く、且つ地形錯雜して居て、山中に入ると最高峯の熊ヶ城（五八四米）の位置を定めるのに容易でない。

福岡市外の箱崎神社前から粕屋郡久原村行のバスで中久原で下車し上久原を經て嘉穗郡に越える犬鳴峠の路を辿ると約二時間で犬鳴峠の頂上に達する。一帶の草原で四邊は山が迫つて居るので眺望は殆んどないが山の深さを思はせるさびしい峠である。峠を鞍手郡側に少し下つて左に最初に分かれる谷を河原河内（カハランコ）と云つて居るが、その谷に入る細徑をその方へなるべく右へ右へと辿ると尾根に出て最高峯が望まれるから尾根傳ひに行けばいゝ。頂上は筑前續風土記には城趾であると記して居るが狹い平地で四方に急斜し三角點の石標がある。雜木が密生して居るので眺望は余りよくない。

頂上から北東側の急斜を下ると間もなく溪流沿ひの細徑に出るのでそれによつて山の東側の犬鳴盆地の入口に近い水車小屋の處に出て道路に合することが出來る。

犬鳴盆地はこの犬鳴山とその東の西山（六四四米）との間の狹い谷間で犬鳴といふ部落がある。全く山間の別天地で舊黑田藩の別館趾といふのが今も保存されて居るが、傳ふる處によると黑田藩主が有事の際ここに避難するためであつたといふ。一帶の山地は樹林鬱蒼として茂り植物の種類に富み藥草の產地として昔から著名であり、黑田藩の藥園もあつたと云はれて居る。最近藥草黃蓮の生ずるを確めたと云はれその邊に藥園

があつたであらうと一部の人に考證されて居る。

三九　椿　山

佐賀縣東松浦郡玉島、嚴木兩村に跨がる六〇〇米内外の高原地帶は南から南西にかけて筑紫山脈の第二高峯天山（一、〇四六米）をはじめ彦岳（八四五米）、作禮山（八八七米）等の山々に限られるが北側は概して低く七〇〇米内外の山で限られて居りその内でも椿山は七六〇米の高度で可成り目立つて居る。

昨年四月十九日福岡の博多驛から唐津行の汽車で濱崎に下車徒歩約四粁鮎粱で名を知られて居る玉島に到り（七山と云ふ玉島川上流の村迄行くバスによることも出來る）右の路をとつて約三粁で平原に達した。ここで天山々麓の川上川上流の古湯溫泉に通ずるこの路から左に分れて更に約二粁今坂に到り、右手の草原のスロープを、眞上に聳ゆる椿山の頂上を目がけて登つた。下から見上げると極めて簡單に頂上に達せられると思つたが、登りかけて見ると一歩毎に頂上は遠のいて、その内に細徑を見失ひ、スヽキや雜木の藪くぐりに散々苦しめられて平原から僅かの間を約二時間を要して漸く山頂に達した。

山頂は略ゞ東西に向つた平な頂で短い草の間にヤマヤナギが點生して居た。南側は雜木林でさへぎられて居るが他の側はよく眺望がきゝ特に浮嶽山の洋鐘形の端麗な山容を北に近く望むのは深い印象を受けた。

山頂を辭して南西へ防火線を下り平原からの道路を横切つて少しく行くと星領の小部落に達した。その日の内に作禮山迄尾根傳ひをするといふ慾張つた豫定で淺い谷の細徑を西に急いだ。谷の源に近づくと廣い平な濕原になつてマアザミやミヅギバウシやサハギキャウが一面である。夏秋の頃の花の美しさを想像しながら濕原を拔けて尾根に出た。地圖で見るとこの邊は高度約八五〇米であるが一帶は殆んど同高度の尾根續きで南西に長く延び作禮山方面に至つて居る。

尾根の防火線を上り下りすること約二時間、暮色漸く迫るのを覺えたが作禮山は間に樹木の茂つた一峯をはさんで遠くに聳えて居る。到底日のある内に作禮山迄の尾根傳ひはむつかしいと思つたので東へ細徑を求

めて嚴木村の鳥越(トリコシ)に下り更に小さな峠を越えて本門の部落に着いて民家に請ふて宿泊した。

四〇　作禮山

椿山から本門に下つて泊つた。翌日早朝宿を出て屋敷に至り金比羅宮の横から頭上を壓する作禮山の秀麗な山姿を仰ぎながら淺い谷の細徑を登つた。谷が終つて斜面にかゝると雜木林になつてヂックザックに少しく登ると村から約一時間で花崗岩の白く崩壞した峠に達した。

ここから平坦な尾根の防火線傳ひに南西に作禮山頂を目あてに進む。右下に地圖（五萬分一濱崎）にある山頂の池が見える頃から急な登りになつて間もなく頂上に達した。峠から約三十分の行程である。頂上は狹い平地で小祠があり四方に急斜して居る。早朝から怪しい空模樣は雨雲を呼んで西から南の一部を除いて雲が亂れ、期待して居た間近く聳ゆる天山の偉容も望むことが出來なかつた。

頂上一帶の地形を概觀すると、北に開いた馬蹄形の峯が續き中に凹地を圍んで底に清水を湛へた池がある。池は元からあつたものと思はれるが今は人工を加へて北側に築堤し更に中で低い土堤で仕切つてある。その南側の池には一面にジュンサイが生じて居るが、北側の池には、池周に僅かばかり挺水草を見るのみであつた。築堤の下にも小凹地があつてその一方を偃き止め水を湛えて居り都合三個の池が頂上の凹地にあることになる。池邊に下りて水草の觀察をして下山の途につく。下りは山の南側をからむ小徑から下の尾根の防火線路に出たが一帶は山火の被害を受けて松の造林が傷ましく燒枯れて居たがその間に點生するヤマツヽジの滿開の花は忘られぬ美しさであつた。行くこと約一粁で右に小徑をとり草原のスロープを下つて栗木部落に出で豪雨にたゝかれ乍ら迂廻路を嚴木驛に出たが、はじめ尾根をそのまゝ眞直ぐに防火線を辿りその尾根と交叉せる前方の約六〇〇米の尾根を越えれば嚴木驛への近路であることを後で心付いた次第であつた。

四一　彦岳より天山へ

長崎本線の列車が佐賀驛附近にさしかゝる頃、北の空を高く區切つて平頂の連山を仰ぐのは筑紫山脈中の第二高峯である天山（一、〇四六米）より彦岳（八四六米）への峯つゞきである。

佐賀驛で唐津線に乘りかえて小城（ヲギ）驛で下車したのはすでに正午に近かつた（昭和七年一月卅一日）。驛前の廣い道を北に約二粁で横町（ヨコマチ）に至り、路を左にとつて更に約四粁で江里（エリ）山に達し彦岳への山路にかゝる。

草原性のスロープを約一時間登ると雜木林になる。その林の下緣の小徑を東に辿り林の東緣に出て笹の急斜面を少しく登ると頂上の東側の尾根に出た。防火線の短い草を踏んで少しく登ると彦岳の頂上であつた。頂上は小さな平地で中央に三角點の石標があり、南側は樹林でさへぎられて居るが北側は草叢の急斜面で何もさへぎるものがなく、高原を距てゝ遠く背振山から脊山、浮岳の連嶺がその全容を露して居り、西には彦岳の尾根續きの窮まる處に天山の大きな頂がのしかゝつて居た。

頂上を後にして西に尾根を辿る。屏風岩と地圖（五萬分一濱崎）に記された高さ十米許りの露岩の北側を卷いて、彦岳の頂上から約二粁で六八九米の鞍部に達し、更に廣い草原の尾根を一粁許り登つて少しく下つて第二の小峠に至ると、その先は急に尾根が大きく登つて露岩が多くなり山容が著しく異なるのを感じた。尾根はやせた小草が生じいぢけたイヌツゲが點生して居る。天山の頂上も間近いことを豫期しながらスロープを登り切ると平坦な草原に出たが、その平坦地は更に遠く西方に連つて天山の頂はその先の小高い平地であることを知つて今更ながら天山の大きさをつくづく感じた。

單調な平坦な尾根を更に約一粁漸くにして平坦地の西端の一段高い處を占める頂上についた。彦岳から約二時間を要し暮色すでに遠近をこめ北西に近い作禮山の背後は夕燒雲が紅に映えて居た。頂上には小祠と、この山頂で自刄して果てたといふ南朝の忠臣阿蘇大宮司昭直公の墓石が高く立つて居る。

山頂を辭して南に細徑を求め約一粁で池畔に小祠のある處に出で（最近この地に山小屋が建設された由で

ある。福岡山の會々報「せふり」第六號參照）更に約三粁で川内に達し小さな峠を越えて、晴田村本山の天山神社前に出で夕闇に追ひ立てられ乍ら、松葉、出分の部落を經て天山々頂より約三時間で小城驛に出で佐賀行の終列車に漸く間に合ふことが出來た。

天山に就いてはすでに本誌第十三年三號に八代準氏の記事がある。氏は晴田村より登り川上川上流の古湯溫泉に下山して居られるが筆者とは異なれるコースであるので參照せられ度い。

四二　野河内（ノカウチ）溪谷

福岡市西新町（ニシジン）から内野（ウチノ）村行のバスで終點の曲淵（マガリブチ）といふ處で下車して約一粁、或は佐賀縣三瀬宿（ミツセジユク）へのバスに乘つて野河内といふ部落に至る。ここは本誌二十五年三號にも記した井原山麓の水無の谷を流れる八丁川の峽流部の入口で、これから直徑にして約一粁の間を曲折して約二粁の峽谷を形成して居る。この峽谷は水無部落の約一粁下流から急に深さを增して激湍、瀑布の連續となり比高約一五〇米を一氣に流下して居る。

此の峽流は從來野河内より水無への細徑が峽流部をさけて左岸の高地を横斷してつけられて居たため、地元の人々にさへ注意せられずに長く自然に放置せられてあつた秘境であつたがため、よくその奇勝が保存せられ全溪欝蒼たる常綠濶葉樹林に蔽はれた幽遠境を現出し、福岡市附近に於ては正に奇蹟的とも稱せらるべき存在であつたのである。

筆者はかねてこの溪谷に注意しつゝあつたが昭和六年五月一日機會を得て野河内より溯行しその幽遠境なるに一驚を喫したのであつたが、その當時直ちに野河内溪谷と命名して紹介する處があつた（拙著福岡市附近の遊山地參照）。

溪谷中には大小の瀑布約十四以上を算し、瀑布には必らず深淵を伴ひチョウノ淵（岸で伐木すると必らずチョウノを水神にとられると稱す）の如きは深さ一〇米を越すと思はれる。最大なる瀑布は溪谷を約三分の二溯行せる處にあり、大瀧と稱し上下二段になつて落ち高さ約二〇米以上を測る。又溪谷の殆んど中央部の右岸に山笠岩と稱する奇岩が聳ゆるが、下より仰ぐ時

は博多の祇園祭に飾る山笠なる飾物に似たるの故を以て名付けられ、中頃に苔蒸した弘法大師の石像を安置してある。溪中には所々に石南があり花時には甚だ趣を添える處があるが、又秋の紅葉の美もすてがたい。

近時溪流の主として右岸を通ずる細徑が修理され探勝者に便する樣になつたけれども溪谷美の眞蹄を味はんとせば野河内部落より橋を渡つて直ちに溪流に入り轉石を涉り、岩壁をへつり激流を渡涉すべきであつて、入口よりカンス淵の瀧を經て水無の盆地の下端に出るのに約二時間を要する。溪中の岩面は滑澤なるもの多く履物は革鞋を穿つを可とすべく、二三人のパーテーであれば二〇米許りのザイルを用意せば便利なことが多い。

四三　冬の背振山

福岡市に近い背振山（本誌第廿五年第三號の拙稿參照）は標高一、〇五五米にすぎないが、筑紫山脈の最高峯で筆者の所謂北九州の區域に於ても屈指の高峯である。しかも山勢が東西に長く且つ海岸に近いので、濕氣を含んだ玄海灘よりの海風の影響を最も受け易い位置にあるので冬期の積雪量は九州に於ても高度の割合には大であり、冬季の山相は可成吾人をひきつけるに足るものがある。

背振山に積雪を見るのは例年略十二月中旬以後になつてからで一月中旬より二月上旬に最大量に達し、三月に入つても屢々比較的多量の降雪を見るが長持ちせずむしろ前の殘雪の溶解を促進するかの感があるが、しかもともすれば四月上旬乃至中旬に至る迄山頂附近の北側の樹蔭には少量の殘雪を見ることがある。

この積雪期に於ても比較的多量の降雪を見るのは先づ多くとも五六回であつて、從來筆者の經驗では三四年前の一月に一日約三尺の積雪を見たのを最大とし普通多量の降雪を見たとしても一二尺にすぎない。而して多量の降雪の後は必らず溫暖なる日が數日持續するので急に雪量を減ずるのを普通とする。

雪質は概して濕氣を多量に含んだベタ雪であるが一二月の頃にはブナ帶の現出する七八百米以上では稀に乾燥した粉雪を見ることがあり、氣候的の界線の存在

を暗示する如くである。かゝる時には日中でも山頂附近の氣溫は零度以下を保つのを見た。そして山頂附近のブナ林が霧氷で蔽はれるのもその頃であるが、例年霧氷がついたまゝ數日を持續する樣なことは極めて稀であるが唯今年一月には異常の酷寒のため一度形成された霧氷が約十日許り持續したのを見たが、かゝる例はむしろ異例とすべきである。

一體に九州の人は雪を恐れること甚しく冬季積雪期の登山を甚だ危險視して居たのであつたが、最近スキー熱の勃興等と相伴つて積雪期の登山が漸く流行するに至つたのは、一つは山岳界全體の動向に支配さるゝ處大なるものがあるのであらう。二三年前雪の背振山に登るが如きは極めて少數の特志家に限られ、それ丈に吾物顏に雪の山の面白さを少數で獨占出來たのであつたが、今年一月二月頃の如きは毎日曜に背振山を目ざす登山者の著しき增加を見、一月中旬の或日の如き一日五十名をこしたことさへあつて山上は時ならぬ賑ひを呈したのであつた。

又背振山を中心として雪の尾根歩きも可成多くの人々の試むる處で背振山より西に獵師岩山（八九三米）或は金山（九六七米）等迄足跡を印して居り、又背振山の溪谷の冬期積雪季の溯行も一部の人々によつて屢〻行はれて居る。

次に背振山麓の板屋附近の海拔約六〇〇米の草原のスロープは數年前より一部の人々によつてスキー場として利用せられて居たが、本年の一月乃至三月の候には著しく多數のスキーヤーの蝟集を見るに至り所謂スキー熱なるものが北部九州にも著しく旺盛となつたことを示して居る。しかしそれ等の人々が乏しい雪の間を草や灌木に氣を配りながら短いスロープを求めて辛うじて滑降の快味?を味ふ場面はむしろ氣の毒である。要するにこれ等は又所謂畑スキーの部類であつて、少くとも北九州の山地に於てのスキー登山と云ふことは積雪量の少ないことが主因となりブッシュに妨げられ殆んど望みがない。卽ち登山の目的にスキーを携行することは北九州の山地では殆んど全く無意味であると云ふことが出來る。

四四　鷹巣三の岳（英彦山彙）

英彦山彙の東の一群をなす鷹巣山は三のピュートより成り東西に並んで奇觀を呈し西より一の鷹巣、二の鷹巣、三の鷹巣の名で呼ばれて居るが、こゝでは便宜上田川山岳會發行の最新英彦山彙詳細圖に從ひ三の鷹巣を鷹巣三の岳と呼ぶことにした。

鷹巣一の岳についてはすでに筆者が、本誌第廿三年第一號でその登路について記したがその後昨年五月十五日鷹巣三の岳に登攀の機會が得られたので同峯について記すことにする。

鷹巣三の岳は海拔約一、〇〇〇米遠望に於いては樹林に蔽はれた尖峯をなし樹間より灰白色の岩壁が隱見して居る。

藥師峠（八七〇米）より尾根を東にとつて鷹巣一の岳及び二の岳の南側のブナの原生林下の林道を辿ると約三〇分で三の岳の南側直下（海拔約九〇〇米）に達した。頭上には直ちに集塊岩の岩壁が聳えて居るが向つて右側の岩の裂罅を連ねて岩塔の東側の狹い尾根に登ることが出來た。尾根にはモミ、ツガ、ヒメコマツ、ツクシシャクナゲ、イヌツゲ等が生じ樹間より東に小屋ヶ嶽（九五五米）、犬ヶ岳（一、一三一米）等を望むことが出來る。それより狹い尾根を少しく西すれば頂上である。

頂上は狹い平地をなし四周には落葉濶葉樹が茂り樹下にはツクシシャクナゲの老木が少なくないが、そのためにこゝからの眺望は僅かに樹間より英彦山北岳を近く望み得る位であつた。

頂上から北西側の急なガレを右にして急斜を樹木に手頼り乍ら下り最後の小岩壁をザイルで降つてスゞの藪を分けて山體の西側に出で藥師峠よりの林道に合した。

三の岳は一の岳に比すれば岩壁の全體的規模は稍ゝ小さいが岩壁の高さに於いては一層優るものがあり、しかも普通の登路が岩の裂罅を連ねて居る點で登路としての興味が多く、又樹林が荒されて居ない點も優れた特色である。

四五　鷹巣三の岳より犬ヶ岳へ

英彦山彙の主稜は福岡、大分の兩縣界を劃して鷹巣三の岳より更に東に野峠(七一三米)で終つて居るが、それより更に長い尾根が東に走つて犬ヶ岳(一、一三一米)、經讀岳(九九二米)、雁股山(八〇七米)、大平山(六三〇米)等の連峯をなして中津附近の平野に終つて居る。この連峯は北九州に於ける最も壯大なるものであつてその高度、深さに原生林相の美を伴ひ登山者の興味をひくに充分である(筑紫山岳會發行「山行」第一號に三日月直之氏の記事あり)。

筆者は前記鷹巣三の岳を降つて筑紫山岳會々員三日月直之氏と共に犬ヶ岳への縱走の途についた。ブナの老樹の下の林道を更に下ると開けた草生ひの谷間に出た。初めの豫定では尾根傳ひのつもりであつたのが林道傳ひにいつの間にか谷間に下りてしまつたわけで、豫定の尾根は左手に高く離れてしまつたのに心づいたので、直ぐブッシュを分けて尾根に出た。

尾根の森林は可成荒れて居て雜木が茂り通過には中々骨が折れる。處々に岩骨が露はれて居る處があり、その度にホット息をつく。

約二時間の苦闘の後杉の造林地に入つて尾根とクロスする小徑を得たので左にとつて少しく下つて見たが何となく前途が不安になつたので、(後でこの小徑を辿れば野峠の頂上に出ることを知つた)思ひ切つてその小徑を見棄て造林地のスロープを眞直ぐに下り續いて赤松の造林地の間に厚く茂つた灌木の藪と戰つてやつと谷底を過ぎる廣い防火線に出た。

同行の三日月氏の記憶によつてこの防火線を少しく登れば野峠の頂上であると判つたので草原間の細徑を辿つて少しく登ると頂上であつた。峠の南側の凹地に小さな泉があつて常に清冽な水を湛えて居る。この一帶は美しい草原で、兩側には杉の造林地が廣く藪は豐富であり、水も充分にあるがこの先の尾根では到底水が得られないことを知つて居たので時間も最早午後四時でありこゝで野宿することにした。

紅茶を沸かしてパンで簡單な食事をとり薪を充分に用意して焚火の横に毛布にくるまつたまゝ星の美しい

空を仰いで寢た。寢覺め勝ちな夜を明かして六時には起き上つて又乏しいパンの食事をすませたが、三日月氏は急に豫定を變更してこゝから歸宅されることになり、七時、餘分な荷物をこゝに殘して單身犬ヶ岳へ向つた。

防火線の急斜を登ると露岩の臺に出る。英彥山方面がよく望まれる。防火線のまゝに少しく下つて見たが方向がどうも變なので又露岩の處に引返して見ると、岩の北側の蔭を細徑が通じて居るのを見出しそれによつて狹い尾根を辿る。尾根は一旦下るが又急な登りが續き、峠より約二時間の後に海拔約九〇〇米の一峯に出た。尾根はこれから起伏が少なくなつてブナの老木の續く尾根路の漫歩は非常に愉快であつた。處々にツクシシャクナゲの滿開の花があり、ホウチヤクサウ、シコクスミレ、シハイスミレ、タチツボスミレ、サルメンエビネ等の草花がチラチラして晩春の喬木帶は今を盛りの美しさである。

森林が終つて笹原となり前方を塞ぐ急斜を登つて地圖の一、一一七米の地點に達したのが十一時半、峠から四時間半を要したことになる。こゝは北側の求菩提山（七八二米）より尾根傳ひの路の合する處で犬ヶ岳の頂上はこゝから更に間の一峯を越えてその先に聳えて居るのが望まれた。

昨夜の睡眠不足がたゝつて大分身體の調子は惡く疲勞が甚しかつたが押して頂上へ向ふ。

笹原を分けて細徑を求めつゝ少しく降つて圓頂の一峯に達し、松の造林をくゞつて急斜を下ると小草地の鞍部に達した。又少しく登つて狹い尾根に出ると石南の老樹の密叢である。犬ヶ岳の石南は昔から著名なものであり花の美しさを心に畫いて來たがどうしたものか全く花を見なかつたのはさびしかつた（犬ヶ岳の石南は最高峯と經讀岳との間の尾根に最大群落がある由である）。スヾ竹を分けて少しく下り又少しく緩斜を登ると漸く犬ヶ岳の最高點であつて俗にカメの尾と云はれる處である。先の一、一一七米の一峯からこゝ迄は一時間を要した。

頂上は小平地で三角點の石標があるのみで他に何もない。周圍に低い雜木が茂つて居るので眺望は期待し

た程ではなかつたが東に經讀岳の尖頂が近く望まれるのは可成魅惑的である。同じ路を先の一、一一七米の峯に引返へし疲勞の加はつた身體に鞭つて先の尾根路を野峠に歸つたのは午後二時であつた。リュクサックを草原に拋り出して第一に湧泉に走つて貪り飲んだ水の美味は忘れがたいものであつた。そして草原でとつた約二時間の午睡は疲勞の回復には偉大な効果があつた。

荷物をまとめて急いで彦山町に向ふ。今度は峠から鷹巣山の北側を通ずる柳峠（七六〇米）の路を幾度か迷ひながら夕方彦山町についた。途中彦山町に近い山側の防火線路で松の造林地の上に仰ぐ鷹巣三峯の姿は美事なものであつた。犬ヶ岳については豐前志に「豐前にて二三を爭ふ大山也、大木茂り深山なり、山の九合目計りに潮水あり、大洞あり、求菩提山伏の行場也」とあり樹木鬱蒼たる深山を想像して行つたが、行つて見ると英彦山以上の荒れ方で山頂迄殆んど全く伐採され大部分松の造林地となつて居たのには少なからず失望した。

犬ヶ岳には昔は狼が多かつたといふことで、山麓では懶惰者に對して「犬ヶ岳へ行つてしまへ、あそこでは寢てゝ食はれる」と云ふさうであるがその意味は犬ヶ岳に寢て居れば狼に喰はれるといふのである。

四六　英彦山主峯西側の尾根と谷

彦山町の上に比高約六〇〇米まで聳ゆる英彦山主峯は普通の登路を登降するだけでは比較的平凡であるけれど（本誌第廿三年第一號拙稿參照）、登路以外の尾根や溪谷には非常に興味あるコースが少なくない。以下筆者のとつた二三のコースについて記して見る。

梵字岩の尾根。彦山町から大南神社への小徑を約一粁で左上に三個の大梵字を刻んだ岩壁を仰ぐのが梵字岩である。その上の尾根には登路はないが昨夏八月二十三日福岡山の會々員の內山、梶原兩氏と共にこの尾根を傳つて上宮岳に登つて見た。

小徑を辿つて梵字岩の下に出るとこゝで細徑が斷えて居るので右に岩脚を卷いて小さなガレを登り、梵字岩の上に出て狹い岩尾根を登る。しばらく行くと不愉

英彦山主峯西側の尾根と谷

快な荒れた雜木林が終つて防火線を間に國有林の美事なブナ林に入る。樹下は一面の石南で花時の美觀が思ひやられる。急なスロープを登るとやがて稍ゝ平な尾根になる。その內石南が終つて露岩の急な斜面になつて短い笹とヒナスゲが一面に生ずる處に出た。急斜が終ると又平な尾根に移ると急に笹が深くなつて丈を沒する程になりラッセルの苦勞は一通りでない。朝からの濃霧は雨になつてグッショリ濡れて頂上直下の行者堂前の廣場に出たが谷の入口から約二時間を要した。

硯ヶ谷の下降。梵字岩の尾根から行者堂に出て上宮岳に登り、下りはコースをかへて上宮岳と南岳との鞍部に下りそれより右に硯ヶ谷を下る事にした。鞍部から約十分許り蘚苔に被はれた樹林下の巨岩を涉つて降ると急に谷が狹くなつて淺い流水が見え始めた。行くに隨ひ益々谷が狹くなつて兩岸に岩が出はじめ所々に石南の籔が見えたがやがて高い斷崖を水は瀧をなして流下する處に至つた。左にルートを求めて內山、梶原、竹內の順にアンザイレンして樹木を賴りながら斷崖の上緣を辿り小さなガレの緣を傳つて斷崖の下に出た。

こゝは巨岩の重疊した荒地でその上に高さ五〇米に餘る斷崖が仰がれ乏しい水が瀧をなして流下して居た。密林下の陰欝な溪流を約十分許り下つて官林境に出ると下は伐木跡の荒地で一部若い杉の造林地になつて居て急に四邊が明るくなつた。こゝから細徑を約十分許り下つて鞍部から約一時間で彦山町への路に合した。

籠り水より南岳へ。昨年八月二十三日福岡山の會々員内山、梶原兩君と共に彦山町より三呼峠（三呼峠と稱するは彦山町より峠に登り觀ると屏風岩の岩壁を望むが、峠より三呼すればこだまして三應するによつて名付けられたものである）を越え鬼杉を下に見て約一時間で籠り水の峠に達した。この峠は大分縣槻ノ木村轟に達する細徑を通じ、もと大分縣下毛郡側から英彦山へ登る人達により可成利用せられたものであつたらしいが鷹巣山側の藥師峠の路が官行斫伐でよくなるにつれそれを利用する人が多く、籠り水の路は殆んど廢たれてしまつたものである。

籠り水は豐前志によると「山上より二里許南の巖中にあり。唯、水音のみ聞えて、水流は見えず。因籠り水と云ふ。上毛郡求菩提山にもあり」とある。傳說によれば役の行者こゝに修法の際流水の騷音を怒つて岩中に封じたりと稱せらるゝものである。その籠り水の岩は峠の北の眞上に比高約百米で聳ゆる安山岩の殆んど一枚の岩壁で甚だ威壓的であるが、その日は上半部濃霧にかくれて見えず一層の不氣味さを加えて居た。

ブナの老樹の下に厚く繁るスヾ竹を分けて岩壁の下に至りかねて右側の緣に傳つて登れそうに思つて居たので竹内・梶原、内山の順にアンザイレンし靴を草鞋に履き換へて竹内が少しく登り始めたけれど岩面が濡して居てホールドが非常に惡く危險だと思つたのでこゝから登ることを斷念し、又靴を履き換へてアンザイレンしたまゝ岩脚を右に廻り土つぽい十米許りのチムニーを見つけてそれを登る事にした。この登りに約小一時間を要して危險帶を脫したのでザイルをはづし、急斜の落石を戒しめつゝ約二〇分許り登つて漸く岩壁の上に出で、谷につき出したナイフリッヂの附近で少憩し食事を攝つて、又ブナ林の下の厚いスヾ竹の間を分けて平な尾根を濃霧で全く視界を奪はれて盲滅法に

登つて行つたが、遂には全く途方にくれて濃霧の中に立往生してしまつた。思ひ切つて前進するといつの間にか元の處に歸つてしまつて居て一時は全然スヾ竹の中に迷ひ込んでしまつたのであつた。しかし又思ひ直して濃霧の中を深い谷を左にして少しく登ると一小峯の頂と思はれる處に出た。地圖（五萬分の一吉井）では籠り水から南岳頂上迄は一粁に足りない極く單純な尾根の樣に思はされて居てこんな峯があるとも思はれず、しかもすでに可成な距離を歩いて居ると思はれるのに未だ南岳に達する氣配もなく、しかも思ひがけぬ峯の頂に出たりしたので愈ゝコースを誤つた如くに思ひ込み、しばらくこの頂上で濃霧を晴らして前途の見當をつけることにし約三〇分を空しく待つたが、遂に急には濃霧の晴れさうな氣配がないので思ひ切つて峯を向側に下つて行くと間もなく淺い鞍部に出て、これを境に急にスロープが上向きになつて岩の多い笹の短い尾根に移つた。こゝで初めて南岳の尾根にさしかゝつたことを直感したので一同急に元氣を回復して一氣に急斜面を登つて、南岳の頂上に近い北東角の岩頭の石南林に出ることが出來たのは午後四時で峠から約五時間を要した。

四王寺谷を溯る。四王寺谷と稱するは梵字岩の尾根の北の谷で英彦山主峯の西側の谷では前記の硯ヶ谷につぐ深い谷である。昨年十月七日上宮岳へ登るのにこの谷によつて見た。

彦山町から玉屋神社道を辿り智室窟の登り口から梵字岩の手前の小さな流れの處から杉の造林地の下の細徑を四王寺谷に入る。間もなく杉林が終り草原になりやがて官林の雜木林に入ると路は急な登りになり約二〇分許りで岩壁を立ち廻はした小さなガレに出た。落石に心をくばりつゝ少々ガレを登り右側の岩稜に移つて登る。センダイサウが水々した葉を展げて白花が眞盛りであつた。一〇分許りで岩稜を登りきると小笹の尾根になり、間もなく上宮岳正面の登山路の中宮の先の平坦な路の處の稚兒落しといふ崖の少しく上に出た。谷の入口から約一時間である。こゝで見ると谷はこの上にも入り込んで居り、この谷も前記の硯ヶ石の谷と同樣筆者の登つたガレの處で段になつて居ること

を知つた。

四七　英彦山主峯東側（裏英彦）の瞥見

英彦山主峯の登路は主に西側にあつてその側が表山の形であり、東側はそれに對する裏山で俗に裏英彦と云はれ一般登山者の全く顧みない處であるが、それ丈に表山とは異つた特色がある點で興味をひくものがある。

東側の著しい特色の一つとしては可成採伐されたりとは云へ多分の原生相を保有する鬱蒼たる溫帶林の間につけられた營林署の巡視路が横斷して居り、その路の逍遙の面白さのあることである。

この巡視路は略〻二條あつて一は籠り水の峠から略〻一、〇〇〇米の同高線を辿つて藥師峠に出るものと、今一つは大分縣槻ノ木村轟から籠り水の峠への路の海拔約六〇〇米の邊から斜に藥師峠に向ふもので木馬路を兼ねて居る。

前者については筆者は未だその南半について未踏査であるが北半の上宮岳より北岳にかけての路は單純な急斜面を横斷するものであるが殆んど荒らされて居ないブナを主とする樹林に蔽はれ晩春の新綠、秋の紅葉に多分の原始美を味ふことが出來る點に優れた特色がある。

後者は前者に比し森林は荒れて居つて處々に杉や松の造林地が介在するが地形に變化があり前者とは全然異つた面白味がある。殊に鬱蒼たる樹林に蔽はれて奇巖を縫ふ溪流の幽邃は前者の路では到底見るを得ざるものである。

山國川上流の新谷（シンガイ）は英彦山の大分縣側からの唯一の登山根據地で旅舍が二軒ばかりあり、中津からのバスの便もある。新谷から頭上を壓して聳ゆる刈又（カリマタ）山（九六〇米）を仰ぎつゝ約三粁で轟に達する。一行六人轟から溪流沿ひの小徑を少しく行くと小橋を渡り木馬道を右に深溪を見下ろし乍ら轟から約四粁で營林署の人夫小室に達する。この小屋は可成立派な小屋で平時は閉鎖されて居るが英彦山裏山の溪谷漁りには非常に便利な小屋であり中津營林署の許可を得れば使用出來るであらう。これより籠り水路に分れて右に細徑をと

り約一粁で北岳直下の海拔約八〇〇米のブナの巨木の疎立する平地に出る。軌道の枕木を涉つて少しく行くと刈又山へ續く尾根に出る。左の細徑をとれば藥師峠が近いが先を急いで居たので鷹巢三山を樹間に望みつゝこれから單軌の木レールが急斜面を下つて居るのを辿り高内（コウナイ）より藥師峠へ通ずる峠路に出で平鶴（ヒラツル）の官行斫伐事務所に着いて少憩した。この事務所は刈又山の北側の溪谷にありすでに約二〇年間英彥山の東側を伐採し造林して來た處であるが來年は愈々こゝも閉鎭して新谷の西の藤原谷に移轉するとのことであつた。

斫伐所から少しく下ると製材所があつてトロ道が守實迄敷かれて居る。營林署の御好意によりトロの便乘を許され、こゝから一氣に高内に下つてそこに待ち合はせて居た自動車で新谷を經て守實に向つた。

四八　籠り水より岳滅鬼（ガクメツキ）峠迄の尾根

英彥山南岳より籠り水を經て岳滅鬼峠に至る尾根は約四粁に至つて平均高度優に一、〇〇〇米を保ち大部分はブナを主とする原生林に蔽はれて山相甚だ堂々たる物がある。籠り水から南岳に達する尾根については既に記したのでこゝでは昨年七月十三日に行へる籠り水から岳滅鬼峠迄の尾根の縱走に就いて次に福岡山の會々報「せふり」第二號から拙稿の一部分を拔萃する。

「岩壁（籠り水）を後にして愈々スヾの中に飛び込んだのは午後一時、苦闘約十分小さな峯の半枯れの松の造林に出て、一氣に急斜を下ると小徑があつて前方猫の丸尾に達して居た。徑は西の一峯の西側から東の一峯の頂に出で又急に下降するが鞍部で又深いスヾの中に沒してしまふ。

ブナ、クマシデ、アカガシ、モミ等の原生林下のスヾを分けるといふより、潛行してヒタ登りに尾根を登る。尾根がやせて來ると石南が多くなり、花時の美觀が思ひやられる。それより尾根は一上一下ひたすら原生林下のスヾの籔をくゞる。蜘蛛の巢と枯葉と汗とが一緒になつて不快この上もない。シャツの袖は潛行一時間ですでにちぎれ、腕には大分かすりきずが出來た。幾度か尾根を斷念して北側の斜面に通ずる筈の小徑に出ようと思つたが、又思ひ直して進む。行けども行け

ども原生林下のスヾで、間々やせた尾根に石南の密叢が出るのが唯一の息抜きだつたが、それさへ通過に一骨折らねばならない。

目ざす岳滅鬼峠と思ひ込んで下つた鞍部には心あての路もなく、又行手にスヾの尾根が續いて居た。又氣をとり直して尾根を登りつくすとやつとかねて通つて知つて居る岳滅鬼峠附近の林相が開けた。

無性にうれしくなつてスヾを泳ぐ樣にして下るとヒョイと峠路に出た。前方のスヾの間には「從是東小倉領」と刻した古い石標がなつかしく立つて居た。時に午後四時五十分、歸りには鬼杉、玉屋の路をとつて彦山町に急いだ。」

四九　樋桶山

樋桶山は大分縣下毛郡津民村にある一峯で海拔八七六米に達し山國川上流に於ける一雄峯である。かねて地圖（五万分一耶馬溪）でこの頂上附近に一〇〇米に近い大岩壁のあるのに心ひかれて居たが今年七月二十八日頂上の岩壁直下迄行くことが出來たので此の山容の概觀と四邊の山相の概要とをこゝに紹介することにする。

耶馬溪鐵道の津民驛から山國川の支流の津民川の谷を約八粁許り溯ると落合といふ小部落に達する。こゝは津民川の二支流の合する處でバスの終點である。左の谷を入つて少しく行くと柾木瀑布に達する。溪流が深く岩を刻んで二段になつて岩壁を立て廻らした暗い瀧壺に落ちる景觀は甚だ豪壯である。

瀧から約一粁で柾木の部落に達する。左に高く樹林に蔽はれた二粁に余る長い尾根續きの樋桶山が實に美事に仰がれる。前方には梅ノ木台と呼ばれる海拔約七〇〇米の岩塔が削立し、その背後には原生林に蔽はれた中摩殿畑山の續きが黑々と望まれる。その一帶は俗に大野々山と云はれ又八大龍王樣とも云つて居るが、中摩殿畑山の頂上には八大龍王の社があるためであり旱天には雨乞の靈驗あらたかであると信ぜられて居る。

後を顧ると檜原山（七三五米）が高くその尖峯をもたげて居るのが著しく目立つ。檜原山は山國川上流の

名山で山頂に白山神社を祀り、疱瘡、疫病除けの神として地方の信仰が厚いといふことである（豐前志による）。

柾木から更に約一粁で奥畑（オクハタ）の部落に達する。右に川を距てゝ耶馬溪式の岩峯がソーミの山裾に立ち連なり所謂津民耶馬溪中の一勝區をなして居る。頭上には梅ノ木台が點々として聳立し一帶の景觀甚だ豪壯なものがある。

小徑を左にとつて梅ノ木台を右に仰ぎつゝ緩斜を登ること約二粁で若い櫟や楢の林を拔けると樋桶山の西側のスヽキのスロープに出た。細徑を登ると何時の間にか梅ノ木台も眼下に見下ろす小さな尾根に出た。

樋桶山主峯の西を劃する灰白色の大岩壁は夕日を受けて明るく頭上を壓して聳えて居る。丈を沒するスヽキを潜つて岩脚を廻り更に前方の尾根に出ると山國川本流の流域がよく望まれ兩岸の台地性の地形を明瞭に指摘出來る。その台地の背後には由布鶴見の一群を左に九重山彙一帶をも望むことが出來た。近くには傘山（カラカサ）（三九六米）、釣鐘（ツリガネ）山（八五二米）、中摩殿畑山（九九一米等が聳え、北にやゝ遠く犬ヶ岳一帶の高い尾根が連亘するを仰ぐことが出來た。

樋桶山の頂上へは別に登路はないがこの尾根から岩壁の南側の小さな谷に入り更に右のスロープをからんで登ることが出來るといふことであつたがその日はすでに時間も遲くなつたので登頂の機會を他日にゆづつて草原の尾根を少しく下り、樋山（ヒヤマ）路からの細徑の通ずる鞍部に出て北側のスロープを下り、往路に出て奥畑に下り、柾木を經て落合に歸つた。

五〇　沖の島

日本海々戰で名を知られて居る玄海灘の殆んど中心にある沖の島は周廻約四粁の小島でその南約一粁の海上にある小屋（コヤ）、御門（ミカド）、天狗（テング）の三小巖と共に一群をなして居る。

沖の島は北東に突角を向け南西方向に長軸を有する不齊三角形を呈し、長軸の方向に島の中心線を一條の高い背稜が走り略ゝ四峯の聳ゆるのを認める。卽ち島の中央より少し西に偏して最高峯一の岳が聳え海拔二

四三米を算し、それより東に二の岳(約二〇〇米)、三の岳(約一八〇米)、白岳(約一五〇米)が連つて居る。それ等の峯々の北側は普通の急斜面で鬱蒼たる原生林に蔽はれて居るが、南側は灰白色の石英玢岩の斷崖で一の岳では比高約五〇米であるが東するに隨ひ比高を增し白岳では略一〇〇米乃至一五〇米に達し海際より直立して居る。一の岳の岩壁は南側に突出せる岩稜をなし東西の南側に廣い面があり、殊に西側は殆んど直立した面で一見慄然たるものがある。この岩稜の下方に幅約一米内外で高さ四〇米位のチムニーがある。白岳の岩壁は風化による大きな凹處が無數にあつて殆んど一枚岩であるけれども登攀には比較的に良好なるホールドを與へて居る。

海岸は海蝕のため東側から北側にかけて二〇米乃至五〇米の石英玢岩の岩壁が連なり所々に巨大な海蝕洞がある。岩脚は直ちに深海に臨みこの側の磯傳ひは地形的に殆んど不可能といつていゝが小舟の補助を伴へば部分的には熟練せるパーテーによつては興味ある岩面のトラバースが試み得ると思ふ。南側及び西側は石英玢岩の巨塊が重疊せる荒磯をなし、その巨岩を上下する磯傳ひは比較的容易でかつ興味が多い。南西部には中生紀の粘板岩の岩壁があつて二〇米乃至五〇米に達するが石英玢岩の岩壁に比して著しく魅力に於いて劣るものがある。

要するにこの島は高度に於いては問題にならないけれども全島に岩壁が多く岩場として優れた特色を有すると云へる。

しかし本島は交通甚だ不便で一般的な定期船がなくしかも最も近い距離であると云はるゝ福岡縣宗像郡大岳より猶海路二八浬と稱せられ發動汽船で四乃至六時間を要する。又同島は官幣大社宗像神社の三社(邊津宮、中津宮、沖津宮)の内沖津宮の鎭座まします處で全島その境内に屬し婦人の上陸を許されず、又男子の上陸にあたつても必らず一定の處で海水に浸つて禊することを要し、又島内で兩便のみならず唾することさへ許されないが(兩便は磯邊に於いて行ふことになつて居る)いづれも嚴重に守られて居る。

島には神社の外に一の岳の頂上に燈臺があるが、神

職及び燈臺看守の數人が交替勤務する他定往の人がない。しかし秋から冬をはさんで春にかけては大島の漁業家が多數の漁夫を率ひて滯在し近海の漁業に從事するのでその期間は島も可成りにぎやかである。

斯様な狀態であるから島に滯在せんとする渡航者は食料寢具等一切の準備が必要であることは云ふ迄もない。又島内の物は一枚の葉、一粒の砂と雖も絶對外に持ち去ることを禁ぜられて居り、若し强ゐて犯すものがあれば何等かの型式によつて神罰があるものと信ぜられて居る。

因みに同島への便船は大島から月三回の燈臺御用船の渡航がある。他は特志參拜者の船によるか又は特に船を雇ふか或は又その方面に出漁の漁船に頼んで特に同島につけてもらはねばならぬ等いづれにしても不便な島である。

猶沖の島に就いては「山と溪谷」第十九號に筆者の「岩場としての宗像沖の島」なる記事があり、又「島」第一卷第三號には「宗像沖の島雜記」の記事がある。參照されんことを望む。　（一九三三年、九月稿）

脊振山懐古

今泉龍三

1. 夢のブロック「せふり」

郷土の詩人長塚節は「せふり」を斯う歌つてゐる。

不知火の國の境にうるはしき
せふりの山は暖かに見ゆ

誠に美しき一幅の名畫ではないか。觀山描くところの繪のやうに大刷毛でスッとなぐつて中央程よき所に稍濃ゆき細線のピラミッドを附すれば我等の脊振はニッポリと浮彫の如くに鮮やかである。

肥筑の二州に跨る峻峯、標高僅かに一、〇五五米に過ぎないが正しく北九州山脈中の最高峯だ。頑丈な大花崗岩の山肌、眞白い石英の筋肉、鬱々たる森林、日夜流れて盡きるを知らぬ無限の水量、そして此間を奔騰する溪流、青玉を懸崖に跳らす瀑布、祕密に戰く谷の隱者の山椒魚、河鹿は金盤を叩いて夏日の山中に鳴き渡り、老鶯は梢を渡つて美聲を張揚げる。穴熊の出沒、笹蟹の横行、そして炭燒く竈に紫煙ゆるやかに立昇れば山雨は白霧に和して一行の詩を添へる。松籟の聲、石槌の音、大自然の音樂は、繪は俗塵に汚れた都人の心を一瞬に洗ふに足る。

加ふるに一樹一石歴史ならざるなく、夏草の下、つはものどもの夢は徒らに空しかつたであらう。全山の殘礎、堂塔伽藍の廢墟は往昔の殷盛なりし山岳宗の面影を偲ばしむる。「脊振千坊、岳萬坊。」その名は今に至る迄里人の口に喧しい。

夢を現實に引戻して試みに脊振の頂に立て。そこは東西南北、唯絶景の外の何物でもない。

東西は群峯の連なる起伏、紫紺に群青に、山は曲線の陽炎に崩えて、谷々の神秘を深く藏して空しきが如く、大古のまゝの靜と寂だ。

北は急峻な斷層の傾動、雄々しい自然の巨鑿を受けて斜角が鋭い。遠く近く大玄海の豹の如き日夜の咆哮を聞きつゝ、逆卷く黑潮の端に滿蒙の朔風を受けて居る。然し海岸線の美は全く素晴しい。長汀曲浦、白砂

青松、美しい乙女の裾模様にも似て國立公園の資格は十二分だ。南はなだらかな傾面である。野燒きの煙のどかに流れ行く彼方、俯すれば綠草の床、柔軟なビロードのスロープ、そしてドーム型のキノコの樣な小丘が可愛く點在する。かくて肥前平原の遠い稻田の擴がりの果が、あの甘美な詩と歌とに名高き不知火の海となる。

延々一千餘里、大コンロンの峯が一度沈んで又東に浮んだものこそ蓬萊島の玄關口、我せふりの山なのである。千古の昔から雨や風や、霜雪の强い試練を受けて、赫土を洗ひ、岩穗を磨き、爲めに山骨稜々として仙人の如く鋭く、其頂は蒼穹高く白雲を戴せて、聰明叡智な聖者の樣に氣高い。

私は脊振の土に生れ、その湧き出づる泉を呑み、其傳說と信仰との中に多感な少年の日を過して來た。脊振の土は從つて私の肉であり、脊振の水は從つて私の血となつた。その傳說はその信仰は其まゝ無上命令的絕對性を私の上に持つてゐた。

腕白の一日、林間に木の實を拾ひ、溪谷に岩魚を釣つて遊び疲れた自然の子は、所定めず肘を枕にし、泉の音を聞いて深き眠りに陷れば、夢は美しく擴がつて山の神秘に熔け込んで行く。實にや「脊振」は私に取つて夢の一大ブロックであつたのだ。

だが然し、自然の中に生命の原始を享受した人間こそは皆誰でもが等しく土の子であらねばならぬ。土の堆積、土の塊團、あゝ山岳こそはさながらに全人類の母の懷なのである。

登山は萬人萬樣の目的を以て試みられる。山は登山者の理想の塔である。そして銘々が山頂に立つた時、彼等は等しく自らの目的の頂點に立つ。

人間の凡ゆる者が一度は山に登るであらう。そして地位と名譽と階級と人間的な一切の形式區別が山の前には一切平等である。宗敎家も政治家も學者も藝術家も山に登つて彼等の求むる眞理を發見する。智も情も意も唯默々たる登山の裡に陶冶せられる。山は偉大なる無言の敎育者だ。今や夏を前にして山々の誘惑は甚しい。されば私は拙きペンを走らせてわが心の故里、母の乳房にも似た懷しの山「せふり」を語らうと思ふ。

2. 問題の山「せふり」

せふりは問題の多い山であつた。過去に於て然りであつた如くに現在に於ても又多くの殘されたる命題が存する。そして此等の問題を一々檢討し行く裡に更に第二、第三の問題に遭遇して遂には多岐亡羊、始め目標とした問題は遂に分らない程の遠い所に來て仕舞ふ。空間的に見て一個の簡單なる山塊が時間的には大きな謎の山、問題の山である。然かも過去數度の兵火に因つて關係文書は缺失、散逸し、加ふるに鄉土史家の雜駁單純な想像と論及は徒らに潤色に忠實に過ぎて結論を得るに性急なる爲め少なからず吾々素人をして判斷に迷はしむるものがある。又山岳に因緣淺からぬ社寺や宗敎の研究は殊に吾々に興味を齎らすものではあるが、其本體を究めんとすれば厄介な神佛混淆、兩部合體の疑裝網中に空漠糢糊として陰蔽されて仕舞ふ。從つて此點こそ面白いと云へば又いへるものでもある。

脊振へ志す者は福岡では今川橋から脇山迄、長崎線ならば神埼驛から坂本迄夫々一時間足らずの自動車の便を借る。こゝから頂上へは各々四時間足らずで行ける。一千米以上の高山の頂へ四時間程で行ける海岸都市は中部地方には恐らく見られないであらう。概して九州の山々の特徴は其高さに非ずして、其擴がりである。又すぐ海岸近くに千餘米の峻峯の存在することである。

脊振へは今迄に無數の人が登り又將來も登りつゞけるであらう。然しながら果してその中の何人がその價値を認識し、其神聖性を體得し得ることだらう。山は徒らに高きを以て貴しとしない、登山數の多少が山岳人の自慢であつてはならない。嘗て九州の代表的山々の麓を素通りして、以て直ちに九州山岳の價値を云云した人があるが、彼は今や「概念的登山を終つて本當の登山の黎明期を迎へつゝある」九州の登山家達の傾向を知らぬものだと謂はねばならぬ。山に對する敬虔なる態度、理解ある愛護、眞熾なる研究こそ彼が登山家としての偉大を物語るものであらねばならぬ。

最近九州山岳界の第一人者竹内亮氏は當地九州日報

社主催の講演會に於て、斯く敎へられた。「(前略)九州の山岳團體が更に一層の活動により、一般的に資料や文獻を完成し、こゝに始めて一般的な登山案内が出來上つて將來はどう云ふ方向にどんな傾向をたどつて進むべきか、といふことになるのであつて、も少し研究的な態度で進み、研究的文獻を澤山著はし、其特色を出すといふことが必要であらうと思ふ。卽ち變化に富む地形、錯雜を極めた地質、他の山岳地帶に比類を見ぬ雄大な高原美、それから山岳と神社の歷史或は傳說、山の部落の神代ながらの傳說の民、現代忘れられた言語、風俗、これ等を探ることも登山家にとつて大きな意味を持つもので將來それ等の方面に活動したならば九州の登山界の特色が立派に出來上るのではないかと考へられる。殊に九州の山として大きな意味を持つものは山の住民の言語や生活樣式に注意を拂ふことでこの點は民俗學の權威者柳田國男氏も力說せられてゐるところで、登山の快適と同時に民俗學の上にも大きな收獲を齎らす一舉兩得の登山法ではあるまいか。」

(同紙記載のまゝ)

私は先覺者の此激勵の言葉に依つて斷然勇躍此貧弱な研究を發表することの無意義でないことを確信した。從つて今回は特に右の樣な方面からわが脊振の問題を見て見ようと試みた。

勿論、此等の問題は從來も屢ゝ鄕土史家達に依つて發表されたものである。然しながら謎は依然謎となつてゐる。私は今に未解決の問題として取殘されてゐる諸種の脊振の問題の裡、特に興味あり、重大性を持つ五つの問題を討究して見ようと思ふ。

3. 山　名　考

先づ脊振の問題の第一は其山名の起源に關する定說のないことである。そして脊振の異名、別名の多いことも又兩手に數へる程である。殊に甚しきは吾等が地圖上に所謂脊振と記された一、〇五五米の高峯さへ「せふり」其物ではなくて、せふりの本家は他にあるといふ珍說である。而かも考證を續けて行く裡にどうやら其奇說にも不尠根據のあることが肯かれる。看板に僞なかるべき筈なるに其肝腎の山名からが斯程に疑問符

をばら撒くに至つては「せふり」の問題は確かに解決困難なるものが前途に横はつてゐるであらうことを想像される。私は記述の順序として先づ諸種の說から紹介しやう。

さふり（茶降り）　建久二年七月、禪僧榮西卽ち千光國師が入唐修業の後、宋國江南から茶種を齎らしこの脊振山に植付け、里人にも製茶の法を敎へるに至つて漸次國內に喫茶の慣習が流行するに至つたといふ。其時植ゑた茶を岩上茶と稱し一時頗る有名であつたが、其時植ゑた茶の木は何度切つても後から〳〵と續々生え出したので、時人呼んで「茶の木が天から降つて來るのだ」となし、遂に茶降りと呼び此地方を茶降山と呼んだのが後に訛つて「せふり」山となつたのであるといふ說で、大體一般に行はれてゐるので最初に揭げた。植茶の故事に就ては後に詳しく紹介しよう。

ソウル　金澤庄次郎博士の珍說である。博士は先づ天孫降臨の有つたと云はるゝ日向の高千穗の添の峯とはソウルの峯のことである。ソウルとは朝鮮語の京城といふ意味で、新羅の古都徐伐も又このソウルと呼んだ。そして高千穗の峯とは例へば宮崎縣臼杵の高千穗とか諸縣の高千穗とか一定して居ない如く一定場所ではない、何れも其元祖は此脊振のことである。せふりはソウルの訛轉で、ソウルが轉じて或はサワラ（筆者註—早良卽ち武內宿禰の子平群木菟の裔を佐和良といふと國史辭典にもあるし、現在脊振山の北麓、福岡市西郊の一帶地域を早良郡と呼ぶ）となり、或はソハラ（麁原—卽ち福岡市城南線地方の地名）となり、或は此のセフリとなつたといふのである。吾等の祖先が朝鮮半島を通つて大陸から來往したといふ說は可成り有力に行はれてゐる際、その朝鮮に最も近くして適當の着船場を其麓到る處に有して居る點に於て、この「せふり」を天孫降臨と結び付けて考へて見ることは、其科學的價値の程度如何などと敢て開き直らなくても、其まゝ受入れて味つて見た丈けで旣に愉快なことではないか。

脊振り　玉林苑（羣書類從卷第五五九）に「夫海西に名隅あり、脊振山是なり（筆者註—原文は脊堀山となつてゐる）飛龍脊を振りしかば龍樹權現跡を下。」とある。

此玉林苑は頗る原始的な書き方をしてゐるけれども、後世脊振を論ずる者、多くは此書を種本として論じて居る。此書の百パーセントの信仰者なる貝原益軒は筑前續風土記中に「又里人の云傳ふるは、古、辨財天百濟より爰に來り給ふ時、乘り給ひし馬の脊振りたる故に脊振山と名付けたりと」珍らしく他說を紹介して居る。然し此里人の言なるものは後に記するであらう如くに脊振辨財天說の有力な證據となるものである。又、玉林苑脊振山靈驗記といふ一書に「肥前國有靈崛、號國鎭嶽、絕頂有靈穴、二龍出現脊振時山動地震、故號脊振山」(東肥前の山々)とある。又更に脊振說を記したものに古跡記がある。「脊振山極樂東門寺、乙天護法善神者、天竺主德善大王十五番王子也、神通自在之人也、乘龍馬翔虛空、去東方飛、著于此國鬼門、當山給時彼龍馬脊振向空鳴三度依之山名稱脊振」とある。(大日本地名辭書上)何れの說も龍か馬かが脊を振つたのが脊振りといふ山名の起源となつてゐるのである。

せんふり　これも珍說の一つだが相當信者が多いので紹介しやう。昔秦の徐福が始皇帝の命を受け、不老長生の仙藥を蓬萊の國なる我が日本へ求めたことは餘りに有名な話である。この邊りの傳說に依れば徐福は有明海の**からみ**に難破上陸し、來航の理由を里人に物語つた所、里人は大いに同情し北方の山脈を指して其靈藥のある由を告げた。彼が澤山の家來と共に行列堂々辿り着いた所は脊振山塊の南方に派生する金立山であつた。彼は此處では「自分は支那某國の王子であるが、繼母たる皇后の苛責に耐へ兼ねて我國に逃げて來た者であるから再び歸國の意志なき」事を告げ終に此山に余生を終つたといふのである。此時里人の敎へた靈藥とそあの胃腸藥として頗る辛い「せんふり草」であつたといふのである。又或一說には不老蕗といつて蕗を敎へてやつたなどといふ傳說も殘つて居る。兎に角、此前者のせんふりが訛つてせふりになつたのだといふ筋である。少々苦しい洒落の樣でもあるがせんふりの話だから我慢して貰はねばならぬ。私は此金立山の近くに生れた。そして幼時から徐福の話は一つの事實談として聞かされて來た。今でも此金立神社の一年一度の祭禮には必ず徐福が支那から齎らしたと傳へらるゝ

珍らしい支那式刀槍などの行列があり、**からみ**の漁民が故實に依つて常に此武器を奉持する役目を果すことになつて居る。

乙宮山　前にも記した通り、現今、地圖上で呼ぶ脊振山、即ち一、〇五五・二の地點は脊振山でなくて本當の脊振山は此五三五米の乙宮さんであるといふ說である。殊に乙宮山麓の東脊振村民などは今も堅くさう信じてゐるし、又榮西禪師の植茶の跡や、乙天護法善神即ち「乙宮さん」を奉祀した所も何れも皆此地點になつてゐる。此處は坂本部落から七曲峠へ小川內縣道を登ること約四キロ、左方の山である。

然らば一體脊振山の本家は何處であらう。今更らの「脊振やーい」も聊か迂遠の嫌はあるが此れは脊振研究上の一つの癌で頗るの重要問題なのである。古文書の脊振は大抵此の乙宮山を指してゐるし吾人の呼ぶ脊振は現在は兎も角つい十年程前迄は次に記する樣に大抵は別の名で呼ばれてゐた。

然らば高峯脊振は脊振ではなかつたのであるか。此珍問を解決する爲には勢ひどうしても、次項に記せんとする脊振の境界問題に迄論及しなければ判明しない。けれども爰に豫め斷言の出來ることは、高峯せふりも又乙宮も嘗ては共に脊振山塊の一部だと考へられて居たことで、從つて、此際兩方に花を持たせるのではないが、現今の脊振山塊を總稱して「せふり」と呼んでゐたと見るのが大體最も適切中正な觀方であると考へられるのである。

此點に就て吉田東伍氏は其著大日本地名辭典に於て賢明にも斯う說明してゐる。「脊振山の南麓は今、脊振、東脊振の二村となる。山峯は肥前國に跨り、山中に神祀あり。僧坊靈仙寺と稱し、其別當なりき。今山中の部落久保山、服卷山、廣瀧山、火隈山等を合同して脊振と曰ふ。大曲、松隈、石動、三津山を合同して東脊振と曰ふ」(同書一五五頁)と現狀のまゝを說明してゐる。從つて私の判斷では此現在の右二村を合稱して昔は「脊振」と呼んで居つたものである。從つてそれは主峯、脊振の周圍の全山を網羅して脊振山と呼んで居たことになるのである。現在の樣には明治二十一年、町村制施行の時に定められた。然し其時も、乙宮山を脊振山

の本家だと確信してゐる現在の東脊振村の人々が「東」の一字を冠せられることを極端に反對し、唯單に「脊振村」とか、或は「脊振本村」とか呼ばれんことを熱望したであらうことは敢て古老の言に依らずとも吾人の想像に難くない所である。今も東脊振村地方を訪るゝ者は、里人が此村名に就て不思議な程神經過敏であるのに一驚を喫するであらう。

脊振山の別名　主峯「せふり」のことを金龍山（傳道緣起）、白宇津山（書寫山御廟講私記）、書寫山、立拜山、國見嶽（玉林苑、筑前續風土記）、御嶽、雄嶽、上宮ヶ嶽（頂上な脊振神社上宮と呼ぶ）辨才天山（里稱ベンジャーサン）などと呼ぶ。一體此地方の人は山名を呼ぶのにさんを附ける、例へば乙宮さん、ベンジャーサンなど其一例であるが、此さんは里人の心理を解剖する時、「山」といふ意識よりも敬稱の樣の方に近い氣持が餘計に働いて居ることを附言して置きたい。だから山といふ言葉を附したい時には乙宮さん山、ベンジャーサン山といふ風に呼ぶ。此れは山岳の尊敬から來てゐること勿論である。

次に此別名の由來を一々考證することは興味あることではあるが茲には省略しよう。

唯一つ金龍山に就て私の疑問點を披瀝して置かう。金龍山といふ山名は玉林苑にも「其頂に龍池あり、水底の石の面は金の銘を表はせり」とある位だから、これから來たものであるか、それとも此地方の路傍には觀音堂多く、殊に大曲部落附近の四辻の觀音像の如きには明かに「金龍山淺草寺の觀音云々」の文字を刻んである位であるから、往昔あの名高い淺草の觀音さんを此山に勸請以來、斯く呼んだのであるかとも思はれる。

又、白宇津山の名稱に就ても多少思ひ當る點がないでもないが姑らく發表を差控へよう。兎に角、吾々歷史に全然の素人が斯樣に山岳の名稱のみならず、諸種の事物の名稱に就て考へを廻らし、古い文獻を漁つて見ることは其事が既に一種の興味を喚起するものである。

4. 境界繫爭

脊振の問題は境界繫爭問題に至つて其極頂に達す

る。脊振山塊の全面、殊に一、〇五五米の地點は古來、北方筑前黑田藩と南方肥前鍋島藩との間に猛烈な境界爭ひのあつたので頗る有名である。之れに就ては兩藩とも巧妙な苦肉の策を講じて各其自領たることを繰返し主張したらしく、近時發見せられた二三の重要文書によれば其發端から元祿八年の幕府の判決迄凡そ十二年間の兩藩の策謀が大小漏さず判明する。此事に就て佐賀市の日刊「佐賀新聞」は去る六月十六日より現在迄既に廿余回に亘つて此事件を連載中であるが資料頗る新しく吾人の參考となる點が甚だ多いので爰に同紙冒頭の文句だけでも紹介して此事件の一斑を知つて戴かう。曰く、「戰國の世でも尺地寸土を爭ふに大兵を動かして劍戟の間幾多の犧牲を拂つたものだ。況して太平の御代、口舌を以て國境を爭ふ容易の事ではない。肥筑の境脊振辨財嶽爭論の如き、同所が單に領域を廣めむとする經濟上の問題のみならず、群雄割據の際に於ける國防上の見地から一國の安危にも關する重大事とて鍋島、黑田兩藩共に死力を盡さんとするも無理からぬ。鍋島藩が脊振の頂上を完全に我物とする爲には貞享元年の頃より元祿八年三月幕府の裁決を得る迄十有二年の長日月を閲して居る。肥前側鍋島藩では大木佐助朝貫、枝吉三郎左衞門順之、重松善左衞門貴常、石田與右衞門惟之、石井甚右衞門など歴々の士が樞機に參與して專ら其衝に當り、公事必勝の計を廻らした。殊に石田惟之は五左衞門と變名して百姓姿となり、久保山の民家に起伏して自ら鋤鍬を握り、腕拳を固めつゝ脊振論爭に獻心的努力を拂ひ、肥前の方の勝訴の如き一に惟之の功に依るものと言はれてゐるが、この五左衞門こそ佐賀藩葉隱の鼻祖石田一鼎先生の實弟であつたのである。一方黑田藩でも、脊振の頂上を筑前領とする爲め、一廉の武士を肥前と同じく百姓に仕立てゝ、爭論の事を掌らしむるなど兩藩の苦心は並々ならぬものであつた。本爭論が一度肥前方の勝訴に歸するや、佐賀藩よりは脊振の頂上に萬代搖ぎなき辨才天の石寶殿を建立し、爭論にあづかつた枝吉、石田以下の人々は總て加增の恩典に浴したが、之に反し筑前では曲事を申立て恐れ多くも天下の裁判を煩はしたといふ廉で黑田藩の家老三人は責を負ふて腹を切つた。事程

左様に本公事は當時兩藩の耳目を聳動せしめたものである」と。以て其概勢を窺ふことが出來ると思ふ。

境界爭論に就て數々のエピソードが今に里人の爐邊を賑はしてゐる。其中の一つに、肥前領民が將來の境界繫爭を豫期して某夜、秘かに木炭を筑前領の某地點に一線に埋めて置き、後年、幕府役人が實地檢證に下向した際、何喰はぬ顏で「我等祖先よりの申傳へには、兩藩の境界には一線に木炭を埋めてあるとのことである」旨を言上した。黑田領民は左様なことはない筈だがと半信半疑、兎に角、其地點を掘つて見た所、案の如く木炭が埋めてあつたので遂に幕府役人の採用する處となり、此地點を兩藩の境界線と定められたといふのである。又、歷代の鍋島藩侯は其元服に當つては必ず當脊振山に登り、山頂北側の某巖上から北方黑田藩目掛けてジャア〳〵小便を飛ばす習慣になつて居たなどといふ。蓋しこれなどは挿話中の異色であらう。

然らば此脊振山なるものは果して古くから肥前の國に屬してゐたものであらうか如何。古文書の殆んど大部分は遺憾ながらその反對のことを記してゐる。

既に三代實祿には「淸和天皇貞觀十二年五月廿九日庚辰、詔して筑前國正六位上背布利神に從五位下を授け奉らる」とあり、元享釋書には性空上人の傳記中に「居四歲移住筑前州脊振山」（大日本佛敎全書、寺誌叢書二六八頁）と何れも筑前國と記してゐる。

榮西禪師が茶種を齎らし植ゑたといふ脊振山の記事を繙くにこれ又筑前說が多數である。廣文庫「茶」の部を一見するに、草木六部耕種法に「後鳥羽院文治三年四月、京都建仁寺第二世千光國師榮西なる者、南宋國に往きて建久二年四月歸朝せし時に江南浮梁の地より茶の種を持來り、此を筑前國脊振山に植ゑて茶を製せり」と。同じく松屋筆記には「鹽尻十二上卷に鹿苑院義滿公はじめて宇治の里にうゑさせられし事、七品の事、栂尾の事など見ゆ。肥前平戸、うれし野、山城栂尾、尾張の內津、駿河の安部、肥前の相良（サガラ）うれし野同所にやなど聞こゆ」とある。この相良は勿論佐賀縣內の某地名だとも想像されるが茶の名所で同縣內に「さがら」と呼ぶ所は一寸思ひ當らぬ。然も脊振の北麓、卽ち筑前側の早良を「さがら」とも讀むので或はこの脊振を指

して「肥前さがら」と指稱したのかも分らぬ。別に、私が斯樣に考へた理由は、うれし野よりも宇治よりも一層古くて一層有名であつた筈の脊振のことが一言もこの中に書いてないからである。して見れば此の文の「肥前の相良」は「筑前の早良」のことではないかと思ふのである。斯くするとき、此文献こそ、古書のなかでわが脊振の肥前說を書いた唯一のものなのである。更に、卷懷食鏡にも「啓益按、日本稱茶舊順倭名抄載茗、朝野群載載藤原敦光茶讚、然上古自中華來茶葉乎、日本植茶種未知其初、或說榮西入宋歸朝日、採來茶種、先植筑前國脊振山、名岩上茶」とこれも又筑前說である。

轉じて戰誌物で脊振中心に誌したのを一見するに之又筑前說が多い、讀史餘論は「應安五年三月、菊池、今川と筑前世振山に戰ふ」と記し、大內氏實祿には「永和元年春、菊地、松浦、千葉等の諸族兵を擧ぐ、今川貞世筑前世振山に陣し三月三日これと戰ふ」とある。更に同じことを肥後國事跡通考には「天授元年乙卯(北朝永和元年)春、菊池松浦至筑前國、今川貞世大內義弘聞之、來陣背振山、三月三日戰于山下、菊池不利退」(櫻雲記、編年要略)(大日本地名辭書)と記してゐるなど枚擧に遑がない。

幕府の判決は遂に脊振山をして肥前領たらしめたけれども古文書の多くが斯く筑前說を取つて居る所を見れば萬更ら筑前脊振說は根據のないことだとはいはれない。然らば筑前側では肥筑の境界線を何處だと主張したであらうか。これに就て筑前の碩學、貝原益軒の物した筑前續風土記は明らかに次の如く主張して居る。

「(前略)筑前肥前の境は右に記す如く脊振の西の酒盛山を下り、唐船山を限り、二重平の下を過ぎて、谷川筋を以て境とす。三渡、花木原、稻岩など云ふ所堺に在て、皆當國早良郡板谷村に屬す。長政公當國を賜り領し給ひし時も、當國の境とする所右の如し。此故に長政公は時々脊振山を越えて南の麓に狩し給ふ。又此處より村民炭を燒きて年々長政公に献ず。然るに近年、肥前國神埼郡久保山の村民、多年當國板谷の村民と二重平の地を爭ひ、脊振の嶺を兩國の境なりと云ふ。山上の神社も肥前國に屬すと云へり。兩國の民久敷爭ひ

て決せず、兩國主の裁斷に及び難ければ、元祿六年村民各江府に往て柳營の官人に之を訴ふ。江府の宰臣訟を聞聽、官庫に納る所の兩國の繪圖を以て裁し給ふ。是より先、正保年中、台命に依つて諸州の繪圖を各獻じて江府の官庫に納む。其時當國より獻ぜられし繪圖に名所古跡の名號を略して記さず、只篭門山、筥崎等の數箇所のみ其名を載せて其他は多く是をもらせり。且山を畫く事、只前面を圖して後面を模さず。或は他國を書そへ、或は自國を遺失す。是唯道路の遠近、海川の淺深のみを詳にして、其他は略せし故也。殊に脊振の神社は名高き神なれども小祠なれば是を編して其名を記さゞるなるべし」。筑前側が背振山頂の辨財天祠を「小祠なれば」と輕視したのが後の敗北の主因を爲して居る。誠に神罰恐るべしと少々擔ぎたくなる。之に反して肥前側から獻上した地圖は頗る入念詳細を極め、名所、古跡は勿論、問題の脊振主峯もちやんと肥前領として記入してあつた。これは乙宮山といふ中宮が肥前側にある爲め、上宮脊振は他領にあつたけれども書き添へたのが怪我の功名を齎らしたのかも知れない。此に於て江戸の役人の心證を動かし事件は肥前側に有利に解決されたのである。此時の判決錄の寫しは現在佐賀市の內庫所にもあるが、又脊振神社下宮宮司春野氏の下にも保管してある。七人の堂々たる幕府役人の連名になつてゐる。此筑前續風土記は幸にも脊振論爭の最も熾烈を極めた元祿八年に出來上つてゐる。だから大體筋は生きて居ると思ふ。扨てそこで、筑前側では元祿十三年に更に立派な詳細な地圖を再製して幕府に獻納した。此時こそ定めし脊振山から最初に書き出されたことであらう。だが「村民上を憚りて、いまだ再訴に及ばず」殘念なことだとさすが溫厚な君子人益軒先生を憤慨せしめて居る。

斯くて境界爭論は肥前側の勝利に歸したけれども、鄉土史家達は今も尙確定的な斷案を下し兼ねて居る。扨て私は此珍爭論を別の方面から面白く見てゐる。一體封建時代の藩境の民の心理といふものは頗る敵愾心に燃えて居たもので、これは一つは當時の藩主や藩の高等政策的な煽動や訓諭が與つて力あつたものに違ひない。斯かる心理の下にあつて境民は自然、民衆警察

の實を擧げ、又屯田兵的役目を果したものだと思はれる。鍋島藩の如きは脊振山内の土民間に大いに武術を奬勵した。その流派は大抵揚心流であつた。揚心流は劍、槍、鎖鎌、早繩、柔術、棒術など行くとして可ならざるなき頗る便利な武藝であつたらしい。そして此等無祿の監視者達に對する會釋の爲め、藩侯は必ず年に一度づつ此土民の總大將の許へ赴かれたといふことが傳へられて居る。明治の末期頃迄武藝の達人が隨分あちこちの村々に生存して居たらしく、數々の武勇傳も傳つてゐる。三十年程前のこと、肥筑境民の間に猛烈な水喧嘩があつた際などは、某翁の如きは小軀よく竹槍で押寄せた筑前側の農民を相手に活躍し、蜘蛛の子を散らすが如くに投げ飛ばしたなどゝいふ話も殘つてゐる。だが肥前側の話は何時も肥前側が投げ飛ばしたことになつてゐて投げ飛ばされた話のないのも無邪氣で面白いではないか。

5. 脊振神社の祭神に就て

俗に「脊振千坊、岳萬坊」といふ言葉が殘つてゐるが、これは往昔の脊振の佛敎の旺盛を物語るもので全山數千の僧侶が修業精進したことが想像される。然し其繁榮も永久には續かなかつた。度々の兵亂は一朝にして丹靑の美を誇つた金色の殿堂を灰燼に歸せしめ、加ふるに神佛混淆や排佛毀釋やの思想運動が惡い方に禍して漸次斯敎の衰運を招來した。今や槿花一朝の夢の趾は堂塔伽藍の廢墟の陰に僅かに其面影を語つてゐる。而も現今殘つてゐるものは僅かに山頂の脊振辨財天石祠、久保山の白蛇宮、坂本の修學院、靈仙寺跡の乙天護法堂位のものである。私は以下順を追ふて、往時を懷古したいと思ふ。

山頂の脊振辨財天は所謂脊振神社の上宮で石祠、玉垣、鳥居、燈籠など何れも鍋島家の寄進になり、今は廢れて見る影もないが往時の結構は稍ゝ想像に難くない。鳥居には「大辨財天」の文字があり、石祠の欄間には「日本六所辨財天脊振神社上宮」の文字が篆書で彫られてゐる。而して祭神を問へば宗像三女神であると傳へられて居る。其創建に就ては四說がある。

(イ) 景行天皇の九州御巡狩の際

(ロ) 玉林苑の「建立の昔をかぞふれば、神功皇后の當、新羅を攻給ひしに祈請の爲に草創」

(ハ) 筑前續風土記の「山下の御社は神宮皇后三韓を攻給ひし時祈願の爲に是を立て給ふと言ふ。神功皇后此國に七社を創立し給ふ。脊振の社も其隨一也」

(ニ) 奈良朝時代、元明天皇の和銅年間、湛譽上人の草創

この中で最後の說が一般に有力である。湛譽上人は筑前雷山の麓なる別所の人と傳へられて居る。

斯うして奉祀せられたといふ宗像三女神は如何なる神であらうか。宗像神社の緣起によれば三女神は天照大神の生ませ給へる多岐津比賣命、市寸島比賣命、多紀理比賣命の御三方で、大御神の神勅のまゝに、海北の道中卽ち朝鮮と北九州の東北部を結ぶ海路にゐまして、道主貴と稱し、筑紫を治め天孫を助け奉られ、夫々邊津宮、中津宮、沖津宮の三社に奉祀され給ふ。そして此神々は畏くも、神功皇后の新羅を征服し給ひし時に、靈驗特に著しいものがあつたので爾來國家に事ある時には必ず幣使を奉られたものである。

故に脊振の頂に此神々を奉祀せられたのが神功皇后時代であるとする前記(ロ)及び(ハ)の說も先づ根據なきことではない。

さて次に同じ石祠の中に辨財天は如何なる關係で祀つたのであらう。歷史に素人の私としては兩者の間に何か混淆すべき共通點でもあつての事かと一通り其由來を考へて見た。

辨財天に就て佛敎大辭典を繙けば「印度サラワッチ川の神格化されたもので妙音、能辯は此川の流れの音樂であつた。此思想が今以て琵琶に表徵されてゐる。後に吉祥天と同一視し施福神と考へた爲め辨財天といふ字を當てるに至つた」意味の事を記してある。けれどもこれのみでは宗像三女神に關係あり相にも思へない。唯、無理に共通點を考ふれば、女神であること、水の神、海路安全の神なること、又三女神の中、市杵島比賣命は安藝の宮島の嚴島神社の元祖であられる(同社緣起)ことなどから、宮島にも辨財天を祀るのは三女神中の市杵島比賣命と混淆した結果であるのでは

ないかなどと類推して行けば脊振辨財天も市杵島比賣と同じものではないだらうかといふ弱い結論には到達する。

然しながら此に全然別の方面から一つの問題が起つて來る。それは脊振神社下宮卽ち白蛇宮の春野宮司の許にある頂上の六所辨財天奉祀の由來書なるものを讀むに「國土安全、五穀豐穰祈願の爲め次の六ヶ所に辨財天を奉祀する」旨を記して

天川（紀州）　嚴島（藝州）　竹生島（江州）
江島（相州）　箕面（攝州）　脊振山（肥州）

とある。その年月は頂上石祠の文字から元祿十年以前である。これに依れば神佛混淆ではなくて、同所に奉祀したものが後世祠を同ふし、祭祀の形式迄が合體されたものであると考ふべきではないだらうか。他日の研究問題として殘して置く。

6. 乙宮山の祭神に就て

乙宮さんの祭神に就ては山名考の部や境界爭論の部にも少記したが之に就て次の記錄がある。「乙護法者、有人云、脊振山守護神歟。亦足不動待者形也。今私云。性空上人、書寫山籠居時應六根淸淨德、乙護法、若護法來給仕。是不動明王二童子也。同異尋之」（傳通記糅鈔十三）卽ち乙天護法の尊像を馬脊に乘せて當山に持來つた事は如何なる理由に因るものであらうか。本文にも書いてある如く此乙護法、若護法なる者は嘗て性空上人修業の際も左右に侍つて給仕した護法神で、而かも不動明王の二侍童であるとされて居る。その點を考ふるに不動明王は修驗道の守り本尊で、大日如來の化身であり、これに侍するのが毘伽羅、勢多伽の二童子であるとされてゐるから乙宮山の本尊は此二童子の混淆せられたものであると考へられる。

更らに此二童子の本地佛を尋ぬるに脊振山緣起に云ふ「南天竺に大王有り、名を德善大王と曰ふ、此王十五人の王子を生ぜり。第十五王子生れて後七箇日を經へ行方を知れず失せ畢る。大王此の事を悲歎して龍樹菩薩に曰して言ふ。其時菩薩定に入り、天眼通を現じ三千世界を知見し給ふに此王子、粟散邊地の境、日域西海の地脊振山に現居せり。菩薩此の事の由を以て大

王に白す。爾の時、大王歡喜の思を生じ、自餘の十四人の王子達を引率して、龍樹菩薩と共に我國に影向し給ふ。今脊振權現之なり。」（溪嵐拾葉集）此の溪嵐拾葉集の價値に就て貝原益軒は「名もなき桑門の作れる所にして疎謬のみ多き書なり、信ず可らず」と評して居るけれども、それは脊振の境界爭論に就ての批評で、此乙宮山の緣起に就てではないので敢て此に引用した次第である。

次に性空上人に就て元享釋書第十一が頗る詳細に傳へて居る。「釋性空、平安城人、大中大夫橘善根之子也。母源氏、諸兄皆產難、孕空時欲食毒藥壞胎、而及誕殆不覺。出胎之時拳右手而不開、父母强啓之、有一枚針、生三日忽失所在。父母愁求、在庭花叢中安坐。從功至老面微笑姿、絕不麁言、十歲時持妙法華。年三十六出家、尋人跡不至鳥音不聞之深山、乃往日州霧島、結廬而居、或隔數日而食。（中略）居四歲移住筑前脊振山、一日誦法華。兒童數人年可十五來左右同誦、容貌奇麗音韵清雅、空在書寫一名金剛薩埵授兩部密敎、覺能記持（中略）神童二人一曰乙一曰若、侍左右凡有使令光意能辨、乙童擊同役而斃、空呵驅去、童雖悲泣悔訴遂不ㇾ許（中略）」そして最後に寛弘四年三月十三日に法華經を誦しつゝ年八十で入寂されたとある。寛弘四年は一條天皇の御代で皇紀千六百六十七年である。從つてそれから遡つて計算すれば性空上人が來山せられた頃も分るし、延ては脊振の佛敎華やかなりし時代も稍ゝ想像せられる。上人が年三十九にして脊振に登られたと謂へば村上天皇の康保三年に當るから今年から丁度九百五十七年である。即ち約一千年前後の頃が脊振の修驗道の極盛時代であつたかと思はれる。

又、傳通記に乙護法は宇賀神の第十五童子なりとある。宇賀神とは豐受大神のことで女神であり、五穀神であり、よく稻荷さんと混同せられ給ふ神である。だから前記の古跡記中の德善大王なる一個假空の佛を我朝の豐受大神の本地佛とし、共十五番目の王子を我不動明王の二童子となし、更に性空上人に顯現せしめた點兩部合體の樂屋裏が明瞭に見えるやうな氣がする。且つ乙宮山なる名稱は元より乙天護法善神を祀る處から來たものなることは勿論であるが別に脊振下宮たる

坂本村の修學院の本尊に不動明王を奉祀することなど彼此考へ合すれば此際乙宮さんの本體も明瞭になると思ふ。

7. 脊振の社寺巡禮

脊振辨財天を南へ下ること四キロ、久保山村に白蛇社がある。これ上宮の別社で或意味での下宮である。頂上が高山であり、冬季の積雪、嚴寒頗る甚しい爲めに參拜人の便宜を思つて此所に分け魂を祀つたものである。此社は明治六年佐賀の亂の余沫を受けて兵火に燒け、本殿のみ僅に殘つたが同八年再建、同十三年三月十八日官許を得て外陣に舊辨財天を安置した。現在の社殿は昭和六年の新築で舊社殿は新殿の後方に山を拓いて一段高く遷座されてゐる。脊振神社の記錄など一切此處に保存せられて居り、殊に境界爭論次第、幕府の判決錄など同所春野宮司の保存する所となつてゐる。

久保山から坂本へ約十キロ、更に修學院(後に記す)を左に見て山茶花の珍らしい天然記念物の森林を左右に見つゝ小川内縣道を登ること約四キロ、杉の丸太の粗末な二本の門柱を見出す。これが其昔の名高い靈仙寺の入口かと思へば少々情けない。これを入つて苔むす石段を登る。雜草はびこり、竹笹繁茂して所々に法塔の臺座、石佛の胴、梵字入りの印塔などを大木の根や分れ路の辻頭に見る。蜘蛛の古巣を拂ひ除け、蛇さへ出さうな茫々たる草の小路を登り〳〵てやがて大きな石垣の段々を發見する。これは相當に大きなものである。登りつめて正面小高き所に古色蒼然たる藥葺の大きな御堂を仰ぐ、右手稍低き所に番僧の庫裡がある。扨て此大きな御堂こそ今より凡そ一千一百年の昔、畏くも元明天皇の勅を奉じて名僧湛譽上人が創立したといふ九州第一の大伽藍、靈仙寺の乙天護法堂の跡である。御本尊の乙護法は高さ約三尺、裸體に褌を締めて突立たれた形相は如何にも天竺渡來の佛樣らしくて景氣がよい。そして此處こそ脊振千坊の中心地であり、脊振山の本家であり、佛敎華やかなりしころ脊振千坊に號令した法燈の王坐であつたかと思へば轉た榮枯盛衰の烈しさに驚かざるを得ない。此地の往昔の殷盛を傳へて玉林苑(續羣書類從)は斯う記してゐる。(原文のまゝ記

さう）「夫海西に名隅あり、脊振山是なり、飛龍脊を振しかば龍樹權現跡を下、德善大王、辨財天、天乙護法の靈場、誠に神委の地なるかな。建立の昔をかぞふれば、神功皇后の當、新羅を責給ひしに、新精の爲に草創、此一千餘歳霜ふりて、瓦の松老ひたり。佛法の前にさは、かゝる樣ぞ有難き。屢〻山下望めば、奇巖斜に峙て、雲洞深通り、澗戸に雲閉て、鳥だに翔らぬ山のをく、高々と聳えたる靈岳。其頂に龍池あり、水底の石の面は金の銘を顯せり。龍宮大城に通ずる、佛法所持の門とかや。役の優婆塞是を見て感を荷て行し、一乘菩薩の西の峯、是也胎金兩部の岩室、波旬の類をしへたげ、かりこめの岩室は乙天童のしわざとか、遙に石陵の岩かど廻り〳〵て幽々たるに、篠原上り上れば國見の嶽、清淨結界の靈地なれば結業煩惱の霧霞、只一時に晴ぬべし。（略）」そして此程の靈場であつた爲めか、有名な入唐僧も一度は當山に登つて修業したであらうことが次の文章で窺はれる。「さても貴かりしは、傳敎、弘法、慈覺、智證、渡唐の波を凌しも、先此勝嶺の雲を分、祈願の誠を凝さしむ」。そして此等の名僧達の難行苦行の有樣を詳細に記錄してゐる。更に開山の湛譽上人に就ては「抑〻元明の聖代、和銅二の年とかや、三味發得の上人、湛譽をめさるゝ事有りき。則詔に應じて花落の月に攀上り、帝闕の里を仰で、効驗威光を耀す。時に勅使の至し麓寺、院使寺と號せらる云云」更に後段の記錄には斯んなのがある。「源家將軍の白旗を新に奉りて、三所の御殿に納らる。末代までのしるしも、勝有難き山なれば、萬歳とよびて君をいのり奉る」と。此の白旗云云は筑前續風土記に「足利尊氏九州下向の時、白旗を捧て祈願有し事あり」とあるから尊氏の事と思はれる。又、これ等の外、皇慶阿闍利や其他の名僧が歷世修法した靈地であるとも傳へられてゐる。

又大宰管内誌には「脊振山靈仙寺修學院在坂木村、寺領二百六十二石、稱脊振山下宮、和銅年中、湛譽上人草創也。因大友兵火燒失。至鍋島直茂公時、僧仁周再興。五戒坊東福院、在東脊振村、稱脊振中宮、寺領百三十七石、多門坊東門寺在久保村、稱脊振上宮、寺領百七十餘石。皆奉天臺宗、其東門寺爲宮司」。これで

三寺の關係や、社格、祿高などが明瞭である。此東門寺の廣かつたことに就て、或は其れが火災で燒けた理由に就て、二百四十年も前に編纂された筑前續風記が詳細にかう記述して居る。「宮司を東門寺といふ、天臺宗なりしとかや。天臺宗未だ渡らざりし前は其宗詳ならず（中略）僧坊三百區ありしと云ふ。今は寺院も僧坊もなし。其遺趾猶ほ南方の下き所に在て各階級をなせり。又大日堂觀音堂、鐘樓寺の跡、其礎猶ほ殘れり。かゝる大寺の殘りなく亡びし事何故ぞと尋ぬるに、昔脊振山の僧徒と西油山天福寺の僧徒とむつまじかりしに脊振山の侍童過失有て、脊振山を逃去りて、天福寺へ行き隱れけるに、脊振山より頻りに是を請へ共出さず。脊振山の僧徒是をいかり西油山に押寄せ火をかけければ、悉く焦土となれり。其後仇を報ん爲め、天福寺の僧徒脊振山を悉く燒く。纔に寺院を再創せしかども、後又兵火に罹りて以來、終に重建する人なし。」といふのである。從つて脊振の修驗道は其頃天臺宗であつたことだけは分るが其以前の宗敎が何であつたかに就ては判明しない。諸宗の僧侶が入込んだ處を見れば他宗があつたのかも知れない。だが兎に角法華經を誦んで居たことだけは性空上人や其他の名僧の傳記で肯かれる。降て後陽成天皇の慶長年間には豪僧の仁周なるもの、非常な軍事政略家で屢〻藩主に献策する所多く、加賀守直茂公の如きは褒賞として寺領百五十石、山林七十五町を寄附し、僧坊十一、堂塔五を建築し、天下泰平國土安穩の祈願道場と定めたと傳へられてゐる。然しながら瓜熟すれば蔕落つ、一稚兒の出入から互に放火の罪條を犯し合つたことは脊振千坊の凋落は既に此間に釀されてゐたことが分るではないか。

護法堂の下段から山路を東に取り「坊中道」の石碑を讀んで北の谷間に深入すれば到る處に礎石や石垣が殘つて居る。記錄に殘る東福院、土橋坊、萬善坊、北谷坊、中谷坊、石上坊、香善坊、道場坊などの趾は何處か。邊りは荒寥落莫として人の氣配さへなく、晝なほ暗くして鬼氣哭々、薄氣味惡いこと一通りではない。此邊りは又脊振茶園の趾でもあるがその事に就ては次項に書かう。

さて限りない懷古の情を中斷して足は麓の修學院に

引返す。坂本部落の稍ゝ中央、道の右側に二本の石柱があり、日清戰役頃の建立で其頃のものとしては頗るモダンであつたであらう鐵製の街頭掛が錆に腐蝕して見るかげなき姿をさらして居る。門の左側には二十三夜尊の石碑も仰がれる。門を入つて右折し勾配の急な古い石段を昇り行けばすぐ修學院の本堂の位置に出る。回顧すれば成程往時の盛況が稍ゝ匂ふてゐる。謹んで本堂正面の障子を開けば御本尊は拜まれないが中程の處に二本の軸が左右の柱に懸つてゐる。右側の軸は直ちにそれと肯かるゝ桓武天皇の御像、左側の軸は天臺の祖師傳敎大師の像である。共に二尺程のもので右の軸は前住職が信濃の善光寺から齎らしたものだといふ。こゝの御本尊は修驗道の守本尊たる不動明王である。筑前續風記に「又其麓十五丁許りに修學院といふ寺あり、地藏堂あり、或は德善大王の社と稱す。是を下宮と稱す云云」。共地藏堂であらうか、本堂の右前に殊更らに十體ばかりの地藏尊を祀つた堂がある。又此本堂と向ひ合つた眞正面に問題の寶篋印塔がある。菊池武光の寄進になるものであるとか或は懷良親王の御作になるとか種々の話題を提出してゐる。里人の言によれば約六十餘年前、乙宮山の某所から此所へ移轉したのだと謂ふ。一度、其原位置を確かめて見る必要がある。本堂右後方の墓地の一隅に同院第廿一世大僧都順信大和尙の一萬字の「大乘妙典一字一石塔」がある。「明治十二年乙卯三月建之、大宰府康文敬書」と頗る達筆である。現在の修學院は坂本部落四十二軒で靈仙寺と共に維持せられてゐるといふが相當經營困難で定まつた住職もなく他村から兼職の僧侶に來て貰ひ、夜番として靈仙寺の番僧が夜丈け見えるといふ事である。斯る由緒ある寺院が時の推移と共に漸次衰頽に瀕して行くことは如何にしても殘念なことである。山中の社寺は山岳の靈魂である。嘗て幾多先人の信仰と尊崇の對象たりし絕對の存在が斯る姿を今の世に曝して居ることは斷腸の思に耐へない。吾々後の世の山岳人は山岳崇拜の一つの表現としても、斯の如き精神文化の遺物に對して何らか永存の方法を講じないでよいであらうか。

昔山麓の平野から此邊りを仰ぎ見れば、靑黛の甍高

く聳え、丹青の美極りなく、金色燦爛として輝き渡り、又河水は濁つて下流の住民の使用に耐へなかつたと傳へられてゐる。

8. 脊振茶園物語

脊振と茶とは少なからぬ因縁を持つてゐる。其山名が「茶降り」に起因するとの說さへ行はれてゐる程である。從つて茶を無視しては脊振の歷史の一部は成立しないことになる。

抑〻茶は南支那及アッサム地方の原產で今もアッサムには茶樹の自然の大森林があるといふことである。支那では何時頃から茶を飲み初めたであらうか。酒、茶論に「滌煩子曰、茶之爲飲發神農」(廣文庫)とある位だから餘程古くから飲まれたらしい。だが一般に民衆化したのは漢代のことで一般に飲用さるゝに至つたのは唐代以後の事だと考へられる。それは諸種の文獻に依つて斯く判斷せられる。それでは此茶が初めて我國に渡來したのは何時頃のことか。茶道要祿には「倭朝の初め弘法大師入唐歸朝の時携へ來れり、卽ち嵯峨帝に献ず」とある。此事は先づ其他の事柄から綜合して大體間違ひないやうに思はれる。然らば大師は桓武帝の延曆廿三年に入唐し、翌々年の大同元年十月廿二日、當時海外交通の要衝なりし博多津に上陸されたのであるから丁度本年より滿一千一百年昔のこととなる。自丈雜記には「茶を栂尾の明惠上人入宋して植ゑ初めた」とあるけれどもそれは間違ひで「茶は日本にも上古より有りし也」と漠然ながら事實に近いことを記してゐる。

然しながら一般の通說は我脊振をして日本に於ける一般的な植茶の風のトップを切つたものであるといふ榮譽を擔はしめてゐる。雍州府志には「凡本朝賞茶也舊矣、嵯峨天皇既玩之、中世建仁禪寺開祖千光國師榮西、入宋得茶而歸本朝、治源實朝公之餘醺。明惠上人稱茶實於栂尾」とある。嵯峨帝と弘法大師は同時代であるから茶道要祿と一點通じる所がある。嵯峨帝が茶を召上られし事、源實朝の宿醉を茶で回復した事などは共に有名な話であつて、茶史に關する文獻は大抵これを記してゐる。閑田次筆は「茶は類聚國史に見えた

れども久しく絶えけるにや高辨上人入宋して持來し、栂尾に栽え給ひしより弘まれり、されば類聚國史に見えたるは世に知る人稀也」と博學を誇り、高辨上人といふ新人物を紹介してゐる。又、三省錄後編には「傳敎大師歸朝の節、茶種を持ち來り給ふ、五十二代嵯峨天皇の御時なり云云」と傳敎大師說を持してゐる。これは弘法大師と五十步百步でどちらであつても先づ時代の考證には差支へない。脊振茶園のある坂本部落が全住民皆天臺宗を奉じてゐることなど思ひ合すれば、感情的には傳敎大師說を取りたい氣さへ起つて來る。續いて同書は「京都建仁寺の開祖千光國師、榮西入宋ありて歸朝のとき、茶の種を持ち來りて栂尾に植ゑ、それより世に廣まる（中略）兩說あれども傳敎大師のかた然らんか」と一本釘を打つてゐる。

それは兎に角、喫茶の風が此時代に行はれてゐたであらうことは延喜式（卷二十三）民部下に次の樣な歷然たる證據が載つてゐる。

尾張國瓷器（シノツキ）　大椀五口徑各九寸五分　中椀五口徑各七寸　小椀□徑各六寸　茶椀（チャモリ）廿口徑各五寸（以下略）

長門國瓷器　大椀（略）…中椀（略）…小椀（略）…茶椀花盤卅口（云云）

即ち此時代に尾長の二國から既に茶椀が製造されてゐる。既に茶椀あり茶の字ある限り、茶が存在し、喫茶の事實のあつたことは贅言の限りでないと思ふ。

扨て脊振茶園の開祖榮西が初めて茶を植ゑた位置は石上坊の境內であつたと傳へられてゐる。彼は建久二年七月、五ヶ年の留學から歸朝し、其時江南浮梁から携へた茶種を此に植ゑた。此茶は岩上茶と稱し一時は非常に有名であつた由であるが今は乙宮山麓の岩上橋に其名を偲ぶのみである。後に榮西の弟子の栂尾の明惠上人が種子を貰つて山城の宇治に移植したといふのである。されば今日名高い宇治茶の元祖は實に此脊振の岩上茶でこの所、正しく俚言其まゝに脊振茶がお株を奪はれた形である。

茶園は其後荒廢したが、明治元年、郡令吉村謙助氏製茶を奬勵し、同十四年脊光社を組織して焙爐製釜製印度紅茶の製造を開始し、爾來屢〻敎師を聘して紅茶製法を傳習し、越えて明治三十年、縣の補助で東脊振村松隈に紅茶傳習所を設けて斯業の發達を計り、歷史

ある脊振茶の名聲を復活せんとしたが成功しなかつた。昭和六年、半井佐賀知事の時又々、その援助と奬勵とに依つて茶業の振興を企圖され、以て今日に至つて居る。

現在此地方を訪るゝ者は歴史に古き製茶の方法が再び古の盛況に赴きつゝあるを知るであらうと共に、坂本から七曲峠の間に亘つて延々二里、乙宮山腹全面に鬱々と繁茂する山茶花の一大自生林を見て、それが脊振茶園と如何なる因縁を持つものなるかに疑問を懷くに違ひない。路傍の左右、彼所又此所、數百千株簇生してゐる光景は、植物學者ならずとも又少なからず珍らしく思はるる。今は此れは天然記念物として其筋から指定され、里人も滅多に手を觸れない樣に大切にしてゐる。

併し乍ら、脊振山塊一帶の地、無心の石佛、默々たる堂塔、さては赫土の間に隱見する陶磁器の破片を見るに至る時、心なき山岳人と雖もまだまだ山茶花以外に更に大きな天然記念物の指定が等閑に附されてゐる事を痛感するであらう。國破れて山河あり、脊振の山川、徒らに默として語らぬ。乍併鄕土の山岳人は殘されたる明日の「せふり」の問題を解決すべき大きな使命を意識しないでよいであらうか。今や夏を前にして我等が「せふり」は强く我等を招いてゐるやうな氣がする。

（昭和八年六月卅日）

因に本文起稿に當つては最初松尾禎作氏の著書にヒントを與へられ、次いで福岡高校玉泉大梁先生及び同校圖書館員の大なる好意と九州帝大農學部竹内亮先生の助言を得た。爰に記して感謝の意を表したい。

參考文獻

一、佛教大辭典　織田得能氏著　吉田東伍氏著
二、大日本地名辭典
三、日本山岳志　高頭式氏著
四、廣文庫　物集高見氏著
五、東肥前の山々　松尾禎作氏著
六、肥前風土記の研究　同氏著
七、筑前續風土記（益軒全集卷四）
八、群書類從　卷三十九
九、讀史餘錄
大日本佛教全書
一〇、元享釋書

一二、日本佛家人名辭典　一三、三　代　實　錄
一三、延喜式二十二　民部下　一四、大　宰　管　內　誌
竹內　亮氏編
一五、古　事　類　苑　一六、福岡市附近の遊山地
昭和八年六月十六日以降
脊振神社藏
一七、脊　振　文　書若干　一八、佐賀新聞記事
昭和八年六月廿九日以降
一九、九　州　日　報記事　二〇、宗　像　三　社　緣　起
三松　莊一編
二一、趣　味　の　博　多　二二、地圖（陸地測量部脊振山心、五萬分一外若干）
二三、修學院文書若干　二四、早　良　群　圖　外四葉

ウェストン氏の杖の跡

黒田孝雄

『杖の跡』言ひかへればウェストン氏の歩いた跡、それを辿ることが本文の目的である。最初は氏の登山經歴表を作る計畫であつたが、集めた不完全な材料の關係でその豫定を變更して、一先づ氏の山旅の跡を辿つて見ることとした。

その材料は、氏自身に直接聞き質すことはせず、專ら氏のものせられた文献によるの外はなかつた。從つて本文中には思ひ違ひ讀み違ひによる多くの過誤も含まれて居よう。また疑問もそのまゝにして、こゝに敢えて未定稿を發表することにする。これが機縁となつて、文献に表れてない氏の山旅を多くの大先輩から聞かせて頂くことができ、同時にこの『杖の跡』をも一層正確なものとする事ができたならば、改めて氏の登山經歴表に纏め上げることもできやう。

文中括弧内の番號は末尾「著作目錄」の番號と相對照するものである。

四、五年前であつたらうか。「山岳」のなかで、ウェストン氏がその時七十歳を迎へられたことを讀んだのは。さうすると氏は、今年で七十四歳、一八六〇年頃の生れといふ事にならう。また、「ウォーター、ウェストン、英蘭(イングランド)サリー州の人」と故志賀重昂氏が書かれてゐる處から見て、氏の生れはサリーであつたと知られる。これら以外に、氏の家庭や教育の事情については遺憾ながらその詳細を知るを得ない。

その以後、山岳に關係してからの氏の經歴については、氏の自敍傳とも云ふべき My Swiss and Japanese Mountaineering や「名譽會員ウォルタア・ウェストン氏の略歴及自傳」(共に「山岳」V—1所載)或は「日本の高山深谷を跋渉したる外國人及其紀行」(小島烏水氏「日本山水論」二二七—二五一頁)が、よき參考資料であつた。

ウェストン氏がスウィスを訪れたのは、一八七八年及び八三年で、まだホンの少年の頃のことであつた。しかし、アルプスの登攀は、其後漸く一八八六年にな

つてからのことであつて、氏の山岳經歷の第一頁は、この年を以つて開かれたといふべきである。

この一八八六年には、ブライトホルン、マッターホルン、その翌八七年には、ヴェッターホルン、トリフトヨホ、マッターホルン（第二回）が主なる登攀であつた。その外にユンクフラウ、アイガーは天候の都合で失敗に歸した。(8)

前記「略歷及自傳」に、「氏は日本に聖安得烈（アンドリュス）教會の牧師として來り」とある。しかしその肝要な日本渡來の年代は、私の知る限りでは、どの文獻にも明かでないやうである。たゞ一八九一年には、すでに淺間登山が行はれたことや、その以前、數度の九州横斷の旅によつて阿蘇山、祖母山、霧島山、櫻島が登られてあることによつて、その二三年前卽ち一八八八年頃ウェストン氏は我國にその第一歩を印したのではないかと推測するに止まる。

かうして、いよ〳〵「日本アルプスの美はしい地域に浸り込むよろこびに初めて接したのは一八九一年であつた。」(8) といふ譯で、この年（明治二十四年）こそ、ウェストン氏と日本アルプスとの、きつてもきれない關係の結ばれた年である。

この一八九一年の七—八月にわたつて日本アルプスの旅の第一歩が踏み出された。卽ち、ベルチャーを友として、輕井澤を出發、淺間山に登つて追分へ下り、それから上田に出で、保福寺峠を松本に越えた氏は、こゝを一時の足溜りとして、島々より德本峠を越え、梓川沿ひに横尾谷に入りその本谷を登つて尾根を越え岩小屋（坊主の?）に至り、それより槍ヶ岳を試みたが、天候のため遂に肩から退却を餘儀なくされて、赤澤岩小屋に下り、松本に引返へした (5§2)。更に轉じて中仙道を桔梗ヶ原、鳥居峠を經て木曾福島に至り、こゝより、木曾駒岳を極めて伊那に下山、天龍川を下る。(5§3)

翌年一八九二年は、氏が、F・R・G・Sに推薦された年であるが、この五月、友人フォルダムと共に、箱根宮ノ下から乙女峠を御殿場へ越え、こゝから富士

へ往復した。(5一九六頁、1.—この富士登山が第一回のものであらうと思ふが、他の文献(14五九頁)では、吉田口のそれが第一回となつてゐる。或は、この年以前のことか。)

同年八月、ドクター・ミラアと共に、岐阜より高山を經て平湯に至り、こゝを根據として先づ、乘鞍岳へ往復(2)。次いで蒲田に至りて笠ヶ岳を目指したが遂にその機を得ずして、空しく安房峠を島々に出で、次いでこゝから槍の再擧を圖つて、德本を越え、前年と異り、槍澤沿ひに槍に向ひ、首尾よく頂を極め得て、松本に引上げた(5ページ 4—5)。續いて南アルプスの赤石山を目指し、松本より、鹽尻、本山峠、高遠、市野瀨、大河原を經て、小澁の湯に至り、これより赤石の絶頂に往復、再び高遠に戻り、金澤峠、臺ヶ原、甲府、鰍澤に至り富士川を岩淵に下る(5ページ6)。

同十二月、地震による富士の地貌變化を視察のため村山口より登山(5一九四頁)。

一八九三年二月、A・Cの會員に推薦された。(Alpine Journal. vol. 16. p. 411.)

同五月、バックストン、オロルクを伴ひ岐阜より中津川に至り、こゝより惠那山に往復、次いで、神坂峠(?)を時又に至り、天龍川を下つて濱松に出で、更に鈴川を經て、大宮より御殿場へ富士を越えた(5一九七頁)。

同八月、長野を發、新町を經て大町に出で、それより針ノ木を越え、平、ザラ峠を經て立山下(リユーザンジタ)(立山溫泉)に至り、こゝより立山(雄山)に往復、原、上瀧を經て富山に出でたが、更にとつて返し、船津を經て蒲田に至り、再び笠ヶ岳を試みしも失敗、平湯、安房峠、島々を經て、一旦松本に出で改めて島々より德本を越えて穗高岳(前穗高)を東側から登攀して成功、松本に引上げ、上田經由輕井澤に歸着(3. 5ページ7—9)。

一八九四年、六月、東京地學協會の會員となる。同年七月初旬、ハミルトンと共に、直江津より糸魚川に至り、姫川に沿ひて南下、蓮華溫泉より大蓮華(白馬岳)に往復、その麓を廻つて大町、松本に至る(5ページ11)。續いて七月下旬、島々、平湯、蒲田に至り、私かに案内を傭ひ、中尾を經て穴毛谷より笠ヶ岳を試み

遂ひに第三回に絶頂を極め得て下山、中尾峠（途上燒岳に登る）、德本を經て松本に戻る（5.8～12）。續いて豐科を經て岩原に至り烏川沿ひに常念岳を極め松本に引上ぐ（4.5～12）。次いで木曾福島に至り、黑澤を經由、御岳に登り王瀧に下山、上松、福島、權平峠を經て身延に至り、富士川を下る（4.5～13）。

翌一八九五年六月、常念、御岳の登山が、A・Cで講演されてるから、その時までに氏は日本を去つて歸國されたものであらう。

それまでの日本アルプスの紀行が纒められて、The Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps となつて出版されたのはその翌年一八九六年のことであつた。

日本を去つた氏は、九七年から早速アルプスの登攀が始められ、同年にはユンクフラウ、アイガーに成功。一九〇一年までベルナーオーバーランドの登攀が續けられたが、そのうちでも、ガイドレスのアイガーヨホの登攀（7）は最も愉快なものであつたらしく、二友人と、クライネシャイデックよりオーベルシュタインベルクを經てアイガー氷河を探り、其の後天候の恢復を待つて改めてその氷河をアイガーヨホに登り、ペレークに下る。

日本の山との再會を樂しみつゝ、ウェストン氏が、再度の渡日は、一九〇二年であつた（8.14六七頁）。

この年以後、日本アルプスに對する氏の興味は、南アルプスにつながれた。

一九〇二年の夏は、甲斐ヶ根（北岳）の登山であつた。甲府より芦安に至り、それより苅安峠（?）、杖立峠を越へて野呂川に入り、廣河原小屋に至り、それから北岳の頂上を極め、廣河原に下り、同じ路を芦安に戻り、鰍澤に至り富士川を下つて岩淵に出た。（14～5—6の甲斐根及鳳凰の紀行がこの時のことかどうか明かでない。）

この外、妙高山、富士山、劍ヶ峯（?）の登山（8）もこの年のことだが、時期が分らない。

一九〇三年五月、氏はジョン・ケンナウェイを伴ひ、

再び芦安に至り、奈良田峠を早川筋に出で、奈良田、西山溫泉(?)、保村を經て、飯富に出で、次いで古關、精進、吉田と富士の山麓を御殿場に出た（14§6）。

同年の夏は、甲斐駒で、輕井澤、鹽尻、上諏訪を經、臺ヶ原に至り、それより黑戸山を經て甲斐駒の頂上に登り、更に尾根を北へ鋸山の手前迄、それより戸臺川に入り、戸臺、高遠、鹽尻を經て輕井澤へ歸る（14§6）。第三回の淺間登山も同年の事であつた(日本山水論、二三八頁)。

一九〇四年七月には、氏の最も得意とする鳳凰山の初登攀が行はれた。例により甲府より芦安を訪れ、杖立峠を越え、大室(オムロ)(南大室?)より地藏岳を經て賽の河原、地藏佛の初登攀を果して再び大室に引返し、更に野呂川を廣河原に遡り、こゝより北岳及び間の岳に往復、更に野呂川を遡りて大仙丈より仙丈岳に往復、北澤峠を戸臺に越え、高遠、鹽尻經由、松本に至る（14§7・6・11）。

その外、金峯、八ヶ岳、戸隱高妻山（日本山水論二三八頁）や吉田より御殿場への富士（10）も同年のことであつた。

かくてウェストン氏は南アルプスに數々の足跡を印して翌一九〇五年我國を去つた（「山岳」I—1）。

英國にては、R・G・SやA・Cや、日本協會で氏の登山談が講演された。

一九〇六年成立した本會が、この生みの親たる氏を名譽會員に推薦したのは、一九一〇年のことである。

一九〇五—一一年、アルプスは毎年ウェストン氏を迎へたに違ひないが、その足跡はこゝに明かでない。一九一一年の一夏の山旅が僅かに知らるゝのみ(16)。それは八月ミュルレンを振り出しに、シルトホルンをキエンタールに入り、ヴァイセ・フラウ、グシュパルテンホルンを極め、次いでオーベルシュタインベルクを中心に、シュマドリヨホ、ムットホルン、チンゲルホルン、ヴィルトシュトルーベル等を歩いたのである。

この山旅を終つて氏が三たび我國を訪れたのは、その年クリスマスの頃であつた(「山岳」VI)。翌一二年三

月、新たに氏を迎へた本會は、講演會を催したが、來會者六百名といふ盛會であつたといふ(「山岳」VII—1)。

この年から日本アルプスの旅がまた續けられ、再び北アルプスを訪れたのであつた。

同八月、輕井澤、松本を經て明科に至り、中房に入つて、有明山、燕岳に登つて松本に歸り、轉じて島々より德本を經て、その足で直ちに横尾谷へ、氏の所謂「大喰峠」を坊主岩小屋に越え、こゝより高瀨側(?)を槍ヶ岳に登攀、歸路は赤澤を經て上高地に下る。續いて、岳川谷(?)より奥穗高に往復した。(14§8—この奥穗のルートは次の年のそれも同じだが、日歸であるから、恐らく岳川からのルートと推測される。)

一九一三年八月には、今度は夫妻にて、再び德本を越えて上高地を訪れた。三週間の滯在中、或は槍澤から槍に往復し、中尾から燒へ登り、或は平湯、蒲田を訪ね、また奥穗高へも登つた。かくて德本を松本に越えた。(14§8)

松本の氏夫妻は、それより明科、大町を經て四谷に至り、こゝより白馬岳に往復、松本に戻る(14§9)。

一九一四年、吉田から大宮への富士登山(14一六〇頁、13)の外、立山針ノ木越えがその七月行はれた。それは横濱から直江津、滑川を經て芦峅に至り、それから材木坂、ブナ茶屋、追分と室堂に至り、立山溫泉に下る。更にそれからザラ峠、平を經て針ノ木を越えて大町に至る(14§10)。

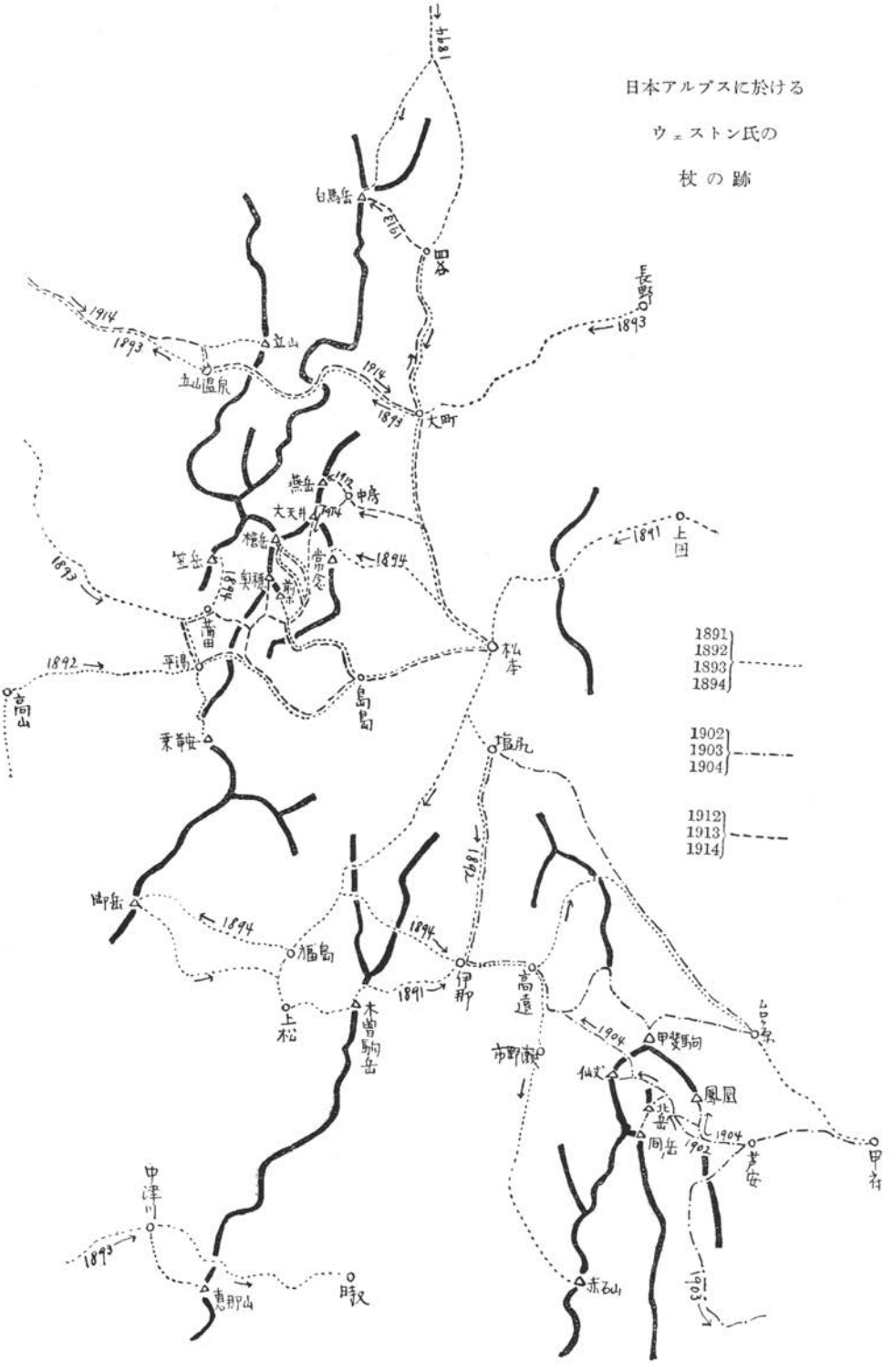
八月中旬、大天井岳を思ひ立ち、夫人同伴明科、中房を經て燕岳の南の鞍部より大天井へ登り、二股小屋を經て一ノ股、上高地へ下り、白骨、島々を經て松本に引上げた(14§10)。

ウェストン氏はこの年を最後の日本アルプスの旅として、一九一五年我國を去られたのである。

一九一七年、日本アルプスに於ける氏の功蹟によつて、R・G・S は氏に Back Grant を贈つた。(Alpine Journal. vol. 31. p. 106)

日本に於ける氏の懷しい山旅の、數々の想出は、Playground of the Far East (1918) となり、A Wayfarer in Unfamiliar Japan (1925) ともなつた。

日本アルプスに於けるウェストン氏の杖の跡



『この年上高地との我々の「さよなら」は、特に悲しいさよならであつた。といふのは、我々には、それが我々の最後の訣別に相違ないことが分つてゐたからだ。しかし我々の友に對して思切つてさう云ふことはしなかつた。「どうか又來年もやつていらつしやい」といふ彼等の挨拶の懇ろなまごころに對しては、何らの答も我々には持合せがなかつた。それは何のお座なりではなかつた。オイソレと答へて口に出せるやうなお座なりでなかつたことは我々の承知する處であつた。朝まだき、冷々とする澄めるうちを我々は、梓川の谷を下へと稍元氣なく下つたのである。』

一九一四年の上高地を去るに臨んでのウェストンの心境であるが、それはいまの處、アルプス日本との訣別ともなつてゐる。

近年、氏はスウ゛ス゛の一寒村に老後を靜かに養はれてもあつたし、また最近では身體の衰弱がひどくなつたとも伺つてゐる。私は『來年もまた』の機會がウェストン氏にめぐつて來ることを切に希ひつゝこの稿を終る。

（一九三三・九・九）

著作目錄

1) Fujiyama in May.
Alpine Journal, vol. 16, pp. 247—250. 1892

2) Mountaineering in the Japanese Alps.
Alpine Journal, vol. 16, pp. 377—390. 1893

3) Scrambles in the Japanese Alps.
Alpine Journal, vol. 17, pp. 237—249. 1894

4) Mountaineering and Mountain Superstitions in the Jananese Alps.
Alpine Journal. vol. 17, pp, 493—510. 1895

5) Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps.
London. John Murray. pp. 346. 1896

6) Japanese Southern Alps and Japanese Mountain clubs.
Alpine Journal. vol. 23, pp. 1—15. 1906

7) An Adventure on the Eigerjoch,
Alpine Journal. vol. 23, pp. 277—284. 1906

8) My Swiss and Japanese Mountaineering.

山岳 vol. 5, no. 1. 1910

9) EightYears' Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps.
倫敦日本協會雜誌 vol. 9. no. 1. 1909—10

10) Eight Years of Travel and Exploration in the Japanese Alps.
山岳 vol. 5, no. 2. 1910

11) Two climbs in the Japanese Alps, Reprinted from the Fell and Rock Journal, Kendal. 1916

12) Exploration in the Northern Japanese Alps.
Alpine Journal. vol. 30. pp. 246—259. 1916

13) Annals of Fuji San,
Alpine Journal. vol. 30, pp. 260—272. 1916

14) The Playground of the Far East.
London, John Murray, pp. 333. 1918

15) Of the Origin of the Term "The Japanese Alps"
山岳 vol. 13, no. 2. 1919

16) In the Playground of Europe
山岳 vol. 15, no. 1. 1920

17) Old Friends and New Faces: some recent Explorations in the Northern Japanese Alps.
倫敦日本協會雜誌 Vol. 18. 1920—21

18) A Wayfarer in Unfamiliar Japan.
London, Methnen, pp. 207. 1925

19) In and Out of the Kienthal,
Alpine Journal, vol. 38, pp. 211—215. 1926

20) H. I. H. Prince Chichibu "A Climb in the Japanese Alps." (Translated by W. Weston anb S. Uramatsu)
倫敦日本協會雜誌 vol. 26. 1928—29

21) Now and Then. 山岳 vol. 25, no. 3. 1930

追憶

松井幹雄君を憶ふ

石川孟範

○

松井幹雄君の追憶を何方か先輩の方に書いて頂くやう御願ひしようと思つて居る中に、早くもその役目が自分に充行はれて終つてゐた。自分の發すべき問ひを先方から發せられて、何とか答へなければならない端目になつたのだが、飜つて考へて見るとやはり自分が書く事が、松井君に對する情誼といふよりは寧ろ私の責任であるやうにも思はれたので、とう〳〵書かして貰ふことになつて終つた。

が併し、松井君逝いてから最早四ケ月にも垂として居るのに、私には未だほんたうに追憶といふやうなものを書く氣持になる事がどうしても出來ない。それほどに私には親交の深いものがあつたからだ。そうしてその深い親交と古い歴史は、書き得ない多くの涙の思ひ出の影のみ強くあつて、たゞ雜然と浮びくる思ひは未だに纒まらず、又一方には書かなければならない責任に、徒らに頭を重うするばかりで、荏苒今日に迄なつて終つた。

近來お互の生活の多忙から、兎角家を訪れる機會も稀れになつて來ては居たが、それでも夏も過ぐる頃になれば必ず山の收獲を齎らして呉れた松井君だつた。今も秋風誘ふ窓邊にこの稿を草して居ると、今にも飄然と——全く飄然と——この砧村の草深い家を訪れて來て呉れるのではないかと思はれてならない。來るべき筈は無いのであるが、あまりにも慌しく逝去されてしまつたので、私は何がなし多くの聞き殘し語り殘された事があるやうな氣持に滿たされて居るからであつた。

顧ると山に共に親しむやうになつてからでも既に二十年を過ぎてゐる。オイ幹チャン、オイ孟チャン、と今迄も呼び交はされて居た仲であつた。呼びかけ呼びかけられた時そこには何時も懷しい童心を感ぜずには

居られなかつた。今その童心へ誘ひくれる唯一人の友を失つた事に氣が附いた時、私には淋しさの一層大きなものがあつた。

○

私が松井君と親しくなつたのは、小石川の臺町に住んで同じ小學校に學んで居た頃からであつたが、山に親しむやうになつたのは松井君が、當時築地にあつた府立工藝學校に入學してからであつた。私の家に來るとよく書架から本を取り出しては長々と寢そべつて本を讀むのが好きで、二三時間もするとさつさと歸つて終ふ事が子供の頃からよくあつた。

著名な紀行文など盛んに耽讀して居たのも此頃で、憧れの山旅に始めて私が誘ひかけられたのは大正二年の夏だつたと記憶する。奥多摩から大菩薩連嶺支脈の末端を、ほんの掠め過ぎた位の處ではあつたが、これが松井君の因緣淺からぬ大菩薩連嶺に足跡を印したおそらくは最初のものであつたのだ。その後お互の夏休みには山旅をする樂しみが一つ加へられ、しかもその間には一日二日での慌しい山旅に出る事も繁くなつて行つた。一緒にといつても大抵は用意周到な、そうして自信のある松井君の計畫に依つて伴はれて行くので、私は何時も君を信ずる余り不用意に旅立つことが多かつた。全く伴はれ行く氣安さである。それだけに私には敎へられたものが澤山あつた。君の得意とする大菩薩嶺を中心として武甲の山々の名から、丹澤山塊を初めとして小さな澤の名、或は一木一草の名に至る迄、およそ私の山の知識の仕入先は松井君であつた。然し私が今最も印象を深うしてゐるものは、近代的道具立式登山には聊か緣の遠い、嘗ての旅に見た着莫蓙に草鞋脚絆の君の姿であつた。私は今も尙その姿こそ眞實の君の心の姿であると思つてゐる。私の存在も全く忘れたかの樣に、默々として山を行く時、私には寂の境涯を多分にもつたある旅人といふ樣な感じが湧いた。凝と山の自然に融合してゐる時、そこにこそ君の心のふるさとが展けてゐたのであらう。私はその姿に湧く親しさを覺えたのである。

○

大正六年の夏は珍しく一緒に山へ出かけることが出

來なかつた。私がアルプスから歸ると松井君は單獨で金峯山へ出掛けて行つた。そうして歸途溪谷に迷ひ込んで辛くも命拾ひをして歸つて來た。丁度私が雜司ヶ谷の家を訪れると、ヤア昨日歸つたよ、と言つて庭先にまざ〳〵と乾されてあるぼろ〳〵の夏服を指し乍ら遭難の顚末を語られたが、それよりも歸京の汽車の中で新婚らしい夫婦者から變な同情を寄せられた事と、乞食のやうな自分の姿に、日頃風采などに無頓著な君にも似合はず余程閉口したと見えて、このことばかり繰返し〳〵語つて居た。

霧の旅會を創立したのはその二年後の大正八年の春であつた。勿論かうした山の思ひ出話に釀されて二三の人との間から生れ出たのではあつたが、一つには當時憧れてゐた日本山岳會に入會するつても又資格も無かつた爲に、もつと一般的な會をつくりたいといふ希望からでもあるといふ事を、私は入會を薦められた時に聞いたと記憶して居る。熱心な松井君は自ら編輯に當つて、謄寫版ではあつたが氣持のよい創刊號を早くも私たちに提供して呉れた。その獨得の編輯振りは尠からず吾々の興をそゝるものがあつた。日本山岳會へ入會したのはそれから間もなくであつたと思ふが、武田先生の「山岳」に御發表になつた「北相の一角」續いては「多摩川相模川の分水脈」等の記事に依つて非常に刺戟され、その頃あまり顧られて居なかつた東京附近の低山探勝に、低山趣味の普及に最も熱心に乘り出したのは松井君であつた。そうして遂には武田先生木暮先生を名譽會員に御願ひして直接御指導を仰ぐ迄になつた。その時松井君には吾々會員と同じやうに實に喜びの大きなものがあつたもんだつた。

大正九年の十一月も末の頃、私と大菩薩峠の新雪に初めての足跡を刻んでからの君の大菩薩禮讃の熱は非常なもので、會の遠足會は自然こゝを中心として行はれることが多かつた。これらが兎角の風評の因をなしたものかもしれないが、霧の旅會創立以來十五年間、あの劇務に携り乍ら全く己を空しくして低山開發に努力して居た君の尊い精神と、稀に見る人格とには私はいつも敬意と感謝の念が有るばかりであつた。殊に大菩薩連嶺號の編纂にあつてはその努力の實に涙ぐまし

いものがあつた。君の山を行く一歩々々の變化をも忽にせなかつたやうに、會の向上發展の上にもこの氣持はよく現れてゐた。何んだ霧の旅會は古い歴史の割合に會員が少ないではないか、とある人々は不思議がり又嗤ひもしたが松井君にはそんな事は問題ではなかつたのだ。山の事に關して、尠くも霧の旅會の上に於て、聊かの妥協も許してこなかつた君の、山に對する霧の旅會に對するいかに强い信念を持つて居たかを私は見逃すことが出來ない。

○

松井君の專門は精密機械であつて、工藝學校卒業後暫く築地の海軍造兵廠に奉職されてゐたが、まもなく母校に歸つて教諭として今日に及んだものであつた。私とは余りに專門が違ふのでつい此の方面の話に深く立入ることが無かつた。が精密機械の先生として、理論と實地の兩方面からする講義の明快さと、そうして熱心な親切な教導は誠に得難い先生であつたと、他から洩れ聞いた事があつた。著書としては「材料及工作法」と外に數種の工業學校教科書等であるが、嘗てこの教科書の上梓に當つては山旅への勃々たる心を如何ともしがたく、一夏の休を犧牲に迄して努力されて居た。最近では東京工業專修學校、市立麻布高工實務學校、東京齒科醫學專門學校等に教鞭を執つて夜を日に次いで全く寸暇もない有樣で、工業教育に盡された功績も又偉大なものがあつた。

それだけに君の家庭に父として寛いだ日を與へられたのは誠に稀なものであつたらう。去年の秋めづらしく二兒を伴はれて私の家に遊びに來られたが、私はこの時初めて父としての松井君に泌々と接して涙ぐましい迄に嬉しさを感じた。私は早速登戸の遊園地から附近の梨畑に案内して、もぎたての梨を滿喫したりして愉快に一日を過ごしたが、これが私の、父としての松井君を見た最後のものとなつて終つたのだ。最早一年である。昨日今日出そめた多摩川の梨に、早くも秋の訪れを知つて私には今又思ひ出の新たなるものがあつた。

（昭和八年九月十四日）

故 松井幹雄氏

故 谷本光彦氏

谷本光彦君を憶ふ

藤島敏男

谷本君は、私にとつて、ほんとうの意味で山で得た友達のひとりであつた。

昭和五年の九月、蒲田から槍ヶ岳へ登るつもりで出掛けた私が、中ノ湯で車を棄てると、二人の學生が、はち切れさうに荷を詰め込んだルックサックをかついで足をふみ出さうとするところだつた。蒲田までゆくのだといふので、それなら一緒にと、安房峠を越えて、とう〳〵その夜は今田の家に同宿することになつて了つた。秋晴れの峠を越えるあひだも、靜かな宿の宵にも、私達は、はじめて遇つた間柄とは思へないやうな氣輕るさで、山を話合つたり、冗談をいつて笑ひ興じたりした。學生の一人が谷本君だつたのだ。

不圖落合つた人と、こんなにも親しくなつたのは、登山者の稀な季節であつたことにもよるが、谷本君もその親しい山友らしい青年も、ふたりともどこか人なつつこい所があつたからだとおもふ。あくる日、錫杖の烏帽子岩へ登る二人と私達とは蒲田川の畔で別れた。

これが緣となつて谷本君は山仲間を引張つて、よく私の家へ遊びにやつて來た。どつちかといへば無口な谷本君は、私達が山の話に夢中になるのを默つて聽いてゐるといふふうであつたが、ポツリ〳〵とその口を出る言葉には、山に對する深い熱情が籠つてゐた。「あれで學校の山岳部の集りでは議論家なんです」と、ひとりの仲間からきいたが、私の印象に殘つてゐる谷本君は、物靜かな、どことなく寂しさうな、それでゐて內心には山への熱が燃えてゐるといふやうな青年だつた。

短い三四年の交りのあひだに、谷本君と私は一度山旅を共にした。始めて知つてから丁度滿一年目の秋、瑞槽山から金峯山の方へ、山小屋ばかりを泊り歩いて、のんきな樂しい旅だつた。焚火のまはりに集つたみんなの賑かなおしやべりを、都會に於てもさうであるやうに、默つてしかし愉快さうに聽きながら、薪を搔き

寄せてゐた谷本君を想ひ出す。

昭和六年の冬、關溫泉附近に建設されたクロフ小屋の計畫には谷本君も隨分盡力したらしく、小屋のプランだの寫眞だのを見せてくれた。この次のシーズンには是非見にゆかうと約束したのだが、約を果さぬ内に、私は遠い東北の町に移り住み、そこで思ひがけない谷本君の訃をきくことになつて了つた。

いつのときか、谷本君との約を果して、神奈山中腹の快よいスキー小屋を訪れる機會は私にめぐり來るであらう。けれども其處で、若い山友達の谷本君と共にスキーを樂しみ、ストーヴを圍む機會は永久にないのを私は寂しくおもふ。

（昭和八年六月一日）

登山經歷

一九二八より關溫泉、一九二九より北アルプス。
一九三〇、三ッ峠、錫杖岳（七月、九月）、五色溫泉（二月）
一九三一、二、日本山岳會入會。
一九三一、岩殿山（五月）、妙高、火打、燒山（五月）、黑澤ノ池（八月）、八ッ岳（九月）、信州峠、瑞牆、金峯（九月）、黑布小屋設立（十一月）、關溫泉（十二月）。
一九三二、黑布小屋（二月）、同（四月）、針ノ木、立山（五月）、妙高、火打（八月）、乘鞍（十一月）、關溫泉（十二月）。
一九三三、關溫泉（三月）、同、笹ヶ峯、乙見峠、小谷、四谷（四月）、關、黑布（二月）、同（三月）。

略歷

愛知縣海部郡立邊村字戸倉四三明治三十八年八月五日出生
大正十三年三月愛知縣立津島中學卒業
昭和五年三月二十五日日本醫科大學豫科入學
同　七年三月二十五日同　學部入學
昭和八年五月三十日逝去。

一九三二年に於けるナンガパルバット登攀の概略

ノルマン・コリー、ヘィスティングスと共にマンメリイがナンガパルバットを試み、彼自身不幸にしてこゝを墓地としてから約四十年が流れた昨年、ドイツ・アメリカのパーティによつて再びこの登攀が試みられたことは、すでに新聞によつて斷片的には報道された所である。最近のアルパイン・ジャーナル及びヒマラヤン・ジャーナルにこのエクスペディションのかなりに詳細な記事が、夫々當事者の一人によつて發表された。これを機會に、その概要をでも紹介して置くのは無駄ではないと考へる。

H. Kunigk, The German-American Himalayan Expedition, "Alpine-Journal" vol. 44. Nov. 1932. pp. 192—200.

W. Merkl, The Attack on Nanga Parbat, 1932, "Himalayan Journal" vol. 5. 1933. pp. 65—74.

× × ×

このパーティの間で、ナンガパルバットの攻撃が計畫されたのは、一九三〇年で、メルクルの友人ヴェルツェンバッハであつた。彼の計畫はマンメリーの採つたディアマライ側からであつた。しかし、種々研究した結果、南面のルパール側は物凄い角度でルパールに落込んで居り、西稜にも少しの望みもなし、といつて北西面すらその上部は殆んど絶望であるといふことで、自ら唯一つの希望は北東面と東稜とに、卽ちラキオット側に注がれたのである。

しかし、このチラス側からのルートは、チラスでは一行に食糧の供給ができない程アアであるとの理由で最初は許可されなかつたが、スリナガール着の上、官憲と交渉の結果、食糧はこれを全部スリナガールから携行するとの了解の下に、漸くこのラキオット・ルートが許可され、北面からの攻撃が始められた。

× × ×

一行のメムバーは

Willy Merkl, Petter Aschenbrenner, Fritz Bech-

told, Hugo Hamberger, Herbert Kunigk, Felix Simon, Fritz Wiessner, Rand Herron, Elizabeth Knowlton.

この九名より組織されたパーティの一行は、一九三二年四月二十八日ゼノアを出帆、五月九日ボムベイに着、ジャンムを經てカシミールの首都スルナガールに入つたのは五月十五日であつた。こゝでは、荷物の小分け、糧食の檢査、人夫用食糧品の調達等に一週間を要し、尙ルートの問題でも暇どつた。

荷物は出發前既に船でバンダプール (Bandapur) に送り更に馬でアストールまで送られた。一行は、五月二十六日いよ〳〵スリナガールをあとにして出發、雪に埋れたトラグバール(Tragbal)及びブルジル(Burzil)の二つの峠を越え、アトール (Astor) に着いたのは八日目であつた。

アッシェンブレンナー及びベヒトルドは四名の人夫と道路の偵察に先發。殘る者はドイアン(Doian)への荷物運搬について人夫の手配をしたが、こゝで一行に加つたフライアの奔走によつて都合よく渉つた。六月六日美しい森の中にドイアンの小村を見出してキャンプした。

六月八日、先發のベヒトルドがルートの報告を齎して來た。同日百二十名のアストールの人夫が集められたが、ともかく雇ふ事にして、翌日直ちに四〇名のバルチの人夫と出發した。この日、一のリッヂをレイチャル谷 (Lichar Tal) の最高部まで越えたが、人夫の行動は旅程に少からざる不便を來たすことがこの一日で分つた。

こゝからアシェンブレンナーとクニークはラキオット谷の偵察に向ひ一のリッヂを越えてバルダール谷 (Buldar Tal) に入りキャンプし、翌日この谷とラキオット谷との間のリッヂを越え、遂にラキオット谷(Rakiot Tal) に入ることを得た。こゝでナンガパルバットに面と對つてキャンプを張つた。深く切落された谷のはるか彼方に小さな道跡を求めつゝ、二日後にはラキオット氷河に接する小さな堆石に覆はれた谷底に、假りのベイスキャンプを設けるを得た。ナンガパルバットの素晴しい氷河、恐ろしい、氷に覆はれたその東北面(北

峯から直ちに氷河まで一二〇〇〇呎削げ落ちてゐる）に、こゝで初めて接することができた。

この間に、バルダール谷に達した後續組から、三十名のハンザのポーターをアストールのと交替せしめたといふニュースを受取つた。かくて、ラキオット谷への運搬は三十名のハンザと四十名のバルディで行ふことになつたが、ポーターの道具が大部分掠奪されて了つたのは大きな失敗であつた。ベヒトルド、ハンベルゲル、ヘロンはバルダール氷河を經ての主稜への登路を求めて出發したが徒勞であつた。この間、アシェンブレンナーとクニークとはラキオットとバルダールの間の一六五〇〇呎に登ることができ、それによつて特にラキオット氷河を詳細に偵察するを得た。そして、主稜中の最低鞍部の下の雪のテラスからラキオットピークに達すること、東北稜への大きな凹地を經てナンガパルバットに達することの自信を深めた譯である。

六月二十二日、サヒブ及びポーターの全部が根據地に集つた。雨雪の二日後、ヘロンとクニークとは、氷河の中央に出て居る岩の齒のうしろにある第一のテラスに登り、氷に圍まれた漂石のうちにキャンプしてから、ガナロピークの下を主氷河の大きなテラス迄登りきつた。太陽はひどく照りつけるし、雪は軟かくなるし、脚の速さは鈍るばかり。荷物を放り出して進んだが駄目で結局荷物の所に歸つてビヴークした。次の日一六七〇〇呎の高さのテラス迄上つた。いよ〳〵ナンガパルバットの攻擊だ。

× × ×

ヘロンとクニークに代つてシモンとヴィスネルが、九名のポーターとテント及び食糧を運んで、一五〇〇〇呎に第一キャンプ、一六七〇〇呎に第二キャンプを設けた。その間に最初の根據地から漂石中のキャンプに荷物が運び上げられ、こゝへベイスキャンプが進められた。六月三十日アッシェンブレンナーとヴィスネルは四名のポーターと第一キャンプに泊つたが、主峯からの恐ろしい雪崩の飛沫はテントの近くに迫つた。從つて、テントは雪でシッカリと圍まねばならなかつた。次の朝人夫等は昨夜の恐しさにベイスキャンプに下がつて、フライヤの人夫だけが、アッシェンブレン

ナーと第二キャンプに登つた。その間にベイスキャンプでは人夫のストライキが始つて、結局殘る人夫は二十一名となつた。

七月三日、ヘロンとクニークは人夫四名とその日に第二キャンプに登つて、アッシェンブレンナーと出會つた。次の日第二のテラスに到り、こゝを第三キャンプとし、氷穴をつくつた(一八〇〇〇呎)。その間に、荷物は運び上げられた。七月八日、ペヒトルドとメルクルが、第三テラスに荷物を運び上げ、こゝを第四キャンプ(一八九八〇呎)とした。かくて仕事はドンドン捗つた。

ポーターに惱まされ乍らも、パーティは、ラキオットを經てチョングラへとナンガパルバットから北東に走る主稜中の最低鞍部の下の最も高い氷河のテラスには既に登つたのだ。ラキオットピークは彼等の上に塔の如く聳え立つてゐた。彼等はこのリッヂ、この最後の險しい側面、二つの東峯の間に初まりそこから北峯及び南峯に向つて續くプラトーに到達することができた。主峯(二六六二〇呎)ははるか後に見えたが、この地點から、そこまで雪の稜が上へとつゞいて居た。ルートはさほど困難にも見えなかつた。自信と希望に滿ちみちて、彼等は困難を克服した。この間に七月十四日アッシェンブレンナーは西チョングラピーク(二〇四八〇呎)に登り、同日(十四日)ヘロンとクニークとは四名の人夫と第四キャンプに荷物を運び上げた。次の日、ハムベルゲルとヘロンが人夫代りに荷物をかついで、アッシェンブレンナーとクニークとはナンガパルバットの偵察に出發した。ラキオットピークとナンガパルバットの間のリッヂへと上つてゐる大きな凹部は一行には取り上げられなかつた(それには一つのテラスを越え、險しいフィルンの斜面をターンして達するのだが)。その登攀は疲れさせられさうだし、新雪の雪崩からの危險はたしかであつた。ラキオットピークを少し登つて、それから凹部の上部を西へ向つて、ラキオットピークとナンガパルバットとの間のリッヂに到る事は、多分出來ようと考へられた。四人は、主稜の下二一〇〇〇呎にキャンプしたが、そのうち二人は第四キャンプに下つた。次の日(十六日)アッシェ

ンブレンナーとクニークとは、主稜に向つて登つた。一時間でラキオットピークの直下に達した。それから北稜へとつゞく雪の斜面、その雪の部分を上へ登り、それから石へ轉じてオーバーハングのベルグシュルンドを越えて岩に達した。その岩は見るからに惡く、滑かなスラブと氷は粉雪に覆はれてゐて、この岩場のトラバースは長さ三三〇呎だが、約三時間を要した。北稜に達してから、雪の狀態は良好となり、速度は急に增加した。それから上でより困難な岩に出合つた。それにつゞく雪の稜を上つてラキオットピーク(二三一七〇呎)に達するまで出發から九時間を要した。

ヒンドウクシ、カラコラムの眺望は實に素晴しかつたが、カシミールの方は殘念にも雲で見えなかつた。ルプールに對するナンガパルバットの南面は物凄かつた。雪に白い主峯はその上に塔の如くそびえ立つた。降りは東面の險しいフィルンを傳はつた。ラキオットピークを越えてのルートはポーターには全く不可能なので、將來は登路は例の凹部を登る必要があると考へ、パーティは小さなテラスに道具を運び下りて、そこに第五キャンプをはり、第四キャンプに降つたが、それから數日間天候は惡くなり、クニークはそこで蟲樣突起炎にかゝり數日後にはベイスキャンプに降つて了つた。アッシュンブレンナーも足指の凍傷にヒドク苦しんだが、他の者は更に登高を目ざした。そして、二つの無駄な努力の後、メルクルとベヒトルドは例の凹部を登りきつてそこに第六キャンプをはる事が出來た(二一六五〇呎)。七月二十九日、ベヒトルド、メルクル、ヴィスネルは、遂にリッヂの上に達し得て、こゝに第七キャンプを設けた(二二六五〇呎)。次の日ベヒトルドとメルクルが道具をキャンプに運び上げた。リッヂに立つ彼等とナンガパルバットとはもう目と鼻のやうに近かつた。希望と勝利の期待に彼等は滿ちみちた。

× × ×

しかしこれ迄續いた好天候は急に險惡となつた。メルクルとベヒトルドはキャンプに食糧を殘してリッヂから退却せねばならなかつた。天候は續いて惡かつた。八月五日、ヘロンとシモンが第五キャンプに登つたが雪は吹雪を混へて盛んにふりつゞいた。八月十日には、

第四キャンプから上へは、雪が深くて努力は無駄であつた。一日晴れた時ヘロン、メルクル、ヴィスネルが非常な骨折りでチョングラピークに登つたのみで、二十日間天候は悪くその間パーティは第四キャンプに機會を待つてゐた。

高いキャンプに登つたり、新しいキャンプをはつたりすることは、新雪のため全く不可能であつた。八月二十一日、殘るパーティ全部ベイスキャンプに引上げた。アッシェンブレンナー、ベヒトルド、シモンは病氣や其他のため、キャンプを去り、フライヤーも大體任務を終へたので二十五日に歸つて了つた。

二三日後、天氣は少し良くなつた。八月二十八日、ナンガパルバットに對して最後の努力が試みられ、ヘロン、メルクル、ヴィスネルが出發。天氣は稍良好、太陽は雪を固めてくれたので、コンデションはベター。新雪は第二キャンプの上から始まつて急に深さを增して行つた。路をつけるのは大した骨折りだつたが、それでも、彼等は三十日には第四キャンプに辿りつく事ができた。次の日大部分のポーターが病氣になつて了つた。雪は非常に不安定で、寒さは劇しかつた。前進はピッタリ止まつて了つた。新雪は平面で三—四呎、斜面では四—五呎に及んで、雪崩の危險は充分に備つてゐた。人夫も全部使へなくなつた。

後髮引かるる思ひで、一行は退却に決した。季節は既に晩く、太陽は雪の狀態を變へる力はなかつた。かかる狀態では前進は全く不可能であつた。退却は九月二日から順序よく行はれた。そしてカムリパスを越えてスリナガールに歸着した。

今度も『ヒマラーヤの巨人は人間よりも强い事』を證明した。

（黑田孝雄）

一九三三年度
エヴェレスト登攀概要

多大の關心を以て注視せられた、本年のエヴェレスト登攀もその達し得た高さは一九二四年の夫れを超える事を得ずに終つたのは、今度こそは頂上をと豫期した人々は勿論、自分の如くその登頂は完うし得られないが更により頂上に近くまで一歩を踏み上げる事を得るであらうと豫想した者に取つても等しく大いなる失望でなければならない。

この登攀と略ゞ時を同じうして試みられた飛行機による世界最高峯への戰ひは見事に凱歌を擧げ得たが、飛行士達はその頂きには豫想せる登攀者の姿を見出し得なかつたのだ。

人間の眼は已にエヴェレストを俯瞰するを得た、然し吾々の足は未だその頂きを踏まえる事が出來ない。吾々登山者に取つてこの事實は何と頼もしく感ぜられる事よ、吾々は將來尙、登山者としてのあらゆる經驗、あらゆる知識を傾倒し、完き裝備の許に、山で錬えに錬えあげた精神と肉體とを以てして克ち得べき一つの命題を課せられた儘で居るのだ。エヴェレストの登頂は登山史の上に劃せらるべき重大なるエポックである。これが片附かない間は二十世紀の登攀者はそれから後如何に轉換して行くべきかの方向を見極める事は容易でないのだ。カンチェンヅォンガは登られる事があらう、そして多くの人々はエヴェレストの登攀よりは技術的により困難と見られる、その登頂を以て、エヴェレスト登頂より更に高く評價するかも知れない。然しそれは技術的方面のみを過重視した考へであつて高さ——そしてこの高さが登攀の第一の對象となり、且つその困難さがこれに因る以上は——と言ふ事を考へて見れば、エヴェレストは矢張り、總括的に見て、最も極め難い頂きを持つて居ると言へよう。獨逸のアカデミーカーに依るカンチェンヅォンガへの精進は全く驚嘆の外はない、然し登山史上、最重大意義を持つエヴェレスト登頂へと撓まざる努力を傾ける事の出來る、傳統的のバックを持つ英國の若き登山家達はより美望せられるべきであらう。

今年のエキスペディションで最も注目すべきは、頂上に達するの一事を以てその目的の全部とした事であつて、頂上に到達せんが爲には如何に學術的に重要なる意義を有するにもせよ、他の總てを犠牲にして止まないとの決意を以て臨んだ事實である。

従つてメンバーの選定もこの見地からなされ、登攀者として充分能力ありと認められた者のみがピック・アップせられた。一行十四名の氏名は左の通りである。

リーダーとしては Hugh Ruttledge 氏が撰ばれた。同氏は印度政廳に以前勤務し、一九二六年の夏にはクマウン・ガルワール地方を訪れ、ナンダ・デビを窺ひ、轉じてチベットに入り、カイラース巡禮を試みた經歴を有し、蓋し適任と言はずばなるまい。カメットに登頂した五名の中、Holdsworth を除いた四名が悉く選ばれたのを見ても、過去に於て然かも成るべく最近に、二萬四千呎以上の高峯に達した經驗のある者を先づ第一に考慮に入れた事は疑ふべくもない。F. S. Smythe, E. E. Shipton, Captain E. St. J. Birnie 及び Dr. C. R. Greene がその四名であつて、殊に Shipton の最近數年間南アフリカに於ける活躍、殊にカメット登頂はよし忘れるとも、その困難なる登攀は登山史上永遠に忘るゝべからずとさへ極言せらるゝマウント・ケーニアのトラバースの如き、エヴェレスト登攀者として選ばるゝべき比類なき經歴であらう。Smythe に就いては敢へて言を費やす必要はあるまい。Birnie はカメット・エキスペディションに於ては全計畫の遂行上、Smythe を助けて大過なからしめた單に登攀者としてのみでなくとも大いに能力ある存在である。Greene 氏は選ばれた他の一人卽ち W. W. McLean 氏（エルサレム英國傳道病院勤務）と共にこのエキスペディションに加はつた二名の醫師である。スーダン駱駝隊付の Major Hugh Boustead 氏は已に一九二六年にカンチェンヅォンガのゼム・ギャップにと志し、これと前後してパンディムに於て約二萬呎の地點にまで達し、或ひはエヴェレスト登攀に具ふるべくローナックを訪れる等シッキムに於て輝かしい足跡を示して居る。一九二〇年 Kellas 氏と共にカンチェンヅォンガを志し、一九二二年のエヴェレスト登攀に加はれる

Colin. G. Crawford 氏は再び選ばれた。同氏は今回のメンバーの中、曾てエヴェレスト・エキスペディションに加はつた唯一のメンバーである。一九二九年に Shipton 氏と共にマウント・ケーニアに於て輝しい登攀の數々を成した P. Wyn-Harris 氏、一九三〇—三一年のワトキンの東グリーンランド、エキスペディションに加はり、マウント・フォーレルの困難なる登攀を成し遂げた L. R. Wager 氏、アルプスに於てガイドレス・クライマーとして知られた、殊に一九二九年にブライトホルンに於けるガイドレスにての初登攀を成し遂げた J. L. Longland 氏或ひは一九二四年の Irvine 氏に比すべき、三年間ケムブリッヂ大學の整調を勤めた、然かも一方アルプスに於ても知名なる T. A. Brocklebank 氏等の若い連中が加はつた事はバッアーの例に倣つたものか、我々に取つて甚だ心強い。これ以外には物資運搬の監督者として G. Wood-Johnson 氏及び E. O. Shebbeare 氏の二氏が任命された。

一行のダージリング出發は一九二四年よりは十七日早く、先發隊は三月六日に、本隊は三月八日に何れも出發した。途中にて無線電信を受持つべき二名が印度電信隊より選ばれて加はつた。セルポの峠は時期が早く越すに困難なる爲め、これを避け、Pedong 及び Natang を經てジェレップ峠を越えて本隊は三月十八日にはチュンビの谷へと降つた。ガウスタで二隊は合し、同月二十九日にはカムパ・ヅォングに到着し、此處で四日の滯在の後、チンキヅォング及びシェカーヅォングを經て六日後にロンバックに達し、四月十七日にはベース・キャンプ（海拔一六、五〇〇呎）を張る事が出來た。一九二四年にはベース・キャンプに到達したのが四月二十九日であるから、約二週間早いわけになる。

同二十一日にはキャンプI（一八、〇〇〇呎）に達し、更に五日後には一萬九千五百呎の地點にキャンプIIが設定せられ、キャンプIIIへの登路が切開かれ初めたが、物資はキャンプI及びキャンプIIが完全にその供給を受け終るまでは更に上に向つては運ばれなかつた。これは本年度に於ける物資の供給運搬に關する根

本方針であつて、斯くの如くする事に依つて、惡天候の長く續いた場合に生ずる物資の缺乏から免がれ、更に登攀者は高度に對する完全なる馴化を獲得する事を得ようといふのである。

五月五日に二萬一千呎の地點にキャンプIIIが建てられたが一九二二年のパーティーは此處で手ひどい目に遭つて居るので特に注意を拂ひ、エスキモー人の住居に倣へたドーム型のアークティック・テントが二つ張られた。その各々の直徑は十二呎、高さは八、九呎で八人は樂に寢られる大いさを持つて居る。骨組には八本のアッシュの竿を折り曲げ、これに目方の輕い天幕を內面に支へしめ、外面には、ずつと丈夫な重い外覆を取付けた。通風は扉よりし、天幕の頂上に風拔けを設け、又窓は雲母板を用ゐた。

ノース・コルへの一九二四年のルートは完全に消えて居たが、スマイス、シップトン等に依つてこのコースは作られ、惡場にはステップを刻み、ロープを取付けたので、人夫達の物資の運搬にも先づ安全と見られるに至つた。五月十五日にノース・コル（二二三、〇〇〇呎）にキャンプIVが出來上つた。同二十日にはラトレッヂはこのキャンプに達し、此處を前進根據地とした。首腦部が斯くの如き高處に達したのは今回が初めての事であり、これから六月一日に至るまで約十日の間には一行十四名中の六名乃至十名が常にキャンプIVと此處とは野外電話に依つて連絡し、それよりベース・キャンプと無線に依つて通信し、これよりカタファールを經て、カルカッタと連絡をとる事が出來た。

同じ二十日の日にウィンハリス、バアニー、ボーステッドの三名は十名の人夫を伴つてキャンプVに達せんと試みたが、惡天候の爲に阻まれた。前記の三名及びグリーンは十二名の人夫を伴つて二十二日に再び登攀を試み、一九二四年より更に六五〇呎高き地點卽ち二萬五千六百五十呎（カメットの高さより稍ゝ高し）の高さにキャンプVを設ける事が出來た。元來、ウェージャー及びウィンハリスの兩名は登攀者としては寧ろ補缺の意味で加へられて居たのであるが、ロングランドが駄目になつた人夫に附添つて下に降り、グリー

ンは馴化が充分に達成せられず、ノース・コルへと歸らねばならなかつたので、この二名は甚だ重要な地位に立つ事となつた。グリーンは下降の途中、古い酸素筒を發見し、これを吸入して元氣を恢復し得たが、これが、今回のエキスペディションに於ける唯一の酸素使用の機會であつた。

さて、これから愈ゝ最後の登攀を志す事となり、次の如き計畫を樹てた。即ち二名の第一登攀隊は、支持隊と共に第一夜をキャンプVに過ごし、翌日共にキャンプVIに達し、キャンプVIを建設した後、二人を殘して支持隊は人夫と共にキャンプVに引返へす。キャンプVには第二登攀隊が已に到達して居る事とする。第三日目に第一登攀隊の二名は頂上まで達し、キャンプVまで降り、これと入れ違へに第二隊はキャンプVIに登り、アクシデントに具へる。そしてその翌日に頂上に向ふ。即ち天候さへよければ連續的に二つ或ひは三つの頂上へ向つての登攀が試みられるわけである。斯くして更に物資の供給を試み、次の登攀に具へる段取となるのだ。

この計畫に從つて五月二十四日に第一登攀隊たるスマイス、シップトンはバアニー、ボーステッドを支持隊としてキャンプVに泊つたが、翌二十五日は天候思はしからず、更に一夜を同處に過ごしたが、二十六日も風强く、キャンプVIに達する事は到底不可能なのでキャンプIVに引返へした。途中ラットレッヂ、ウィンハリス、ロングランド、クロフォード及びウェージャーの登つて來るのと出會ひ共に降つた。ボーステッドは休暇の期限が來たのでスーダンに引返へした。

二十七日にウェージャー、ウィンハリス、バアニー及びロングランドはキャンプVに再び登り、二十九日にウェージャー及びウィンハリスはロングランドを支持隊として、キャンプVI（二七、四〇〇呎）に達した。この日ラットレッヂ、クローフォード、マックリーンの三名はキャンプIIIに降つた。キャンプVIは尾根の第一段階の二萬七千四百呎附近に設けられ、ウェージャー、ウィンハリスの兩名を殘して、ロングランドは八人の人夫を伴つてキャンプVに降つた。

三十日に二人は未明に出發して頂上へと向つた。途

中、マロリー、アーヴィン或ひはソマーベルの何れかゞ所持したものと思はるゝピッケルを見出し、第二段階の下をトラバースして一九二四年にノルトンが採つたと略〻同様なルートを取つてクロアールに入つたが、棚岩は雪で掩はれ甚だしく危險であり、時間の不足から止むを得ず引返さねばならなかつた。第二段階の處に引返して、その反對側の所が登れるか或ひはトラバース出來るか否かを調べて來た。同日下より第二登攀隊として登り來つたスマイス、シップトンの兩名と共に三十、三十一の兩夜を過ごした。

六月一日にスマイス、シップトンは第一登攀隊と同じくトラバース・ルートを採つて進んだが、二時間許り前進の後、シップトンは身體の調子惡くキャンプVIへと引返へし、此處に二時間休憩、更にキャンプIVへと降つた。スマイスは唯一人、ノルトンのルートを辿つたが、クロアールの處で、新雪を被つた棚に行當つて引返へさねばならなかつた。六月一日、二日をキャンプVIに過ごして、三日の日に天氣の惡い中をキャンプIVへと降つた。五月二十八日より六月三日までをキャンプVに過ごしたシップトン、バアニーも共に下つた。

さて一行は全部キャンプIIIへと一旦降つて今後の處置に就いて研究した。已にモンスーンが初まり、一行は何れも多少ともへばり、スマイスを除いては皆が輕度の心臟の擴張を來たして居るのでベース・キャンプへと歸つた。

更に第二回目の計畫を立てたがそれは實行せられずに終つた。六月十三日にベース・キャンプを出發し、一行の大部分は六月十六日キャンプIIIに到着したが、朝の中は天氣はいゝが、夕刻には毎日雪が降り、ノース・コルは雪崩の危險が多く、再びベース・キャンプにと引返した。エヴェレスト委員會は已にモンスーンも初まり、一行の疲勞も大きく、物資の供給も不足となつて來たので、六月二十七日付で歸還命令を發した。それに對する受諾の電報は七月一日付でラットレッヂから返事があり、一行は八月五日ボムベイ發で英本國に引揚げる事となつた。

ラットレッヂは失敗の原因は、單なる登攀上の困難

にありとして居るが、委員會の意見としてはこれに加ふるに新雪と、恐るべき疾風とが數へられるであらうとして居る。

一九二四年のリーダーであつたノルトンの考へでは、ラットレッヂの出發前に二人で語り合つた事であるが、ノルトンは若し失敗するとすれば、惡天候に依るか、或ひは人夫の關係で充分に高き所にキャンプVIを設ける事が出來ぬか孰れか以外にはないと考へた。その第二の方は實に見事に成功して、一九二四年よりは七〇〇呎もより高い地點に、一九二四年より五日早く建設する事が出來て實に驚嘆に價したが、第一の天候の方で失敗して仕舞つた。一九二二、一九二四及び一九三三の三回のエキスペディションにかける天候狀態を夫々五月及び六月に分つて考察して見ると、一九二二年には五月中は比較的良好で、六月に入ると直ちにモンスーンが初まつた。一九二四年には五月中はずつと天氣が惡く、六月に入ると却つてよくなり十五日まではよい天候に惠まれた。一九三三年は五月はずつと惡く、六月に入ると直ちにモンスーンが初まり、一九二二年と一九二四年の惡い方だけを組合はせた結果となつた。卽ち一九二四年には二萬七千呎以上の登攀の場合には天候がよかつたのであるが、本年はその場合にも五月と同じ惡い天候であつたのだつた。何れの側からファイナル、ピラミッドに取付くとしてもスラブが新雪で掩はれた場合には登攀は殆んど全く不可能となり、これに恐るべき强風が加はれば、益ゝ以て危險となる。

ウィンハリス、ウェージャー、スマイス、シップトン等の强力なるパーティーを以てすればこれに籍すに一九二四年の六月の天候があれば、頂上は必ず極められたに違ひあるまい。今年のエキスペディションの一行から聞きたい事は、二萬七千四百呎と云ふ驚くべき高さまで人夫を如何にして連れ上げる事を得たか？ シムラ氣象臺は一九二四年及び一九三三年の天候を例外的なものと見做すや？ ノルトンのルートに代るに第二段階よりしては如何？ ノルトンのルートのヴァリエーションを試みて見たか？ 苦痛を感ぜずに達せられる高さが一回のエクスペディション毎に高くなつて

居るが今年も更に高くなつて居るか等の事項である。然しチベット政府は更に今後もエクスペディションを許可するであらうかこれが問題であるとノルトンは述べて居る。

今回の登攀の失敗は當事者は技術上の困難に重點を置き、他方委員會は惡天候に因る事を强調して居るが、快晴無風の日は斯る高處に在つては望み難く、これより頂上に近づくに從ひ西風は益ゝ强くなる事は明白であり、登るべきルートが新雪に掩はれるチャンスも又決して尠くない事を思へば、一日の行程は甚だしく局限せられねばならないが故に、キャンプVIより直接に頂上への登攀は殆ど不可能であり、更に高いキャンプVII、キャンプVIII、キャンプIX等が當然要求せられるべきである。然かも天候及び物資運搬の能力と關聯して斯るより高きキャンプを建設する事、自體が已に甚だしく困難である事は明かであり、來るべきエクスペディションに於ては精々キャンプVIIが二萬八千呎に設け得らるゝであらうとのみしか豫想出來ない。然して頂上との間には少くとも更にもう一つの中間キャンプを必要とするものと考へれば來るべき試みに於てもエヴェレストは依然その頂きは極められないであらう。

强風と惡天候と惡場とを充分に考慮に入れた上で計畫を建てる事は、一面キャンプを小刻みに設けて行く事を要求するが故に、物資運搬上の煩雜さを增大し登攀の進行速度は却つて遲くなり、從つてモンスーンに捉へられる機會は增すわけで、此處に大きな惱みが生じて來る。さればとて、時期を早めて出發する事は、途中の狀態が未だ冬の季節を脫しきらない以上不可能であり、これは著しく經費を要する事ではあるが、前年の秋にカンパ・ヅォング或ひはロンバックのベースキャンプまで物資の運搬を終はり、一行はカンパ・ヅォング邊りで越年して、充分なる馴化を體得し、翌年三月下旬頃から行動を開始したらどんなものだらうかとも考へられる。然しかうまでしても其の後の進行速度が惡天候の爲めに防げられたら何にもならない事になる。

來るべきエクスペディションこそコミティーの頭腦と手腕の見せ場であらう。

（渡邊　漸）

本邦山岳遭難要項輯錄

（自一九二三年至一九三三年九月）

瀨木三雄編

序言

一、 本輯錄は一九二三年より一九三三年九月に至る本邦山岳遭難の各例に就て次の事項を輯め記したものである。

遭難者氏名（年齢）所屬團體　職業（同行者數、本人を算入）

一、遭難の時日（屍體發見若くは死去の時日）

二、遭難の個處

三、遭難の種類、原因

四、遭難參考文献、報告書、追悼出版物、遺稿集

二、 本輯錄を作成するに當つては、確實な文献のあるものは成るべく之に準據するに努め、參考文献無きか、或は存在するも小生の手に入らず、若くは看過せるものに就ては止を得ず新聞記事に據つた。新聞記事を寫すは小生の本意としない處であるが、各件に就て關係者に問合はせる事は筆者個人としては殆んど不可能に近い。新聞の報道區々にして取捨に迷ひ、參考すべき文献なき數例の遭難に就ては、小生より關係者に直接照會し、其の大部分より好意ある回答を得た。記して以て厚く謝意を述ぶる次第である。

四、 練習場に於けるスキー遭難、又はスキーレースの不幸は原則として此を記載しない。然し斯る中には山岳遭難との區別明確を缺く場合も又多い。適宜に取捨選擇をなしたれど妥當を缺く場合又少くないと思はれる。火山の爆發による登山者災害も記載するを至當と信ずるも、氏名明瞭を缺く事多く、本輯錄には省略する事にした。

五、 筆者自身も本輯錄には尙多數の誤謬脫漏のあるべき事を信ずる。然も此の不完全なる報告を敢て提せんとするは、本輯錄が完全なるものの出現に對する一つの刺戟、若くは一つの階梯とならん事を私は希望するが爲にして、幸に此の意圖が幾分なりとも達成せられる事あれば、編者の幸甚之に過ぐるはない。遭難の實態を究め、其の反覆を防止してこそ、始めて身を以て訓へを殘せし先人の靈に應へる事が出來るのであつて、斯る目的の爲に、單にかゝる要項の輯集に留らず、詳細正確な記載の出でん事を切に祈つて止まない。

六、 本輯錄の誤謬脫漏を適當な機關に發表せられるか、若く

は編者に教示の勞を賜れば、筆者の甚だ光榮とする所である。

（一九三三、九、三〇）

一九二三

一、板倉勝宣（二七）　（同行三名）
　一、一月一七日午前〇時五七分死去。
　二、立山、松尾峠附近。
　三、吹雪——凍死。
　四、山行（槇有恒）。登高行四、五年。山とスキー二年二六號追悼號。板倉勝宣遺稿。山と雪の日記。

二、大塚弘二（二六）　海軍省製圖課　（同行二名）
　一、一一月二五日以後不明（一二月一日屍體發見）。
　二、鳳凰山、大棚澤。
　三、吹雪——疲勞——滑落凍死。
　四、山（甲斐山岳會雜誌）一年一號一九二五年。

三、藤江永次（二三）
　一、一二月二七日負傷（一二月三一日於札幌死去）。
　二、ニセコアンヌプリ。
　三、スキー滑降中左眼重傷、治療中腦膜炎併發。
　四、山とスキー四年。

一九二四

一九二五

四、山口藤吉郎（一八）　慶應大學豫科生　（同行三名）
　一、一〇月二五日以後不明。
　二、金峯山、御岳金櫻神社奥ノ院附近。
　三、墜死。

五、三枝茂雄（二八）　東京電燈社員
　一、一二月二八日（翌年一月三日屍體發見）。
　二、藏王山、熊野岳、三角點西方。
　三、凍死。

一九二六

六、吉村恭一(二二)　第一高等學校生徒　(同行三名)

一、五月一六日。

二、八ヶ岳、赤岳。

三、滑落墜死。

七、牛奥富昌(二二)　大倉商業學校生徒　(同行案内一名)

一、七月一二日(八月一三日屍體發見)。

二、南アルプス、間岳頂上西方。

三、墜死(帽子を取らんとして?)。

八、清水福三郎　(同行三名)

一、七月一八日。

二、八ヶ岳。

三、不明(墜死?)。

九、松田多計士(二五)　外務省電信課　(同行三名)

一、七月二九日。

二、戸隠山、八方ニラミ附近。

三、風雨——疲勞凍死。

一〇、井上金三(二一)　三高山岳部員　(同行五名)

一、七月三一日午後四時遭難(八月一日午前二時死去)

二、前穂高北尾根第四、五峯間涸澤側雪渓。

三、墜死(グリセード中、クレヴァス墜落岩石衝突)。

四、三高山岳部報告六號。

一一、新井春吉　東京

一、八月一六日以後不明。

二、鳳凰山。

三、風雨。

一二、黒澤米太郎(四八)　案内人　(同行多數)

大橋　浩(三〇)　同行寫眞師

芳賀　ソノ(一八)　福島縣福島女子師範學校生徒

菊地　ハツ(一七)　同

一、九月一七日。

二、吾妻山、五色沼附近。

三、風雨——疲勞凍死。

一三、西田健哉(二一)　早稲田高等學院生徒　(同行三名)
吉野玉雄(二一)　同
一、一〇月一九日。
二、會津駒ヶ岳。
三、濃霧降雪——疲勞凍死。
四、吉田素(同行生存者)氏手記(新聞)。

一九二七

一四、村越忠雄(二一)　三越デパート店員　(單獨行)
一、五月一三日午後七時(推定)(五月二二日屍體發見)
二、甲武信岳より東澤に派出せる山稜中腹。
三、凍死。
四、山(甲斐山岳會雜誌)三年三號一九二七年。

一五、石井　元(三三)　東京府立第一商業學校教諭
福室順之輔(一八)　同　生徒　(同行多數)
一、八月一日。
二、梓川、一の俣附近。
三、溺死(石井氏、丸木橋より轉落せる福室少年を救はんとして共に溺る)。

一六、石黑光興(二一)　京都帝國大學學生　(同行二名)
一、八月四日。
二、穗高岳(奥穗と穗高小屋との間)。
三、墜死。
四、サンデー毎日。

一七、佐藤嘉三郎(二五)　上伊那郡　(同行三名)
一、八月一六日。
二、仙丈岳より瀧ヶ澤に降る途中。
四、風雨——墜死。

一八、小宮山仙太郎　山梨縣中巨摩郡先達
一、八月二二日。
二、富士山八合目須走下山中。
三、岩石落下壓死(?)。

一九、家村貞治(二二)　早稲田大學山岳部員(同行一一名)
(六月二五日屍體發見)
上原武夫(二〇)　同　(六月一〇日　同　)

關　七郎(二二三)　早稲田大學山岳部員
(六月五日　屍體發見)
山本勘二(二二二)　同　(六月一〇日　同　)
一、一二月三〇日午前一一時。
二、針ノ木、籠川谷赤石澤出合附近。
三、雪崩埋死(乾燥新雪雪崩)。
四、リユックサック六號。籠川谷遭難の眞相に就て。
スキー登山(舟田)。

一九二八

二〇、大野勝郎(二五)　鐵道省技手
一、一月二四日午後三時負傷、同日一〇時死亡。
二、五色スキー場附近。
三、スキー杖を右眼に突き差す。

二一、大島亮吉(三〇)　三田登高會員　(同行四名)
一、三月二五日午前一一時五〇分(六月一日屍體發見)
二、前穂高岳北尾根第四峯。
三、墜死。
四、登高行七年。山(研究と隨想)。

二二、井原　清(二八)　東京
一、不明(三月二八日屍體發見)。
二、妙高山麓燕溫泉附近。
三、凍死(推定、或は雪崩?)。

二三、小池　孝(一八)　成城高等學校生徒
一、七月一七日。
二、大天井岳牛首附近。
三、風雨——凍死。
四、孝(小池忠一編)。

二四、高橋宗吉(三五)　北安曇郡北城村　案内人　(同行三名)
一、七月二六日正午頃。
二、五龍岳八峯。
三、墜死(崖崩れに驚きザイルを手放す?)。

二五、高築文雄　日本大學學生　(同行二名)
一、七月三一日(八月四日屍體發見)。

二、白馬鑓岳。
三、風雨——凍死。

二六、喜多村忠雄(一九)　松本中學校五年　(單獨行)
一、八月二日屍體發見。
二、針ノ木、北葛澤。
三、凍死。

二七、速水貞治(二四)　横濱中央電話局員　(同行四名)
(屍體未發見)
茅根　一(二四)　同　(三〇年五月二六日屍體發見)
一、一〇月五日以後不明(同月二一日捜索打切り)。
二、甲武信岳。
三、風雨——疲勞凍死。

二八、丸山錠太郎(三三)　松本　(同行二名)
一、一一月一一日。
二、燒岳(中の湯方面森林迷入)。
三、飢餓凍死。

一九二九

二九、宮澤勝平(一五)　諏訪郡川岸村小學校生
一、七月一六日午前九時。
二、八ヶ岳。
三、墜死(石に躓き轉落)。

三〇、玉野莊太郎(二三)　金澤醫大附屬藥學專門部生徒
(單獨行)
一、七月二二日(推定)(八月二日屍體發見)。
二、穗高岳、屏風岩。
三、雷雨——墜死(推定)。

三一、大森謹平(五三)　前安城農林學校々長
一、七月二六日。
二、合戰澤附近。
三、雷雨——心臟麻痺。

三二、渡邊芳太郎(二七)　東京
一、八月二〇日以後不明。

二、甲斐駒岳。
三、不明。

三三、中澤達夫(二六)　東京、第一銀行員　(同行二名)
一、九月一九日午後八時。
二、北岳より大樺池に降る途中、小太郎尾根に道を失ふ。
三、風雨——疲勞凍死。
四、山に眠る(中澤秀夫編)。

三四、二木　確(一七)　松本第二中學生
中村　統(一七)　同
一、九月二八日(一〇月一日屍體發見)。
二、美ヶ原(小縣郡武石村山中)。
三、霧と風雨。

三五、平泉德太郎　早稲田大學學生
一、一〇月三日。
二、妙義山。
三、墜死。

三六、太田敬三(二二)　東京帝國大學學生　(同行三名)
一、一二月二六日遭難(二八日朝死去)。
二、岩菅山、發哺溫泉附近。
三、疲勞、飢餓凍死。
四、山岳、二五—一。

一九三〇

三七、坪田進太郎(二二)　北海道帝國大學學生
Y・M・C・A會員　(同行四名)
一、一月三日午前四時死亡。
二、北海道錢函峠附近。
三、疲勞凍死。
四、北海道帝國大學新聞(一月二〇日)。山岳、二五—一。

三八、野村　實(二三)　慶應大學山岳部々員　(同行五名)
一、一月六日午前一〇時遭難(一一日午後四時五二分野呂川深澤出合死去)。
二、北岳、大樺澤。

三、雪崩(板狀雪崩)。
四、登高行八號。山岳、二五―一。南アルプスの雪に消えし實(野村德七氏)。みのる。

三九、窪田他吉郎(三〇)　東大スキー山岳部出身
松平日出男(二九)　理化學研究所員　東大大學院學生　(同行六名)
田部正太郎(二七)　東大スキー山岳部出身　內務省勤務
土屋　秀直(二一)　慶應大學々生
佐伯　福松(四〇)　芦峅寺、立山案內人組合案內人
佐伯　兵治(二五)　同　同
一、一月九日午前四時二〇分(一月二〇日發掘)。
二、劔澤、三田平小屋。
三、雪崩に小屋埋沒、壓死。
四、銀嶺に輝く(東京帝大スキー山岳部)。劔澤に逝ける人人(山の會)。山岳、二五―一。立山劔澤遭難について(四家)。山は知る(土屋氏)。

四〇、能登秀雄(一八)　四高旅行部員　(同行七名)
一、一月一三日午前八時五〇分死去。
二、醫王山。
三、疲勞凍死。
四、ベルクハイル六號。山岳二五―二。

四一、津田節三(二三)　(同行一〇名)
一、二月九日。
二、鉢伏山。
三、雪崩埋沒死。
四、R・C・C報告四號。

四二、三村信男(三三)　奈良郡山中學校教諭　(同行七名)
土肥嘉典(一六)　同校山岳部員
松本太郎(一七)　同
一、四月二日。
二、伯母子岳、榎谷。
三、疲勞凍死。
四、山嶽(大和山岳會)六號。噫山の犧牲(大和青年協會)。

四三、上林　盛二(二一)　三高山岳部員(六日屍體發見)　(同行三名)

川村　潔(二〇)　三高山岳部員　(七日屍體發見)
長谷川作郎(二〇)　同　(六日　同　)
一、五月一日午前一一—一二時(推定)。
二、片貝川南又(土倉谷出合より稍上流左岸—推定)。
三、河中に轉落、溺死(アンザイレン)。
四、山岳二五—二。三高山岳部報告八號二冊。山彦(上林盛二君を偲びて)上林盛一編。

四四、倉持良治(二二)　山形高校山岳部員　(同行四名)
一、七月一三日午前九時二五分(一五日屍體發見)。
二、立山、ブナ平上。(稱名川斷崖に墜つ)。
三、墜死(夜間行進)。
四、岳聯報告二號。

四五、江崎甚六(二六)　東京登山クラブ員　(同行五名)
一、七月一六日午前八時三〇分。
二、餓鬼岳、乳川。
三、墜落溺死(丸木橋より)。
四、山の旅(東京登山クラブ)一卷追悼號。山と旅九五號(佐藤勇吉)。

四六、加藤景一(二六)　京都帝國大學旅行部遠足班
一、七月一七日午前一〇時頃。
二、黒部、折尾谷。
三、墜死。
四、嗚呼景一よ(加藤秀一編)。

四七、大月圓次(二〇)　大阪商大豫科生徒
一、七月二〇日屍體發見。
二、紀和國境、下北山村七色附近。
三、墜死。

四八、杉浦武夫(二七)　上田營林署員　(同行三名)
一、八月五日。
二、小槍。
三、墜死(頭蓋骨折卽死)。

四九、中島政吉(五八)　東京　(同行五名)
一、八月七日。
二、木曾御岳山、頂上附近。
三、墜死(夜間行進——滑落)。

五〇、廣崎秀雄(二一)　九州帝國大學學生　(同行二名)
渡邊邦彥(二一)
一、八月一一日。
二、九州、久住山。
三、荒天——疲勞凍死。
四、兩氏遭難報告(筑紫山岳會)。

五一、大塚吉太郎(二六)　東京野步路會員
一、八月二二日朝(推定)(九月四日屍體發見)。
二、乘鞍岳、不動岩附近。
三、荒天——飢餓——凍死。

五二、三宅恒夫(二二)　同志社大學學生
一、九月一日午前八時。
二、劔澤、三田平附近(?)。
三、墜死。

五三、有勳格到(一七)　濟々黌生
一、九月七日。
二、阿蘇山、天狗岳。
三、墜死。

五四、岡　一男(二五)　慈惠醫大山岳部員　(同行七名)
一、十月十四日午前九時二〇分。
二、甲斐駒岳、六方石附近。
三、墜死(木の根に躓く?)(腦底骨折、頸推骨折)。
四、岳聯報告二號。JOCH 一號。山岳二五—三。母故、路(岡家)。

一九三一

五五、蝶名林隆二(一八)　新潟縣三條中學校生徒　(同行六名)
一、三月二日(四日屍體發見)。
二、粟ヶ岳、三十三丈瀧斷崖下。
三、吹雲—凍死。(スキー行)。

五六、大島秀夫(一六)　東京高師附屬中學山岳部一行　(同行二〇名)
福島　正(一八)　同
高野茂藏(六一)　案內人(鑛山山林監視人)
一、四月一日午後五時以後。

二、佐渡妙見山。
三、降雪荒天――疲勞凍死。
四、山岳二六―三。

五七、木代不二夫(二三)　日本大學山岳部員　(同行三名)
一、四月二八日午後三時。
二、白馬岳雪溪。
三、荒天スキー滑降中行方不明。

五八、中野克明(一八)　早稲田高等學院生徒　(同行三名)
高師附屬中學山岳部出身
一、七月一七日午前九時二五分(一八日午後六時一八分於上高地死去)。
二、前穂高岳、北尾根第四峯。
三、墜死(足場の崩壊)。
四、山岳二六―三。追憶(克明會)。日本山岳遭難史。

五九、石倉初男(二二)　京都帝國大學々生
一、七月廿二日以後不明(八月二十日屍體發見)。
二、甲斐駒岳、摩利支天附近。
三、墜死。

六〇、大村作郎(二五)　山形荷札會社　(同行三名)
一、七月十九日(二十日屍體發見)。
二、月山。
三、風雨。

六一、竹内廣吉(四九)
一、七月十九日。
二、富士山御殿場口、八合目。
三、巨岩落下(?)。

六二、牛田佐市(五一)　駒城村案内組合案内人
(同行明大生三名)
一、七月二二日(二五日屍體發見)。
二、小澁川、北澤と高山澤との中間。
三、徒涉中顚倒溺死。
四、山岳二六―三。爐邊五號。

六三、山田博二(一九)　大阪　(同行三名)
一、七月二二日。
二、槍岳東鎌尾根、喜作新道新舊分岐點。
三、滑落墜死。

六四、蓑谷勝次(一七)　斐田中學校生徒

一、七月二六日。

二、黑部五郎岳附近。

三、風雨——疲勞凍死。

六五、鈴木千代吉(二四)　東京遞信局員

一、七月二六日(二八日屍體發見)。

二、日光白根山。

三、墜死。

六六、久保田久孝(二二)　東京

一、七月(遭難日不詳)。

二、梓川。

三、溺死。

六七、小林義夫(二四)　日本山岳會々員　三省堂勤務　(單獨行)

一、八月三日(推定)(八月一五日屍體發見)。

二、大井川西俣マンボウ澤。

三、墜落(溺死)。

四、山行—小林義夫追悼號(三省堂山行會)。山岳二六—三。

六八、柿本喜代造(一九)　高山町

一、八月一四日遭難(一七日午前〇時死去)。

二、前穗高岳。

三、墜落重傷——四日間昏睡後死亡(腦震盪?)。

六九、川保義重(四六)　あけび會々員　野步路會々員　(單獨行)

一、九月二九日(推定)(一〇月六日屍體發見)。

二、荒川岳荒川小倉附近。

三、暴風雨——疲勞凍死。

四、あけび追悼號(昭和六年)。山岳二六—三。

七〇、福島雄一(二三)　三越山岳部員　(同行二名)

一、一〇月二五日以後不明(一一月一六日屍體發見)。

二、茂倉岳北突坂澤。

三、滑落墜死(草付急斜面——瀧に轉落)。

四、岳(三越山岳部)四輯。

七一、井戸廣正(二二)　大阪工業大學山學部員(同行二名)

中川定治(二三)　大阪工業大學山岳部出身者

一、一一月三日以後不明(翌年八月一日屍體發見)。

二、木曾駒岳、奈良井御料林、白川谷。

三、疲勞凍死(推定)。

四、木曾駒に友を尋ねて(工大山岳部)。木曾駒遭難事情(同)。山岳二七—二。

七二、石戸　宏(二五)　京都府立醫大山岳部員　(單獨行)
日本山岳會々員

一、一一月四日(一七日屍體發見)。

二、穗高岳、瀧谷、雄瀧附近。

三、滑落死(推定)。

四、山旅(京都醫大山岳部)三號。登山嚢。山岳二七—二

一九三二

七三、黑澤正好(二〇)　浦和高等學校生徒　(同行多數)

一、二月二三日午後三時三〇分。

二、秩父、兩神山。

三、墜死(腦底骨折)。

四、山岳二七—二。山小屋六號。

七四、金光隼人(二四)　神戸驛勤務　(同行三名)
塚田清治(三七)　有明口登山案內者組合、案內人

一、三月二〇日。

二、常念岳頂上附近。

三、吹雪——凍死。

四、山岳二七—三。登山とスキー九號。

七五、三谷慶三(二八)　日本山岳會々員、R·C·C會員。
神戸徒步會々員　(同行三名)

一、三月二二日。

二、大槍小屋。

三、凍死。

四、ペデスツリアン(一四〇號)。山小屋八、九號。登山とスキー九號。

七六、山埜三郎　R·C·C會員　北海道帝大豫科生(同行五名)
中山彦一(四三)　有明口登山案內組合案內人
高橋益司(三五)　有明口登山案內組合案內人

一、三月二九日午後五時五〇分。

二、常念岳一ノ澤(乘越澤合流點)。金光氏等救援途中。

三、雪崩(乾燥新雪々崩)埋死。

四、山岳二七—二。登山とスキー九號。

七七、佐野長吉(四五)　人夫

一、七月一四日。

二、富士山大宮口、七合目。

三、風雨——凍死(荷物運搬中)。

七八、鈴木郁夫(二二)　三菱社員　(同行三名)

一、七月一九日午後三時。

二、仙丈岳。

三、病死。

七九、木村直臣(二三)　(九月十一日屍體發見)(同行三名)

島倉義男(二一)　(屍體未發見)

一、八月二一日以後不明。

二、大門山、犀瀧附近。

三、荒天——疲勞凍死。

四、山岳二八—二。

八〇、蜂谷博俊(一九)　兵庫縣立神戸高商山岳部(單獨行)

一、八月二四日以後不明(九月九日屍體發見)。

二、穂高岳瀧谷。

三、墜死。

八一、町田敏男(二九)　理化學研究所員　(單獨行)

一、八月二四日午後(推定)。

二、只見川、仕入澤出合下。

三、溺死。

四、山岳二七—三。

八二、泰　正二(二〇)　大阪管見社登山部　(單獨行)

一、一〇月四日以後不明(翌年七月二一日屍體發見)。

二、前穂高岳、北尾根、涸澤側。

三、不明(墜死?)。

四、ケルン四號。

八三、土屋　勇(二七)　三田登高會員　(同行六名)

一、一一月二七日午後一二時一〇分。

二、富士山八合目大澤。

三、滑落死(顱頂骨複雜骨折)。

四、山岳二八—一。

一九三三

八四、朝日榮藏(二一四)　大阪　(單獨行)

一、一月二日以後不明。
二、大和、國見岳附近(推定)。
三、不明(凍死?)。

八五、井上養之助(四二)　神戸　(單獨行)

一、一月一六日以後不明。
二、木曾御嶽山。
三、不明。

八六、柏源一郎(三八)　東京　(單獨行)

一、一月一七日(推定)(三月一二日屍體發見)。
二、藏王山、馬脊附近。
三、吹雪——凍死(推定)。
四、山岳二八—一。

八七、松枝角二(四二)　東京　(單獨行)

一、三月六日以後不明(五月一六日屍體發見)。
二、吾妻山。
三、凍死(推定)。
四、山岳二八—三。

八八、鶴本政之助(二〇)　三越金澤山岳部員　(同行四名)

一、三月一八日。
二、醫王山。
三、凍死。

八九、村岡弘三(一九)　大阪商大高商部生　(同行四名)

一、四月二日(翌日屍體發見)。
二、氷山、小豆轉し(スキー行)。
三、滑落凍死。
四、ベデスツリアン一五四號(村岡義雄氏)。ケルン一號。

九〇、須田信太郎(二三)　早稲田大學山岳部員

一、四月六日、松本病院にて死去(急性肺炎)。
二、鹿島側より鹿島鎗に登山中罹病。

九一、町田貞雄(三一)　長野　(同行五名)

一、六月三〇日。
二、妙高山。
三、墜死(頭蓋骨折)。

九二、加藤才助(二〇)　早稲田大學山岳部員
一、七月一二日午前一一時頃(同日午後八時死亡)。
二、穗高岳、涸澤槍。
三、落石——墜死。

九三、五十嵐藤之進(六〇)　栃木縣
一、七月二二日午後五時。
二、富士山吉田口、七合目。
三、心臟麻痺。

九四、藤澤德行(二一)　大阪商大山岳部員　(同行三名)
(八月一九日屍體發見)
中島龍平(一八)　大阪商大山岳部員
(八月九日　屍體發見)
松永金作(二一)　同　(同　九日　同　)
一、七月二五日。
二、劔澤、長次郎出合附近。
三、墜死(アンザイレン)。

九五、淺田信次(二八)
一、七月二五日。
二、立山室堂。
三、病死。

九六、齋藤通利(二三)　中央大學々生　(單獨行)
一、八月一日以後不明。
二、穗高縱走中。
三、不明。

九七、丹後吉春(二五)　東京第七十七銀行員
一、遭難日不明(八月二〇日死體發見)。
二、雲山。
三、墜死(?)

九八、平田吉次郎(三一)　東京鐵道病院醫師　(單獨行)
一、八月二九日以後不明。
二、不明(劔澤、黑部方面?)。
三、不明。

吾妻山に於ける松枝角二氏の遭難顚末記

〔本報告は松枝氏の義弟に當たられる原田信次郎氏が、親しく捜索に參加せられての經驗に基いて書かれたもので、會員林悌助氏の御好意により本誌に載錄するを得た。玆に改めて兩氏に深く感謝する次第である。　編輯係〕

松枝角二氏は昭和八年三月六日五色溫泉より沼尻に向け吾妻山單獨縱走を企て途中遭難す。以下其の顚末を概報する。

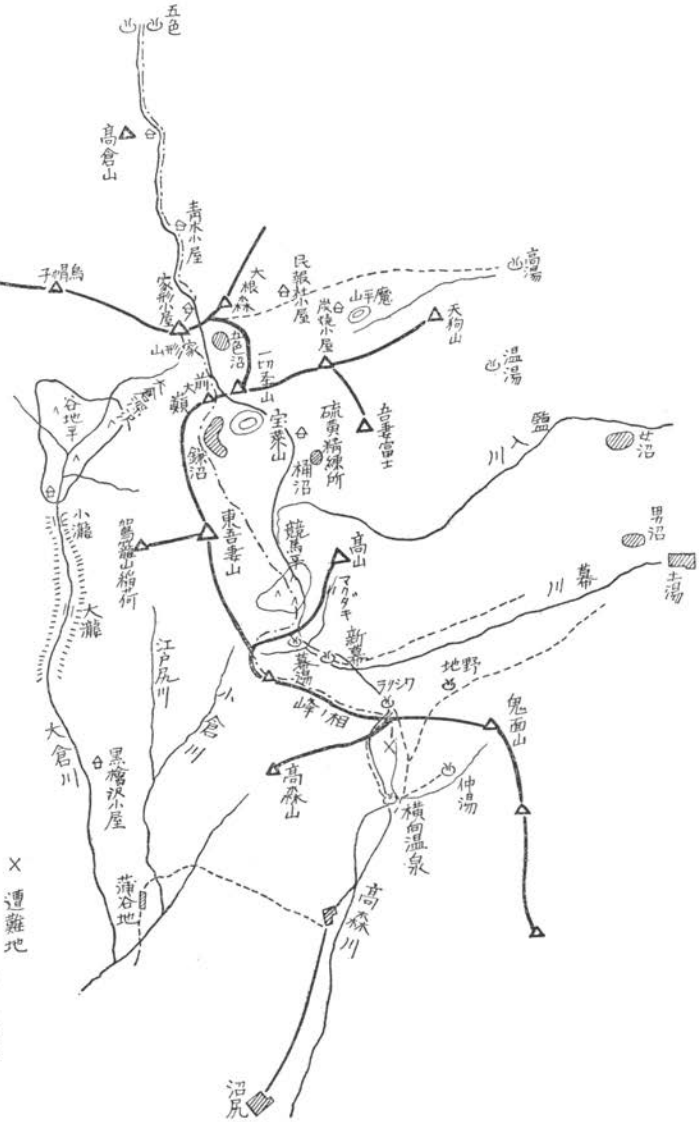
出發に當つて比較的氣輕に輕裝であつた事と、多少の金品を所持し、而も出發以後の消息が全然不明の爲、新聞等には種々誤れる臆測による記事が見えたが、出發より遭難迄の眞相は次の通りである。

自宅出發より遭難捜索に出發迄

三月一日、朝八時兄は夫妻にて上野出發上越岩原スキー場に赴き同所に一泊、翌日姉の鄕里足利に立寄り、四日朝單獨にて五色に向ひ同夜宗川旅館に投宿、五日朝沼尻に向け出發したが、途中濃霧と吹雪の爲斷念して高倉山附近より五色に引返した。翌日再び午前七時旅館を出發し、九時頃青木小屋に到着。居合せた宿の番頭作松に幕ノ湯の狀況を尋ね、少憩の後十一時頃家形小屋に至り、(青木、家形間に二時間を要したとは思はれないが、家形到着の時刻は獵師の言にて信を置き難し。)當時小屋を根據に狩獵中の浪岡、國枝他一名と共に茶を呑み其の際注意を受けたが、充分自信ある旨を語つて十一時半頃同處を出發以後消息全く不明となつた。

當日の天候は五色附近は終日薄曇、チラ〳〵雪の晴間には折々青空も見え、風も强くはなくガスも深くは込めず當時としては惠れた天候と云ふ事であつた。只々家形附近は前記の獵師等の話によると、三時頃より惡化し西の强風吹き荒び獵を中止して小屋に歸つた程であつたとのこと。また沼尻方面は五色と略ゝ同樣で夜には十二、三日の月が見られた位であつた由。

積雪の狀態は前日來の新雪五、六寸、ラッセルにも左程苦しむ程ではなかつたと云ふ話であつた。


五色
高倉山
青木小屋
家形尾
大根森
民報小屋
魔手山
天狗山
高湯
温湯
一切経山
色沼
宝来山
硫黄精錬所
吾妻富士
川入
谷地平
小瀧
大瀧
鎌沼
東吾妻山
鷲羅山稲荷
横沼
鏡馬平
高山
マクダキ
新幕
幕湯
川幕
土湯
男沼
女沼
地野
ヲシカ
相峰
鬼面山
江戸瓜川
小倉川
大倉川
高森山
黒檜沢小屋
横向温泉
仲湯
蒲谷地
高森川
沼尻
×遭難地
遭難者ノ歩ミタト想像サレル「コース」
コース

吾妻山附近

捜索の概要

唯さへ困難なる冬山の捜索に加へて、遭難後捜索隊出發迄の時日の經過と惡天候、全く此の捜索を絶望的のものとした。兄は足利出發に際し、「沼尻到着後は盤梯山に登る豫定であるから歸京は七、八日頃とならう、但し天候の都合により二三日は遅れるかも知れぬ。」と云ひ殘し、且つ青森在職以來スキーにも冬山に充分の經驗と自信とを有して居た事であり、又出し抜けの縱走の客に慣れぬ宿も氣が附かなかつた爲、五日歸宅した姉も九日頃迄遭難等は夢にも思はなかつた。併し豫定より二日遅れた事と、何の便りも無いのが多少の心懸りとなつたので、九日上京した私と相談の上幸ひ大崎署長津崎氏が親しい友人關係であつたので、十日午前十時頃氏に御願ひして五色及び沼尻に警察電話で照會した結果、同日午後七時頃五色を六日に出發した事實が判明したが、沼尻方面は電話線の故障の爲消息が確實に判明したのは翌日の正午頃であつた。其處で不取敢、叔父原田保之助、私、弟の三名及び急を知つて驅付けた兄の友人和田政吉、村田勇兩氏に御願ひし、其れに大崎署より長田刑事都合六名其の夜十一時上野より五色に向け出發した。

手懸りとしては出發時の模樣及び獵師の話が唯一の頼みであつたので、捜索も五色を本據とするのが順當と思はれたが、遭難地點は沼尻に近いとも想像されたので和田・村田兩氏には途中より沼尻に廻つて戴いて警察及びスキー倶樂部に捜索隊の組織を依頼する事とし、私達四名は途中福島署に寄つて其の後の詳報を聞き、三月十二日朝八時頃五色宗川旅館に到着した。同じく捜索の爲來色された米澤署員三名及び宗川日出夫氏等と會し種々の話を聞き、一應の捜索計畫をも立て十二時五色出發二時青木小屋に到著した。此の時迄に判明せる事實及び報告は次の如し。

一、當人は自宅出發前、横向、野地溫泉に往復葉書を以て附近の地形及び旅館の狀態を問ひ合せた。

二、出發前宿の番頭より種々注意を受けたが、充分自信ある旨を語つて居た。尚出發後青木小屋にて作松に精練所迄の道及び幕ノ湯に人無きかを確めた。

三、家形小屋の獵師は出發後、間もなく沼尻へのコー

スを離れた、俗に云ふ「ガンチャン落し」を眞直に家形の頂上に登つたシュプールを認め、尙一人の獵師は小屋への歸途三時頃、家形の頂上より大倉、深澤谷地平方面に滑降せるシュプールを認め恐らく自己の樏の跡を慕つて道を誤つて深澤より谷地平に降つたものと思はれると語つた。只此の獵師の話は當人が非常に忙しく直接會へなかつたので、警察に依賴して充分問ひ合せたのであるが、時間其の他に於ても如何にも不明瞭であり、又其の間種々の誤傳もあつて、反つて搜索を迷はすに役立つたのみであつた。

四、沼尻方面よりは三月八日同地の小澤新之助、西村次郎の兩氏がコースに赤布を付ける爲、幕ノ湯精錬所を經て靑木に至つたが、幕にも精錬所にも人の入つた形跡無く、又自分等の通つたコースを橫切つたシュプールを見なかつた。同じく九日には沼尻の河部某氏は客を案內して靑木に縱走したが何等手懸りとなる可き遺留品も形跡をも見なかつたと。

五、沼尻駐在所の調査によれば、野地、橫向、土湯、溫湯高湯附近には何等降つた形跡無し。

六、當人の携行品としては宿で特別に用意せる樣子の無い所より想像すれば食糧は多くて漸く二日分。服裝は毛のシャツ及び褐色の毛の薄いスキー服、黑セルヅボンの外、防寒具としてはやゝ厚手のジャケツ、チョッキ各一枚の外、着代へのシャツ一枚を持つたに過ぎなかつた。他の携帶品としては種々のスキー用具の外預金通帳とランタン一個、吾妻附近の五萬分の陸地測量部地圖、ルックサックは白の小型であつた。

以上の知識を根據に、前日福島スキー倶樂部を率いて登山せる宗川榮吉氏及び五色駐在の中山巡査等の意見により、獵師等の話が事實なれば(多少とも見通しが出來たとすれば、深澤に入るとは思はれないのであるが、)一度深澤に降り氣が付いて引返し一切經を越えて鎌沼或は東吾妻東麓附近で吹雪に會つたか、或は其のまゝ谷地平に降つて遭難したものと思はるので、遭難地を大體大倉、深澤及び谷地平、一切經、鎌沼附近、東吾妻の東麓及び幕ノ湯附近の三方面と推定し東吾妻以南は微溫湯より登る筈の庭坂の消防及び沼尻の搜索隊

に委せ我々は主として他の二方面を捜る事とした。

六日以來の天候は七日吹雪、八日やゝ良、九日雪、十日より吹雪、即ち十日頃より惡化し遭難當日よりの積雪は三尺と想像され、何か目標でも殘さぬ限り假りに遭難地點を通過しても發見は全く困難と想像された。尙遭難以來既に一週間に近く、生存は全く絶望と思はれたが萬一の奇蹟を希ふ人情から小屋だけは多少方角違ひの所でも洩れ無く尋ねる事に一決した。我々が青木に到着した頃より吹雪激化し展望全く妨げられ、時刻も遲く之よりの捜索も無効と思はれたので、一先づ前日登山せる捜索隊の歸着を待つて其の報告を聞く事とした。捜索隊の根據地としては地形上よりは精錬所が最適と思はれたが他に種々の不便があり、家形と青木は登り約四十分行程であるが、青木は電話の便があり福島、沼尻方面との連絡も出來るので、本據は青木に置く事とした。四時半頃前日登山された福島スキー倶樂部の人々に宿の番頭善六を加へた六名歸る。精錬所、鎌沼、一切經を尋ねたが手懸り無し、吹雪激しく展望無しと。福島の人々は多忙中の處日曜を利用されて捜索に加つたので、池田、藤橋の兩君を殘し他は大部分當日下山された。

第一回捜索(三月十三日—十六日)

早川榮吉氏の意見により二班に分る。

第一班は中山巡査、宗川日出夫氏、藤橋枡三郎、米澤署員二名に善六を加へて一行八名、家形より深澤を降り谷地平小屋を尋ね鎌沼に至る。

第二班は叔父、私、弟の三名は池田君をリーダーとし米澤署員一名の應援を得て、一切經附近を捜索しつゝ精錬所に至り、微溫湯より登る捜索隊に連絡し三時頃鎌沼附近に於て第一班と落合ふ事とした。

午前七時青木出發八時頃家形の乘越にて一班と別る。天候は風やゝ強きも良し。午前十時半頃精錬所到着、途中何等手懸り無し。十一時頃消防及び福島の森巡査部長等九名(カンジキ)精錬所に到着、途中何物も發見せずと。其の日は幕ノ湯に宿る豫定の事故、よく東吾妻東麓の捜索を依頼して我々は一足先に十二時近く勝沼に向け出發したが、十一時頃より風益ゝ激しく氣溫降下し一時頃より猛吹雪と化して面も向けられない有

様となつたので、途中捜索を中止して、小屋に歸る事として、一切經を登り肩近に達した頃、同じく歸還中の第一班を認め之と合し三時頃青木に歸つた。第一班は谷地平小屋に達したが小屋は全く雪に沒し何等人跡を認めなかつたと云ふ事であつた。

當日連絡係として板谷駐在の巡査及び大崎の長田刑事は小屋に殘られた。夕方に至つて吹雪益々激しく捜索は全く無効と思はれたので、明日天候の回復の徴見えざれば一先づ捜索を打切る事に定めた。沼尻方面にも何等消息無し。

十四日吹雪依然衰へず、前日來の降雪三尺に達したので折から高木米澤署長及び叔父原田政七、同邦之助來色されたとの報が昨夜あつたので、豫定通り善後策打合せの爲五色に降る事とし、九時半頃小屋出發十時過ぎ五色に著いた。途中高倉附近は先頭は膝上迄雪に沒してラッセルに惡闘せねばならなかつた。同日降雪終日止まず、六日以來の積雪は谷間は少くとも五六尺に達すると思はれたので、高木署長とも相談の上雪融けを待つ外はあるまいと意見の一致を見たので、警察方面の捜索は一時打切る事とし、署長始め米澤署員、長田刑事、板谷駐在所巡査宗川榮吉氏、同日出夫氏は同日下山された。我々は尚姉、親族等の希望により無効とは思はれたが、唯一つ見殘せる鹿平山西方の小屋を捜す爲翌日十四日上の叔父二人を五色に殘し、中山巡査、池田、藤橋兩君、善六と私達三名、人夫一名、都合八名にて午前七時五色を出發した。九時青木着、此の日依然吹雪は止まなかつたが風靜まり溫度昇り行動に便となつたので、翌日沼尻に越す事に急に豫定を變更して食糧補充と叔父に打合せの爲善六人夫を此處より五色に歸した。十一時大根森を越え途中民報舍の廢れ小屋を見て黑檜の鬱蒼と繁る澤を降る事一時間正午頃目的の炭燒小屋を發見したが、小屋は全く雪に沒し何物の形跡も得られなかつた。斯くて翌日の沼尻越に期待しつゝ三時半青木に歸つた。然るに夕方より風加はり夜中より再び吹雪と化し翌朝は小屋前のシュプールさへ全く消えて沼尻は全然無意味と思はれたので、此處に此の度の捜索を斷念して十六日午前十時五色に歸り今後を相談して十六日五色宿泊、十七日朝前日峠驛より叔

父達の出した捜索隊の姥湯、滑川附近の小屋の報告を得たが、何れも得る所無く同日我々五名板谷に降り、種々同情を以て捜索に盡力された米澤、福島警察への御挨拶と尙今後の御助力の御願ひを一番上の叔父政七に依頼して同日夜我々は東京へ歸つた。

第二回捜索(四月二十日―二十三日)

米澤署長より二十日、二十一日の兩日大捜索を行ふとの通知及び計畫を頂戴したので、私と叔父政七及び親戚石關郡藏都合三名十九日の夜行にて出發參加した。捜索隊の編成及び捜索顚末は次の如し。

米澤署長自ら青木小屋を本部として捜索隊の指揮を取る。捜索隊は米澤署警官、スキー倶樂部員、青年團及び山上村消防全員六十二名を七分隊に編成す。尙別動隊として福島不忘スキークラブの齋藤陽吾氏は池田、三好の兩君及び森巡査部長と共に參加された。

二十日天氣快晴。第一、第二、第三分隊はスキー堪能者を以て編成し、朝六時五色出發後谷地平、鎌沼、カゴ山稻荷、高山方面一帶を精査し同日家形小屋宿泊手懸り無し。

第四分隊(カンジキ隊)第一、第二、第三分隊と連絡を保ちつゝ東吾妻一帶を捜索せしも空しく家形小屋宿泊。

第五分隊(十名)白布高湯溫泉を出發人形石、樂大顚を經て家形附近一帶に亘り捜索を行ひ同日青木小屋宿泊。

第六分隊(徒歩隊)消防七名滑川溫泉出發溪谷を捜りつゝ家形に至り青木小屋到着手懸り無し。

第七分隊(消防八名)滑川より赤瀧、姥湯、家形を經て青木到着。

斯くて第一日は空しく終つたが二十一日も引續いて快晴に惠まれたので次の如く捜索を續行した。

第一分隊宗川日出夫氏外六名谷地平方面。

第二分隊中山巡査外五名カゴ山稻荷を經て黑檜澤小屋小倉川溪谷。

第三分隊菅原善六外五名高山、幕ノ湯附近。

第四分隊長谷川警部補外七名(徒歩)五色沼、一切經を經て高湯に降る。

第五分隊平田巡査部長外九名。

第六分隊安藤消防副組頭外八名、第七分隊（不明）七名（共徒歩）は昨日のコースを逆に捜索しつゝ歸還す。

別動隊齋藤陽吾氏外四名東吾妻を中心とし競馬平、鎌沼附近。

此の日も亦遂に得る所無く、米澤署長は此處に捜索を打切り全員五色へ引上げ、五時捜索隊を解散した。然し私達は此の機を逸しては發見は一層困難と思はれたので、特に署長の好意により駐在期間を延長された中山巡査及び齋藤氏等四名に二十二日登山された不忘會の二名と宿の番頭善六、作松都合十二名と共に青木に殘り、二十三日迄東吾妻寶萊山、鹽入川上流、相ノ峯江戸尻川等を捜索し、尙沼尻よりは兼子巡査、小澤新之助氏等四名二十一日より三日間幕ノ湯を根據に幕川、小倉川、江戸尻川、黑檜澤小屋附近を極力捜索したが依然何の手懸りも得られなかつた。

斯くして此の度の捜索は終始好天氣に惠まれ雪の狀態も捜索に最適と思はれて今度こそと意氣込んだが、米澤署の全力を擧げての努力にも、福島、沼尻クラブの方々の涙ぐましい盡力にも拘らず、遂に得る所無く空しく失敗に歸し失望に沈みつゝ私等も二十四日夜鄕里へ歸つた。

尙此の間四月二日には齋藤氏をリーダーとする福島スキークラブの一行二十三名、捜索傍〻五色、沼尻縱走を行ひ、五色駐在の中山巡査は米澤署長の好意により特に捜索の爲駐在期間を五月上旬迄延長され宿の番頭善六と共に數回登山し職務を離れて獻身的な努力を傾けられ、又遺族としても徒らに手を拱いて日を過すより幾分發見の機會を早むる動機にもと思ひ、些少ながら懸賞を呈し、出來得る限りの手段を構じたのであつたが、不幸何等酬ひられる處無く發見の端緒すら得られなかつた。

第三回捜索（四月二十八日—三十日）

吾妻は標高比較的低き爲頂上近く丈余の熊笹生ひ繁り雪消えて笹中に沒すれば或は永久に發見困難かと思はれたので、折から二十九日、三十日の休日を利用し、叔父保之助、兄唯七、私外一名は二十九日朝沼尻に至り小澤氏外二名人夫一名都合八名にて十二時沼尻發、

三時頃幕ノ湯に到着した。途中望遠鏡等を用ひて觀察したが無爲。

三十日午前七時出發吾妻東麓競馬平を經て鎌沼に十二時着、晝食の後二隊に分れ磯貝氏外二名は精錬所に降り一切經東側に廻つて、望遠鏡を以て東側の崖を觀察し一切經を越えて四時家形到着。我々五名は鎌沼より谷地平に降り二時谷地平小屋到着。折よく二十七日登山し昨夜此處に宿泊して附近を捜索中なりし中山巡査、作松外一名と會し種々其の後の話を聞き、一行八名となり三時小屋出發、大倉深澤を遡行して途中一行の笛に驚きて逃れたる熊の跡を發見せるのみにて、六時半暮色漸く谷に深き頃クラストせる雪に加へて慣れぬ短いスキーに轉倒を續け乍ら、殘雪の疎林を漸く家形小屋に辿り着いた。

翌日天候は漸く崩れ始めたので、七時小屋出發家形より多少方面違ひと思はれたが烏帽子に至る森林中を尋ね、烏帽子の下にて幕ノ湯に殘る沼尻の四名に深澤左岸より駕籠山稲荷、東吾妻西麓及び相ノ峯、幕川の捜索を依頼して別る。時に十時半霧益々深く展望全く効かず、雨模様と思はれたので十二時家形小屋に歸り晝食。休憩の後、三時小屋出發五時半五色に降り三度の失敗に重い胸を抱き夜行に搖られて翌日朝歸京した。

第四回捜索と死體發見

福島警察署及び同時不忘倶樂部より五月十四日、十五日の兩日最後の捜索を行ふとの通知に接したのと、沼尻の人夫笹川某が以前より獵師を以て捜索隊を組織し度き旨希望して來て居つたので、叔父政七と共に十三日夜行にて再度沼尻に向つた處、種々の故障にて意外に人夫集らず、漸く笹川外獵師金四郎人夫一名並に西村次郎氏の同行を得て一行六名獵師の犬二匹をつれて十四日三時頃幕ノ湯に到着した。

既に福島の齋藤氏は福島署の警部以下土湯及び水穗の消防一行二十名を以て土湯より登り、相ノ峯一帶幕川及び附近の溪を捜索中であつた。尚土湯より登りし捜索隊は四十數名二班に分れ、一班は福島スキーの三浦及び池田氏等がリーダーとなつて鹽入川を遡行し、精錬所に至り同所を根據として附近一帶を捜索し明日幕に來り會する筈であると。幕附近は雪全く消え丈余

の熊笹にて捜索能率擧らず發見は全く不可能と思はれた。翌日も附近一帶の谷を隈無く捜したが遺留品の片影だに認め得ず、最早今後の偶然の發見に待つ外は無いので、獵師等三名に丈け尙三日間、相ノ峯、小倉川附近の捜索を依賴して黑檜の間に殘雪の耀くマダラの山肌に盡きぬ恨みを殘して同日夕刻土湯に下山した。

翌日福島に廻り永い間の御盡力を謝し同日二時半の汽車で夕刻八時失望に疲れた身を足利の實家に運んだ所、直ぐ五分前に東京より死體發見の旨電話があつたとの事に、叔父と共に今更天の皮肉にあきれつゝも、旅裝も解かず兄を加へて三名其のまゝ同夜の夜行で沼尻に引返した。東京より來た姉と弟と共に現場に著いたのは翌日十時半頃であつた。

遭難地點は横向溫泉より北東一粁上湯峠の頂上より稍ゝ西に寄つた尾根より小澤を約二、三百米降りた地點で沼尻よりスキーコースは其の左の尾根上七、八十米の處を通過して居り、同地より横向迄はスキーにて滑降すれば三、四分の行程と思はれ一同今更に口惜し涙に咽んだ。

發見者は匡救事業の道路工事の人夫小林某、時刻は五月十六日午後三時半頃であつた。所持品はランタンの外失はれた物無く食糧は全く盡きて一物も殘さなかつた。死體は道路工事の監督の好意により人夫の助力を得て同日中附近のコブシの花咲き散れる林中に運んで茶毘に附し翌日遺骨を守つて歸京した。

遭難地點の狀況、遺留品等より考察すれば、原因は想像とは全く違ひ、吹雪の爲めコースを誤つたのではなく、唯、食糧の缺乏の爲のみと推察された。只、幕ノ湯に降らず相ノ峯を縱走した爲意外の時間と體力を消費し食糧不足から空腹と疲勞の爲困憊の極倒れたものと推定される。

日頃何事にも用意周倒な性質の然も冬山にも充分の經驗を重ねた兄が、此度に限つて何れの點からも充分とは思はれぬ準備を以て無謀の縱走を行ひ冬山の初心者さへ冒さぬ食糧不足と云ふが如き過失によつて生命を失ふに至つたのは、返らぬ愚痴乍ら唯、運命と諦めるには余りに別れ難く、魔神の惡戲としか思はれぬ。終りに此度の兄の遭難に就いて凡ゆる同情と助力を惜ま

れなかつた米澤、福島兩警察署及び福島、沼尻スキー倶樂部の方々、並に山麓各地の消防の方々に深甚の謝意を表すると共に、今後益々增加するであらう吾妻縱走を企てられる人々の爲に旅館としても充分專門的の知識を以て便宜を計り連絡を取り、今後絕對に斯る不幸を生ぜしむる事無き樣努力されん事を、故人の靈と共に希望する次第である。

（原田信次郎記）

圖書紹介

Kamet Conquered. by F. S. Smythe.

8vo, cloth, p. 420, 48 ills, 2 maps. Victor Gollancz Ltd, London. 1932. 16/—net.

一九三〇年カンチェンヂャンガへの國際登山隊に參加して、大分業を煮やした著者が、その鬱憤を晴らさうといふ譯でもなからうが、翌る一九三一年度、異分子を交へない英國人ばかりのパーティーを以て、ガワールヒマラヤの巨峯カメット、大英帝國領内の最高峯ナンダ・デヴイに亞ぐこの高峯に遠征を試み首尾よく登頂を成就すると同時に、全世界に於ける最高登頂記錄を獲得した光輝ある登山記を纒めたのが本書である。

カメット登攀に關する記事は本書の緒言にもある通り、當時倫敦タイムス、カルカッタのステーツマン誌、紐育タイムス、東京朝日の各新誌に掲載され、私達も經過如何にと片唾をのんで貪るやうに愛讀したものであるが、今かうして一册の本に纒められたのを手にして讀み返して見ると、ひとしほ興味が深い。

一行の顔觸は著者スマイスを首めとして、他の五人も、或は歐洲アルプスに、或はアフリカに、或はヒマラヤに豐富な經驗を持ち、年齡も著者の主張するやうに、ヒマラヤの如く著しい高度を有する山岳への登攀に最も適してゐる。二十四歲乃至三十五歲の謂ば油ののりきつた連中ばかり。

從つて登攀の經過も、二萬五千呎を拔く大物のそれとしては寧ろ呆氣ないほどスムースに運んでゐるのである。殊にベース・キャンプを定めてから征頂まで、殆んどすべてが計畫通り着々と進行して、僅々二週の短時日でこの高峯の頂を足下に踏んだ手極はまことに天晴れといふの外ない。然し一行が、かくも容易にカメットをものにし得たのは、隊員の各自が優秀な登山家であつたのに據ること言ふを俟たないが、他のすべての條件にも甚だ惠まれてゐたのを見逃すことは出來ない。第一カメットそのものがヒマラヤの内でも、モンスーンの影響の最も稀薄な部分に位し、モンスーン期にあつても好晴の日の續くことが珍らしくない。エヴェレストやカンチェンヂャンガへの試登が、いかにこの恐るべきモンスーンの猛威に苦しめられてゐるかに想到するとき、人力を以てはどうにもならないこの大敵の襲來を禦ることが比較的少ないのは登攀隊にとつて何より好都合である。實際スマイス氏の一行は登攀の途上に於て、天候のため前進を阻止されたやうなことは殆んどなかつた。

登攀路の大部分が、勿論比較的の問題であるが、技術上より

みて概して容易であり、第三キャンプ（二萬六百呎）と第四キャンプ（二萬二千呎）と間に難關とも稱すべきものが横たはつてゐたに過ぎず、殊に第五キャンプ（二萬三千三百呎）から絶頂まで最後の約二千呎の登路が攀ぢるに困難な岩場を含まないのも（本書一八八頁寫眞參照）登頂を容易ならしめた一條件なりと思はれる。

ヒマラヤン・エキスペディションの成否の鍵と謂はれるポーターについても、前年カンチェンヂャンガ試登の際目覺しい働きをなしたレワを始め、近年ヒマラヤ登山隊が必ず世話になつてゐるカーネル・トビンの斡旋によつて高峯登攀に經驗を有する屈强のポーターを傭用することを得たばかりでなく、ベース・キャンプまでの運搬も極めて好都合に運んでゐる。

このやうに一行のカメット登攀はあらゆる點に於て好條件に惠まれてゐたのであるが、假令條件に於て惠まれてゐやうとも、カメット登攀が始めての試みであつたならば、かくまで容易に登頂は成就されなかつたに違ひない。本書第二章カメット試登略史の項に著者の記す如く、一八五五年シュラギントワイト兄弟の試登以來今次の征頂まで、過去に於てカメットに向つて闘ひを挑んだ登山隊は實に十指を屈するのである（本書二七頁參照）。ヒマラヤの巨峯中かくあまたたび攻擊を受けたものはカメットを除いて他に之を見出し得ない。それ故に登路も既に一九一二年ミード氏によつて推定され、翌一九一三年同じミード氏が東イビ・ガミンとカメットとの鞍部、所謂ミード・コル（二萬三千五百呎）に達するに及んで、最早議論の餘地のないものとなつてゐた。過去に於ける此等の數次の試登、殊にミード氏のそれが今次の登攀に當つて、いかに參考となつたかはこゝに言ふまでもない。スマイス氏の一行は、最後の頼みとする城門までも打ち破られて、いま一戰あれば落城の外ない運命におかれた城に攻め入つたやうなもので、ミード・コル直下の第五キャンプまではミード氏及び一九二〇年ドクター・ケラスとモーシエッド氏の執つた登路を忠實に辿つてゐるのである。

先蹤者の過去に於ける努力によつて築き上げられた有形無形の業蹟が、後至者の登山にいかに大きな力となり頼みとなるかを、私はしみ〴〵想ふのである。

カメットの征頂に成功した一行は更らに西方に轉じてアルワ溪谷源頭に旬日を送り、二萬一千八百呎のアヴァランシュ・ピークをはじめ、二萬呎前後の高峯をいくつか登つた。大物を片付けたあとの安樂な氣分がそこに窺はれるとともに、私は、名だたる大物を目指さなくてもヒマラヤでは二流所を登り歩い

て結構面白い山登りが出來ると、ゼェネラル・ブルースか誰かゞ言つた言葉を思ひ浮べた。

本書は登攀の記錄紀行の外、著者以外のメンバーの筆になる高峯登攀の人體に及ぼす影響、踏破地方の植物の二章を加へ、尙附錄として、行程日記概略、氣候、食料、裝備、寫眞等を略述してある。食料、裝備等記述は簡略であるが、幾多の學ぶべき點をそこに汲みとることが出來る。

挿入の寫眞は、ライカ・カメラ、大型名刺及び大型手札のエテユイ・カメラ、イーストマン・コダック・フィルム（種類の記載なし）及びイルフォード・パンクロマチック・プレート、K1及びK2フィルター、イルフォード・赤色フィルター（詳記なし）、以上の用品を以て撮影されたものであるが、いづれも中々い、。たゞ慾を言へばキャンプ・ファイヤなど、いふ子供だましみたいな寫眞や（二〇頁）、土人風俗の寫眞などをもう少し減らして、假令登らなかつたにしても、書中しば〳〵その壯大な山容に言及してゐる東イビ・ガミンやマナ峯の寫眞を入れて貰ひたかつた。

尙本書の附圖の不明瞭不完全なのは一體どうしたといふのか、本文中挿入のもの、末尾のものいづれも物足りないこと甚しい。著者の罪か出版書肆の罪か、讀者に不親切といふべきである。同じ書肆から出版された著者の前著も山岳圖書としては不完全なものであつた。やつぱり餅は餅屋とでも言ひたいところ。

本年の第四次エヴェレスト遠征も敗退の已むなきに至つて、カメット征頂は依然として最高登頂記錄の榮譽を保持してゐる。その意味からしても、本書は一讀に値ひするものであらう。

（藤島敏男）

Peaks, Passes and Glaciers.

Third Series.

(Methuen & Co. Londo. 1932. 15/.)

一八五九年に第一輯、一八六二年に第二輯二卷を世に送つた昔の Peaks, Passes and Glaciers に就ては今更贅言の必要がない。

それは當時登山を白眼視した世人に對して、登山は狂人の行ふものであるどころか、實に快適なスポーツであることを敎へ、爲に大いに登山趣味を擴大するに役立つた。

そしてこの書はアルパイン・ジャーナルの創刊といふ機運を釀成してその大きな歷史的役割を了へたものだつた。

昨年出版された第三輯は、そのアルパイン・ジャーナルの最

初の五卷に掲載されたものを撰出して一卷としたもので、序文に依れば、一般讀者が容易にジャーナルのバックナンバーを入手することが困難な現狀にあるために試みられたもので、之一卷に限らず、今後も出版するような意向もあるらしい。

内容は一八六二年以降一八七一年に到るA・Cメンバーの面々の輝しい初登攀、又はヴァリエーションの記錄を以て埋められて居る。

エドワード・ケネデイ、トーマス・ケネデイ、H・B・ヂョーヂ、A・W・ムーア、C・E・マッシュス、或ひはクーリッヂ、フレッシュフィールド等々大登山家の顏がずらりと並んだ處は素晴らしいものである。

吾々はこの顏觸れによる、この時代の登山記錄を讀むことによつて、前三卷以後の英國登山家の大活躍の樣をはつきり知ることが出來る。

云ふ迄もない歐洲アルプスの黃金時代――それが一八五九年に始まり、一八六五年に終つたとすれば、この書はアルプス黃金時代の後半を記錄する登山史と云へるわけである。

そして前三卷が一八六一年迄を含んで居るのであるから、この第三輯を得て吾々は完全な「アルプス黃金時代登山史」を持ち得たのだと稱してもよいだらう。

もつとも編輯者は一度他の單行本に含まれて發表された著作はすべて排除して居るから、かなり有名なものが反つてこの書には含まれて居ない點は考慮しなければならないが。

この書にはアルパイン・ジャーナル第一卷に掲載された創刊の辭が再錄されて居るが、之は恐らく現代の吾々にとつても尙且刺戟性を持つものだらう。

吾々は幾多のヒマラヤに於ける輝しい活動の記錄等を再錄してこの書の第四輯、五輯が現れることを切望するものだ。

前三卷では版畫が挿入されて居た處を、今度は十六枚の寫眞が代つて表現して居る。止むを得ないと云ふよりむしろ當然の變化であらう。

W・F・ドンキン等の作品をその内に見るのは懷しい。

日本でもこう云ふ種類の本が一册位現れてもよくはなからうか、と思はされる。

（島田　巽）

Alpine Journal

Vol. XLV. No. 246. (May, 1933)

五大陸に亙つての記載のある本號はその執筆者の顏觸れから見ても相當に異色がある。一九三二年の獨墺山岳會のコルディレラ・ブランカへのエキスペディションはそのリーダーた

りしボルヘアスに依つて詳細に記述せられて居る。獨墺山岳會は近年アライ・パミール、カンチェンヅォンガ等にその主力を注いで居るが、アジアに次ぐ高峯を有する南米の方面も決して輕視しては居ないのであつて、已でに一九二八年にはボリヴィアのコルディレラ・リアルにエクスペディションを派遣し、今また、アンデス中にても最も興味深きペルーのコルディレラ・ブランカにと七名より成る優秀なる登攀隊を送つたのであつた。

連峯中の最高峯たるファスカラン（六七六三米）の初登攀はこのエクスペディションの最大なるメリットである。この峯は南北二峯に分たれ、最高點を有する南峯に比して稍〻低き北峯（六六五〇米）は已でに一九〇八年、アメリカのアニー・ベック孃に依つて登攀せられて居るのである。一行はこれ以外、チョピイ・カルキ（六五五〇米）、アリティソン・ラジュ（六二〇〇米）、ファンドイ（六四〇〇米）ファルカン（六二五〇米）等の數多くの登攀を重ね、餘勢を籍つて南米の最高峯たるアコンカグア（七〇三五米）の六回目の登攀をも成し遂げた。

南米に就いてはもう一つ、パーリン氏に依つて書かれた「西部パタゴニアに於ける山岳と氷河」なる一文があるが、これは南米の南端に於ける太平洋岸に面せる出入著しき半島地帶の山々と湖沼、深く彎入せる峽灣、それに流入する氷河等の錯綜せる狀態を示せる點、一見、北半球に於けるノルウエーのフィヨルドを想起せしめる。

北米大陸第五の高峯たるメキシコのポ、カテペトル及びイックスタクチイファトルに關する珍しき記述はホール氏に依つて爲されて居る。

アジア大陸に關してはショームベルグ氏による天山に關する簡潔なる記述があるのみである。一九三一年以來、引續きアジアス方面を探れる同氏の記述は近い中に單行本として出版せられるらしいから、その出現を期待して置かう。

北米大陸に於ける最高峯たるマウント・マッキンレー（二〇、四七四呎）は一九一三年にハドソン・スタックに依つて登られし以來、これを訪れし者はなかつた。一八一二年のカトマイ大地震に依つて東北尾根は著るしく荒されたが、一九三一年四月の飛行機に依る偵察の結果、その後、氷雪の作用に依つて大分滑らかになつて居る事が分つたので、リンドレー氏等四名に依つてスキーを用ゐての登攀が試みられるに至つた。一九三二年四月に一行は愈〻犬橇隊を率ゐて出發し、ムルドウ氷河を經て、東北尾根にと取付いた。尾根の上は一二、〇〇〇呎及び一五、〇〇〇呎に夫々キャンプを設けた、後者の位置

はスタック及びブラウンのパーティーが使用したと同じ大きな岩小屋の地點である。此處で一行はスタックが殘した最低寒暖計を檢したが、最低の目盛たる零下九五度にまで示針が寄せつけられて居る事からして、零下百度以下に氣溫の低下したであらう事は想像に難くない處である、これは一見有り得べからざる事のようにも思へるがユーコン地方で零下六〇度に達する事は稀でないから敢へて怪しむには足りない。

この地點から、一行と行を共にせんとしたが、宇宙線測定の準備の都合にて遲れたるアレン・カーブ及びテォドール・コーヴェンの二人より成る一隊をムルダウ氷河上に發見した。

尾根の上のキャンプは風當りが強いので氷河の上に降つて更に前進し、一七、〇〇〇呎近き地點に最後のキャンプを設け、最高峯たる南峯へは五月七日に、北峯には同じく九日に登頂する事を得た。斯くして喜びの中に下山の途に就いたのであつたが途中、圖らずもコーヴェンの死體を發見、そしてコーヴェンと行を共にせるカーブのクレヴァスに墜落し永遠に彼等の眼より消え去りたるを確認し、今更ながらに山の偉大に打たれたのであつた。マウント・ローガン初登頂に依つて知らるゝ、アメリカ一流の登山家たるアーレン・カーブは斯くして自ら深く愛したるアラスカの氷河の底にと眠る運命になつたのである。

パウムガルテン氏による同じアラスカのマウント・クリロン（一二、七二五呎）の登攀は太平洋から直接蒙むる惡天候の影響を受けてその南のコルにまで達しただけで、止んで仕舞つた。

アフリカに關してはポリツア・ボーレンギ氏の「アトラス山脈」なる二十數頁に亙るモノグラフがあるが、我々の興味の對象から聊か緣遠い。

「ユングフラウ、メョンヒ及びアイガーの北壁」と題した一文は曾つてアルパインクラブに於いて爲された最も立派な演說の一つとして編者ストラットが推賞しただけあつて、十二分の讀み應へがある。筆者はベルナーオーバーランドの第一人者として自他共に許す名にし負ふハンス・ラウバーである。オーバーランドに殘された三つの難問を苦もなく一人で片付けたラウバーの業蹟は赫々として永遠に輝く事は疑ひを容れない。

アルプスに關しては、ステッサー及びカストに依るピーチホルンの東北山稜登攀に關する概略的な記述がある。

コルシカの山々に關してアムストッツが短いものを物して居るのも注目に値しよう。

巻頭に掲げられたモンタニエール氏の「トーマス・ブレーキーとミシェル、ガブリエ・バッカァー」なる考證は曾て本誌に掲載せられて多大の興味を喚起せる「ロスト・ナラティーヴ・オブ・バッカァー」の補遺と見られぬでもない。英國の造園師であるブレーキーがフランス大革命前に大陸に渉りバッカァーの父親の家を訪れ、バッカァー等と共にシャモニー附近の山々を探れる消息をブレーキーの日記より引用してこれに注解を施せるものであつて、バッカァーがモン・ブロン初登攀者として動かすべからざる存在となつた今日、その傳記の完成は復、重要なる價値を生じて來たわけで、此の點本文は可成高く評價せられて差支へあるまい。

最後にグラハム・ブラウン氏の筆になる「アルパインクラブ。一九二〇―一九三二」と題して、一九三二年シャモニーに開催せられたる第三回万國山岳會議に提出せられたる一文はアルパイン・クラブ會員の活動を中心として見たる大戰後に於ける世界登山界の動向を簡潔に纏め上げたもので、この十二年間に登山界に於て成し遂げられた重要な成果と、大戰前と大戰後に於ける登山傾向の變遷とを知るには好適な記述であつて、平素海外の動きには餘り注意を拂はれぬ人々もこれだけ讀めば大體の事は分る筈である。敢へて一讀を推むる次第である。

兎に角、全體として本號は内容が豐富であり、そのレベルも高く、編者ストラットの手腕はさる事ながら、近年來の上出來と言ふべきであらう。

（渡邊　漸）

高山深谷・第九輯

日本山岳會編、四六倍判

東京・梓書房刊、價四圓五〇錢

山といふものに漸く近付きになり初めた頃、先輩の所藏する「高山深谷」を見せて貰つて、その見事な寫眞の數々に、若い心を躍らせたのを、今もなほ私はおぼえてゐる。その「高山深谷」が十六年振りで、從前のものとは全く異つた形の下に、復活更生したことは、本集の序文、跋文に筆を執られた小島、高野兩老にとつて久しく巡り合はぬ愛兒に久々の對面とでもいふやうな歡びがあらうし、又私自身は舊知に再會するやうな懷しさを感ずる。

いまこゝに選び出された五十葉の寫眞を一枚一枚繰りひろげ、朧な記憶に殘る在りし日の「高山深谷」と比較すれば、本邦登山界の大きな變遷の跡がそこに窺はれる。

登山は夏のものと考へられてゐたのが、スキーの普及發達か

ら積雪期登山の隆盛を招來し、山は四季を通じて登山者を迎へるに到つた。本集の大部分が積雪期の撮影にかゝり、然らざるものと雖も春秋の收獲が多く、盛夏のものが數へるほどしかないのは、時代相の反映に外ならない。

今日から見れば所謂定石ともいふべき登路を――當時それらは未知と神秘と靜寂との幕に閉されてゐたのだ――辿つて、驚異と詠歎の心をもつて山に登り山を眺めた時代は去つて、文字通り縱横に山谷は極はめられ、未知はもとより或る意味に於ては神秘も靜寂も過去のものとなり、登山者は親しみの心をもつて山に登り研究的なまた解剖的な態度をもつて山を眺め、そこに新らしき美を見出さんとする時代は來た。同じ山の姿も嘗つての「高山深谷」に收められたものと本集のそれとを對照するならば、或るものは殆んど別の山の如き山貌を呈するのに或るものはその觀點の著しく異なるのに氣付くであらう。

また登山者の興味も憧憬も所謂日本アルプスに集中されてゐた往時に比して、近年は海内各地方の山岳が登山の對象となつてきたことも、本集の明らかに物語つてゐるところである。而して登山界の變遷と共に見逃し得ないのは寫眞器械及びこれが材料の改善進歩と、撮影技術の研究發達とで、殊に器械、レンズ、フィルター、乾板、フィルム等の著しい進歩が山岳寫眞の向上を助長してゐることを感する。

本集收むるところの五十葉、いづれも見事な作品、印刷亦千遍一律に流れず、各作品に適した調子の出てゐるのは嬉しい。づらりと並んだ二十人に及ぶ撮影者――この内に嘗つての「高山深谷」にありし先蹤者の名を見出し得ないのは確かに寂しいことであるが――の個性が窺はれるのも興味深く、作品を通じて撮影者の山の登り方、山の見方、山に對する態度さへも想見し得るやうな氣がする。

寫眞と同數の隨筆も、或は懷古的なるあり、或は輕妙洒脫なるあり、或は研究的なるあり、詩情溢るるあり、とりどりに面白く讀まれた。

終りに望蜀の言をなせば、本集末尾の編輯方針「成る可く地方的に偏せざる立前」に基くものか、やゝ見劣りする寫眞が二三選ばれてゐるやうに思ふ。筆者は「高山深谷」の使命は、當代に於ける代表的山岳寫眞の蒐集採錄に在りと信じてゐるが故に、地方的分布といふやうなことは考慮する必要がないのではあるまいかと思惟する。隨筆と寫眞とが全く無關係のものあるのも、大部分が大體に於て適合してゐる以上、聊か奇異の感を禁じ得ない。編輯時日に餘裕の少かつたためとは想像するが、各葉に添付された撮影記錄は、報告者にも罪はあらう

が、より完全なものを望みたい。

とまれ久しく忘れられてゐた「高山深谷」は愛山家の書架に永く保存されるに値ひする内容と外觀とをもつて茲に更生復活した。英米の出版界で "Fifty Best Books" といふ年鑑のやうものの刊行されてゐるのを見たことがあるが、それと同じやうに、今後毎年本邦登山界に於ける代表的山岳寫眞五十葉を選出した「高山深谷」が續刊されることを望んでやまない。

（藤島敏男）

奥秩父

原　全敎氏著、四六版六一八頁

定價二圓五十錢、昭和八年七月

明文堂發行

山に親しむ者、各々異れるリーブリングスゲビートを持つ程幸福なことはない。一の山岳或は山塊を丹念に歩き廻つて、その山の事を書く。それは近年に於ける山岳書の一つの傾向である。その一つの現れが、この原全敎氏の『奥秩父』である。

評者として私にとつては、この秩父の山、その自然は、殘念乍ら緣のうすい世界である。從つて本書の内容、並に記載については如何とも云ふ資格がない。勢ひこの批評も、著者の山に對する、特に秩父の山に對する態度といふ樣な事を少し述べさせて頂いて責をふさぐことにならう。

かつての小集會で原氏からは秩父の話を拜聽する機を得た。また、「會報」上で氏の持つ秩父の氣持の一端をきくを得た。その時、氏は、秩父山村の人文地理的發展から、氏は特に秩父人情美を強調して、森林美、溪流美、人情美を以て、秩父の山岳美の三要素とされた。その氣持は「私を取り卷く秩父山村の人々の恩顧が」と卷頭に述べ、そしてそれらの人々の名を錄して敬意を表して居られることに現はれてゐる。

この秩父の美に人情の美を強調するのは確かに一つの見方に相違ないと考へる。事實我々も、山を歩いてゐて、その地方の人々から受けた恩惠は決して忘れることはできない。しかし、秩父の人情美を強調するの餘り、他の秩父の山岳美、秩父の自然の持つ美はしさがその前に影を薄らぐといふやうな氏の氣持は、私には一寸と解し難い。しかし乍ら、一のリーブリングスゲビートを有つてそれに繁く足を運ぶ。初めのうちは、それの自然の持つ美に心打たれながらも、その數を度重ねるにつれて、そのゲビートの人との交渉も追々に深まり行くことは確かであらう。特に人との交渉の淺くない秩父に於て、かうした傾向の異常に發展することは、さうして著者の人情美の高唱

とまでなることは、極めて自然な道程と云はねばなるまい。それも許されてよい一つの見方と云ふべきであらう。

古く秩父を歩かれた木暮、田部氏、又秩父の遺稿を殘された大島君など、秩父にどんな氣持を有つて歩かれたか、それらと原氏との氣持の比較など甚だ興味ある問題だが、こゝには述べる機會を有たない。

奥秩父、その範圍は、私が漠然と腦裡に描くものとは少し異る、可なり廣い地域にわたる。本書に取扱はれる奥秩父は、三峯雲取から金峯までの秩父主脈と、日原谷、荒川谷、丹波川、大洞谷、瀧川谷といふ多摩川流域の溪谷である。

記述は主として案内的であるが、考證とそれをゴッチャにしたといふ批難は、本書には見られない。兩者適當に鹽梅されてある。それに紀行も別に編まれてゐる。

著者は、殘りの秩父の部分を續篇として近く發表されるといふが、私の如く秩父をかなり狹く考へる者にとつては、この一册のみでも充分にその使命を全うするやうに思はれる。

寫眞は、多くの秩父の景觀であるが、秩父らしいと思はれるものの少く、むしろ、變に氣かざつた老人夫婦の寫眞が多くあるのも、著者の氣持の一つの發現ではあらうが、少し眼ざわりである。

附錄。大秩父山岳圖は、かなり親切なものだが、なくもがなである。本書の出版以前一度どこからか出たと同じものであるが、意に滿たない著者の氣持を考へすに附錄としたのは、果して著者自身の意圖によるものか。

或は新綠に、或は紅葉に、或時は北から南へ、或時は東から西へ、峠、谷、山村を、かくして七年もの間、秩父に親まれる機會のあつた著者、その丹念な山歩きの一の收獲に對して敬畏を表しつゝこの妄評を終らうとする。

（黑田孝雄）

雪線散歩

藤木九三氏著

總頁二六三頁、大陸版

昭和八年七月、三省堂刊

定價一圓八十錢

『峰・峠・氷河』が世に出たのはたしか六月の初旬であつたらう。それと二ケ月も經てぬ今日、同一の著者によつて『雪線散歩』が公にされた事は、よし後者が今までの隨筆的のものの蒐集であるにしても、ともかく著者の精力絶倫なのに今更驚かされる。特に筆の方でブックアルピニストであると同時に、實地に於てアクティヴなアルピニストである同氏については尙更

の事である。

著者によれば、『雪線散歩』は、昭和四年の『屋上登攀者』以後に於ける、研究、批評、隨想、詩がその内容をなしてゐる。それは其通りであるが、日頃種々なものに書き散されてゐたそれらのものも、こゝに改めて一本に纒め上げられた姿では、また目新しいものに接するやうな氣持がした。誠に氏の文はいつも新鮮さがあふれ〳〵てゐるやうだ。局紙で背をはり、青い木炭紙で表紙を包む大陸版の裝幀はまた見るからに心持よく、組方も活字もスッキリとして申分ない。この點から見て『屋上登攀者』の出來榮よりすぐれてゐるやうに考へられる。

ヤング、マメリー、ウォークマン等の評傳や登山靴、クランボン等の研究等、教へらるゝ多くを含むでゐるが、輕い氣持で書たれた隨想は、私を喜ばせるものであつた。春山の行樂、峠の回想、ヒルワンダリングの情操、ある日の保壘岩、登山風景の今昔、氷河と龍、火山と裾野など。そのうちでも私の特に興味深く讀むを得たのは、後の三篇であつた。いつでも岩と氷と雪とを求めらるゝ「雪線散歩者」にも時としては、火山と裾野に見られるやうな何かの物を持つてゐることに、意外を感じ、奥床かしくも感ぜられる。また登山風景の今昔は、小島、木暮、高頭、高野氏等の大先輩の、「あの頃」の氣焰が次々に展開されてゐて、微笑ましく讀むことができ教へられる所も多かつた。氷河と龍はアルプスの氷河に關する傳説の一つとして面白いものであつた。この外にもヒマラヤン・コントラストの如き、フレッシュフォルドやプルウスの言は我々にとつて大きな教訓であると考へた。

序文の一節『『山をエンジョイする』……だが人が、――山の子が――慈父の膝下で嬉戯し、時にその肩にすがり、あるひは頭にしがみ付いたりして駄々を捏ねることは、山自身にとつて樂しい思ひ出である。』これは山に對する一つの面白い、比喩であると思つた。

（黑田孝雄）

東北の山々

安齋　徹著

朋文堂刊・三六判・三五一頁

寫眞三三葉・地圖一三葉・價一、四〇

東北の山と言へば著者の名を聯想するほど著者とそれらの山との因緣は深くまた久しいものである。その著者によつて未だ類書の企てなかりし本書の編まれたのは、東北の山に興味をもつ登山者にとつて喜ばしいことだ。

著者は先づ會津盆地以北を東北地方と限局し、飯豐連峯、朝

日連峯、月山、鳥海山、岩木山、磐梯山、吾妻火山群、藏王山、栗駒山、駒ヶ岳、巖手山、八甲田山、早池峯山の十三項に亘つて夫々登路を紹介されてゐるが、お膝下ともいふべき藏王、吾妻、月山、飯豐、朝日等の諸山に就いては流石に記述は詳細に、登路も各方面が略々網羅されてあるとしても、其他の諸山に就いては、著者の親しく踏まれた登路以外は、或るものは全く之が記載を缺き、或るものは余りに簡略に失し、ガイド・ブックとして稍遺憾に思はれる。栗駒山、鳥海山の如きはその著しい例である。また「東北の山々」の題名の下に當然含まるべき、燒石岳、森吉山、八幡平の諸山に何等言及してないのも聊か物足りない。尙東北の高山は著者の言はれるやうに、日本アルプスの三千米級諸峯に匹敵する氣象帶を持つたもの決して少くない（序文）にしても、登山の對象としては夏季よりも寧ろ積雪期により多く興味が繫がれてゐると――高山植物研究のための登山は別である――筆者は思惟するが、この積雪期登山の登路、根據地、積雪狀態等に關して本書の述べる所は甚だ貧弱である。東北の山は登山者のための山小舍の設備のある所が少ない。藏王、吾妻を除けば夏場限りの小屋ばかりで、冬期使用に堪へるものは殆んどないといつてもいゝ狀態にある。從つて積雪期に東北の山に登らうと計畫する場合、何處を根據地とすべきかに誰しも惱むのである。この點についてのより詳細なる記載があつたならば登山者を裨益すること頗る大なるものがあらう。幸ひ著者は膝下に、有爲なる若き登山者を擁する山形高等學校山岳部を控へてゐられる。その助力を得て、他日本書を更に完全なものとして世に送られんことを、筆者は切に希望するとともに、東北地方と限局した狹い部分のいくつもない山でも、それについてガイド・ブックを纏めやうとなると、ひとりふたりの手ではむつかしいものであると感じたことを茲に附言して妄評の筆を擱く。

（藤島敏男）

會報

會務報告

臨時役員總會

五月二十三日午後六時本會事務所

出席、小島、高野、近藤、槇、黒田、角田、鳥山、神谷、高頭、茨木、福島、委任一名

一、山小屋の件

四月二十六日出發の本會山小屋調査に就いて槇理事より報告あり、是に就いて討議の結果左の如き假決議を行へり。

「濁澤に於ける山小屋設置豫定地に就いては調査隊の報告に基き、尚實驗、研究、調査を續行するの必要を認む。」

右は會則第十八條により假決議とす。

六月定例理事會

六月八日午後六時本會事務所

出席、小島、冠、高野、高頭、武田、津田、中原、田中、角田、茨木、槇、黒田、神谷、福島

一、山岳に關する件　黒田理事より第二十八年第二號編輯に就き報告あり。

一、高山深谷に關する件　高野評議員より編輯經過報告あり、七月中に發行の豫定。

一、山小屋委員の件　角田、槇理事今年滿期に付、次年度山小屋委員委囑につき協議す。

一、會計に關する件　五月分會計諸表供覽、神谷理事より説明あり。

一、山日記に關する件　角田理事より今年度山日記發行に關する諸報告あり。

一、山小屋に關する件　五月の臨時役員總會の假決議に關し、本日を以て決議となす。

一、理事故松井幹雄氏靈前に本會より花環を供ふるの件可決。

七月定例理事會

七月十三日午後六時半本會事務所

出席、小島、高野、高頭、武田、冠、鳥山、茨木、黒田、角田、神谷、福島

一、山岳二十八年二號發行經過報告（黒田）

一、關西小集會の件（角田）

一、山岳寫眞資料展覽會報告（角田）

一、英國山岳會へ寄贈すべき幻燈板は山岳寫眞資料展覽會及

び「高山深谷」の寫眞の中より約二十枚を選定することゝす（鳥山）

一、高山深谷の件（高野）

九月定例理事會

九月十四日午後七時本會事務所にて

出席、小島、武田、高野、高頭、冠、鳥山、槇、松本、茨木、神谷、角田、伊藤、黒田

一、登山經歴表の件（黒田）會報第二十八號所載の同表につき研究を續けること。

一、山岳第二十八年三號の編輯報告（黒田）

一、高山深谷の發行報告（高野）現に三版を重ね極めて好成績、同時に同編輯委員は解散となる。

一、山小屋建設善後處置の件（槇）その建設に關する研究調査の經過を會報に報告することとし、尚研究の具體的方法は改めて山小屋委員にて討議することに決定。

一、事務所電話架設の件（小島）事後承認を求められ、架設に決す。

一、會計報告（神谷）

一、理事改選の件（小島）今年滿期となるべき理事六名（内一名補充、一名關西）につき協議す。同時に滿期となる會長副會長、常任評議員の件は來る十月二日評議員會、役員議會を開くに決す。

評議員會

昭和八年十月二日午後五時より　於三會堂

出席、小島、武田、高頭、高野、中村、木暮、冠、鳥山、（委任三枝）

決議事項

一、近藤、三枝、田部、三評議員任期滿了の處再選重任に決す。

一、槇有恒氏を新に評議員に選任す。

一、常任評議員は左の五氏と決定す。

小島、武田、高野、冠、槇

一、鳥山評議員は都合により評議員辭任の申出あり、承認。

役員總會

昭和八年十月二日午後六時より　於三會堂

出席、小島、武田、高頭、高野、木暮、鳥山、中村、冠、槇、松本、角田、中原、茨木、伊藤、額田、黒田、（委任）三枝、津田、高橋

一、會長副會長任期滿了に付選任の件

席上詮衡委員を選任の上、高頭氏を會長、木暮氏（他一名は交

渉中）を副會長に推薦の處、滿場一致可決。

十月定例理事會報告

十月十二日午後七時本會事務所にて

出席、小島、高頭、木暮、横、角田、神谷、茨木、額田、黒田

一、豫算編成に關する件　六名の理事より成る豫算編成委員にて研究協議の上作成に決す。

一、理事改選の件　前回理事會にて協議の來年度理事六名につき協議を重ねたり。

一、澗澤雪崩調査の報告　横、角田兩氏より報告あり、十一月十四日より改めて角田、額田、茨木三理事出張に決す。

第七回關西小集會記事

昭和八年七月十日大阪堂ビル清交社別室にて

田部重治氏には此の春の關西小集會に講演をお願ひしてあつた處、突然氏の御急病の爲に來阪中止のやむなきに至り、當日集つた會員諸君一同實に殘念に思つた。今回は又改めてお願ひした處、快く承諾を得「登山文學に就いて」の題の下に講演を願つた。多數の來會者は氏獨特の文學的雰圍氣に包まれ興味深く有意義な時を送るを得た。

講演概要

總て登山文學は主觀から出發する。登山家が紀行文を綴る時、それは寫實してゐる樣ではあるが其實は、主觀から出た創作をしてゐるのだ。過去の出來事が好ましい思ひ出を持つのは、記憶・印象が無意識に主觀から出發してゐるからである。生活の實在と、文學の實在は自ら違ふ。文學は其まゝの模寫ではない。マルキシズムを持ち出し、文學の經濟的價値を言ふ人があるが、文學は經濟的價値があるから書くのではない。

若い者が「山を科學的に考へねばならない」とよく言ふが、それのみではないだらう。個人の考へが個人の考へだと言つても他の人に妥當性がないのではない。山岳描寫が個人個人で違つて來るが、その違つた感情を各々現してゐるのが又全部に妥當する。

文學は經驗と體驗が必要である。自分は經驗と體驗は違つたものと考へてゐる。如何に感じるかと言ふ質

の問題であり、量の問題ではない。山を藝術的觀察を持つて歩く人は多くの體驗を持つ人と言へる。だから主觀と體驗を必要とする。

山の文學を階級的に考へる人があるがそんな事はあり得ない。大自然の中にあつて感情の高潮するとき、どこに階級的なものがあらうか。登山は現實生活と違つた處がある。山へ登る者はロマンティックであると言へる。自分はロマンティックと言はれて喜ぶ。崇大なもの、美しいものに憧れるのはそれだけでもロマンティックである。ロマンティックそのものが登山者にとつて現實的なのかも知れない。

吾々が山へ登るのは登山の改造を目的にしてゐるのではなく、美しい自然に憧れた現れである。登山に於て科學は必要だらう。だがそれは最上の目的でなく矢張り前述の如くロマンティシズムであり、美への憧れである。登山はスポーツではない。スポーツ的な部分はあるだらうが、神祕的なむしろ宗教的な氣持ちがある。

結論として、大自然を背景に感じた事見た事をそのまゝ、大膽に、卒直に表現すればそれが登山文學であると言へやう。從來山岳文學が、劇、小說に現れた事は少なく、紀行と詩に多く現れた。だがこれ等は登山者に依つて將來大いに開拓せられねばならない所である。

（津田）

出席者

大野正市　西岡一雄　吉澤一郎　名須川渡
服部鑛一　井上仙之助　高橋健治　美濃島巍
米澤政吉　下川友記　山崎彦麿　津田周二
宮崎武夫　下山勇　松井久之助　中原繁之助
松本俊二　頭井豐次郎　渡邊小兵衞　喜田清左衞門
小倉志郎　大中彰一　政友巖三　影山寅造
田部重治　藤木九三　會員外三十八名

第五十九回小集會記事

昭和八年九月七日三會堂にて

今年六月花蓮港大タロコ宣傳協會の招請によつて臺灣に渡られた槇有恒氏に御願ひして、「臺灣の山々の印象」と題する講演をして頂いた。秋とは名のみの九月

に入つたばかりの七日の夜は、かなり蒸し暑い夕ではあつたが、それでも、夏の山旅を終えて集まられた會員諸兄の日焦けのした顏は何となく輝かしく、開會以前お互の山旅の思出話しに一時花が咲いてゐたやうであつた。定刻七時より約四十五分にわたり槇氏のお話あり、終つて五分休憩、更に、その時の寫眞を幻燈板にして約四十枚を、一々詳細な說明を加へて頂き乍ら、うつした。九時半閉會したが、その後もお互の山の談話は仲々つきさうに見えず、笑聲をきゝつゝ別れたのは十時近くであつた。幻燈板の製作方までお願ひした處快よく講演と共に御引受け下さつた槇氏に終りに臨み厚く御禮申上げて置きたい。

（講演の梗概）　槇氏の今度登られた臺灣の山はその東に偏して同島を南北に貫く脊梁山脈が花蓮港廳に入つた部分、卽ち合歡山連峯及び菁萊主山連峯を連ねる三六〇〇——三五〇〇米を上下する山脈である。それは山顚の近くまで密林を以つて覆はれ、それが急に絕えた處はカヤトで、そこはスウ＊スのアルプを髣髴せしめるとの話。この山旅は大タロコ宣傳協會の發起による事とて、同協會及び花蓮港廳の盡力に依り氏が臺北を經て花蓮港街に到着せし六月中旬には、人夫、食糧等すでに準備されてあつた。かくして、種々打合の上、警官、蕃人苦力等、計四十名の一行が花蓮港街を跡にしたのは二十日で、その日タッキリ溪に沿ふて遡行、典型的V字型溪谷のタロコ峽（深さ四、五〇〇尺）を經てタビト駐在所泊、二十一日カラパオ泊。その日カラパオでは合歡越道路の開通式が行はれ、一行もその式に加はつた。こゝよりいよ〳〵山に取附き二十六日まで野營がつゞいた。途中一泊、二十三日北合歡山山麓に、二十四日菁萊主山北峯西側の溪流にそれ〴〵野營、二十五日菁萊主山北峯の頂を極めた上その東側山麓に野營、二十六日菁萊主山に登りその南峯への西側山麓に野營、二十七日更に菁萊主山南峯を經て能高駐在所を通過、木瓜溪を下つて東能高駐在所に一泊、翌日坂邊駐在所、二十九日花蓮港街に歸着、この山旅を終る。以上は行程の大略であるが、講演の內容はこんな無味乾燥なものでなかつた。槇氏のネイルドシウズと競爭出來さうな蕃人の足の裏。合歡山の頂で發見されたウ

スユキサウの一種の大きな群落。亞熱帶、溫帶…と急激な變化を見せる臺灣山岳の林相の特徴。蕃人の生活。理蕃より道路の開鑿に至る迄盡瘁してゐる警備員の涙ぐましい活躍等。種々臺灣の山でなければ見聞し得ない話がおり込まれてあつた。四十枚のスライドは同行寫眞技師片山氏の撮影にかゝるものであるが、何れも出色のものであつて、その講演の内容をその上にも豐富ならしめ得て余りあつた。

（黒田記）

出席者

酒井　忠一　安田登茂次　菊地　朋弐　丹羽　惠
山下助四郎　伊藤秀五郎　福田　昌雄　伊東　虎夫
塚本　圀治　尾崎　喜八　原田　恭雄　齋藤　雄三
荒井道太郎　黒田　孝雄　澤　智子　野口　末延
橋本晋七郎　島田　武時　島田　巽　新庄　球生
増山清太郎　田邊　主計　安藤　正一　石塚秀次郎
赤星　平馬　中司　文夫　長沼　重　神谷　恭
岩崎京二郎　淺原　重繼　吉田　禮二　桑田　英次
山口　健兒　小野金太郎　吉田　竹志　山根　雅男
初見　一雄　角田　吉夫　佐藤誠次郎　鳥山　悌成
堀田　彌一　荻島　雄三　飯塚篤之助　逸見　眞雄
斯波悌一郎　大澤　照貞　春山仙二郎　大賀　智
石川　孟範　中村　貞治　河合　秀治　村尾　金二
近藤　恒雄　三浦　新　岩永　信雄　木村　一男
小島　久太　横　有恒　茨木猪之吉　冠　松次郎
本郷　常幸　外に會員外二十六名

計　八十七名

「高山深谷」編輯報告

昔「高山深谷」がどうした經過で、發行する樣になつたかは今度出た第九輯の跋文に筆者が書いた通りである。今度のものも、やはり同じ心持で發刊された事は勿論である。只筆者の如き老兵は第一線に立つべきでもないが、好きなまゝに其係りの一端に列したのである。寫眞の蒐集、撰別等は何れも他の委員諸君の努力に負ふ所極めて大であるが、途中から、止むを得ぬ事情で編輯刊行の一切を此の老兵が引受けねばならなくなつた。新しい傾向も何も知らぬ老登山家として隨分の負擔ではあつたが、寫眞の撰擇丈けは既に全委員に於て出來上つて居たので、後は印刷の事、裝幀の事

などどうにか、やつてのけてしまつた。吾ながら少々大膽でもあり、臆面もなく舊式振を發揮したものだと、今に考へて居る。それでもあゝして比較的評判の良いのは、他の第一線に立つ若き委員の方々の賜物である。事實、編輯から校正まで老眼鏡を掛けての仕事である。粗漏、誤植等々全く今尙ほ汗顏の至りである。然し自分としては、過去八輯の「高山深谷」を手鹽にかけて來、其まゝ中斷したので聊か尻切り蜻蛉となり、心殘りであつたが、老兵再び返り咲きをして、玆に一卷を世に送り出し、あまつさへ、過去八輯とは事變り、大衆性を帶びて同好諸君に見參し得た事は、「高山深谷」育ての親として所謂有終の美あらしめた感があり、今輯の編纂に關して、多大の努力と援助を惜まざりし同人委員の各氏、又其の原寫眞提供の各位・隨筆文寄稿の各君に感謝の意を表するものである。今後誰人によりて再び「高山深谷」は世に送り出さるゝやは知らねど、世の同人諸君よ、余輩此の老兵に賜りし同情と援助を、「高山深谷」の爲めに永久に切望して止まざるものである。

（高野鷹藏）

「高山深谷」第九輯一九三三年版內容

序　小島烏水

寫眞目次

北穗高飛驒側　島田武時
雪の山路（赤倉附近）　鳥山悌成
寶劍岳及南駒岳の連峯　横內勝司
雪の淨土山　山田應水
琵琶池と坊平山幕岩　渡邊漸
冬の岩手山　櫻井敏夫
白馬戸隱妙高山方面　塚本閣治
魚沼駒ヶ岳　櫻井敏夫
冬の十勝岳大砲岩　河田黨
乘鞍岳劍ヶ峰　山田應水
雪の飯豐山　田中實
黑姬山　渡邊漸
雪の大朝日岳　櫻井敏夫
荒澤岳　櫻井敏夫
十勝岳　河田黨
高尾山より富士　額田敏
不歸天狗岩　山田應水

蓼科山　藤島敏男
藏王山のお釜　櫻井敏夫
槍ヶ岳　冠松次郎
五月の富士山北側　塚本閣治
笠ヶ岳と抜戸岳　冠松次郎
日光白根頂上　塚本閣治
前穂高岳　渡邊漸
阿蘇の新火口　北田正三
黒薙川北又谷の上流　冠松次郎
雲の波(槍より常念)　穂刈三壽雄
溪流　鳥山悌成
日光小田代の原　塚本閣治
釜無川金峯山方面　塚本閣治
黒部下廊下白龍溪釣越　塚本閣治
嚴冬の十勝岳主峯　島田巽
冬の霞澤山　穂刈三壽雄
仙の倉シッケイ澤の雪崩　角田吉夫
針ノ木の雪溪　錦織嘉夫
槍ヶ岳　角田吉夫
藏王山の樹氷　角田吉夫
槍ノ倉の頭　角田吉夫
利根の水源　角田吉夫
苗場山頂より鳥甲山　早川義郎
戰場ヶ原　藤島敏男
磐梯山の曉　三浦新
サウス岳　角田吉夫
冬の十勝岳　河田黨
冬の裏富士　鳥山悌成
信州美ヶ原　藤島敏男
冬の一切經山　額田敏
鬼怒沼より奥日光　塚本閣治
八ヶ岳より槍穂高　額田敏
千島バラムシロ島　佐々保雄
赤岳、白煙山　佐々保雄
隨筆目次
前穂高　渡邊漸
白馬の麓　石川欣一
木曾駒ヶ岳　黒田正夫
立山　細野重雄
琵琶池　渡邊漸

岩手山	藤島敏男	黒薙川	塚本繁松
熊野湯の想ひ出	吉澤一郎	常念岳	高野鷹藏
駒ヶ岳	藤島敏男	高瀬入り	辻村伊助
十勝岳	島田巽	奥日光	茨木猪之吉
乘鞍岳で雷に擊れた男	小山二八	山の寫眞と赤外線寫眞	額田敏
飯豐山	篠田理策	白龍溪附近	冠松次郎
黒姫山と其感想	志村烏嶺	北海道の自然と山	伊藤秀五郎
私達の雪の山	後藤幹次	霞澤山	高野鷹藏
荒澤岳	藤島敏男	雪崩	今西錦司
北海道と山小屋	角田吉夫	針ノ木の雪溪	森田勝彦
高尾山から見た富士	額田敏	槍ヶ岳	槇有恒
白馬岳(雪景)	高橋健治	藏王の思ひ出	立上秀二
八ヶ岳	丸山晩霞	山頂の池	角田吉夫
苗場山の印象	早川義郎	利根川の水源	木暮理太郎
「槍」の思ひ出	藤木九三	苗場山	大平晟
富士山雜記	佐藤順一	戰場ヶ原	藤島敏男
笠ヶ岳	冠松次郎	磐梯山	高野鷹藏
日光より南會津への山越	白井光太郎	冬の十勝岳	伊藤秀五郎
春雪の上高地	田中薫	十勝岳の冬	加納一郎
阿蘇山	竹内亮	富士を禮す	中村清太郎

美ヶ原　黒田正夫
吾妻山　別所梅之助
鬼怒沼の夏　塚本閤治
八ヶ岳より穂高連峯の遠望　額田敏
北千島の便り　佐々保雄
跋　高野鷹藏

山岳寫眞資料展覽會記事

昭和八年六月十六日より廿五日まで十日間、日本橋小西六本店新館五階及び四階に於て、本會主催のもとに「山岳寫眞資料展覽會」を開催した。

出品寫眞約二百點に及び、秩父宮殿下御作品マッターホルン及び、槇有恒氏所藏「秩父宮殿下歐洲アルプス御登攀記念寫眞」二十八點を初めとして、會員全般より立派なる作品多數集まり、豫期以上盛會であつた事は欣快とするところである。

應募寫眞が、一地域に偏せず、千島より本州、九州、朝鮮の山々を含み、撮影の時期は積雪期の多數あつたのも、時の推移であらう。往年、三會堂に於て、本會大會及び小集會當時展覽したるものに比すれば、大きな變化である。

資料としては赤外線望遠寫眞、雪崩、岩登り、植物、山小屋、遭難記錄、物故案内者等があり、短期日の募集としては、これ以上のものを望む事は無理であらう。

尙參考品としては、寫眞集「高山深谷」第一輯より第八輯、山岳第一年より第二十八年、各地登山團體徽章其の他を陳列した。

山岳寫眞資料展覽會出品目錄

秩父宮殿下御撮影御作品

マッターホルン（ツェルマットより見たる）　松方三郎所藏

秩父宮殿下歐洲アルプス御登攀記念寫眞　槇有恒所藏

1 Gross-Schreckhorn taken from Wetter-Sattel. Aug. (Uramatsu)

2 Mittellegi-Grat of Eiger from Hörnli. Sept. (Matsukata)

3 Gleckstein-Hütte of Wetterhorn.
Aug. (Uramatsu)

4 Finsteraarhorn, Agassizjoch and Agassizhorn taken from Anderson-Grat. Aug. (Fujiki)

5 Gross-Viescherhorn and Walcherhorn from Mittellegi-Hütte Aug. (Fujiki)

6 Ochsenthal-A.A.C.B.-Hütte and Kingspitze.
Aug. (Maki)

7 Kingspitze and Wetterhörner taken from Simmelistock. Aug. (Matsukata)

8 Engelhörner: Mittelgruppe and Simmelistock.
Aug. (Uramatsu)

9 Traversing the South Side of Lauteraar-Sattel; H.I.H. Prince Chichibu in Middle.
Aug. (Watanabe)

10 Krinne-Gletscher of Wetterhorn, Lauteraar-Sattel and Ober-Grindelwald-Gletscher in the Background. Aug. (Maki)

11 Gross-Schreckhorn, Anderson-Grat and Nasijoch, from Zäsenberg. Aug. (Uramatsu)

12 殿下の御一行

13 Riskam 附近に於ける殿下の御一行

14 Zermatt Aug. (Matsukata)

15 Matterhorn

16 Matterhorn from Gorner-Gletscher.
Aug. (Matsukata)

17 Ober-Gabelhorn and Matterhorn.
Aug. (Matsukata)

18 Leaving the Italian Summit of Matterhorn.
Aug. (Matsukata)

19 Swiss Summit of Matterhorn; Monte-Rosa) Lyskamm and Breihorn in the Background.
Aug. (Matsukata)

20 Tiefenmatten-Joch from Schönbühl-Gletscher.
July (Matsukata)

21 Matterhorn from Breuil-Joch. Aug. (Matsukata)

22 Matterhorn from Schönbühl-Gletscher
July (Matsukata)

23 Dent d'Hérens from Arben. July (Matsukata)

24 Lyskamm from Gorner-Gletscher.

Sept. (Matsukata)

25 Breithorn and Polluse from Gorner-Gletscher.

Sept. (Matsukata)

26 Icefall on the East-Wall of Monte Rosa taken Zumsteinspitze.

Sept. (Matsukata)

27 Matterhorn and Dent d'Hérens from Signalkuppe of Monte Rosa.

Sept. (Matsukata)

28 On the East-Ridge of Weisshorn; Dom and Täschhorn in the Background.

Sept. (Fujiki)

第一部

一 千島アライト島(日本最北の山 二,三三九米) 岡田喜一

二 層雲峡(銀河の瀑) 鳥山悌成

三 十勝岳附近 角田吉夫

四 樹氷(狭薄岳) 同人

五 北海道の印象(チセヌプリ附近) 梶山正雄

六 樹氷(藏王山) 野島親幸

七 藏王地藏岳にて 長澤壽三

八 藏王山より月山を望む 佐藤榮太

九 藏王山三寶荒神山 角田吉夫

一〇 コーポルトヒュッテ(藏王山) 同人

一一 船形山 佐藤榮太

一二 樹氷(家形山にて) 野口末延

一三 吾妻山天狗岩附近 後藤幹次

一四 磐梯山 三浦新

一五 玉川溪谷(抱きがくり) 鳥山悌成

一六 溪流(片品川) 同人

一七 瀞(片品川) 同人

一八 利根川水源 角田吉夫

一九 八海山より魚沼駒ヶ岳 塚本閣治

二〇 孤高(武尊山劔ヶ峯) 早川義郎

二一 谷川岳耳二つ 角田吉夫

二二 萬太郎山 同人

二三 萬太郎山 同人

二四 笠より見たる茂倉・谷川の連嶺 中村貞治

二五 初秋の尾瀬沼 鍵山覺

二六 春の野反池 角田吉夫

二七　鬼怒沼と日光白根　塚本圖治
二八　雲間秀峯(鳥甲山)　早川義郎
二九　岩菅山(赤石山より)　渡邊漸
三〇　黒姫山　同人
三一　結氷の「みくりヶ池」と大日岳　中野甚吉
三二　立山一ノ越より直滑降　同人
三三　立山　梢山正雄
三四　大日岳　同人
三五　彌陀ヶ原　同人
三六　稱名瀧　菊池孝
三七　立山　小林太刀夫
三八　劔澤の大瀧　冠松次郎
三九　黒部白龍溪　塚本圖治
四〇　黒雁川北又谷　冠松次郎
四一　春陽の内藏ノ助附近　奥平昌英
四二　毛勝岳　同人
四三　片貝南又谷　同人
四四　劔の四月　逸見眞雄
四五　雪庇　武田久吉
四六　雙紙樺　同人
四七　カクネ里と北鎗北壁　小原勝郎
四八　鹿島鎗ヶ岳　逸見眞雄
四九　鹿島鎗　渡邊漸
五〇　爺ヶ岳の一角　逸見眞雄
五一　針ノ木峠の夕陽　冠松次郎
五二　藥師岳　高田茂
五三　有峯の里　同人
五四　双六より見たる鎗　同人
五五　燕岳　三浦新
五六　山嶺(槍ヶ岳)　三溝貞之助
五七　槍ヶ岳　冠松次郎
五八　冬の槍　角田吉夫
五九　秋の北穂高　同人
六〇　春の涸澤(其の一)　同人
六一　春の涸澤(其の二)　同人
六二　ヂャンダルム　同人
六三　暮るゝ梓川　冠松次郎
六四　朝の大正池　(故)松井幹雄
六五　北穂高岳　小川登喜男
六六　北穂高岳　小林太刀夫

六七　穂高屏風岩　小林太刀夫
六八　三月の飛騨笠ヶ岳　角田吉夫
六九　白山翠ヶ池　安田登茂次
七〇　木曾駒ヶ岳の南望　同　人
七一　地藏岳(甲州)　三浦新
七二　晩秋の甲斐駒ヶ岳　野口末延
七三　聖岳より兎岳を望む　明治大學山岳部
七四　高原(美ヶ原)　角田吉夫
七五　冬の富士　鳥山悌成
七六　夏の富士　同　人
七七　山中湖畔　(故)松井幹雄
七八　外金剛集仙峯(主峯群)　小川登喜男
七九　同　(同)　同　人
八〇　同　(東北稜)　同　人

第二部

八一　槍ヶ岳(航空寫眞)　東京日日新聞社
八二　穂高連峯(同)　同
八三　上高地と乘鞍岳(同)　同
八四　Finsteraahorn(同)　田中薫
八五　Matterhorn, Nordwand(航空寫眞)　田中薫
八六　乘鞍岳より見たる槍穂高(赤外線望遠寫眞)　同　人
八七　甲斐駒ヶ岳より槍穂高の遠望(同)　三浦新
八八　大菩薩峠長兵衞小屋附近より南アルプス方面を望む(同)　長澤壽三
八九　同　(同)　同　人
九〇　富士山六合目小屋より御坂山塊及奥秩父方面(同)　同　人
九一　東京越中島より見たる富士(同)　三浦新
九二　高尾山よりの富士山(普通寫眞)　額田敏
九三　同　(赤外線望遠寫眞)　同　人
九四　東京より見たる富士山(同)　同　人
九五　八ヶ岳より見たる日本アルプス(四葉)(同)　同　人
九六　山膚(同)　荻野二九七
九七　國境の白雲(同)　同　人
九八　冬季峨々溫泉附近より熊野岳の一部(赤外線寫眞)　額田敏
九九　冬の藏王山(同)　同　人

一〇〇　谷川岳より笠ヶ岳（赤外線寫眞）　額田　敏
一〇一　雪崩の痕（鹿島北鎗とカクネ里）　冠　松次郎
一〇二　穂高澗澤の雪崩　角田吉夫
一〇三　雪　崩（谷川岳一ノ倉澤）　同　人
一〇四　同　（茂倉岳芝倉澤）　中谷健弍
一〇五　同　（仙ノ倉シツケイ澤）　角田吉夫
一〇六　同　（草津白根山田峠）　同　人
一〇七　雪中露營（猫又山）　奥平昌英
一〇八　キャンプファイヤーの群（其一）　月原俊二
同　（其二）　同　人
一〇九　香春一ノ岳南の岩試登　同　人
一一〇　ヂャンダルムにて　角田吉夫
一一一　冬の槍と小槍　村井榮一
一一二　小　槍　角田吉夫
一一三　谷川岳の山腹岩面の擦痕　額田　敏
一一四　梓川にて發見せる岩面の擦痕　角田吉夫
一一五　雷　鳥　三浦　新
一一六　偃　松（槍ヶ岳）　武田久吉
一一七　同　（牛首岳と大天井岳）　同　人
一一八　同　（乘鞍岳位ヶ原）　同　人
一一九　イハレンゲ（沖ノ島白岳頂上）　竹内　亮
一二〇　高山植物寫眞圖聚（白馬號）　武田久吉
一二一　同　（富士山號）　同　人
一二二　山小屋寫眞（日本の部）二十四葉　日本山岳會
一二三　同　（外國の部）二十九葉　同
一二四　遭難記錄（藏王山熊野岳に於ける三枝茂雄氏の遭難）（その一）　額田　敏
同　（その二）　同　人
一二五　山案内故中山彦一　安藤治彌
一二六　山案内上高地の故嘉門治と信濃坂の故類藏　豐邊國臣
上條嘉門治の死顏（槇有恒撮影）　吉澤一郎

高山深谷（山岳寫眞集）
第一輯より第八輯まで　日本山岳會
山　岳　同
第一年第一號より第二十八年一號まで　同
參考書籍　同
地形圖模型（五萬分一立山）　同

日本山岳會會員有志晩餐會

前回有志晩餐會に飛び込んで高野さんから次回の世話人を仰付かつた塚本、田邊兩氏と共にスケドュール通り十月五日池端世界の別館に牛鍋をつゝくことにした。十八名の出席を得たことは從來の例から見てかなりの好成績といふ所であつた。

仲秋の名月には惜くも遲かつたが、上野の鐘の音をきゝ乍ら、相互に心おきなく牛鍋に杯を重ねた。新しい方も見えたので各自己紹介を願つたり、いゝ氣持で山の話、思ひ出話に花を咲かせたりして、別れたのは九時近くであつた。尙高頭氏の御紹介により志村寛氏の舊顏も見えたことは當日の收獲でもあつた。

尙次回の世話人は其人を得たと考へるので、恐らく型破りの晩餐會になりはしないかと一寸御披露致して置きます。

（黑田記）

當日の出席者（アルファベット順）左の如し。尙○印は次回の世話人を示す。

飯塚篤之助　○茨木猪之吉　冠　松次郎　加藤　保
木村　鑛吉　黑田　孝雄　○槇　有恒　岡埜德之助
酒井　忠　佐藤誠次郎　高頭仁兵衞　鳥山　悌成
田邊　主計　塚本　繁松　○角田　吉夫　山本幸次郎
吉田　竹志　志村　寛

（黑田記）

圖書基金報告

前號發表以後に於ける圖書基金は次の如くで、計二十八人、三十五口に達するを得た。

東京市　田邊主計氏（一口）

急　告

十月二日役員總會の結果來年度よりの會長副會長左の如く推薦決定を見たり。

會　長　高頭仁兵衛氏

副會長　木暮理太郎氏

同　松方義三郎氏

松方義三郎氏は現在役員に非ざるも來年度の理事に推薦され居るを以つて同時に副會長として推薦決定されたるものなり。

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
一、原稿は返却せざるものとす。
一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
一、原稿にはその梗概を付せられたし。
一、紀行には概念圖を添付せられたし。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付けられ度、裏面或ひは別紙に說明記入を乞ふ。
一、校正は編輯者に一任せられたし。
一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所

原稿用紙所要の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和八年十一月廿五日印刷
昭和八年十一月廿八日發行
〔定價金貳圓〕

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル內
發行所　日本山岳會
電話芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

東京市牛込區市谷仲ノ町二八番地
編輯兼發行者　黑田孝雄

東京市神田區表猿樂町二番地
印刷者　中村修二

東京市表神保町
發賣所　東京堂

東京市牛込區富久町一四
廣告取扱所　進恒社

著作權所有

株式會社開明堂東京支店印刷

日本山岳會々則

第一條　本會ヲ日本山岳會（Japanese Alpine Club）ト名ツク

第二條　本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス

第三條　本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ爲ス

(1) 機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時又ハ定時ノ出版物刊行

(2) 其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業

第四條　本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長若干名、評議員十五名以内、理事十五名、監事二名以内

第六條　會長ハ本會ヲ代表ス　但シ會長ニ事故アル場合ハ副會長之ニ代ル

第七條　會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之ヲ推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ケ年トス　但シ役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長副會長トシテノ任期滿了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ

第八條　評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス

第九條　評議員ハ本會發起人ノ總テト元役員タリシ會員中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス　發起人以外ノ評議員ノ任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十條　評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス

第十一條　常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其任期ハ三年トス

第十二條　理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中ヨリ會員ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス

但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　監事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十四條　役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス

第十五條　役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當ル　但シ會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條　役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其

任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條　役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條　役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非レハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條　役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條　役員ハ總テ無報酬トス　但シ其職務ノタメ必要ナル實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條　本會ハ會員ヲ分チ左ノ三種トス

一、通常會員　會費年額六圓ヲ納ムル者

二、終身會員　一時金百圓以上ヲ納メタル者

三、名譽會員　役員會ニ於テ推薦シタル者

右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條　本會々員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ムモノトス　入會許可ノ通知アリタル後一ケ月以内ニ右ノ手續ヲナササル者ハ入會ノ許可ヲ取消サル可シ

第二十三條　入會ノ許否ハ理事會ノ決議ニ依ルモノトス

第二十四條　本會會則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條　前條ノ決議ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條　本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

則

一、會費其他ニ關スルモノ

(イ)　會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

(ロ)　毎年一月一日ヨリ八月三十一日迄ノ入會者ニ限リ其年度ノ會費ヲ二ケ月間延納スルコトヲ得　但シ此適用ヲ受ケントスル者ハ其旨入會申込ト同時ニ申出ス可シ

(ハ)　毎年九月一日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ免除ス

(ニ)　本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノ

ハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

（ホ）本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ毎號一部ヲ本會會員ニ頒布ス　但シ毎年九月一日以後ノ入會者ニハ頒布セス

（ヘ）毎年九月一日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコトヲ要ス

（ト）本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閲覽スルコトヲ得

（チ）會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面ヲ以テ申出ツヘシ

（リ）會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

（ヌ）本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

（ル）團體加入者ノ代表者交付シタル場合ニハ新舊兩代表者ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

（ヲ）本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三階三〇七號室ニ置ク

（ワ）海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ケ月以上、三十六ケ月以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間等ヲ詳記シ、取扱手數料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得、此場合ニハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選擧ニ關スルモノ

（イ）理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

（ロ）役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

（ハ）會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ擧クルコトヲ得　但シ一候補者ヲ推薦シタルモノハ他ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

（ニ）理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコトヲ要ス

（ホ）團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

（ヘ）候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

（ト）候補者ノ數カ改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

（チ）改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

（リ）投票ハ記名連記投票トス

山岳第二十八年總目次（昭和八年）

本欄

山岳文學に就いて……田部　重治　一號　一頁　通頁1
景觀描寫としての山岳寫眞……田中　薫　一　一四　14
東郡大山塊（紀行と覺え書）……鹿野　忠雄　一　三七　37
日本アルプスの雪線に就いて……今西　錦司　二　一　193
遮日峯　北水白山　兄弟水……橋本　秀一　二　三五　227
風成雪とその雪崩に關する考察……今西　錦司　三　一　341

雜錄

ティロールの冬……田中　薫　一　八九　87
マッターホルンの北壁……吉澤　一郎　一　100　100
裏川と大日岳（飯豐山塊）……鈴木　岩雄　一　一二四　114
春の藥師岳より針ノ木越え……島田　武時　一　一四五　145
臺灣の山岳漫談（一）……沼井鐵太郎　一　一五二　152
ティロールの春……田中　薫　二　五九　249
赤牛岳……小池　文雄　二　六八　260
冬の湯澤岳越え……島田　武時　二　七九　269
臺灣の山岳漫談（二）……沼井鐵太郎　二　八六　278
墺國のエンガディーン……高橋　健治　三　三〇　370
朝日山麓三面村記……高橋文太郎　三　三八　379
小澁川　荒川遡行
遠山川　北股　大澤を下る……黑田　初子　三　五二　392
毛猛連山行……中司　文夫　三　六二　402
春の白山より妙法山へ……池田　知幸　三　七九　417
北九州の山ところどころ（その三）…竹内　亮　三　八五　425
背振山懷古……今泉　龍三　三　一〇九　447
ウェストン氏の杖の跡……黑田　孝雄　三　一三一　471

追憶

松井幹雄君を憶ふ……石川　孟範　三　一三八　479
谷本光彦君を憶ふ……藤島　敏男　三　一四三　483
一九三二年に於けるナンガパルバットの登攀の概略…黑田　孝雄　三　一四五　485
一九三三年度エヴェレスト登攀概要……渡邊　漸　三　一五一　491

遭難顚末報告

富士山に於ける土屋勇氏の遭難報告……一　一六八　169
菅沼に於けるドイツ技師の遭難報告……一　一七一　171
藏王山に於ける柏源一郎氏の遭難顚末聞言……一　一七四　174
大門山遭難略記……二　一一〇　302
吾妻山に於ける松枝角二氏の遭難顚末記……三　一七五　515

本邦山岳遭難要項輯錄（自一九二三年至一九三三年九月）……瀨木　三雄　一五九　499

圖書紹介

An Epitome of Fifty Years' Climbing (C. Wilson)……島田　巽　311
山とふるさと(河田楨)……松井　幹雄　312
山岳寫眞のうつし方(額田敏)……塚本　閤治　313
ヒマラヤの旅(長谷川傳次郎)……渡邊　漸　314
Kamet Conquered (F. S. Smythe)……藤島　敏男　526
Peaks, Passes and Glaciers, Third Series…島田　巽　528
Alpine Journal, Vol. XLV. No. 246……渡邊　漸　529
高山深谷第九輯(日本山岳會)……藤島　敏男　532
奥秩父(原全敎)……黑田　孝雄　534
雪線散歩(藤木九三)……黑田　孝雄　535
東北の山々(安齋徹)……藤島　敏男　536

集會記事

昭和七年度會員大會……179
第五十七回小集會記事……180
第五十八回小集會記事……183
臨時小集會記事……332
第五十九回小集會記事……541
第七回關西小集會記事……540
日本山岳會會員有志晩餐會……333, 553
會務報告……178, 331, 538
「山日記」(一九三三年版)編輯報告……326
「高山深谷」編輯報告……543
山岳寫眞資料展覽會記事……547
圖書基金報告……333, 553
新入會員紹介……186, 334, 553
會員計報……188, 336, 555
退會者……188, 336, 555
日本山岳會々則……189, 338, 557
正誤……337

圖版

乘鞍岳最高點東面下より視角略々百度の展望(田中薫)……34—5
西に向つてザールバッハの村とヒンテルグレームタールの奥を望む(同)……88—9
ウィルデンカールコーゲルの尾根より北西にシュビールベルグホルンを望む(同)……98—9
藥師岳より望む劔立山群峯(島田武時)……144—5
遮日峯(岸波義彦)……232—3
藥水川を經て北水白山を望む(岸波義彦)……232—3
赤牛岳主峯(小池文雄)……266—7
中ゴヤより藥師岳を望む(小池文雄)……266—7

涸澤岳飛驒側(島田武時)……274—5
涸澤岳西山稜と北穂高岳(島田武時)……274—5
山田峠にて遭遇せる雪崩とその説明圖(角田吉天)……354—5
風成雪による第二次雪崩の自然的發生(高橋健治)……358—9
シュネープレットの崩壞……360—1
ザールバッハ風景……370—1
朝日山麓三面村三面(高橋文太郎)……382—3
サワブドウ(高橋文太郎)……382—3
古處山頂石灰岩上のツゲ(竹内亮)……426—7
犬ヶ岳尾根のツクシシャクナゲ(竹内亮)……426—7
故松井幹雄氏……482
故谷本光彦氏……483

挿圖

東郡大山塊憶測圖……76
ザールバッハ附近略圖……93
マッターホルンの北壁……106
裏川略圖……140
クル溪谷略圖……182
咸南中央部山勢圖……242
遮日峯附近……243
クリムルの瀧……255
涸澤岳附近概念圖……270
大門山附近……303
風の影響の全然なき降雪直後の積雪狀態……346
降雪後風の影響を受けて變化せる積雪狀態……346
第三圖(登高行 VIII 記錄一〇九頁より)……360
遠山川北股、小澁川荒川……394—5
毛猛連山附近……403
白山妙法山附近……423
英彦山主峯西側の尾根と谷……433
日本アルプスに於けるウエストン氏の杖の跡……476—7
吾妻山附近概念圖……516

附錄

本邦氷河問題に關する文獻……佐々・今西編第二號卷末
「山岳」第二十八年總目次……第三號卷末

口絵

高原(寫眞)……角田吉夫第一號卷頭
早春の山麓(北アルプス)……茨木猪之吉第二號卷頭

カット

茨木猪之吉
坂本直行

「山岳」バツクナンバー

Vol.	No.	定價	送料
3	3	¥2.00	6
4	1	2.00	〃
〃	2	2.00	〃
〃	8	2.00	〃
5	2	1.00	8
〃	3	1.00	〃
6	1	1.00	〃
〃	2	70	〃
〃	3	70	〃
7	1	1.00	〃
〃	2	1.00	〃
〃	3	1.00	〃
8	1	70	〃
〃	2	70	〃
〃	3	70	〃
9	1	70	〃
〃	2	70	〃
〃	3	70	〃
10	2	1.00	〃
14	2	50	〃
〃	3	50	〃
15	2	50	6
〃	3	50	〃
16	2	50	8
〃	3（奥上州號）	50	〃
17	2	50	6
〃	3	50	〃
18	1	50	〃
〃	2	50	〃
19	2（金剛山號）	50	〃
〃	3	50	〃
20	2	50	〃
21	2（黒部號）	50	8
22	1（第二奥羽號）	50	〃
23	3（臺灣號）	50	〃

日　本　山　岳　會

東京.芝.琴平町1.不二屋ビル307號・電話芝1649.振替口座東京4829番